「東関東の盆綱」総合調査報告書

（茨城県編）

茨城県教育委員会

「東関東の盆綱」総合調査報告書

（茨城県編）

茨城県教育委員会

3　立延（小美玉市中延）

盆棚のある部屋に投げ入れられたボンヅナ（P45）

5　平山（小美玉市下玉里）

新盆の家に上がり込み、盆棚の前でボンヅナの頭を叩きつける（P60）

1　池野辺（笠間市）

二手に分かれて綱を引き合う（P35）

2　五平（笠間市）

ボンヅナを持って左回りに回る（P39）

4　下馬場（小美玉市）

盆棚のある部屋に投げ入れられるボンヅナ（P53）

9　沖洲（行方市）

ボンヅナを持って次の家へ（P77）

10　高須（行方市玉造）

角、目、唇のあるボンヅナ（P81）

6　南川又（茨城町）

ボンヅナを地面に叩きつける（P66）

7　奥谷（茨城町）

大人たちがボンヅナを製作する（P68）

8　金上（行方市三和）

ボンヅナを高く持ち上げ、地面に叩きつける（P74）

14　佐野子（土浦市）

頬かむりをして集落を巡行する（P105）

11　冷水（鉾田市）

子供たちがボンヅナを持って巡行する（P85）

15-1　東田中・東地区（石岡市）

ジャーメを担いで出発（P110）

12　徳宿新田（鉾田市）

ボンヅナ本体に藁縄を巻きつける（P89）

15-2　東田中・西地区（石岡市）

おんぶして先祖を背負う所作を行う（P114）

13　駒木根（鉾田市）

ボンヅナに土や苔を入れる（P97）

19　下岩崎（つくば市）

先祖の霊を迎えに寺にやって来た人たちとボンヅナ（P143）

20-1　栗原・台坪（つくば市）

掛け声と共にボンヅナを高く持ち上げる（P146）

20-2　栗原・乾島（つくば市）

ボンヅナを作る様子。もうすぐ完成（P150）

16　宮渕町千秋（龍ケ崎市）

ボンヅナを持って各家をまわる（P121）

17　田宮（牛久市）

高提灯、太鼓、僧侶の鉞の後に子供たちの竜が続く（P128）

18　小茎（つくば市）

真菰と青竹で作ったボンヅナを持って集落を巡行する（P132）

23　島津（阿見町）

家の前でボンヅナを持って回る（P171）

20-3　栗原・中坪（つくば市）

ボンヅナを持って次の家へ移動する（P153）

24　実穀（阿見町）

暗くなっても元気よく掛け声をかけて巡行する（P176）

21　苅間（つくば市）

掛け声と共にポンを地面に打ちつける（P162）

25　大塚（筑西市）

完成した綱を用いて綱引きをする（P184）

22　下須田（稲敷市）

庭でボンヅナを前後に振る（P166）

序

平成二十七年三月二日、「東関東の盆綱」が記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国選択）に選択されました。

「盆綱」は、茨城・千葉両県にわたって分布する盆行事の一つで、一般に子供たちが藁綱を曳いて先祖の霊を送迎する習俗と考えられていますが、その藁綱の形、実施形態及び所作などは、地区によって異なります。

こうした「盆綱」については、これまで実態の解明がなされておりませんでしたが、少子高齢化が進展する今日、「盆綱」の存続が困難となる地区が年を追って増加している状況の中で、一刻も早く総合調査に基づいた記録作成を行う必要に迫られました。そこで、国選択となったことを機に、平成二十七年度より事前調査を進め、平成三十一年度より国庫補助を受けて、「東関東の盆綱」総合調査事業を三か年計画で開始いたしました。

しかしながら、令和二年度以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて「盆綱」を中止する地区が相次いだことから、事業計画の変更を余儀なくされてしまいましたが、このたび総合調査報告書を刊行することができました。

本調査の実施及び報告書の刊行にあたり、御指導・御助言をいただきました文化庁をはじめ、御尽力いただきました「東関東の盆綱」総合調査委員会の調査委員、調査補助員の皆様方に、心から感謝申し上げます。また、各市町村文化財保護行政主管課、各調査地の盆綱関係者及び情報提供者の皆様には、多大なるご協力をいただきました。深く御礼申し上げますとともに、地域において大切に守られてきた貴重な文化が、これからも長く継承されますよう心より祈念申し上げます。

令和五年三月

茨城県教育委員会教育長

森　作　宜　民

例　言

一、本書は、茨城県教育委員会が平成三十一年度から令和三年度の三か年にわたって国庫補助事業として実施した「東関東の盆綱」総合調査事業の報告書である。なお、新型コロナウイルス感染拡大の影響により当初の計画を変更し、印刷・製本は令和四年度に県費を用いて行った。

二、事業は、文化庁の「民俗文化財調査費国庫補助要項」に基づき、「東関東の盆綱」総合調査実施要項を定め、事務局を茨城県教育庁総務企画部文化課に設置して実施した。

三、調査にあたっては、「東関東の盆綱」総合調査委員会（以下「調査委員会」という）を組織し、県内各市町村の文化財保護行政主管課（以下「市町村」という）の協力を得て、事前調査、詳細調査及び現況確認調査を行った。

四、事前調査は、平成二十七年度に各市町村が域内における「盆綱」の実施状況を網羅的に行った。

五、詳細調査は、事前調査の結果に基づいて、現在も「盆綱」が存続している事例の中から調査委員会が選択した二十五件について、調査委員及び調査補助員が実施した。詳細調査の結果は、調査を担当した調査委員及び調査補助員が執筆し、第三章第一節に「詳細調査報告」として掲載した。尚、各報告の末尾に、執筆者名を記した。

六、現況確認調査は、現在も「盆綱」が存続している事例（詳細調査の該当事例を除く）について、主に調査補助員及び事務局が調査したものを事務局が編集して、第三章第二節に「現況確認調査報告」として掲載した。なお、各報告の末尾に、調査担当者名を記した。

七、本書において、盆綱行事を示す場合は「盆綱」、稲藁等を用いて作成した綱を示す場合は「ボンヅナ」と表記した。

八、口絵及び本文中に掲載した写真は、特に断りのない限り、詳細調査及び現況確認調査の担当者が撮影したものである。

九、詳細調査報告で使用した順路図は、国土地理院のホームページよりダウンロードしたものに加筆して作成したものである。

十、本書の編集は調査委員会の指導のもと、事務局が行った。

目次

口絵
序
例言
目次

第一章　調査事業の概要

第一節　「東関東の盆綱」総合調査事業実施要項……2
第二節　「東関東の盆綱」総合調査委員会……4
第三節　「東関東の盆綱」総合調査委員会開催記録……5
第四節　詳細調査地区選定理由……7
第五節　調査票様式……9

第二章　総論

茨城県下における盆綱の様相……12

第三章　調査報告

第一節　詳細調査報告……33
一　池野辺（笠間市）の盆綱……林　圭史　34
二　五平（笠間市）の盆綱……大津　忠男・林　圭史　38
三　立延（小美玉市中延）の盆綱……大津　忠男　42
四　下馬場（小美玉市）の盆綱……大津　忠男　50
五　平山（小美玉市下玉里）の盆綱……萩谷　良太　56
六　南川又（茨城町）の盆綱……萩谷　良太　64
七　奥谷（茨城町）の盆綱ひき……塚原　伸治　68
八　金上（行方市三和）の盆綱……徳丸　亞木　72

九　沖洲（行方市）の盆綱……林　圭史　76
一〇　高須（行方市玉造）の大蛇担ぎ…林圭史・徳丸亞木　80
一一　冷水（鉾田市）の盆綱……横田　慶一　84
一二　徳宿新田（鉾田市）の盆綱……清水　博之　88
一三　駒木根（鉾田市）の盆綱……榎　美香　94
一四　佐野子（土浦市）の盆綱……森戸日咲子　102
一五　東田中（石岡市）の盆綱……徳丸亞木・関口東亜　108
一六　宮渕町千秋（龍ケ崎市）の盆綱……榎　美香　118
一七　田宮（牛久市）の盆綱……榎　美香　124
一八　小茎（つくば市）の盆綱……渡瀬　綾乃　130
一九　下岩崎（つくば市）の盆綱……萩谷　良太　136
二〇　栗原（つくば市）の盆綱……藤崎綾香・横田慶一　144
二一　苅間（つくば市）の盆綱……三津山智香・榎　美香　156
二二　下須田（稲敷市）の盆綱……萩谷　良太　164
二三　島津（阿見町）の盆綱……横田　慶一　170
二四　実穀（阿見町）の盆綱……岡田　真帆　174
二五　大塚（筑西市）の盆綱……三津山智香　182
第二節　現況確認調査報告……189
二六　仁古田（笠間市）の盆綱……大塚　健司　190
二七　大古山（笠間市）の盆綱……大塚　健司　190
二八　佐才（小美玉市）の盆綱……三津山智香・藤崎綾香　191
二九　野田（隠谷東組）（小美玉市）の盆綱
……横田博之・大塚健司　191
三〇　川戸（小美玉市）の盆綱……北條海織・森戸日咲子　192
三一　小塙（小美玉市）の盆綱……大塚　健司　192
三二　鮒内・川端（小美玉市川中子）の盆綱…大塚　健司　193
三三　根玉里（小美玉市下玉里）の盆綱……横田　博之　193
三四　大井戸・共栄（小美玉市下玉里）の盆綱…横田博之　194
三五　田畑・橋下（小美玉市下玉里）の盆綱…横田　博之　194
三六　上馬場（小美玉市）の盆綱……大塚　健司　195
三七　中台（小美玉市）の盆綱……齋藤　和浩　195
三八　小堤（茨城町）の盆綱……吉川　明宏　196
三九　海老沢本郷（茨城町）の盆綱……吉川　明宏　196
四〇　下土師宿（茨城町）の盆綱……吉川　明宏　197
四一　三和穴瀬（行方市）の盆綱……徳丸　亞木　197
四二　内宿（行方市）の盆綱……大塚　健司　198
四三　大井（つくば市）の盆綱……徳丸　亞木　198
四四　菅間（つくば市）の盆綱……徳丸　亞木　199
四五　六斗（つくば市）の盆綱……徳丸　亞木　199
四六　下広岡（つくば市）の盆綱……大塚　健司　200
四七　土屋（美浦村）の盆綱……宇都木宏一・大塚　健司　200
四八　掛馬（阿見町）の盆綱……大塚　健司　201
四九　飯倉（阿見町）の盆綱……宇都木宏一・大塚　健司　201
五〇　下小池（阿見町）の盆綱……大塚　健司　202

第四章　茨城県内の盆綱実施状況

茨城県内の「盆綱」分布図……204
茨城県内の「盆綱」実施状況一覧……205

第五章　盆綱関連資料

三村のジャーノメと木製の頭部について……228
実測図……230
古写真……234
参考文献一覧……240

第一章　調査事業の概要

第一章　調査事業の概要

第一節「東関東の盆綱」総合調査事業実施要項

一　調査目的

「盆綱」は、茨城・千葉両県及び九州北部などに分布する盆行事の一つで、その多くは子供たちが藁綱を曳いたり担いだりしながら、先祖の霊を送迎する習俗である。藁綱は龍や蛇に模したものとされ、先祖の霊を依り憑かせる憑依ものとして扱われることが多い。

八月十三日の迎え盆では、子供たちが藁綱を曳いて墓地に行き、先祖の霊を藁綱に依り憑かせた後、集落の家々をまわって降ろしていく。一方、八月十五日の送り盆では、逆に家々をまわって先祖の霊を依り憑かせた後、墓地まで行って降ろす地区もある。それらの所作や、使い終えた藁綱の処理の仕方は集落によって異なる。

こうした「盆綱」は、我が国の文化を考える上で大変貴重なものではあるが、その実態は不詳である。また少子高齢化が進行し、地域のつながりが疎遠となりつつある中で、「盆綱」が年ごとに少なくなってきている。

「東関東の盆綱」は、平成二十七年三月に「記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財」（国選択）に選択されており、県内における「盆綱」の分布や実施状況、特徴及び諸課題について聞き取りや記録保存を行うほか、さらには関係資料や伝承等による裏付けによって、その全体像を明らかにしていく必要がある。

二　調査範囲

茨城県全域　ただし、現在も「盆綱」が行われている地域を中心とする。

三　事業の実施方法

茨城県教育委員会が、国庫補助金（平成三十一年度～令和三年度）を受けて事業を実施する。

四　事業主体

茨城県教育委員会（茨城県教育庁総務企画部文化課）

五　協力機関

各市町村文化財保護行政主管課

六　事業期間

平成三十一年度から令和四年度の四か年とする。

（一）平成三十一年度　聞き取り調査、記録保存、文献等調査、調査票の作成
（二）令和二年度　聞き取り調査、記録保存、文献等調査、報告書の作成
（三）令和三年度　聞き取り調査、記録保存、文献等調査、報告書の作成
（四）令和四年度　報告書の編集・刊行

七　調査組織と役割

（一）「東関東の盆綱」総合調査委員会

調査全般に関わる総括的な指導を受けるために、「東関東の盆綱」総合調査委員会（以下、「調査委員会」とする）を設置要項に基づき設置する。

調査委員会は、九名以内の調査委員によって構成する。

（二）調査委員

専門知識を有する学識経験者を茨城県教育委員会教育長が委嘱する。調査委員は、詳細調査地区の選定のほか、担当する地区の調査に

関する指導及び調査成果のとりまとめなど、調査全般における中心的役割を担うとともに、報告書の執筆・編集を行う。

※　この他、調査委員会が推薦する者の中から、調査補助員を選出する。調査補助員は、調査委員の指導・助言のもと、調査対象地区の現地調査（聞き取り、記録保存）、文献等調査または報告書の執筆を担当する。

八　調査方法

（一）詳細調査

平成三十年度までに各市町村文化財保護行政主管課から報告された事例の中から、調査委員会が選定した地区について、調査委員及び調査補助員が詳細調査を行う。

①　報告件数　　一五〇件　※注1

②　詳細調査地区　　二十五地区　※注2

③　調査内容

所在地、名称、年代・沿革、実施状況、実施日、ボンヅナの形状、目的、巡行の起点・終点、子供の構成、活動の状況、伝承の状況、評価等について調査し、調査票に整理する。

④　調査日

盆綱開催日（八月十三日、十五日など）。文献等調査は適宜実施する。

（二）現況確認調査

平成三十年度までに各市町村文化財保護行政主管課から報告された事例の中で、現在も「盆綱」が行われている地区（前述の詳細調査地区を除く）について、調査補助員等が現在の実施状況を確認する調査を行う。

①　現況確認調査地区　　二十五地区　※注3

②　調査内容

所在地、名称、実施状況、実施日、ボンヅナの形状、目的、起点・終点、子供の構成、活動の状況等について調査し、調査票に整理する。

③　調査日

盆綱開催日（八月十三日、十五日など）。文献等調査は適宜実施する。

九　成果品

調査結果を報告書として刊行する。報告書は、調査事業の概要（目的、調査組織、調査方法と経過）、現地調査・文献等調査の結果（写真・図面等を含む）、実施状況一覧及び解説等を内容とする。

【注】

1　事前調査の結果に基づき、当初把握していた件数。その後の現地調査、市町村による追加報告及び文献調査により、一八五件（一三七地区）を確認した（第四章　茨城県内の盆綱実施状況一覧参照）。

2　第三章　調査報告　第一節　詳細調査報告参照

3　第三章　調査報告　第二節　現況確認調査報告参照

第二節「東関東の盆綱」総合調査委員会

○ **調査委員**（所属・職名は令和三年度末時点のもの）

徳丸　亞木　筑波大学大学院人文社会科学研究科　教授　※委員長
大津　忠男　茨城県立歴史館史料学芸部学芸課　特任学芸員　※副委員長
榎　美香　千葉県立関宿城博物館　主任上席研究員
清水　博之　茨城キリスト教大学文学部文化交流学科　准教授
塚原　伸治　東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻　准教授
萩谷　良太　土浦市立博物館　主任・学芸員
林　圭史　茨城県立歴史館史料学芸部学芸課　主任学芸員

○ **調査補助員**（所属は令和三年度末時点のもの）

岡田　真帆　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻修了
三津山智香　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻事務室
渡瀬　綾乃　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
横田　慶一　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
藤崎　綾香　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
森戸日咲子　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
水口　和樹　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻修了
大城　沙織　筑波大学大学院　人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
関口　東亜　筑波大学人文・文化学群　比較文化学類
北條　海織　筑波大学人文・文化学群　人文学類卒

○ **事務局**

茨城県教育庁総務企画部文化課（平成三十一年度～令和四年度）
市村　志保　課長（平成三十一・令和二年度）
田﨑　俊一　課長（令和三年度）
宮﨑　薫　課長（令和四年度）
仲野　祐二　課長補佐（総括）（平成三十一年度）
増子　靖啓　課長補佐（総括）（令和二年度）
宮尾　徹　課長補佐（総括）（令和三・四年度）
横田　博之　有形・無形文化財担当課長補佐（平成三十一～令和三年度）
根本弘太郎　同課長補佐（令和四年度）
大塚　健司　同文化財保護主事（平成三十一～令和三年度）
宇都木宏一　同文化財保護主事（平成三十一・令和二年度）
齋藤　和浩　埋蔵文化財担当文化財保護主事（平成三十一年度）
豊田　学史　有形・無形文化財担当文化財保護主事（令和四年度）
吉川　明宏　同主査（平成三十一～令和三年度）
江本　春美　同係長（平成三十一・令和二年度）
永井　幸恵　同係長（令和三・四年度）
峯嶋啓一郎　管理担当課長補佐（平成三十一年度）
吉澤　正貴　同課長補佐（令和二年度）
吉田　信行　同課長補佐（令和三・四年度）
新黒　康司　同係長（平成三十一～令和三年度）
武藤　尚子　同係長（令和四年度）
井野場文晃　同主任（平成三十一年度）
小澤　伸介　同主任（令和二～四年度）

第三節「東関東の盆綱」総合調査委員会開催記録

一　第一回総合調査委員会

日　時　平成三十一年四月二十四日（水）午前十時～十一時四十分
場　所　茨城県立歴史館一階　第一講座室
議　事
（一）審議事項
①　調査概要・調査委員会の趣旨説明
②　事前調査報告
③　調査対象の選定
④　委員の分担について
⑤　調査の進め方、調査票の作成について
⑥　報告書の構成案について
⑦　その他

二　第二回総合調査委員会

日　時　令和元年六月二十六日（水）午前十時～正午
場　所　土浦市役所本庁舎二階　研修室３
議　事
（一）審議事項
①　詳細調査地区の決定
②　現地調査について
③　調査票（修正案）の検討
④　報告書構成（修正案）の検討
⑤　その他

三　第三回総合調査委員会

日　時　令和元年十月三十日（水）午前十時～正午
場　所　茨城県庁行政棟二十一階　総務課分室
議　事
（一）審議事項
①　詳細調査結果の検討
〔調査委員担当地区〕〔調査補助員担当地区〕
②　次年度の詳細調査に向けて
③　原稿執筆の留意点
④　報告書構成（修正案）の検討
⑤　その他

四　第四回総合調査委員会

日　時　令和二年六月一日（月）午後一時二十五分～三時四十五分
場　所　茨城県三の丸庁舎三階　共用会議室Ａ
議　事
（一）報告事項
①　令和元年度の事業報告
②　反省点等
（二）審議事項
①　報告書原稿の内容確認
②　調査対象（新規及び追加調査）及び分担の決定
③　報告書構成（修正案）の検討
④　その他

五　第五回総合調査委員会

日　時　令和二年七月二十七日（月）午後一時三十分～三時三十分
場　所　茨城県庁行政棟二十一階　総務課分室
議　事
（一）報告事項
①　今年度の現地調査について
（二）審議事項
①　前回調査委員会の確認事項について
②　報告書原稿の内容確認
③　報告書構成（修正案）の検討
④　休止地区について
⑤　その他

六　第六回総合調査委員会

日　時　令和二年十月二十六日（月）午後一時三十分～三時五十分
場　所　土浦市役所本庁舎二階　研修室3
議　事
（一）報告事項
①　今年度の現地調査について
（二）審議事項
①　今後の調査事業の進め方について
②　詳細調査結果、現況確認調査結果の検討
③　報告書原稿の作成について
④　令和元年度分の修正原稿の確認
⑤　報告書構成（修正案）・分担の検討
⑥　その他

七　第七回総合調査委員会

日　時　令和三年三月九日（火）午後一時三十分～三時
場　所　茨城県庁行政棟二十三階　教育庁会議室
議　事
（一）報告事項
①　令和二年度の事業報告について
（二）審議事項
①　令和三年度の調査事業の進め方について
②　休止地区（平成20年以降）の聞き取り結果について
③　報告書原稿の確認
④　報告書構成・分担の検討
⑤　その他

八　第八回総合調査委員会

日　時　令和三年八月二日（月）午後一時三十分～三時三十分
場　所　茨城県庁行政棟二十三階　教育庁会議室
議　事
（一）審議事項
①　今年度の現地調査について
②　現地調査後のスケジュールについて
③　報告書原稿に関する意見交換
④　報告書構成・分担、編集等に関する意見交換
⑤　その他

九　第九回総合調査委員会

日　時　令和三年十一月三十日（火）午前十時～十二時
場　所　土浦市立博物館地下一階　視聴覚ホール

議　事
（一）報告事項
①　今年度の現地調査について
（二）審議事項
①　調査票の内容確認
②　報告書原稿に関する意見交換
③　報告書構成、編集等に関する意見交換
④　その他

一〇　第十回総合調査委員会

日　時　令和四年三月三日（木）午後二時～五時
場　所　土浦市立博物館地下一階　視聴覚ホール
議　事
（一）審議事項
①　報告書原稿の校正に関する意見交換
②　その他

一一　第十一回総合調査委員会（小委員会）

日　時　令和四年三月二十四日（木）午後一時三十分～四時
場　所　土浦市立博物館三階　会議室
議　事
（一）審議事項
①　報告書原稿の校正に関する意見交換
②　その他

第四節　詳細調査地区選定理由

○　現在も存続する盆綱を対象に、詳細調査を実施する地区について、調査委員による選定を行った。
○「池野辺」（笠間市）は、県内の盆綱の北端の事例で、典型的な綱引きの形態。
○「五平」（笠間市）は、三地区に分かれて実施している。内郷地区で、手作りの行燈を持って各家をまわるのが特徴的である。
○「中延（立延）」（小美玉市）は、存続数の多い小美玉市において、盆綱が市指定無形民俗文化財に指定されている。
○「下馬場」（小美玉市）は八月十三・十五日の両日に盆綱を実施し、綱を墓地の塚に巻きつける独特の風習がある。
○「下玉里（平山）」（小美玉市）は、八月十三・十五日の両日に盆綱を実施し、子供たちは白い服装で統一。長老が統括的な役割を担う。
○「南川又」（茨城町）は、盆綱に対する意識が注目される。
○「奥谷」（茨城町）では、子供たちが迎え火を蹴散らしながら巡行する。神社を起点としており、神葬祭との関連が興味深い。
○「三和（金上）」（行方市）は、北浦西岸の数少ない事例。
○「沖洲」（行方市）は、小美玉市に隣接する集落。小美玉市内に残る盆綱との比較や、古い時代の盆綱との比較が可能。
○「玉造（高須）」（行方市）のボンヅナは蛇型で、縄を巻いた胴体に、角、目、唇、舌が丁寧に付けられている。最後は綱を川に流す。
○「冷水」（鉾田市）は、太平洋に面した地区。最後は綱を海に流す。
○「徳宿（徳宿新田）」（鉾田市）は、北浦に流れ込む鉾田川（七瀬川）左岸の事例。
○「駒木根」（鉾田市）は、北浦に流れ込む鉾田川（七瀬川）右岸の事

例。隣接する「徳宿新田」の盆綱との比較が可能。

○「佐野子」（土浦市）は、土浦に残る盆綱の唯一の事例。市指定無形民俗文化財に指定されている。

○「東田中」（石岡市）は、子供たちが墓地で仏様をおんぶする所作が特徴的である。

○「宮渕町（千秋）」（龍ケ崎市）は、龍ケ崎市に残る貴重な事例。古い時代の盆綱との比較が可能。

○「田宮」（牛久市）は牛久市に残る貴重な事例。古い時代の盆綱との比較が可能。

○「小茎」（つくば市）は、牛久沼に流れ込む谷田川左岸の事例。真菰（マコモ）を用いてボンヅナを作製する。

○「下岩崎」（つくば市）は、牛久沼に流れ込む谷田川右岸の事例。盆綱と寺との関わりが注目される。

○「栗原」（つくば市）は、旧大穂地区に程近く、集落内の三地区で盆綱が存続している。

○「苅間」（つくば市）は、つくば市中心部に近い集落で、二地区に分かれて盆綱が実施されている。藁製の「ポン」を地面に叩きつける。

○「下須田」（稲敷市）は、隣接集落における「オタチ行事」との関連で注目される。

○「島津」（阿見町）は、霞ケ浦南西岸における事例。八月十三・十五日の両日に盆綱を実施している。

○「実穀」（阿見町）は、盆綱の実施・存続に向けた地域の思いを窺い知ることができる。

○「大塚」（筑西市）は、県西地区における数少ない貴重な事例で、典型的な綱引きの形態。

第五節　調査票様式

①

「東関東の盆綱」総合調査に係る調査票

通し番号	
市町村名	

地区名	ふりがな	行事名称	ふりがな

地区の概況（歴史，地理，自然環境，世帯数など）

準備	日時または期間	場所	
工作物	つくるモノ	主な素材	
	全長等	制作主体　○ 男　○ 女 ○ 小学生（　年～　年）　○ 中学生（　年～　年） ○ 高校生（　年～　年）　○ おとな（　　）	
その他の準備物			
準備上の特記事項			

迎え	日時 月　日　：　～　：	集合場所
起点 終点	～	実施主体　○ 男　○ 女 ○ 小学生（　年～　年）　○ 中学生（　年～　年） ○ 高校生（　年～　年）　○ おとな（　　）
かけ声		
終了後の綱の扱い		

内容（具体的に）

②

通し番号		市町村名		地区名	

送り	日時 月　日　：　～　：	集合場所
起点 終点	～	実施主体　○ 男　○ 女 ○ 小学生（　年～　年）　○ 中学生（　年～　年） ○ 高校生（　年～　年）　○ おとな（　　）
かけ声		
終了後の綱の扱い		

内容（具体的に）

主要な場面を示す写真（必ずキャプションを入れてください）　※このほかの写真は，別紙を使用してください。

③

通し番号		市町村名		地区名	

順路図（国土地理院の地図を使用し，順路を朱線で示してください）

	盆綱関係	各家の盆
8月12日までの動き		
13日の動き		
14日の動き		
15日の動き		

④

通し番号		市町村名		地区名	

	盆綱関係	各家の盆
16日以降の動き		

歴史的変遷					
所見・評価					
情報提供者	ふりがな 氏名	氏名公開 ○	住所 電話	―　―	○ 大正 ○ 昭和　年 ○ 平成　生まれ
	ふりがな 氏名	氏名公開 ○	住所 電話	―　―	○ 大正 ○ 昭和　年 ○ 平成　生まれ
参考文献					
参考資料					
調査年月日		調査委員 氏　名			

第二章　総　論

茨城県下における盆綱の様相

はじめに

国選択無形民俗文化財「東関東の盆綱」は、茨城・千葉両県にまたがる先祖送迎の盆行事である。墓地で先祖の霊（仏さま）を藁綱に乗せ、子供たちがこれを担いだり曳いたりして集落内を巡行し、各家では子供たちが運ぶ綱によって仏さまを迎える。八月十三日に仏迎えのみ行う集落が多いが、十五日に仏送りを行うところもある。用いられる綱は各集落によって特徴ある形状を示し、集落ごとに異なる所作やかけ声に、綱に乗った先祖に対する意識が表れている。

本調査事業では、茨城県下における「盆綱」の記録作成を主眼とし、現行の「盆綱」行事について現地での実施状況の把握に努めた（以下、「現況調査」とする）。また、そのうち五十か所については、実施主体や内容・巡行経路などに注目して記録を作成した（以下、「詳細調査」とする）。一部の調査は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、聞き取りなどで補足せざるを得なかったが、概ね県下の様相を把握できたと考えている。また、調査開始時点で、すでに廃止や休止となった盆綱も多数あった。それらについても、市町村に情報提供を依頼し、また自治体史や民俗調査報告書・論考などによって把握につとめた。その結果、茨城県下では現行のものも含めて大字単位で一三七事例を集成できた。なかには、行事が行われなくなって久しく、かつて盆綱が行われていた集落の名称しか情報が得られなかったものもある。具体的な内容把握に至らなかったケースだが、盆綱の分布などを理解するうえでは有益な情報と考え、適宜参照した。

以下、これらの成果を基礎資料に、茨城県下における盆綱の分布や特徴について述べながら、その様相を概観したい。さらに、民俗学的意義と現代におけるありかた、継承に際しての課題について解説を加える。なお、本書の例言にならって、本稿においても、行事名称としては漢字表記の「盆綱」を用い、使用される「綱」自体を指し示す場合には片仮名で「ボンヅナ」と表記をしていく。

今回の基礎資料が集成できたのは、事務局である茨城県文化課の地道な取り組みと、市町村の情報提供によるところが大きい。そして、実際に盆綱行事を伝承されている地域のご協力なしには、今回の集成は成しえなかった。ここに記して感謝を申し上げたい。（徳丸亞木・萩谷良太）

一　分布上の特徴

茨城県下の盆綱の分布状況については、これまでも多くの研究者が注目してきた。たとえば藤田稔氏は、「茨城県の盆綱」（『茨城の民俗』第三号、一九六四年）のなかで十五か所の事例を表と分布図に示し、茨城県南とくに霞ケ浦周辺に多いことを指摘した。更科公護氏は涸沼川周辺の盆綱について詳細な報告を行い、当該地域の集中的な分布状況を明らかにしている（「盆綱引きの意義」『茨城県史研究』第七号、一九六七年）。嶋田尚氏は、全国における盆綱に類する行事の集成を試みるなかで、涸沼川周辺や霞ケ浦・牛久沼の北側に事例をプロットした分布図を作成している（「蛇型綱の習俗に就いて―茨城の盆綱のルーツに関する一考察―」『茨城の民俗』第二十七号、一九八八年）。

今回、これまでの報告や研究よりも多くの事例の集成をみたことで、より詳細な分布状況を把握することができた。**表1**は大字を基準として、情報を整理したものである。現行の市町村でいえば、つくば市が二十五の大字を数えてもっとも多く、次いで茨城町が二十二例、小美玉市と阿見町がそれぞれ十三例で続く。結果、県下の分布が県央から県南にまとまることが追認された。

これらの事例を地図に落とし込み、河川水系とともに示したのが**図1―1～4**である。茨城県は久慈川水系・那珂川水系（涸沼を含む）・利根川

表１　茨城県下の盆綱一覧表①

大字	水系	小集落・坪・班など	子供組	仏の送迎	迎え	出発地点	送り	綱引き	祈願	備考／典拠	調査種別
水戸市全隈町	—									文化庁（2000）	文献
水戸市有賀町	桜川	中区		△	—	有賀神社	16日	—		15日に各戸を回り、16日桜川へ流す	聞取
		北区				集落センター			厄払い	13～15日に毎日実施	聞取
		南区								14日に実施。内原町史（1997）	文献
水戸市中原町	—					中原不動尊		■	悪霊祓い、豊作祈願	13・14日実施。杉崎町との綱引き伝承有	聞取
水戸市杉崎町	古矢川	大坪						■		杉崎町と中原町とで綱引き	聞取
		中町						■		杉崎町と中原町とで綱引き	聞取
水戸市赤尾関	古矢川								無病息災、豊作祈願	13・14日実施。内原町史（1997）	聞取・文献
水戸市内原町	古矢川									15日実施。内原町史（1997）	文献
水戸市小林町	古矢川									内原町史（1997）	文献
水戸市鯉淵町	涸沼前川	播田実								内原町史（1997）	文献
水戸市五平町	涸沼前川	万蔵寺			—		—	■		8月14～16日に綱引き、藤田（1964）他	文献
		大塚								内原町史（1997）	文献
		下遠田								内原町史（1997）	文献
笠間市池野辺	桜川	倉作	—		—	—	—	■	厄除け	8月13日に豊作祈願（綱引き）	詳細
笠間市小原	涸沼前川	滝川			—		—	■		15，16または17日か。藤田（1964）他	文献
笠間市五平	涸沼前川	内郷・飯田1班	小1～中1		—	高山神社	—	■		13・14日実施。昔は最後の家で綱引	詳細
		西内郷	小1～中1		—	コンビニ駐車場	—	■		13・14日実施。昔は最後の家で綱引	詳細
		飯田2・3班	小1～中1		—	個人宅	—	■		13・14日実施。昔は最後の家で綱引	詳細
笠間市大古山	涸沼川		小1～小6	○	13日	薬師堂	—	◆		新盆宅で綱引きをする	現況
笠間市仁古田	涸沼川		小4～中3		—	集会所	—		鎮魂	14日に行う	現況
茨城町南川又	涸沼川		小1～中2	○	13日	集会所	—	—			現況
茨城町木部	涸沼川	西								14・15日実施。更科（1967）	文献
		東								14・15日実施。更科（1967）	文献
茨城町南栗崎	涸沼川			◎	13日	墓地	16日・31日	—		7月晦日も引いて歩いた。更科（1967）	文献
茨城町野曽	涸沼川				—		—	■		14・15日に盆綱引き。更科（1967）	文献
茨城町飯沼	涸沼川	飯沼新田		○	13日	寺跡の広場	—	◆		13日の仏迎えと別に14・15日に綱引き	文献
茨城町上飯沼／下飯沼	涸沼川				—		—	▲		合同で引き回しす。更科（1967）	文献
茨城町下土師	涸沼川	宿	小1～小6	○	13日	墓地（堂）	—	—			現況
		新地		○	13日	息栖神社→墓地	—	—		更科（1967）	文献・聞取
		中塚		○	13日		—	—		更科（1967）	文献
茨城町越安	涸沼川				—		—	■		14・15日に綱引き、更科（1967）	文献
茨城町奥谷	涸沼川	赤坂	～中2・3	○	13日	墓地	—	—		更科（1967）、茨城町史（1997）	文献
		奥谷	小1～中3	○	13日	御霊神社→墓地	—	—			詳細
茨城町小堤	涸沼川		中1～中3	○	13日	墓地	—	—			現況
茨城町大戸	涸沼前川	上郷			—		—	■		上郷は13日も実施、14・15日に四辻等で引き合う	文献・聞取
		下郷			—		—	■		14～15日に四辻などの広場で引き合う	文献
茨城町前田	涸沼前川				—		—	—		14・15日に実施、更科（1967）	文献
茨城町谷田部	涸沼前川・涸沼川									14・15日に実施、更科（1967）	文献
茨城町駒場	涸沼川 寛政川	表方		○	13日	墓地	—	—		更科（1967）	文献
		中町		○	13日		—	—		更科（1967）	文献
		後方		○	13日		—	—		更科（1967）	文献
茨城町小幡	寛政川							■		14・15日に実施、更科（1967）	文献
茨城町秋葉	寛政川							■		14・15日に実施、更科（1967）	文献
茨城町南島田	寛政川			○	13日	墓地	—			更科（1967）	文献
茨城町神谷	寛政川		小1～小6	○	13日	墓地	—	—		更科（1967）、文化庁（2000）	文献、聞取
茨城町上石崎	涸沼	東永寺		○	13日	墓地	—	—		更科（1967）	文献
		船渡		○	13日	熊野神社	—	—		茨城町史（1997）	文献
茨城町海老沢	涸沼・涸沼川	本郷	小1～小6	○	13日	辻→地蔵→墓地	—	—			現況
		海老沢		○	13日		—			更科（1967）	文献
茨城町宮ケ崎	涸沼			○	13日		—			更科（1967）	文献
茨城町網掛	涸沼			○	13日		—			更科（1967）	文献
鉾田市田崎	大谷川	大神									聞取
鉾田市冷水	太平洋		小1～中3	○	13日	墓地(新盆の墓)	—	—			詳細
鉾田市湯坪	太平洋										聞取
鉾田市徳宿	鉾田川	徳宿新田	小1～中2	○	13日	墓地	—	—			詳細
鉾田市駒木根	鉾田川		小3・4～中2	○	13日	墓地	—	—		徳宿新田に対抗	詳細
鉾田市上富田	巴川	周防坪		○	13日	墓地	—	—		嶋田（1988）	文献
鉾田市（旧巴村内ヵ）	巴川									文化庁（2000）	文献
鉾田市安塚	北浦	上宿		○	13日	勝軍寺→墓地	—	—		更科（1967）	文献
鉾田市高田	北浦			○	13日	墓地	—	—		茨城県教育委員会（2010）	聞取・文献
行方市三和	北浦	穴瀬	年長、小1～小6	○	13日	墓地	—	—			現況
		金上	小1～小6	○	13日	墓地	—	—			詳細
行方市内宿	武田川	上宿		○	13日		—	—			聞取
		下宿		○	13日		—	—			聞取

表１　茨城県下の盆綱一覧表②

大字	水系	小集落・坪・班など	子供組	仏の送迎	迎え	出発地点	送り	綱引き	祈願	備考／典拠	調査種別
行方市沖洲	霞ケ浦・鎌田川		小1～小6	○	13日	墓地	―	―			詳細
行方市玉造	霞ケ浦	高須	小1～小6	○	13日	墓地	―	―			詳細
行方市手賀	霞ケ浦	船津	～中1	○	13日	墓地	―	―			聞取
行方市行方	霞ケ浦	内宿		○	13日	墓地(薬師堂)	―	―			聞取
小美玉市飯前	巴川	前原		○	13日		―	―			文献・聞取
小美玉市佐才	―	一班		○	13日	墓地	―	―			現況
	―	二班		○	13日	墓地	―	―			現況
小美玉市野田	鎌田川・梶無川	隠谷東組(東1･2班)	小1～中3	○	13日	墓地(田村総本家)	―	―			現況
		隠谷南組		○						南組の盆綱は平成20年代に中止	聞取
小美玉市川戸	鎌田川・梶無川	1・2班		○	13日	墓地	―	―			現況
		3・4班		○	13日	墓地	―				現況
小美玉市小塙	鎌田川	1・2班	小1～中3	◎	13日	墓地	15日	―			現況
		3・4・5班	小1～中3	◎	13日	墓地	15日	―			現況
小美玉市倉数	梶無川	田幡	小3～小6	○	13日	墓地	―	―			聞取
小美玉市中台	花野井川		小1～小6	○	13日	墓地	―	―			現況
小美玉市上馬場	園部川		小1～小6	○	13日	集会所→墓地	―	―			現況
小美玉市中延	園部川	立延	小2～中2	○	13日	墓地	―	―			詳細
小美玉市下馬場	園部川・鎌田川		小3～中3	◎	13日	墓地	15日	―			詳細
小美玉市栗又四ケ	園部川	辻		◎	13日		15日				聞取
小美玉市川中子	霞ケ浦 園部川	鈔内・川端	小1～小6	◎	13日	墓地	15日	―			現況
		火の橋・城之内		◎						昭和50年代まで実施	聞取
小美玉市下玉里	霞ケ浦	大井戸・共栄	年長、小1～中1	◎	13日	集会所	15日	―			現況
		平山	年長、小1～小6	◎	13日	辻	15日	―			詳細
		岡・帯阿井	小学生	◎	13日		15日	―			聞取
		根玉里	小1～中1	◎	13日	集会所	15日	―			現況
		田畑・橋下	小1～中1	◎	13日	稲荷神社付近	15日	―			現況
石岡市東大橋	園部川	下坪		○						石岡市（1983）	文献
石岡市東田中		東(台･沖･新田)	小1～小6	○	13日	墓地	―	―			詳細
		西（西・和田）	年長、小1～小6	○	13日	墓地	―	―			詳細
石岡市大谷津				◎	13日	墓地	15日	―			聞取
石岡市北根本	恋瀬川		小1～中3	◎	13日	墓地	15日	―			聞取
石岡市中津川	恋瀬川	上	小1～小6	◎	13日		15日	―			聞取
		下	小1～小6	◎	13日		15日	―			聞取
石岡市三村	恋瀬川	吹上		◎	13日		15日				聞取
		今泉									聞取
		諸士久保									聞取
		新生		◎	13日		15日				聞取
		長見寿		○							聞取
		羽成子		◎	13日		15日				聞取
		坂井戸									聞取
		御前山									聞取
		水内		○	13日		―				聞取
石岡市石川	霞ケ浦		小4～小6	◎	13日		15日	―			聞取
かすみがうら市宍倉	菱木川	天神	小1～小6	◎	13日	お堂(墓地隣地)	15日	―		坂本要編（2013）	文献
土浦市手野	霞ケ浦			○			―			新盆の家だけで作った、土浦市（1980）	文献
土浦市飯田	桜川・備前川			○	13日		―				聞取
土浦市矢作	桜川・備前川			○	13日		―				聞取
土浦市佐野子	桜川・備前川		小1～中3	○	13日	萬蔵寺跡→墓地	―	―			詳細
土浦市宍塚	―			○	13日		―	―		宍塚の自然と歴史の会（2005）	文献
土浦市舘毛	桜川・備前川			○			―			土浦市（1980）	文献
土浦市上高津	桜川・備前川			○			―			土浦市（1980）	文献
土浦市小松	桜川・備前川			○			―			土浦市（1980）	文献
土浦市大岩田	霞ケ浦			○			―			土浦市（1980）	文献
阿見町掛馬	霞ケ浦		小2～中2	◎	13日	墓地	15日	―		14日も村回りをする、昔は小4～小6	現況
阿見町島津	霞ケ浦・清明川	上島津	小1～小6	◎	13日	集会所→長泰寺	15日	―		昔は小5～小6	詳細
阿見町岡崎	清明川			○	13日					阿見町（1981）	文献
阿見町若栗	清明川・桂川			○	13日					阿見町（1981）	文献
阿見町塙	清明川			○	13日	墓地	―	―		嶋田（1988）	文献・聞取
阿見町石川	清明川			○	13日	墓地	―			嶋田（1988）	聞取・文献
阿見町君島	清明川			○	13日	村のはずれ	―	―		嶋田（1988）	聞取・文献
阿見町飯倉	清明川		小3～中3	○	13日	墓地	―				現況
阿見町大形	清明川			○	13日	墓地	―			嶋田（1988）	文献
阿見町荒川本郷	清明川 乙戸川	上本郷		◎	13日		15日				聞取
		下本郷		○	13日		―				聞取
阿見町実穀	乙戸川		小3～中3	◎	13日	集会所→乙戸川→墓地	15日	―			詳細

表１　茨城県下の盆綱一覧表③

大字	水系	小集落・坪・班など	子供組	仏の送迎	迎え	出発地点	送り	綱引き	祈願	備考／典拠	調査種別
阿見町小池	乙戸川	上小池		○	13日	墓地	―				聞取
		下小池	小1～中学生	○	13日	墓地	―	―			現況
阿見町福田	乙戸川			○	13日	墓地	―	―		嶋田（1988）	文献
美浦村土屋	高橋川		小1～中3	○	13日	墓地	―	―			現況
稲敷市古渡	霞ケ浦	上宿・下宿	―	△	―	―	16日	◆	年占	8月14・15日に綱引き、16日送り	文献
稲敷市下須田	霞ケ浦（野田奈川）		小1～中2		―	般舟寺	―	―	豊作	8月13日に豊作祈願	詳細
牛久市牛久町								▲		牛久市史編さん委員会（2002）	文献
牛久市新地町	稲荷川・谷田川							▲		牛久市史編さん委員会（2002）	文献
牛久市田宮			小1～中3	○	13日	墓地	―	―			詳細
牛久市岡見町	小野川			○	13日		―	◆		十字路で綱引き。藤田（1964）	文献
牛久市東猯穴町	小野川		小3～小6	○	13日	墓地	―	―		牛久市史編さん委員会（2002）	文献
つくば市玉取	桜川			○	13日		―	―		筑波大学みんぞく研究会（1980）	文献
つくば市栗原	桜川	中坪	小1～中3	○	13日	集会所（昔は北斗寺）	―	―			詳細
		台坪	小5～中3	○	13日	集会所	―	―			詳細
		乾島	小1～中3	○	13日	集会所→北斗寺	―	―			詳細
つくば市上ノ室	花室川	中坪・前坪		○	13日	墓地	―	―		桜村（1985）	文献
		西坪		○	13日	墓地	―	―		桜村（1985）	文献
		本郷								田村（1979）	文献
		舘坪								田村（1979）	文献
つくば市倉掛	花室川			○	13日		―			桜村（1985）・嶋田（1988）	文献
つくば市上広岡	花室川			○	13日	共同墓地	―			桜村（1985）	聞取・文献
つくば市下広岡	花室川		小5～中2	○	13日	墓地	―	―			現況
つくば市大角豆	花室川	上大角豆		○	13日	墓地→オコヤ	―	―		桜村（1985）	文献
		下大角豆		○	13日	神社	―	―		各戸では仏の送迎はしない	聞取
つくば市中内	小野川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市館野	小野川			○	13日					嶋田（1988）	文献
つくば市赤塚	小野川			○	13日	墓地	―			更科（1967）	文献
つくば市梶内	小野川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市稲岡	小野川			○	13日	墓地	―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市市之台	小野川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市大井	小野川	上組	小1～小6	○	13日	墓地	―	―			現況
		下組	小1～小6	○	13日	墓地	―	―			現況
つくば市北中妻	小野川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市南中妻	小野川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市菅間	稲荷川		小1～中3	○	13日	十字路→墓地	―	―			現況
つくば市苅間	蓮沼川	上扇・宮本・籔/古屋敷	小4～中3	○	13日	墓地	―	―		「ボン」を鳴らす点に特徴あり	詳細
		辻・原	小4～中3	○	13日	墓地	―	―		かつては小学1年生から参加していた	詳細
つくば市西大橋	蓮沼川			○	13日		―			谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市要元猿壁	蓮沼川		小3～中3	○	13日	墓地	―	―		つくば市（2014）	文献
つくば市水堀	谷田川									谷田部の歴史編纂委員会（1975）	文献
つくば市六斗	谷田川		小1～中3	○	13日	墓地	―	―			現況
つくば市小茎	谷田川・稲荷川		小3～中3	○	13日	墓地	―	―			詳細
つくば市上岩崎	西谷田川			○	13日		―			茎崎町（1994）	文献・聞取
つくば市下岩崎	牛久沼・谷田川		小1～中2	○	13日	辻→守徳寺（墓地）	―	―			詳細
龍ヶ崎市長峰	大正堀川	沖坪			―		―		悪霊祓い	龍ヶ崎市史編さん委員会（1993）	文献
龍ヶ崎市宮渕町	大正堀川	千秋	小1～中3	○	13日	墓地	―	―			詳細
河内町源清田	利根川・新利根川	広田		○	13日	墓地	―	―			聞取
利根町中谷	利根川			○	13日					ダンドビンドと呼ばれた	聞取
利根町福木	利根川	宿福木		○	13日					利根町史編さん委員会（1992）	文献
		土手福木		○	13日					利根町史編さん委員会（1992）	文献
利根町羽中	利根川			○	13日					ダンドビンド。利根町史編さん委員会（1992）	文献
つくばみらい市伊丹	中通川				13日		―				文献
つくばみらい市下鳥	中通川	上組			13日	少年団本部	―	■		春日神社で綱引き	文献
		下組									文献
つくばみらい市下平柳	小貝川			○	13日		―				文献
筑西市大塚	小貝川				―		―	■	疫病除け	8月13日に綱引き	詳細

水系は大字内や字界を流れる主要な河川湖沼を示す。「綱引き」欄のうち■は実施する（実施した）もの、▲は実施した可能性があるもの、◆は綱引きとともに仏迎え・仏送りの要素をもつものを示す。調査情報のうち「詳細」は詳細調査を、「現況」は現況確認調査を実施したものを示す。「文献」は主に文献資料をもとにしたもの、「聞取」は市町村等からの情報提供によるものである。

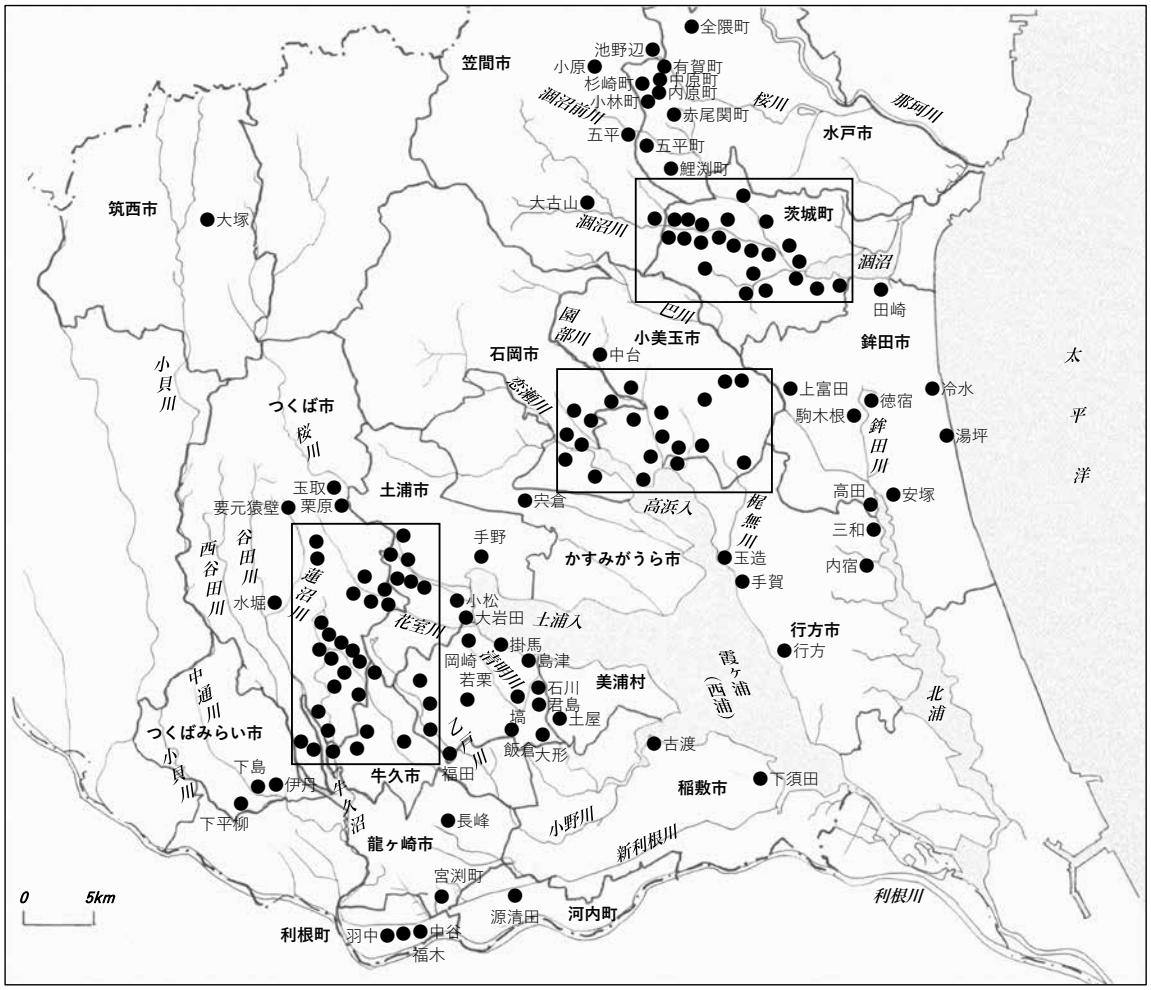


図１－1　盆綱分布図（全体）大字単位でプロット（鉾田市旧巴村は該当する大字が不明のため非表示）

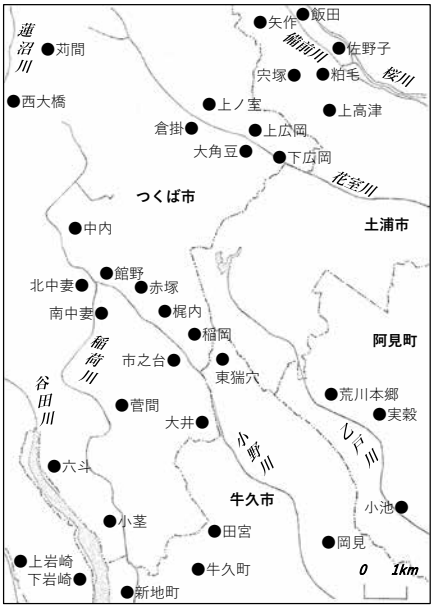


図１－4　盆綱分布図（土浦市・つくば市・牛久市・阿見町周辺拡大）

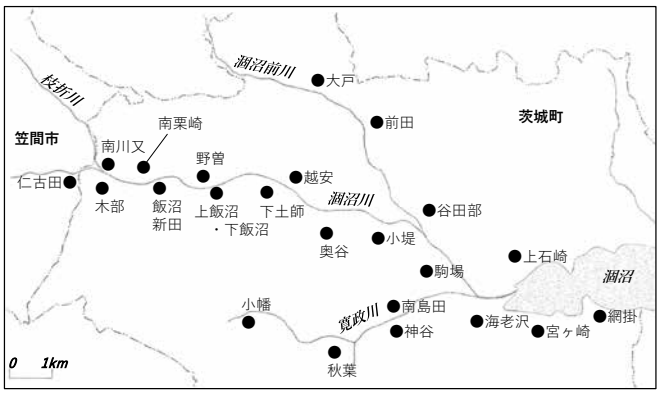


図１－２　盆綱分布図（茨城町周辺拡大）

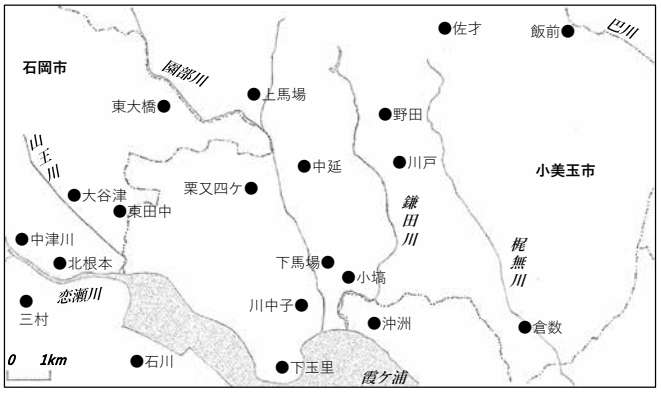


図１－３　盆綱分布図（小美玉市・石岡市周辺拡大）

水系（霞ヶ浦〔西浦〕・北浦・牛久沼・小貝川・鬼怒川など）の三つの水系に大別されるが、県北の久慈川水系では確認されなかった。また、那珂川水系であっても、その分布は涸沼より上流の涸沼川と、支流の涸沼前川・寛政川に集中し、涸沼から那珂川への合流まで、あるいは那珂川の本流においては確認されず、水系内での地域的なまとまりが認められる。利根川水系では、霞ケ浦沿岸のいわゆる「土浦入」や「高浜入」周辺に顕著で、たとえば高浜入に注ぐ恋瀬川・園部川の下流部などに局所的なまとまりがみられた。その一方で霞ケ浦・北浦沿岸域にわたって万遍なく分布する傾向は認められない。分布上の空白がみられるため、かすみがうら市や行方市など、湖に広く接している市であっても、事例数はさほど多くなかった。もっとも多くの事例を数えたつくば市をみると、霞ケ浦の土浦入に注ぎこむ桜川と花室川、霞ケ浦南西岸（稲敷市古渡）で流入する小野川と支流の乙戸川、牛久沼に注ぐ谷田川と支流の稲荷川、蓮沼川などに分布を確認できる。盆綱が顕著にみられる複数の河川を有していることが、つくば市の事例数の多さにつながっている。

盆綱行事の最後に、ボンヅナを川や湖へ流す事例が複数みられた。阿見町実穀のように行事の最初に乙戸川へボンヅナを運んで水に浸す事例や、牛久沼周辺での水辺の真菰（マコモ）を刈り取って作るボンヅナなどは、盆綱行事が水辺空間と深い関わりをもつ習俗であることを示唆しており、分布のほとんどが主要な河川沿いにみられることからも、これを裏付ける。鉾田市冷水や湯坪のように太平洋沿岸でも盆綱がみられた。冷水では巡行を終えたボンヅナは浜辺へ運ばれ、海へ流される。

二　盆綱行事の分類と特徴

（1）時期と名称

茨城県下では盆行事を月遅れの八月に行っており、一般的には八月十三日から十五日ないし十六日までがお盆の期間とされる。今回現地調査をした盆綱も、すべてこの期間のものであった。ただし、過去の調査報告をみると、旧暦七月を実施日とするものがあり、元々は旧暦七月十三～十五日の行事として把握すべきであろう。

名称としては「ボンヅナ・ボンズナ（盆綱）」あるいは「ボンヅナヒキ（盆綱引き・盆綱曳き）」が多い。そのほか、「盆殿」の字を当てるであろう「ボンドノ」（石岡市東田中西地区）、巡行中の唱えごとに通じる「ヤンサボンサ」（石岡市石川、かすみがうら市宍倉天神）や「ヤツデノボンヅナ」（鉾田市安塚）、綱そのものの呼び名による「ジャーメ」（石岡市東田中東）・「ジャーモミ」（河内町源清田広田）・「ヘビカツギ（蛇担ぎ）」（つくば市要元猿壁）もある。その由来は詳らかではないが、利根町中谷では「ダンデビンド」と呼ばれていた。

（2）分類と分布

表1からも明らかなように、盆綱行事のほとんどがいわゆる「仏の送迎」を目的としている。以下、八月十三日に各家が盆綱によって先祖の霊を迎えることを「仏迎え」とよび、八月十五日各家から送りだすことを「仏送り」とよぶ。事例全体を俯瞰すると、もっとも多いのは十三日に「仏迎え」だけを行う事例である（後掲の**図2**では○で示した）。大字を単位としてみれば八十四例を数えた。この八月十三日の「仏迎え」に加えて、八月十五日に「仏送り」をする事例が十六例あり（同、◎で示す）、両者（○＋◎）をあわせた「仏の送迎」は全体の七十三％を占める。これらは大字単位の集計であり、実際には大字内

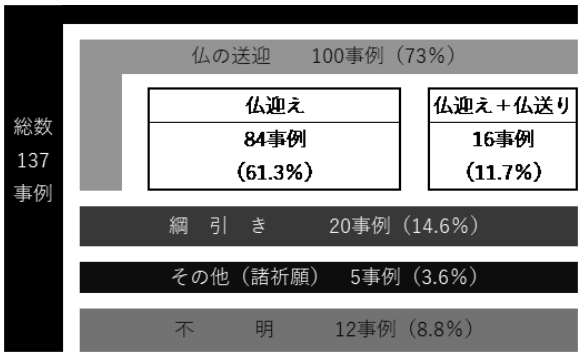


表2　盆綱の分類と事例数（大字単位での集計）
綱引きには仏の送迎を伴うものを含んでいる。

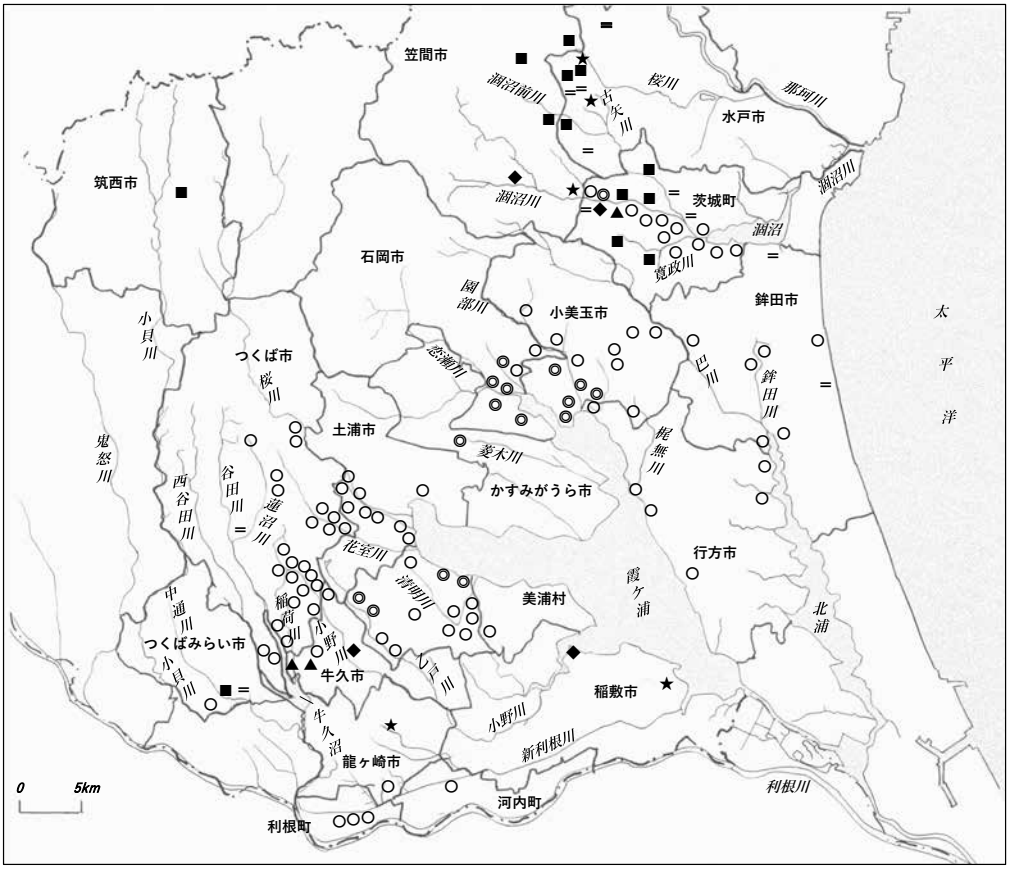


図２　盆綱の分類

○仏迎え　◎仏迎え＋仏送り　■綱引き　▲綱引きヵ　◆仏の送迎＋綱引き　★その他　＝不明

の小集落・坪や班を単位として複数の「仏の送迎」に伴う盆綱がみられる。調査にあたった者の実感としても、茨城県下の盆綱の大部分は「仏の送迎」を目的とする行事だといってよいだろう。これらを**図２**に示した。分布上の中心的エリアのほとんどで「仏の送迎」が行われている傾向が看取できる。そのなかでもとくに分布が濃密なふたつのエリア、すなわち石岡市東部から小美玉市南部の高浜入周辺と、土浦入南岸の清明川・乙戸川の辺りでは、「仏迎え」と「仏送り」の両方が行われていることも読み取れる。

一方で、「仏の送迎」を主たる目的としない、あるいはその認識が希薄な盆綱の存在も確認された。これらの事例では、人々が綱の左右に分かれて引き合う「綱引き」を行うものが約十五％を占めている（**図２**では■・▲・◆で示した）。また、稲敷市下須田のように、神社に立ち寄ったり、各家の庭で綱を振りながら豊作祈願の唱えごとをする例もあった（同、★で示した）。**図２**をみると、「仏の送迎」を主たる目的としないこれらの盆綱は、分布上の中心エリアより外れた周縁部のエリアにみられ、とくに涸沼川・涸沼前川上流にまとまっている様子が看取できる。以上のような分類と分布上の特徴を踏まえながら、さらに詳しくそれぞれの様相を整理していきたい。

①仏迎え

前述のとおり、八月十三日に「仏迎え」だけを行う盆綱が事例数としてはもっとも多い。これらの事例のほとんどで十三日の当日あるいは前日までにボンヅナが製作される。ボンヅナは毎年新しく作られるものであり、かつては材料となる藁や真菰を子供たちが各家から集めた。十三日の夕方になると、子供たちが墓地で唱えごとをしたり、墓地を周回して仏さまをボンヅナに依りつかせ、各家に送り届ける。家の門口や庭で仏さまを連れてきたことを唱え、ボンヅナを担いで庭を回ったり、地面や縁側に叩きつけたり、座敷に上がり込んだりする。こうした唱えごとや所作によって、各家に仏さまが迎えられたことになる。すべての家を巡り終えると、ボン

ヅナを近くの川や湖・海に流したり、特定の場所に納めたりして行事は終了する。

②仏迎え＋仏送り

①の仏迎えの翌々日、十五日に今度は各家で仏さまをボンヅナに依りつかせて墓地などに送りとどける。十五日の仏送りは、十三日の仏迎えと対になっているものがほとんどである。

小美玉市下玉里平山の場合、十三日の仏迎えで辻を出発するときに、「先祖代々皆乗れ」とボンヅナに乗ってもらう唱えごとをして、各家を巡り始める。そして、その日の晩に出発した辻へと戻って一度ボンヅナを納め、十五日に再び巡り始める。十五日に辻を出発する際の唱えごとはないが、すべての家を巡り終えて出発地点の辻に戻ると、最後に「先祖代々皆降りろ」と唱える。十三日の出発から十五日の終了までがひとつのサイクルになっている。かつて、かすみがうら市宍倉天神では、八月十三日に墓地のあるお堂を出発して鹿野山集落を巡った後、天神集落を西から東に進み東端の家でボンヅナを預かってもらった。そして、十五日に預けておいた家に取りに行き鹿野山への巡行を始め、天神集落に戻ると東から西へと十三日とは逆の順番で家を巡って西端の家で終えた。最後はお堂に戻らずに、辻にボンヅナを納めた。天神集落では十三日と十五日で経路を逆にしており、迎えと送りが対になっていたことが分かる。

仏迎えと仏送りの両方を行う場合、「迎えは早めに、送りはゆっくり」などと言われ、十三日は早い時間帯に始め、十五日は少し遅い時間に行事を始めることがある。仏さまに長く滞在してもらう意識が垣間見える。

なお、阿見町掛馬では、十三日の「仏迎え」と十五日の「仏送り」の中日にあたる十四日に、村回りをすることが確認された。嶋田氏の調査報告によると、阿見町君島では十三日に一般の家を、十四日～十五日に新盆の家を巡ったとされる（嶋田一九八八）。これらの事例は、お盆中の三日間にわたって盆綱が行われる事例となる。

また、更科氏の報告に、茨城町南栗崎では七月十三日に迎え、十六日に送りを行い、さらに七月晦日の盂蘭盆にもう一度ボンヅナを墓地から引き出して道路を歩いたとある（更科一九六七）。今回の調査のなかでは、八月十三日に迎え、八月三十一日の盂蘭盆にも引いていたとの報告があった（ただし、平成二十九年に休止）。十三日、十五日以外に行う事例として記しておく。

③綱引き

「綱引き」を行う事例が二十か所の大字で確認できた（**表1**や**図2**では■などで示した）。なかには、茨城町飯沼新田のように十三日の仏迎えの盆綱とは別に綱引きを十四・十五日にした事例や、牛久市岡見町の「仏迎え」のあとに綱引きをした事例も含む（同、◆で示した）。また、詳細は不明だが過去の調査記録や周辺の状況から「綱引き」の可能性が高い報告も含めた（同、▲で示した）。

「綱引き」の盆綱のうち、笠間市池野辺と五平、筑西市大塚については詳細調査を、笠間市大古山については現況確認調査の報告文を参照された

写真１　下島の盆綱（「下島少年団本部」の門）

写真２　春日神社境内での綱引き

い。ここでは、事例数が少ない「綱引き」の様子を補足するため、平成二十四年をもって休止されたつくばみらい市下島について、筆者の調査記録（平成二十二年当時）から簡単に紹介しておく。八月十三日、下島ではくじ引きで決めた男子の家に人々が集まり、大人が中心となってボンヅナが作られる。男子の家の前には杉の葉で作った門がつくられ、門には「下島少年団本部」の看板が掲げられる（写真1）。夜になると、子供たちはボンヅナを家から出して、集落内の通りを曳きずりながら歩く。墓地から出発したり、立ち寄ったりすることはない。また家一軒一軒の中に入ることもない。通りを曳き歩いた後、集落の端にある春日神社へ移動する。この時には大人もついて行く。そして、子供たちがボンヅナを曳いて社殿の周りを三周すると、大人と子供に分かれて境内で綱引きを始めた（写真2）。綱引きを終えたボンヅナはそのまま境内に取り置かれた。

民俗学では、綱引きの勝敗は神意のあらわれとされ、年占としての側面をもつが、県下の綱引き事例でも同様である。筑西市大塚の盆綱では、かつて隣の深見地区の人たちが綱を引きにやってきて対抗したという。引き負けると田畑が荒れ、疫病が流行ると言われたそうだ。稲敷市古渡の盆綱引きは、八月十四日・十五日に行われ、上宿（農方）と下宿（浜方）とに分かれて引き合い、十四日は引き分けとし、十五日は綱が切れるまで引き合ったと伝わる。上宿が勝つと豊作、下宿が勝つと大漁だという。ボンヅナが豊穣を引き寄せるものとして観念されている。なお、古渡では綱引きの翌日にボンヅナを霞ケ浦に流したが、この綱に乗って先祖の霊は帰っていくという伝承があった。綱引きを主体としつつ、仏送りの要素ももつ事例である（同、◆で示した）。

後述するように盆綱は子供組の行事であるが、「綱引き」の盆綱に関しては大人が主体で実施していたり（笠間市池野辺・筑西市大塚・稲敷市古渡）、子供と青年・大人が引き合ったりする（つくばみらい市下島）点に特徴がある。また、行事日についても、「仏の送迎」が十三日を主体とするのに対して、「綱引き」は十五日とする事例が目につく。この点が、九州南部で盛んな「十五夜綱引き」と当地の盆綱との関連性が説かれるひとつの要因になっている。

④その他（諸祈願）

笠間市仁古田の盆綱は十三日に作られるが、それを持って子供たちが集落まわりを行うのは翌十四日の夕方である。墓地には寄らず、各家で「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声をかけて綱を上下させながら揉む。そこに「仏の送迎」の意味合いはなく、「鎮魂」が目的だとされる。ちなみに、嶋田尚氏は仁古田の盆綱を「綱引き」として把握した。これは、ボンヅナを庭に叩きつけたり引っ張ったりすることを根拠にしたようだ。涸沼川周辺の盆綱では、ボンヅナに取りつく引き綱を引き合うような所作がみられるため、確かに「綱引き」を行っているようにもみえる。しかし、二手に分かれて綱を引きあう、厳密な意味での「綱引き」とは言えないことから、ここでは「その他」に分類した。

稲敷市下須田の盆綱は豊作祈願として行われる。八月十三日の夕方、地区内の般舟寺で住職に読経をしてもらい出発するが、初めにふたつの神社の社殿まわりを周回してから巡行を始め、各家の庭で「豊年満作」の唱えごとを繰り返す。墓地へ行くことはないが、翌十四日朝に川へボンヅナを流した後、共同墓地の入口に子供たちが小屋を作り、お籠りをする。

この他にも、「仏の送迎」や「綱引き」の要素はなく、厄払いなどを目的にするものはいずれも「その他」に分類した（同、★で示した）。

（3）儀礼としての仏の送迎

ここまで県下の盆綱について、その分類と分布、特徴を概観した。以下では事例の大分を占めている「仏の送迎」（「仏迎え」および「仏迎え＋仏送り」）に対象を絞って、その様相を整理しておきたい。とくに送迎に関わる儀礼に着目し、場面ごとに提示する。

①出発地点と所作

仏の送迎を目的とする事例は、大字内の小集落・坪や班を単位に実施されているものも含めて一三六例あり、うち出発地点を把握できたのは八十六例あった。このうち墓地を出発点とする事例は六十二例を数えた。多くは共同墓地であるが、特定の家の墓前とする例もある。製作したボンヅナをあらかじめ墓地へ運んでおき、盆綱が開始されるまでの間に仏さまが乗り遷るというところもある。この場合、共同墓地の入口に置かれることが多く、墓地の地蔵尊を囲むようにして置いておく（茨城町小堤）、無縁仏の塚に巻きつけておく（小美玉市下馬場）などの事例もみられた。

墓地以外の出発点としては、集会所（地区集落センター）や神社・堂などを出発点とするもの、辻から出るものなどが二十四例みられる。ただし、そこから出発して墓地へ立ち寄ってから巡行する事例が九例あった。それらを合わせれば八十六例のうち七十一例が、墓地を出発点・経由地として各家へと向かうことになる。なお、小美玉市下玉里平山の場合は、地蔵の建つ辻のところで「先祖代々皆乗れ」と唱えて出発するが、この地点は共同墓地へ上がっていく坂の入口にあたる。各家ではこの坂を上がったところで提灯に火を焚いてお迎えをしており、仏さまが坂のあたりに来ていると認識されるようだ。墓地に直接行くことはないが、坂が仏を迎える場所と観念されているようである。

墓地の出発にあたっては、仏を依りつけるための唱えごとをする例が多い。「ノーラッセ」「ノーラッショ」「ノーリャンセ」など、ボンヅナに遷ることを促す言葉がみられ、それぞれの地区によって節が異なる。茨城町奥谷の奥谷区では「仏さんの道は糸より細い」と唱えてから墓地にボンヅナを入れる。同様の文言は同町上石崎船渡でもあった。ちなみに先祖の霊を指す言葉の多くは「ホトケサン（仏さん）」だが、小美玉市野田隠谷のように、「ノリラッショイ、ノリラッショイ、ジッチャン、バッチャン、ノリラッショイ」と爺さん・婆さんとするものもある。

墓地でボンヅナを周回させてから巡行を始める事例は多い。墓地を時計回りに三回まわるのは小美玉市中台やつくば市大井などで、反時計回りに三回としているのが小美玉市中延立延やつくば市六斗などであった。

石岡市東田中の西地区や牛久市東猯穴町では、先祖を乗せるため、子供が墓地の中を歩きながら墓石の前で先祖をおんぶする仕草をする。鉾田市駒木根では墓地の土や墓石に付いた苔を一つまみ集めてボンヅナの胴体の隙間に詰める。行方市手賀船津ではボンヅナに墓地の砂をかけた。いずれも先祖を綱に乗り遷らせるための所作である。

つくば市下岩崎では、集落内の辻からボンヅナを担ぎ出すに際して爆竹を鳴らし、まず守徳寺に向かう。境内に墓地があり、かつては墓地を周回してから出発した。今は墓地を回ることはしていないが、ここでタカバリ（高張提灯）に火を灯してから出発するのが習わしである。阿見町実穀では墓地へ行く前に乙戸川へ行き、ボンヅナを水に浸す。そして墓地で「のーりゃんせ、のーりゃんせ、ほーとけさま、のーりゃんせ」と唱えてから提灯に火を灯す。ボンヅナに先祖が乗った合図なのだという。龍ヶ崎市宮淵町千秋では、共同墓地へボンヅナが出発する際に松明へ火をともす。松明は長い竹の先端に藁を束ねて作ったもので、大人がこれを掲げてボンヅナより先に墓地まで走り抜ける。以上のように、提灯や松明に火を灯したり、花火や爆竹を鳴らすなど、音と光を合図にして盆綱行事を開始する事例もみられた。

②集落内の巡行

墓地や辻などを出発すると、ボンヅナを担いだり曳いたりして進む。このときに「ワッショイ、ワッショイ」「ワッショイ、ガッショイ」などと連呼することが多い。かすみがうら市宍倉天神では「ヤンサー、ボンサー」、阿見町実穀では「ノッタカノンネカ、ワッショイコラショイ」と囃す。土浦市佐野子では「ゴーザッタ、ゴーザッタ、ホートケサーマ、ゴーザッタ」、茨城町小堤では「ナーンマイダンボ、ホトケサマ、キタヨ」とふれながら

歩く。

集落の巡行では、仏さまのある家（仏壇がある家）一軒一軒に立ち寄る場合と、家には入らずに道を巡行するだけの場合がある。後者の具体例となる鉾田市冷水では、「外回り」と「内回り」と呼ばれる定められた巡行ルートがあり、ボンヅナをもって集落を周回する。外回りは三周で、「ヤッサーヤッサーヤッサのボンヅナエー、オジーサンモ、オバーサンモ、ミーンナノーラッショ」と唱える。内回りは二周で文言の最後が「ミーンナオリラッショ」に変わる。茨城町奥谷の奥谷区やつくば市下岩崎でも家には立ち寄らない。ただし、奥谷の場合は、各家の門口で迎え火が焚かれ、盆綱の子供たちがこれを蹴散らしながら走り抜けていく。

家一軒一軒を巡っていく場合、出発点となる墓地や辻に近い家から始め、毎年決められた順番で巡行している。そのため各家では、毎年決まった時刻にボンヅナが訪れることになる。

③家での儀礼

家一軒一軒に入る場合は、仏さまを連れてきたことや、「オリラッセ」「オジラッショ」など仏さまを降ろすような言葉が唱えられる。つくば市の花室川や小野川周辺では「ホートケサマ、マイコンダ」と唱える例が散見される。行方市三和金上では「ヤンサノボンヅナ、キレタラツナゲ、ジーサン、バーサンノセテキタ」と唱えている。「切れたら繋げ」「切れたら恥じよ」という表現は北浦周辺でいくつか記録されている。

これらの唱えごとにあわせて、家の庭を一～三周まわる、ボンヅナを激しく上下させる、庭の地面にボンヅナを叩きつけるなどの所作がなされる。つくば市苅間のように「ポン」と呼ばれる麦藁で作った道具を地面に打ちつける事例もあった。また、盆棚のある座敷や玄関先へボンヅナを寄せたり、縁側に叩きつけたりするところもある。なかには、縁側から座敷へボンヅナをもって駆け上がったり、ボンヅナを投げ入れたりする事例もあった。石岡市東田中の東地区ではボンヅナの藁を一本抜いて座敷に投げ込む。茨城町小堤ではボンヅナに挿してあるヒノキを一枝ちぎって家人に渡し、家人はこれを盆棚へ供える。このような所作を通して、仏さまは各家に迎えられたことになる。

なお、十五日に仏送りを行う場合、各家の庭を回るなど仏迎えと同じ所作をするところもあるが、その場合でも唱えごとは「ノラッセ」「ノットクレ」など、仏さまをボンヅナに依りつかせるものに変わったりしている。

④新盆の家

新盆の家では盆綱の子供たちへ厚い接待をする事例が多い。子供たちへの御礼（おひねり）も他の家より金額を多くする傾向がある。茨城県内の新盆の家では、庭に灯篭を立てる風習がみられるが、牛久市岡見町や阿見町君島ではボンヅナが灯篭の周囲を回ったりする。茨城町奥谷ではボンヅナを曳きずりながら集落内を走り抜けるが、新盆の家の前では速度をやや緩めて「オーリナンショ（降りなんしょ）」と声をそろえる。小美玉市下玉里平山では、新盆の家だけは盆棚のある座敷に駆けあがる。阿見町実穀の盆綱は、新盆の家の墓地をまわって出発し、新盆の家しか巡らない。そのため実穀では、新盆の家とその墓地の位置、軒数によって毎年の巡行のコースが異なってくる。

三　ボンヅナの形態と特徴

（1）ボンヅナの名称と材料

ボンヅナの呼称としては、「ボンヅナ（盆綱）」あるいは単に「ツナ（綱）」と呼ぶところが多い。一方で、その形態的特徴から「ジャ（蛇）」（牛久市田宮・つくば市下岩崎など）、「ダイジャ（大蛇）」（行方市高須）や「ジャーメ（蛇目）」（石岡市東田中東）、「リュウ（龍）」（土浦市佐野子、つくば市栗原）、「ボンドノ（盆殿ヵ）」（石岡市東田中西）などの呼称も聞かれた。

ボンヅナの材料は、その多くが稲藁もしくは麦藁だが、つくば市小茎・下岩崎では胴部に真菰を用いる。真菰は牛久沼や谷田川で採取する。真菰

の利用は、つくば市六斗・苅間など牛久沼につながる水系でみられる。かつて牛久市田宮では胴はチガヤで、角は真菰で作ったという。また、前述した茨城町小堤ではヒノキの葉を挿して完成させる。石岡市東田中では杉の葉を挿しており、杉の葉は茨城町南島田・神谷、石岡市石川、阿見町君島でもみられた。

小美玉市中延の立延地区のボンヅナは、胴部に地区の仏さまと同じ数、すなわち仏壇のある家数の分だけ縄を結び、その結び目に仏さまが座るとされる。ボンヅナはまさにムラを構成する家々の仏さまが依りつく乗り物だといえよう。

現在は、コンバインで藁を細かく刻んでしまうことや、農家そのものが減少していることにより、藁の確保が難しくなった。しかし本来は、材料となる藁を各家が提供することでボンヅナは作られるものであり、藁を出せない家では代わりにお金を出していた。家々が共同で材料を供出し合い、これを縒り合わせて綱を打つことによって、ムラ全体として仏さまを迎える道具となった。

(2) ボンヅナの形態分類

ボンヅナの基本的な形態は二種類である。

(i) 藁を縒って太縄をつくり、その縄を三本捩ってさらに太い綱をつくる。

(ii) 竹などを芯にして、藁で覆って太くしたり、細縄を巻き付けつくる。

(i) はいわゆる注連縄のような形になり、(ii) の場合は棒状の形態を呈する。このふたつの作り方を基本として、さらに次のような造作をする。

(a) 頭部や顔を作り出すもの。俵ボッチを使って上あごと下あごを作り出したり、切れ込みをいれて口にしたりする。茄子などで目を作ったり、唐辛子の舌をつけたりする。龍の場合は角がついたりもする。

(b) 顔は作り出さないが、片側を太くすることで頭とするもの。

(c) 胴部に子供たちの持ち手となる縄をとりつけたもの。数が多い場合にはムカデのような形にみえる。

(d) 割った竹を並べてボンヅナの胴部下側につけて橇（そり）のようにしたり、台車をつける。

実際のボンヅナをみていくと、地区によってその形態はさまざまである。(a) の頭部を作り出すにあたっても、胴体部分とはまったく別に作る土浦市佐野子のような事例があったり、頭部と胴部を分けることなく顔を作り出す小美玉市中延の立延地区の事例もある。(c) の引手をつける事例は、ボンヅナを曳きながら歩いたり、上下させて地面に叩きつける事例にみられ、ボンヅナの扱い方によって形態が規定されてくることがうかがえる。(d) のうち車付の台車は、曳きずって歩く際の工夫で、子供たちの数が減ったことに伴う変化でもある。また、近年の変化として、ボンヅナを毎年作ることをやめて、運動会で使用する綱で代用するところがみられた。このほか、幣束を挿したり（石岡市東田中、つくば市栗原）、盆花を挿したり（鉾田市冷水）、紙垂をつける（稲敷市下須田）ところもみられる。

毎年新調されるボンヅナだが、今回の調査で、石岡市三村の諸士久保・吹上・今泉地区で木製の龍の頭が確認された。ボンヅナの頭部として使用されたとのことで、大変珍しい事例といえよう。

(3) ボンヅナの取り扱いと始末

行事の際にボンヅナをまたいではいけないという禁忌が各地でみられた。ボンヅナには仏さまが乗っているからだという。また、ボンヅナが地面にふれてはいけないとするところもあり、子供たちの足の上にボンヅナを乗せて休憩をしたり（つくば市栗原中坪、同小茎）、枕をおいてからおろす（石岡市東田中）などしている。

行事が終了した後のボンヅナは、①川や湖・海に流す、②燃やす、③特定の場所に納めて朽ちるままにするなどして始末される。①では橋の欄干に巻いておくものもあった。②については、阿見町実穀のように燃やした灰を乙戸川に流す例もある。③には辻（三叉路）に置くもの、墓地や堂に納めるもののほか、神社の神木に巻き付けておく例もある。

ボンヅナを川に流した後は走って帰る事例が、土浦市佐野子や稲敷市下須田にみられる。流したり燃やしたり、捨てる離れるという行為は、行事が終了した後のボンヅナに対する意識を考えるうえで興味深い。

四　ムラの盆綱とイエの盆行事

（1）行事の実施単位

ひとつの大字を単位として行われる盆綱がある一方で、大字内の小集落・坪・常会、班を単位に盆綱を実施する例も多い。この場合、大字内で複数のボンヅナが作られ巡行する場合と、特定の坪だけに限定される場合がある。今回の詳細調査・現況調査の範囲内でみると、たとえば小美玉市の大字下玉里では、大井戸・共栄／平山／岡・帯阿井／根玉里／田畑・橋下と、常会をもとにした五つの単位で盆綱が行われている。つくば市の栗原では中坪／台坪／乾島坪が個別に盆綱を行う。坪によって製作されるボンヅナの形が異なっている点も興味深い。

石岡市東田中では東地区と西地区とが別個に盆綱をおこなっているが、お互いの視界に入ったときには勝負を仕掛けにいき、ボンヅナにつけた杉の葉を使って相手地区の担ぎ手を傷め、どちらかのボンヅナがバラバラになるまで喧嘩をしたこともあったという。鉾田市駒木根と隣の徳宿新田でも対抗をしたという。

土浦市佐野子は本田と新田とに分かれるが、むかしは盆綱に参加できる子供は本田の男子に限られていたという。かすみがうら市宍倉天神では天神地区と鹿野山地区を巡った。鹿野山は天神から分かれた地区なので、盆綱を一緒に行うともいわれる。このように盆綱行事のなかに、集落内の新旧関係が現れている事例もある。

少子化により盆綱を維持できなくなってきたため、複数に分かれていた盆綱を一緒に実施するようになった地区もある。これに対して笠間市五平は、もともとは一つであった盆綱が、地区の人口増加によって近年三つに分かれたという。時代によって盆綱の実施単位が変わっていくことを示している。

（2）子供組の活動

綱引きの盆綱を除けば、盆綱の担い手はすべて子供たちであり、かつ以前は男子であった点が共通している。近年の少子化により、女子が参加をするようになった事例は多くみられ、現在では女子がいなければ成立しない状況もみてとれる。参加する年代としては、幼稚園児を含むものもあるが、多くは小学生からであり、中学三年生までとするところが多い。中学生だけとする事例もあれば、小学校高学年に限るところもある。また、中学三年生は受験を控えていることから、中学二年生までとする例もみられる。彼らのうち最年長者となる者は、「親方」「先達」「大将」などとよばれ、行事全般の指揮をする。育成会などの親たちが子供たちを手伝う事例もみられたが、これも近年の変化であり、本来は親方を中心とする子供たちだけの行事であった。盆綱では各家から子供たちに対しておひねり（寄付）が渡されることがほとんどで、その分配は親方たちの裁量に委ねられている例が多い。親たちが積極的にかかわりをもつようになった現在でも、お金の分配についてだけは口を出さないとする事例もあった。年齢あるいは盆綱行事での役割に応じて、お金の配分が変わる点も各事例に共通する。

盆綱には年齢階梯的な要素が多分にみられる。

かつては、子供たちが一晩を共にしたという事例も確認される。たとえば、茨城町奥谷では、昭和五十九年まで盆綱づくりを終えた子供たちが公

民館で合宿をして、翌日に盆綱を行っていた。つくば市苅間の辻・原地区でも十二日から十三日にかけてオゴヤ（お小屋）に泊り、作ったボンヅナを守った。石岡市北根本では旧公民館に泊り、十三日の早朝から薬師堂境内でボンヅナを作った。稲敷市下須田では、八月十四日の早朝にボンヅナを川に流しに行ったあと、共同墓地の入り口に小屋を作って、子供たちだけで過ごしている。

盆綱の始まる前に、お風呂に入って身を清める事例もあった。子供たちが白い体操服などで衣装を揃え（小美玉市下馬場など）、白い鉢巻を巻くなどした白で統一した装束も、子供たちの潔斎を意味するのかもしれない。

なお、土浦市佐野子の子供たちは、頬かむりのための手ぬぐいをかぶり、かつて顔には炭を塗って参加したという。

ボンヅナづくりより前に、綱の材料となる藁あるいは真菰を、各家から集めておくことが子供の主な役割となっていた。このように子供たちを主体とする集団によって盆綱は行われてきた。特定の行事に際して顕在化する組織で、年齢に基づいて集団を構成し、最年長者が親方となるなどの点から、盆綱はいわゆる「子供組」による行事と捉えて差し支えない。

（3）ボンヅナ作りと大人たち

子供組が主体となる一方で、ボンヅナの製作については、大人たちの関与が認められる。綱を撚る作業が子供たちだけでは難しいことにも起因するだろうが、特定の個人がボンヅナづくりの中心となることも多い。かすみがうら市宍倉の天神地区のように特定の家三軒の当主が毎年ボンヅナを作っていた事例もある。行方市三和金上やつくば市下岩崎のように新盆の家の人たちがボンヅナづくりに参加する例もある（その一方で鉾田市駒木根のように新盆の家は大人も子供もボンヅナづくりに参加しないという例もあった）。子どもたちは大人とともに、藁の大きさを整えたり束ねたり、綱を撚るのを手伝う。

（4）宗教者の関与

寺が関わる事例として、稲敷市下須田の盆綱があげられる。般舟寺（曹洞宗）の住職が盆綱の出発にあたって境内で読経をしている。つくば市栗原中坪では、親方と次年度の親方が北斗寺（真言宗）を訪ね、幣束（ご神体とよんでいる）を受けてきて、ボンヅナの頭部に挿す。牛久市田宮の盆綱には薬師寺（真言宗）の住職が深くかかわる。もっともこれは、昭和三十五、六年頃に中断してしまった盆綱を、昭和五十四年に復活させてからのことである。薬師寺境内と共同墓地、霊園内を一巡する形で復活が図られた。

これらの事例を別にすれば、盆綱行事において僧侶が積極的に関わる事例を見出すことはできない。小美玉市下玉里平山や下馬場では仏式ではなく、神式（神葬祭）で葬儀を行う家もみられる。この行事の存立が寺社や特定の宗派に因らないことを示しているといえるのではないだろうか。

（5）イエの盆行事

今回の調査では、盆綱行事とともに、各家でどのような盆の儀礼を行うかも把握するようにつとめた。その結果、盆綱にのせて仏さまを各家に迎える一方で、十三日の夕方に各家で迎え火を焚いたり、墓地へお参りに行って提灯に火を灯すなどして、個別に先祖を迎えていることが確認された。つまり、仏さまを迎える行為が、ムラの行事として行われる盆綱のそれと、イエごとのそれと二重になされていることになる。各家が墓参りを終えたあとでないと盆綱は行わないとする行方市玉造高須地区の例もあれば、盆綱の巡行とほぼ同じタイミングで墓参りにいくつくば市下岩崎の事例もある。巡行を終えた後、墓参りにいく小美玉市下馬場や、迎え火を焚く同市下玉里平山のような例もあった。なかには盆綱で仏さまを連れてきてくれるのだから、個別には迎えをしないと考える個人や家もあるが、どちらか

と言えば少数である。

そもそも、盆綱は十三日の「仏迎え」だけとする地区が多い。このため、これらの地区では十三日に盆綱より仏を迎えることはできても、仏を送るための手段は各家に委ねられていることになる。見方によっては、各家の仏の送迎が前提にあり、地区すなわちムラとしての仏の送迎（盆綱）がそこにつけ加わっているようにもみえる。

（萩谷　良太）

五　盆綱行事の民俗学的意義

（1）「仏迎え」・「仏送り」としての盆綱行事

茨城県下に展開する盆綱行事は、盆に訪れる先祖を、個々の家単位だけでなく共同体単位で子供たちを中心として迎え送る極めて貴重な民俗行事である。祖先祭である盆の期間に、家々の先祖は、彼らと系譜関係にある子孫がその祭祀の主体となり、子孫によって個々の家に迎えられ、祭祀・供応を受け、そして期間の終わりに再び送られる。その儀礼の流れは基本的には、祭と同様に、時と場との聖化の過程を経た上で、先祖の迎えから、盆棚という祭壇における祭祀と、子孫との共食へと進み、行事の終わりに際しては、先祖の送りと脱聖化という過程をとる（宮家準『宗教民俗学』一九八九年）。

七夕の時期の墓掃除や、盆棚を組立てそこに先祖の位牌を並べるなどの各家の行為は日常を非日常へと移行させる聖化の過程である。聖化された空間と時間の中で、家々の先祖は、迎え火や、道辻に設けられた土壇に立てられた線香に導かれ、その帰属する子孫の家に迎えられる。盆棚を祭壇として迎えられた先祖に対しては、その家の収穫物や盆団子などの供物で供応がなされ、檀那寺の僧侶を迎えての読経という追善が行われる。盆に集まった親族による共同飲食は、先祖と子孫との「共食」でもあり、それは祝祭的な時と場でもある。盆の期間の終わりに際しては、送り火が焚かれるなどして、迎えられた先祖を送り出し、日常の生活に復する脱聖化の過程がとられる。

盆綱行事は、盆の期間の始まりに際して、盆に迎え祀るべき先祖を有する家々の子供たちが主体となり、共同で墓からそれぞれの家へ先祖を導く行事である。また、一部地域では、盆の期間の終わりに際して、先祖が迎えられる起点である共同墓地や、集落外の世界への通路である河川にボンヅナを送り、送り盆としても盆綱は行われている。迎えられ、あるいは送られる先祖の姿は、ボンヅナによって具象化され、見えるものとして視覚化される。さらに言えば、子供たちによる賑やかな送迎は、祝祭的な場をも形作る。

留意されるのは、盆綱行事が行われている集落においても、個々の家での個別の先祖の送迎も、先祖の遺骨が納められた墓地や道辻などで並行して行われている点である。その意味では、迎えられ、送られる先祖に対する儀礼が、家を単位としたものと共同体を単位としたものとの二重化が生じていると言える。

（2）盆綱行事の主体としての子供

家々における先祖の送迎は、基本的にその家を単位とするものであるが、盆綱行事の場合は、集落の子供たち、あるいは特定の共同墓地に墓を有する家の子供たちを主体として、共同行事として先祖が迎えられる。共同墓地においては、個別の墓にボンヅナを引き回すのではなく、製作したボンヅナを墓地にしばらく安置し、あるいは出発の際に墓地の中で三回ボンヅナを引き回すなどの所作で先祖たちがボンヅナに乗ったことをイメージし、集落内を巡回しながらそれぞれの家に送ってゆく形をとる例が一般的である。子供たちは、共同墓地を出立する際、綱に乗せるべき先祖を個々にイメージして―例えば、生前の名前や人物そのものを思い浮かべながら所作を行ってはいないように思われる。迎えられる先祖の個別具体的なイ

メージ―桜井徳太郎の言う直接的具象的先祖観（桜井徳太郎『霊魂観の系譜』一九八九年）につながるようなイメージがその先祖に付帯されている訳ではなく、盆に迎えられるべき共同体の先祖群を習合的にボンヅナにのせているように感じられる。初盆の家の子供が参加している場合は、その死者に対する記憶が家族であった子供にも残っているだろうから、この行事への参加中に具体的なイメージを持ち得ると思われるが、それが具体的な所作や発話としては表現されていない。初盆の家の場合は、子供たちに少し多めの金銭を与えるなどの差別化が行われるが、そこでも故人に関するイメージが子供たちの間で語られたりする場面は見られなかった。

対して、個々の家に於ける先祖の迎えは、その家に帰属し、具体的に先祖として祀られるべき霊に対するものであり、特に初盆にあたる先祖については、いまだ生前のイメージが強く残っている。子供集団が、彼らに関わる先祖群をボンヅナに乗せ、その先祖が、個々の迎えられるべき家で分かれて行く形となる。この点で、子供たちは、自分が帰属する家の先祖を迎える事のみ目的として盆綱に参加しているのではなく、自分が帰属する共同体全体の先祖群を迎えるためにこの行事に関わることになると思われる。ただし、この場合も、集落の共同墓地で共同体全体の先祖群を迎えている場合と、対象を限定して起点となる共同墓地を利用している家々の先祖群を迎えている場合とに区分される。その子供が盆綱に参加するのは、迎えるべき先祖がその先祖群の中に含まれているという基本的な認識が認められる。

盆綱行事は、現在は、ボンヅナの製作や安全確認など大人の補助が加えられているが、綱引きとしての盆綱など一部の事例を除いて行事の行為主体は子供そのものであり、その準備と当日の実践は本来すべて子供の手で行われる傾向にあった。祖先がかつて集落を支えた過去の存在であるならば、子供は言うまでもなく、集落の未来を切り拓き、かたち作り、支える存在である。

それぞれの家の盆行事では、家筋に帰属する大人たちがその生活を支え、祖先祭祀の中心となり、子供たちは、その大人の所作を見て、言葉を聞く。子供たち自身も祖先祭祀に関わる様々な準備や儀礼行為に加わりながら、先祖を祀るとは何かを周縁的な参加者として学んでゆく。

一方、盆綱への参加は、学齢で言えば小学校の低学年から高学年（地域によっては幼稚園の年長と、中学生を含む）までであり、その年齢の階梯の中で学齢に伴う盆綱に関わる経験の蓄積が行われ、上の世代から下の世代へと伝承が行われる。この点では、子供たちは、本来、盆綱においては周縁的な参加者ではなく、主体的な存在であった。行事に参加する子供たちの中で、学齢に応じた序列が設けられ、上の世代から下の世代へと、盆綱にかかわる様々な事柄が伝承されて行った。そこには大人たちの介在はなく、特定の世代の子供たちが伝承の主体となり、子供たちはその過程を経て成長し、大人になり、先祖を祀る家を継承した場合は、次代の子供たちが運ぶ先祖を迎え、家での祭祀を行う立場となる。

子供たち全体が一体となり、共同で集落各戸へと家々の先祖を送り届けるという儀礼行為は、家々の先祖が単にその家の維持にのみ関わるものでなく、共同体全体の維持とも関わる存在であり、村と家々、そこに生活する大人と未来を背負う子供たち、そして先祖とが強く結びつくイメージを形成することにもなっていると考えられる。

（3）ボンヅナの形状―竜と蛇―

迎え盆にあたる八月十三日に盆綱が行われるのは、かつては、夕刻から夜遅くに至る時刻であったが、現在では、児童の安全への配慮から早まっている。当日の午後、まだ日が高いうちに始められることが多く、子供たちは炎天下でボンヅナを運ぶことにもなり、熱射病などにならないよう、大人が付き添い、訪れた家々で長めの休憩時間をとるようになっている。ボンヅナが集落を回る時間が早まったこともあり、家々の迎え火による個々の先祖迎えに先んじてボンヅナが家を訪れる場合も認められる。この

場合も、墓参りや迎え火などによる迎えは行われており、個々の家での迎え盆と共同行事である盆綱での先祖迎えが並行して行われることとなる。

盆綱行事で先祖を迎える際には、竜蛇の形象をとるボンヅナに先祖が乗るイメージが示され、墓を死者の世界との通路として、集落の子供たちによって、それぞれの子孫が待つ家々に運ばれる形をとる。ボンヅナの形状については、萩谷氏による分類に示されているように、明確に竜蛇の形をした頭部を有する場合もあれば、頭部のない綱に多数の引き手をつけたムカデを連想させる形状の場合もありバリエーションに富むが、後者の場合も、起点となる共同墓地で「蜷局を巻かせる」など竜蛇のイメージで語られる場合が見られる。また、石岡市東田中や石岡市三村の吹上集落でボンヅナをジャーメと称する例にも、ボンヅナを蛇と結びつける意識が示されているものと思われる。ボンヅナが竜蛇としての頭部を持つ場合、準備の段階で藁を用いて頭や顎を形作り、茄子の眼や角を飾る例が多いが、石岡三村常春寺には、吹上集落でボンヅナに用いた木製の頭部が四体残されている。この地区では、既に盆綱は行われていないが、かつては藁で製作した胴体に竜を連想させる木製の頭部をつけて盆綱を行っていた。この頭部が何を参考に製作されたかは伝えられていないが、形状としては竜を連想させる形状となっている。しかしながら、大きく開いた鼻孔の形状は、石岡市柿岡地区などで祇園祭の一環として演じられる三匹獅子舞である「棒ささら」の獅子の頭部にも類似している。近在の祭礼に於ける獅子の形状なども参考として製作した可能性もある。

竜、あるいは蛇はいずれも河川など水場につながる霊的な存在ともされ、特に河川は盆の送りの場ともされる。盆綱行事においては、ボンヅナやあるいはそれを焼却した後に生じた灰を流して処分する場を河川とする例が見られる。ボンヅナの処分は、道の辻や共同墓地の境など人の生活の場とその外とを繋ぐ境界的な領域で行われる例が見られる。河川でのボンヅナの処分は、霊的な世界とつながる水界に先祖を送迎するイメージとボンヅナの竜蛇の形象とが結びついているものと思われる。実際につくば市六斗では、河川から子供たちが刈ってきた真菰（水草）が、ボンヅナの材料として使われている。この地域は、かつては河川周辺で田舟を用いた湿田で稲を育成しており、そのような環境が盆綱の形象に影響を与えた可能性も認められる。

（4）盆綱行事と屋敷地

各家での子供たちの所作は集落によって違いがあるが、庭先でボンヅナを地面に叩き付ける例や、ボンヅナの頭部を盆棚が設けられた部屋の縁側に差し込む例、あるいは、より直接的にボンヅナからワラスボを抜いて、それを盆棚のある座敷へと子供たちが投げ込む例などが見られる。これらの事例では、ボンヅナに乗った先祖が、その子孫の生活する屋敷へ到着し、盆棚に迎え入れられる様が子供たちの所作として明確に示される。

注意されるのは、子孫が生活する屋敷地内への先祖の送迎が意識されている点である。ボンヅナを庭先で巡回させる例や、ボンヅナを庭先に三度叩き付ける例など、先祖の祭祀と、その子孫が住まう居住空間としての屋敷地とのつながりが強く示されている様に思われる。ボンヅナを地面に叩き付ける例は、建築儀礼における地固めや、農耕儀礼としてのイノコ打ちなどを想起させる。また土浦市大畑では祇園祭の神輿の巡行に際して、神輿を地面すれすれまで降ろしては担ぎ上げる所作を伴う場合もある。前二者は、生活の場、あるいは豊穣を生み出す土地霊の鎮めの意味があると思われる。盆綱を庭先で地面に叩き付ける所作にも、屋敷地にまつわる先祖を鎮める意味が考えられる。特定の家筋に連なる先祖が、単に先祖と子孫というつながりで迎えられ祭祀されるのではなく、先祖が居住し、そして子孫が居住する屋敷地を媒介として迎えられ祭祀されるのは、先祖という存在が家筋のみならず、その居住する生活空間としての屋敷地にも深く関わっていることにもよると思われる。

（5）鎮送儀礼との関係性

ここで留意されるのは、盆行事における屋敷地での無縁仏の祭祀であるが、盆綱行事との関連づける伝承は直接的には確認できなかった。今回の調査では、並行して盆行事全体の聞き書きも実施したが、先祖に捧げた供物の一部を盆棚の下に供えてこれをムエンサマ（無縁仏）への供物とする例や、共同墓地内の石塔や地蔵でムエンサマを祀るとする例、個々の家の墓参りにおいては、家墓に線香を上げた後、余ったものをムエンサマにも供えるとする例が聞かれた。あるいは共同墓地を囲むフェンスの外に恐らくはペットを埋葬したと思われる小さな墓標が設けられている例なども確認できた。しかしながら、ボンヅナによる先祖の送迎に際して、無縁仏を対象と意識される儀礼行為は行われていなかった。共同墓地内にムエンサマを祀るとする石塔や地蔵が設けられている場合、ボンヅナを置く場所をその近くにする例などはあったが、ムエンサマに対する特別な儀礼行為は見られなかった。

ただし、盆綱行事の儀礼の過程に、夏期に発生する虫害や疫病などの原因となる御霊を鎮めて集落外に送り出す鎮送儀礼との類似が見られる点には留意が必要であろう。茨城県では、夏期の鎮送儀礼としては、音曲を伴って大獅子や神輿、山車を集落内やその田畑を巡回させ、個々の家々の祓除を行っていく祇園祭が広く見られる。あるいは、土浦市大畑のからかさ万灯のように仕掛け花火によって共同体全体の祓除を祈念する事例も見られる。特に、神輿等の巡回によって行われる鎮送儀礼は、夏期の行事であること、共同体の子供たちが行事の中心となること、集落各戸を巡回し一定の儀礼行為を行うこと、その一部には水草など水界につながる表象物を伴う場合が見られることなどの点で盆綱行事との類似が見られる。

盆綱行事の主体は子供であることが一般的であるが、特に綱引きとして盆綱が行われる場合には、大人が主体となる傾向が見られる。綱引きとしての盆綱には、先祖をボンヅナに乗せて送迎するという観念は希薄であり、むしろ二つのカテゴリーが綱を介して対抗することによって、その年の作物の豊凶を占う作占的な意味や、あるいは負けた方に疫病が生じると伝えるなど、ボンヅナを介した対抗が共同体からの災厄の祓いと結びつけられている例も見られる。つくば市小田の祇園祭では、大獅子と神輿とがマチの境界とされる場所で対抗する。また、行方市麻生の祇園祭では、神前で神輿と神馬が対抗し、八岐大蛇をあらわすとされる神馬を境内の外に追う「馬追い」が行われる。これらはいずれも、境界で霊力ある神輿や大獅子、神馬を対抗させることで災厄の原因とされる悪しき霊を集落外に追い払う意味を有すると思われる。

このような鎮送儀礼は、基本的に共同体の生活空間から悪しき霊を鎮め、外部へと送り出す行事である。それに対して、盆綱行事は、共同体を守る先祖をその内部へと迎え、その上で先祖を送り終わったボンヅナを境界の外へと送り出す行事であり、そこに夏期の鎮送儀礼との相似性を指摘することも可能かと思われる。ここで留意されるのは、ボンヅナがその行事の終わりに際して、先にも述べたように集落の境界にあたる辻や道の脇の藪に投げ込まれ、あるいは河川に流される例も見られる点である。仮に、盆綱行事に夏期の鎮送儀礼としての意味が重層しているとすれば、ボンヅナによって家々に先祖を送るとともに、先祖以外の無縁仏をはじめとする諸霊を盆綱行事によって鎮め、集落外に送り出しているとの解釈も考えられる。それ故に、家々の個々の先祖の送迎と盆綱行事とが並行して行われるとも考えられる。

（6）高齢化・少子化の中での盆綱行事の積極的な継承・実践の模索

盆綱行事が現在でも維持・継承されている茨城県の農村社会は、農業のみによって維持されている訳ではない。各世帯の多くは兼業であり、会社勤めや公務員などサラリーマンとしての給与所得や、商店経営や工務店経営等自営業による所得によってその生活を維持している。今回、調査を行

い得た各集落も、専業農家のみから構成される集落はなく、各世帯は、いくつかの生業を複合しながら、その生計の安定度を高めて生活している。

そのため、その生活のリズムは、すべてが農事暦に対応するものではなく、世帯によって違いが生じている。特にサラリーマンの場合は、祭礼の準備が共同体で必要とされても平日には行いにくい状況もあり、従来の期日を変えて土日や休日に準備を行う傾向が見られる。

盆綱行事は、一部を除いて本来は、子供たちによる行事であり、その準備も子供たちによって進められるものであった。しかしながら少子化によって子供たちのみでの実施が困難になった状況もあり、ボンヅナを綯う準備段階や、子供達が集落内でボンヅナを引き廻す際の安全確認などには、大人が関わる形となっている。

集落内の農家から藁を集めるなどの作業は、特に伝承的な技術も必要とされないため、子供たちが担当し、一方、集めた藁でボンヅナを実際に綯う役割は、集落の中でもその知識や技術を身につけている大人が行う形が一般的となっている。今回の調査では、ボンヅナを綯う場面を幾度か観察させていただいたが、藁縄を綯ったり、ボンヅナの形を整える過程では、様々に試行錯誤が行われており、綱が足りなくなればホームセンターに車を走らせたり、ボンヅナの強度を高めるために塩化ビニール製のストッパーを用いたりするなど、伝承的な知識や技術がそのまま一つも形を変えずに伝えられている訳ではなかった。

しかしながら、そこには集落で子供時代から盆綱行事へ参加した経験に伴うボンヅナ全体の形状に関する記憶や、上位の世代から伝えられた知識や技術を基盤として、そこに今日的な工夫を加えながらボンヅナの制作技術を積極的に継承しようとする集落の人びとの姿を見ることができた。

例えば、ボンヅナを綯う綱については、本来であればすべてその年に農家から集めた藁を綯って用いることになるが、藁を提供できる農家も少なくなっており、また、藁を大量に綯うことも困難であることから、購入した縄を用いる場合もある。あるいは、ボンヅナの目玉は、本来は茄子を使うが、毎年使える木製の目玉に変えられている場合も見られる。こうした変化は、伝承的な盆綱行事の崩壊過程として捉えるべきではなく、現代の社会状況の中で、変化を加えながらも現代に適応した形で盆綱行事を積極的に維持しようとする地域の人びとの姿勢として把握することができる。

(7) 女子児童の参加と集落児童全体の行事への変化

同様のことは、盆綱行事に関わる子供たちについても言える。ボンヅナを墓地から各家に運ぶのは、集落各家の長男のみとする場合も一部では見られた。これは、明治以降、日本の近代化の過程において家父長制度を基盤とする家制度が整備され、長男子による家継承が一般化したことにも関わると思われる。共同体行事として、家々の先祖を各家にお連れし、また還すのが盆綱行事であり、各家の継承候補者であり、かつ未来の祖先祭祀の司祭者である長男子がその役割を負うべきという認識にも関わるものと思われる。家制度における長男子優先の意識は、戦後の戸籍法等の改正後も日本の社会の一部には残されてはいるが、先にも述べたごとく盆綱は共同体行事であり、また、盆の期間における家々の先祖の送迎は、それぞれの家単位で並行して行われている。さらには、少子化による男児の減少に伴い盆綱行事は、長男子を含む男児全員で支えられる行事から、女児も加えた子供たち全体で行う行事との認識が一般化している。

盆綱行事に女児を加えることについては現在ほとんどの集落で行われている。その経緯について、いくつかの集落で聞き書きを行うことが出来たが、集落の子供が少なくなり男児のみでの盆綱の維持が困難になった段階で、集落全体で協議して女児を加える選択を行った例が一般的である。従来、女児を参加させなかった理由については、神道的な解釈に基づいて赤不浄などで説明する例も聞かれたが、一般的な認識ではない。実際に、盆綱行事における女児の活動状況を男児のそれと比較して見ても、両者の間

に差異や区別を見いだすことは出来ない。ボンゾナを引き廻す際に、全体の行動を統括する役割は、基本的には子供たちの内、最年長の者が担う。大人たちは、子供たちが交通事故に遭わない様に気をつけながら順路を指示し、健康状態に気をつけるなどの配慮を行いつつ子供たちの主体性が失われない程度に関わる。最年長の児童が女児の例もあったが、その場合もその女児が、ボンゾナの出発の声かけなどを行い、全体を指揮していた。

また、盆綱は、共同墓地に位置する家々の墓から各家まで運ぶ行事であるため、共同墓地に墓を持っていない家の子供が盆綱に参加することに違和感があるとの話も聞かれた。そこには盆綱行事は家々の先祖の送迎の意味を持っており、祀るべき先祖がある家がその主体となるとする認識が示されている。その一方で、この行事は集落全体で行う行事であるから子供は全員参加できるとする意見や、あるいは、子供の参加に際して、その子供の家に祀るべき先祖があるかどうかなどを全く認識していない地域もある。傾向としては、祀るべき先祖を有する家々の子供を主体とする行事から、集落全体で支える共同体の盆行事としての意味が強くなっていると考えられる。

参加する子供たちは、強固な結束の下で活動するというよりも、猛暑の中、ボンゾナを運ぶこともあり、それぞれの家で用意されたアイスクリームや飲み物などを楽しみつつ休憩を交えて緩やかなペースでボンゾナを運んでゆく。また、家々から与えられたお金は、行事の後に子供たちにすべて分配され、それも楽しみの一つとされる。かつて男児のみで盆綱行事を行っていた集落では、女児がお金を分け合う男児たちを羨ましがったという話も聞かれた。

盆綱行事は、学齢の離れた子供たちを緩やかに結びつけ、また、集落の家々を廻り、祝祭的な雰囲気の中でそれぞれの家の盆棚を見て、先祖の祀り方を経験として学ぶ機会になるなど、将来につながる共同の記憶を形成する機会であるとも言える。

（徳丸亞木）

おわりに―なぜ盆綱行事を継承するか―

この調査事業が行われた期間は、新型コロナウイルス感染症が急速に拡大した期間でもあり、特に令和三年度は、多くの地区において盆綱行事の休止が余儀なくされた。集落の少子化にともなって盆綱行事への参加者が減少し、行事の維持が難しくなっていた集落では、今後の行事自体の継続が見通せないとする話も聞かれる。

一方で、盆綱行事は、地区にとって貴重な行事であるからコロナウイルス感染症が終息した後には、必ずこの行事を復活したいという意見も聞かれた。現時点では、ボンゾナを引き廻すのは子供たちが主体であるが、盆綱行事の将来を考えた場合、集落によっては、いずれ大人たちがその役割を担う必要があるとの意見も聞かれた。子供たちが少なくなったから盆綱行事を中止するという選択ではなく、そのような状況になっても行事を何とか継承し、実施して行きたいという積極的な考えに支えられている意見である。

この点に関して、ある話者から聞かれた印象的な言葉があった。

「今、家によっては、お年寄りだけになっていて、身体も不自由で、盆の迎えをお墓で行えないような場合もある。それぞれの家での先祖迎えが出来なくても、盆綱が続いていれば、子供たちがボンゾナに先祖をのせて家まで連れてきてくれる。お年寄りにはとても大事な行事だから止めることは考えない」

個々の家の先祖の送迎と、子供たちによる共同性を持った先祖の送迎である盆綱行事は、先祖の送迎という面でのみ見れば重複しており、盆綱行事が中止されても問題はないように思われる。しかしながら、現代の地域社会における高齢者に、大きな安心を与える重要な役割を、盆綱は担っていると言えよう。

第三章　調査報告

第一節　詳細調査報告

一　池野辺（いけのべ）（笠間市）の盆綱

〔地区名〕

笠間市池野辺（倉作集落）

〔地区の概況〕

国道五十号線を水戸市内原から十kmほど北上した、朝房山の南麓に位置する。行事の実施場所である倉作は、涸沼川上流域、笠間市域の北部に位置する池野辺地区の中でも最も北に位置する集落で、東側を水戸市に接し、北側は山を隔てて城里町と接する。

行政上の変遷は、近世期から池野辺村、明治二十二年（一八八九）には西茨城郡大池田村（大橋村・池野辺村・福田村・飯田村の合併による）、昭和三十年（一九五五）に笠間町、その三年後に笠間市となった。さらに平成十八年（二〇〇六）に友部町・岩間町との合併により笠間市となり、現在に至る。池野辺地区の戸数は明治二十四年で九十戸、明治四十一年一二五戸、平成二十九年四月一日時点では二五九戸と推移している。そのうち盆綱が行われる倉作集落の戸数は、調査時で十六戸である。

〔実施主体〕

集落の住民（男女問わず）

特定の家や個人、宗教者（寺院）の関与はない。

〔実施日〕

①　準備・綱引き行事　八月十三日　午後六時から午後八時

②　迎え　該当する行事なし

③　送り　該当する行事なし

〔綱の形状〕

長さは特に決まっていないが、製作工程で目安とされているのは、全長十m程度、太さ（径）は二十～三十cmである。

〔詳細〕

以下では、令和元年八月十三日に実施した現地調査をもとに報告する。

①　準備と綱引き

《準備》

午後六時前に区長が鳴らす太鼓の合図で、住民が集まり始める（**写真1**）。行事の準備から綱引きまでの一連は、集落内の広場で行われる。住民は、藁束を一束ずつ持参してこの藁で綱を作り、最後に全員で引き合う。

写真1　太鼓を鳴らす区長

写真2　藁の選別

全員が集合すると、まもなく綱作りが始まる。綱の製作工程は、まず各々が持ち寄った藁束を集め、綱に適した藁を選り分ける（**写真2**）。硬さと長さが、ある程度一定にそろった藁だけを残して一か所に積み重ねていく。この準備が進む間、一人が藁で一本の縄を綯う。この縄は、綱の製作工程の最初に根元を束ねるために使われる。次に三~四人で綱を綯い始める。綯い方は三つ編みで、綱の後方から前方に向かって形ができていく。三本の藁束の根元近くを一人ずつが手に持ち、それに向かい合うようにして、三方向から藁束を次々に足していき、右回りに固く捩じりながら綯い込んでいく（**写真3**）。次第に長さが増してくると、最後部にはもう一人が付き、前方に向かって左回りに回転を加えて、綯い込む作業を補助する（**写真4**）。この工程を繰り返し、最先端部は二股の縄状にして（**写真5**）綱の完成となる。午後六時過ぎに作り始めて、約一時間で綱が完成する。

写真3　4人で縄を綯っていく

写真4　最後部

《綱引き》

綱が完成すると時間を置かずに、中心的行事である綱引きが始まる。参加者は二手に分かれ、綱を引き合う（**写真6**）。このとき、組の分け方は特に決まっておらず、また、勝敗を付けることもない。時間にすると数分で綱引きが終わる。

写真5　綱の先端

写真6　綱を引き合う

〔綱の取扱い〕

行事の準備から終了まで、集落内の定点で行われ、移動はない。また、禁忌とされている行為も特に伝わっていない。

また、綱引きが終わると、材料に使わなかった藁はその場で焼却処分し、片付けをして参加者は解散となる。引き終えた綱はその場に置いておき、後日、ごみ収集日に回収してもらうことになっている。

〔各家の盆行事〕

家によって異なるもので、決まったかたちがあるわけではない。年々、簡略化されてきているが、お盆を迎える前の墓掃除は八月六日頃、または十三日に行われる。十三日に家の門で迎え火を焚くか否かも家によって区々で、これは十六日の送り火についても同様である。十三日にご先祖様を迎えに墓地へ行く。新盆の家では位牌、野菜、果物のほか、餅や花を供えた盆棚が仏間に設けられる。盆の期間の食事としては、カボチャや茄子のほか、うどんが食されることが多い。

〔歴史的変遷〕

調査委員会事務局によって収集された平成二十七年（二〇一五）時点での情報として、①行事概要は「親子で参加し、親子が二手に分かれて綱引きをする」ものであること、また、②由来としては「嵐除けと豊作祈願の行事」として認識されていたことが挙げられている。

令和元年に行事に参加した住民に聞き得た限りでは、先に挙げた二点のうち、①の行事概要については、ほぼ同じ内容の話が聞かれ、②の点については完全に同じというわけではないが、部分的な一致が認められる。先祖の送迎に関しては、今回の行事に参加している住民が記憶している一九三〇年代も、先祖の送り迎えをするような行事ではなかった。また、それ以前についても先祖の送迎との関係を伝え聞いている人は確認されなかった。

今日と異なっていた点としては、この行事がかつては集落内だけでなく、他集落からの参加者を交える規模で行われていた。すなわち、五十年ほど前は、集落内に五十人を超える子供がおり、その当時は子供だけで行事の準備を行っていた。そればかりでなく、その頃は集落外からも子供たちが行事に参加し、一緒に綱引きを楽しんでいたという。

行事の由来については、「厄除けの神さま」に何らかの関係があり、この行事が行われている広場にある石祠が、その神様を祀ったものであるとされる（**写真7**）。石祠で祀られているとされる神様については、特にお札を受けるようなことはなされていない。石祠と行事の由来が関連するとの話は一人の住民からしか聞かれなかったものだが、また別の住民は、この祠はハチマンサマと呼びならわしてきた神さまで、八幡太郎義家（源義家）の伝承と関わるものと伝え聞いている。石祠も元々は集落の竹藪の中にあったが、後に現在の地に移設されたものだという。

写真７　「厄除けの神さま」の石祠

〔所見〕

茨城県で行われている盆綱行事の中では、例外的な事例に該当する。藁で綱を作る点は同じだが、先祖の送り迎えが一切行われず、ただ綱引きだけを行うものである。

行事の名称は、先祖の送迎を伴う他地域の事例と同じように、「盆綱（ぼんづな）」、または「盆綱祭り」と呼ばれている。綱の形状や外見から、蛇ないしは龍を模ったものにもみえるが、この行事において綱がどのように認識されているかという点について、住民からの明確な回答は得られていない。一方で、「この行事は、どんなに天気が悪くても中止してはいけない」との言い伝えは、複数の住民に共有されている。その理由は、「大昔にこの祭りをしなかった年があり、その時に疫病が流行した。」というものである。このような理由から、どれだけ天気が悪くとも、この祭りは休まず行われなくてはならないものと住民に認識されている。

〔情報提供者〕
槍崎　博雄さん（区長）

〔参考文献〕
角川日本地名大辞典編纂委員会『角川地名大辞典８　茨城県』一九八三年

図　行事の実施場所

注）行事のはじめから終わりまで、場所の移動はない。

（林　圭史）

二　五平（笠間市）の盆綱

〔地区名〕

笠間市五平（内郷・西内郷・飯田地区）

〔地区の概況〕

笠間市五平地区は、茨城県の県央地域に位置し、涸沼前川の上流域にあたる。川沿いには水田が、その南側の県道沿いには住宅地が広がる。平坦地で交通の便も良いため、昭和三十年代から住宅の増加が続いている地域である。江戸期の五平村は宍戸領に属し、下遠田・内郷・飯田・万蔵寺・犬塚からなっていた。明治期には東茨城郡鯉渕村の大字となり、昭和三十年に内原村に含まれたが、一部は友部町五平となった。

現在の五平地区は内郷・西内郷・飯田の三地区で構成されているが、世帯数（内郷五十二世帯・西内郷一〇二世帯・飯田二四五世帯）の増加により、盆綱行事の巡行を一つのコースで実施することが困難になり、コースを三つに分けて実施するようになった。A・B・Cコースを設定し、Aは内郷と飯田1班、Bは西内郷、Cは飯田2班と3班の担当としている。ただし、参加する子供の数により分担を変更することもある。

〔実施主体〕（令和元年）

小学一～六年生　　五十四名
中学一年生　　九名
五平子供会育成会役員　三十六名

〔実施日〕

①　準備　七月　　集合場所の一つである高山神社の草刈り
　　八月十三日　午後二時から諸準備
②　巡行　八月十三日　午後五時から午後九時
③　巡行　八月十四日　午後五時から午後九時

〔綱の形状〕

十年ほど前までは、先端が太く徐々に細くなる形に藁を編んで作っていたが、その時点でも顔の表現はなかった。参加する子供たちの人数により長さを調節して製作したが、二十メートルほどの長さになることもあった。

現在は購入した綱であるため、太さは均一である。かつてと同様に先端に顔の表現等はないが、肩に掛けて綱を保持しやすいようにするため、さらしをたすき状に二本結び付ける。

〔詳細〕

①　準備

諸準備は、行事に参加する子供たちの保護者で組織する子供会育成会を

写真１　平成８年
ボンヅナを製作している様子

中心に進められる。かつては、稲藁を持ち寄って綱を製作していたが、十年ほど前から、運動会などで使用する既製品の綱を購入するようになり、綱を製作することはなくなった。現在は、当日（八月十三日）の午後二時に五平公民館に集合し、巡行ルートや参加者の確認と、綱の先端にさらしを結びつけて巡行の準備をするのみである。この時、子供たちに配布するお菓子や弁当の準備もする。盆綱行事のスタート地点の一つである高山神社の草刈りと清掃作業は、現在でも七月中に行われている。

参加する子供たちは、子供会育成会から配布される行燈製作マニュアルに従って準備し、当日持参する。行燈の下方の棒を一本だけ長くして、巡行の時に高く掲げられるようにするのが特徴である。

②・③　八月十三・十四日の地区巡行

写真２　行燈

写真３　昭和63年の盆綱行事

写真４　平成19年の盆綱行事

盆綱行事は、毎年八月十三日と十四日に五平子供会の行事として実施されている。令和二年と三年はコロナ禍のため中止であった。お盆の時期に実施され、行事名も盆綱であるが、先祖の霊の送迎に関する行事という観念はまったくないという。従って、十三日が「迎え」、十四日が「送り」ととらえることはなく、両日とも同時間帯に同内容の行動が繰り返し行われる。十三日は前夜祭で、十四日が本番と考えているという。十四日の地区巡行の際にお駄賃が貰えることが多いからだという。

戦後、五平地区は世帯数・人口ともに増加し、盆綱の訪問戸数が増えたため、地区を三つに分け、三本のボンヅナが五平地区全体の約四百戸を巡行する。約七十年前には一本のボンヅナが地区全体を巡行していたが、約六十年前には二地区に分け二本のボンヅナが、約三十年前からは三地区を三本の綱が分担してまわるようになった。三つに分ける基準は、効率的に巡行できる地理的なまとまりが重要視される。巡行時の行動は三地区ともほぼ同様である。

子供たちは、午後五時にそれぞれの出発地（A：高山神社　B：コンビニエンスストアー駐車場　C：個人宅）に集合し、ボンヅナを持って出発する。出発に際しての特別の所作はない。小学六年生が先頭に立ち、他の子供たちはほぼ年齢順に綱の左右に並び、最後尾に中学一年生がお駄賃の預かり役として付く。先頭の二人は綱の先端に縛り付けられたたすき状のさらしを肩に掛ける。六年生が先頭、五年生が最後尾、年少者が真ん中という並び方をする場合もある。片手で綱を握り、もう一方には手作りの行燈を下げる。巡行先の庭先では、ワーという声を上げ、ワッショイという掛け声で庭を小走りに一周する。家の中に綱を投げ入れるような行為はない。地区内の全戸を巡行するのが原則であるが、庭がない家の場合は、数戸分をまとめて周辺道路を回って代替することもある。各戸からは千円～二千円程度のお駄賃が子供たちに渡される。休憩を挟みながら全戸を回り終わると午後九時頃になる。

十三・十四日の両日でいただいたお駄賃は子供会育成会の役員に預けられ、翌日に参加した子供たちに均等に分配される。かつては、上級生の取り分が多いこともあった。前回の実施時（令和元年）は、二日とも参加者した人には約四千円、一日だけの参加の場合は約二千円が分配された。

〔綱の取扱い〕

現在は、複数年使用するため、使用後は公民館の倉庫に格納する。かつては、高山神社の下を流れていたスナ川（現涸沼前川）に流した。また、正月のワーホイの時に注連縄のように回し焼却した時代もあった。

〔歴史的変遷〕

・　行事内容にほとんど変化はないが、現在購入されている綱は、十年ほど前までは手作りであった。材料の稲藁は、八月十二日頃、子供たちが各家から二束ずつ高山神社に持ち寄った。藁は選った後、川に浸し柔らかくし、小束にしたものをボンゾナの長さに並べる。ここまでは子供の中心役（親方と呼ばれる）の指示で行うが、その後、藁を縄にもじる作業は親に依頼した。出来た三本の縄を一つに編んで綱を作るが、先頭の方は太く、徐々に細くなるようにするのが難しかった。出来上がった綱は高山神社に一晩放置されるが、子供の年長者が翌日まで寝ずの番をした。

・　今は効率を考えて巡行コースを設定しているが、かつては集合場所の高山神社から東に共同墓地まで進んで、墓地に近い家から巡行を開始した。

・　子供の保護者の関与が増えた。約四十年前から盆綱は子供会の行事と位置づけられるようになり、子供会育成会も関与するようになった。

・　女子も参加するようになった。

・　かつては、手に持った行燈は、家の庭を回る時に高く持ち上げた。

・　かつては、八月十四日に全戸を巡行後、最後の家の庭で子供たちが二手に分かれて綱引きをした。勝敗は関係なかった。

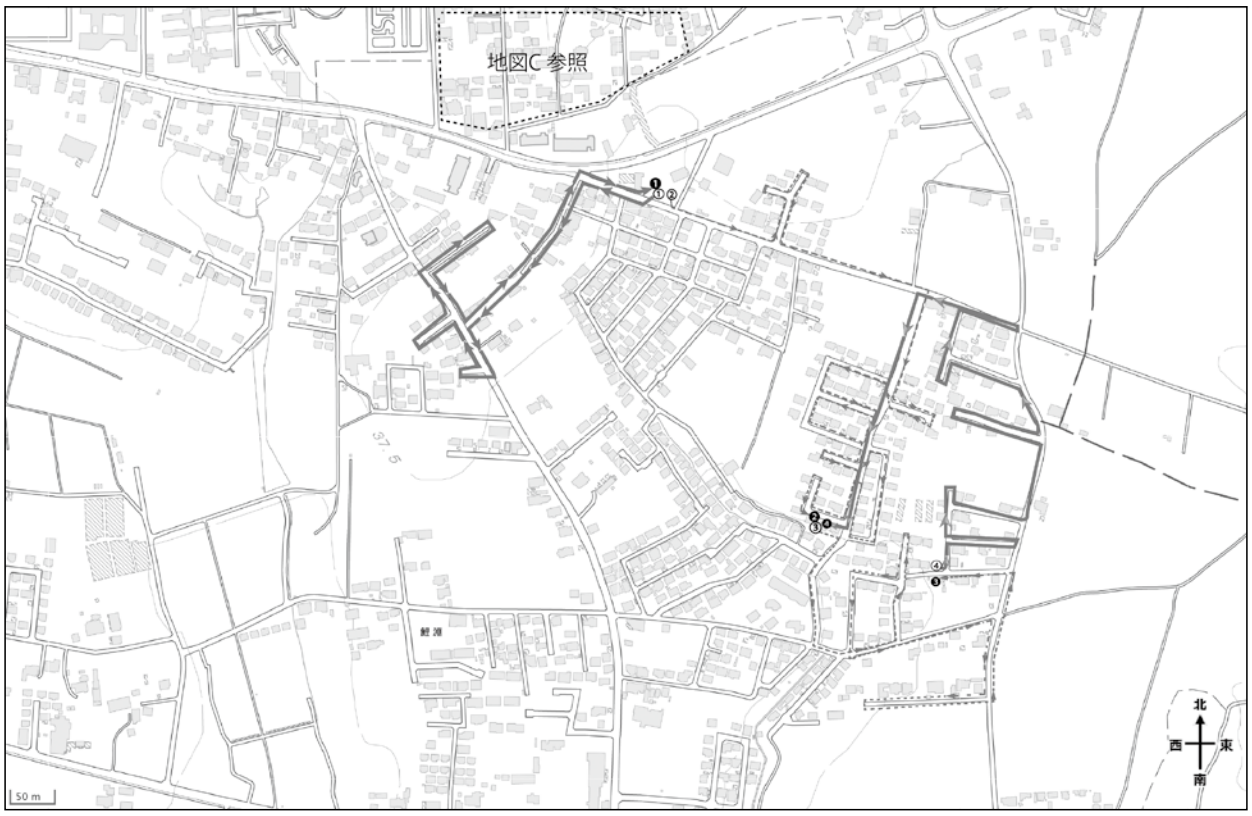
・　行事終了後のボンゾナは、高山神社の下を流れていたスナ川（現涸沼前川）に流した。正月のワーホイの時に注連縄のように回し焼却した時代もあった。

・　かつて子供の不参加は考えられなかったが、現在は自由参加になった。事前に希望確認調査をして参加者を把握する。前回は、約七割の参加率であった。

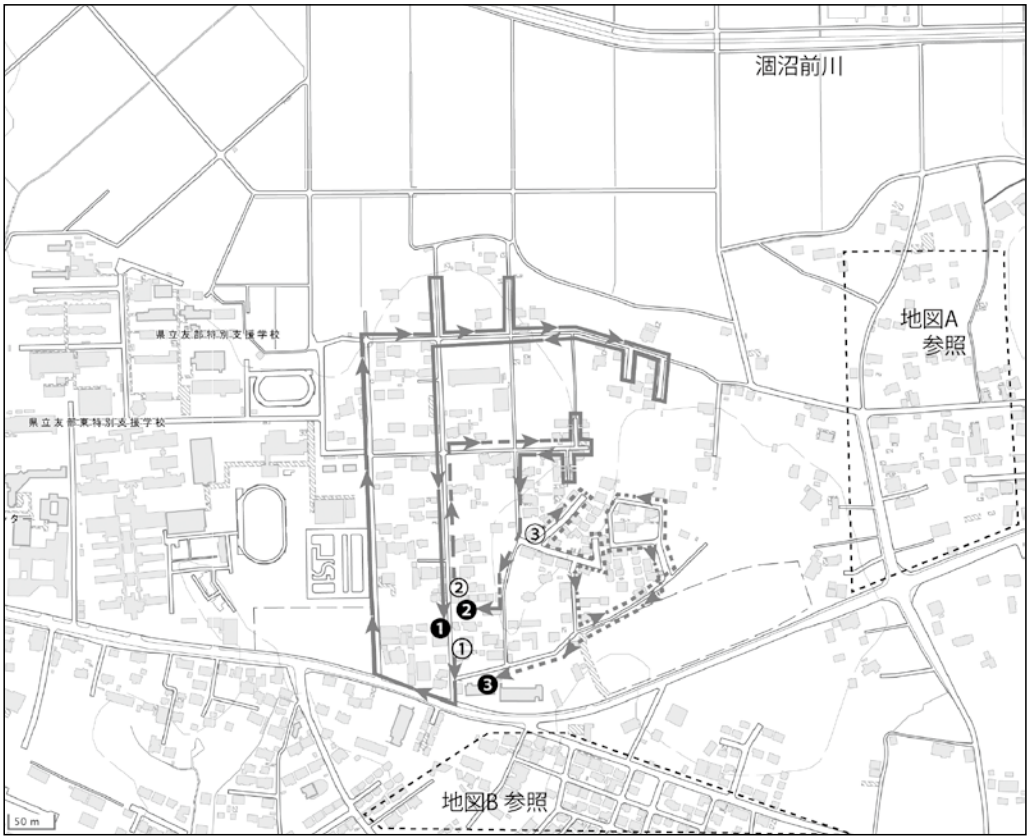
〔情報提供者〕

藤枝　茂幸さん（昭和五十七年生まれ）
菱沼　征一さん（昭和二十年生まれ）
藤枝　耕平さん（昭和二十八年生まれ）

地図Ａ［五平地区Ａコース（高山神社出発）］



地図Ｂ［五平地区Ｂコース（コンビニエンスストアー駐車場出発）］



地図Ｃ［五平地区Ｃコース（個人宅出発）］

※　この報告内容は、令和三年八月二十三日に五平公民館において実施した聞き書き調査をもとにしたものです。

（大津　忠男、林　圭史）

三　立延（小美玉市中延）の盆綱

〔地区名〕

小美玉市中延（立延地区）

〔地区の概況〕

中延は県の中央部にある小美玉市の南部に位置し、霞ケ浦に近接している。その最南部に立延地区がある。中世には佐竹氏の支配下にあったが、近世になり、宍戸藩領、幕府領、旗本内藤氏の知行、複数の旗本の相給などの複雑な経緯をたどり、明治三年（一八七〇）に水戸藩領となった。この間、江戸期から明治十一年（一八七八）まで立延村として存在した。明治十一年に隣村の中根四箇村と合併して中延村となり、立延はその一部となった。明治二十二年（一八八九）、中延・小川・下馬場など六箇村が合併して小川町が成立し、小川町大字中延字立延の住居表示となる。平成十八年（二〇〇六）、小川町・美野里町・玉里村が合併して小美玉市となり、小美玉市中延の一部となった。

当地区は、霞ケ浦に流れ込む園部川下流左岸に位置し、肥沃な水田を利用しての稲作が立延の主要な生業であった。現在、専業農家は減少し、会社員・公務員が増えている。住居は園部川の東方の台地上に散在し、畑や山林も点在する。現在の戸数は六十四戸である。

〔実施主体〕

小学二～六年生　四人
中学一～二年生　二人
特定の家や個人、宗教者（寺院等）の関与はない。

〔実施日〕

① 準備　八月十三日　午前八時から午前十一時
② 迎え　八月十三日　午後五時三十分から午後九時

〔詳細〕

① 準備

○ ボンヅナの原型づくり（午前八時から午前九時）

盆綱に参加する子供の父親が立延公民館に集合し、公民館に隣接する旧消防団用の車庫内で、ボンヅナの芯（中心部）を作った。ボンヅナは竜の形に作るといわれる。

まず、荒縄を数本撚り合わせて五m二十cmくらいの太い綱を作った。結んだ先端は竜の口になり、末端は尻尾になる。その綱を三m九十cmの真っ直ぐな真竹（当日朝、公民館近くから切り出した）に縛り付けてボンヅナの芯にする。竹よりも綱の方が長いので、竹からはみ出ている綱だけの部分は尻尾になり、竹に綱が縛り付けられている部分が竜形のボンヅナの胴体部になる。その胴体部分に藁を縛り付けて肉付けしていく。この時には、

写真１　８月13日早朝、原型がつくられたボンヅナ

まだ選っていないクズのついたままの藁を使用する。

ここまでが準備の第一段階で、この後はボンヅナづくりの経験が豊富な古老に引き継がれる。

○　ボンヅナづくりの仕上げ（午前九時から午前十一時）

公民館にボンヅナづくりに豊富な経験を持つ五十代～八十代の五人の大人（男性）が集合して、仕上げをする。同時刻にボンヅナを担ぐ六人の男子小・中学生も集合し、仕上げに使う藁を選る作業を手伝う。古老たちは、朝作っておいたボンヅナの原型に選った藁を付け加えて、形を整えていく。肉付けされた藁が落ちないように、荒縄を二回り胴体に巻き付けて固定していく。この巻き付けられた縄がホトケサマの乗る場所（座席）になるといわれ、解けたり緩んだりしないように、俵結び（男結び）できつく結んでいく。結び目が竜の背に一列に整然と並ぶように留意する。この縄は、お迎えするホトケサマと同数にならなければいけないといわれ、立延地区の戸数（六十四戸）と同じ数（六十四本）の縄が結びつけられる。

ボンヅナの本体ができあがると、藁を注連縄状に編んだツノ（約四十cm）の根元を、頭部に二本並べて縛り付け、先端を綱で後方に引いて丸味のあるツノの形にする。さらに、竜の顔面になる部分に大きなナスを二つ竹串で刺し入れ、目にする。芯にした縄の先端部分が口に、ナスが目になり、ツノと共に竜の頭部ができあがる。その後、胴に巻いた縄がズレないように、左右両側に縄を通して完成する。最後に、藁の屑をハサミで切り落として整形する。

写真２　ボンヅナを仕上げる古老と手伝う子供たち

今回出来上がったボンヅナは、総長五m二十cm（藁が巻き付けられている胴体部分が三m九十cm、綱のみの尻尾の部分が一m三十cm）、最も太い頭部付近の直径が約二十二cmのものとなった。参加する子供たちの人数により、ボンヅナの長さと太さは調整されるが、今回のものは、これまでと比べ小さなものである。胴体が太いと、子供の手がまわらなくなってしまうので、太さを抑えるように留意して制作したという。

ボンヅナの仕上げが行われている最中、公民館に隣接する修善院薬師堂から昨年のボンヅナが引き出され、公民館の駐車場で焼却された。一年間保存しておく理由は伝承されていない。

ボンヅナを仕上げてくれた古老たちには、御礼として簡単な飲食が振る舞われた。その代金は、当日朝七時から、行事に参加する子供たちが地区全戸をまわって集めた藁代（一戸につき五百円）で賄う。

写真３　ボンヅナを仕上げる古老

○　ボンゾナを共同墓地に移動（午前十一時から午前十一時三十分）

成人男性一人（伊野勝亮氏）に先導され、六人の子供たちがボンゾナを担ぎ、夕方の出発点となる共同墓地に移動する。共同墓地の入口付近で担いだまま反時計回りに三回転し、その場に藁を敷いて、ボンゾナを丁寧に降ろした。その時のかけ声等はない。「この時から出発するまでの間に、ホトケサマがボンゾナに乗る」といわれているので、これ以後にボンゾナを跨ぐことは禁止される。

子供たちは墓地から公民館に戻り、夕方の集合場所と時間の確認を行って解散する。昔はこの日各家で餅を搗いていたので、子供たちは夕方までに餅を食べて力をつけてから「迎え」に出発した。

②　迎え（午後五時三十分から午後九時三十分）

○　共同墓地からの出発と移動

午後五時三十分に、盆綱に参加する六人の男子と成人男性三人が共同墓地に集合する。服装は学校の体操服に統一されている。

参加者の最年長者は中学二年生であり、オヤカタと呼ばれる。オヤカタ（小川南中学二年生　伊野湧羽君、伊野勝亮氏の三男）の合図で、六人がボンゾナを担ぎ、反時計回りに三回転したあと各戸をまわるために出発した。出発時のかけ声やはやしことば等はない。担ぎ手は中学二年生が一人、中学一年生が一人、小学五年生が二人、小学三年生が二人で合計六人というこれまでで最も少ない人数であった。先頭からほぼ年齢順に並んで担ぎ、最年少者は最後尾で尻尾を持つシッポモチをするのが通例であるが、今回は人数が少なく、身長差も大きかったため、中学二年生が先頭を、中学一年生が胴体の最後尾を担ぎ、尻尾は胴体に巻き付けるという通常とは異なった形態で実施した。大人の男性三人が子供たちと一緒に移動する（一人は軽トラックで、二人は徒歩で）が、行事の主体は子供たちであり、大人が手を貸すことはほとんどない。

なお、ボンゾナの出発時、墓地には多くの住民が花や線香をもって墓参りに来ていたが、盆綱に関わることは全くなかった。

墓地を出て地区をまわる時には、オヤカタに合わせて「ワッショイ」「ワッショイ」のかけ声をかけながら歩く。同行者の成人男性の一人が、ホイッスルでピッピッと合いの手を入れる。

○　各家での「ホトケサマオロシ」

地区内の各家に到着した際、出迎えている家人から「ホトケサマをボン

写真４　共同墓地にボンゾナを移動させる子供たち

写真５　共同墓地に到着した盆綱

写真６　ボンゾナを担いで地域内をまわる

写真７　各家での「ホトケサマオロシ」

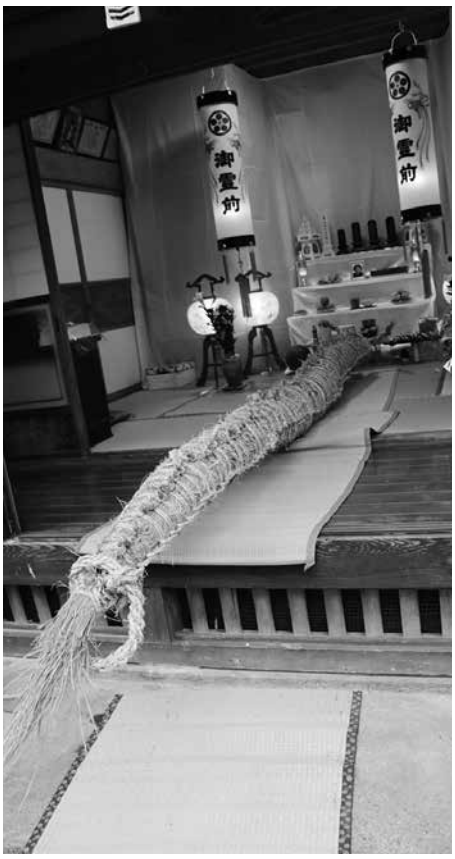


写真８　子供たちによって投げ入れられたボンゾナ

ゾナから降ろす」方法についての希望が伝えられる。方法は、ボンゾナを家の中に投げ入れるかどうかによって、大きく二つに分けられる。

①　家の中にボンゾナを入れることなく、庭先で「ワッショイ」のかけ声とともにボンゾナを三回投げ上げる（揉む）。（**＊写真７　上**）

②　「ワー」と声を出しながら、盆棚のある部屋にボンゾナを投げ入れる。

これには、次の二つのパターンがある。

ａ　子供たちは家の中には上がらず、家の外から綱の半分ほどを投げる。（**＊写真７・中**）

ｂ　全員でボンゾナをかついだまま土足で盆棚の目前まで駆け上がり、ボンゾナを置く。（**＊写真７・下**）

昔は三割程度の家が②のボンゾナを家の中に投げ入れることを希望したが、①の庭で投げ上げる（揉む）だけで家の中には投げ入れない形式が徐々に増え、今回はａｂの両パターンを合わせても、家の中までボンゾナを入れたのは一割程度であった。

○　訪問順

訪問順は決まっている。昔からまわる順が決まっていて、間違えると叱られると言われ、十五年ほど前に、順番を記載した地図（ハシ売り＆藁代集め班分布図）を作った。公民館に一番近い伊野秀茂氏宅が六十四番目で最後になる。

※立延地区の端にあり、立延の集落中心部から少し距離のある橋本旅館と丸ト幡谷商会にも、盆綱がまわって行く。普段の付き合いはあまりないが、立延の共同墓地にお墓があるからだという。特に、橋本旅館は、順番として前半と後半の境目に当たるため、休憩が出来ることと、旅館の長い廊下を土足で走れるので、昔から楽しみにしている場所だという。

○　最後の家が終わったあと（ホトケサマオロシ終了後）

最後の家から共同墓地までの十数ｍは、ボンゾナの尻尾を前（通常とは逆）にして道路に置き、中学二年生を乗せて引きずる。盆綱行事卒業への慰労といわれている。

地区まわりが終わると、ボンゾナを修善院薬師堂の軒下に置いた。その後、公民館内でオヤカタを中心に、いただいたお小遣いを参加者で分け合う。金額は学年により差はあるが、一人あたり一万円前後になるという。

すべてが終了して解散したのは、午後九時三十分であった。

〔綱の形状〕

竹と荒縄を芯にして藁を巻きつけた本体は、総長五ｍ二十cm（藁が巻き付けられている胴体部分が三ｍ九十cm、綱のみの尻尾の部分が一ｍ三十cm）ある。最も太い頭部付近の直径が約二十二cmである。参加する子供たちの人数により、年ごとにボンヅナの長さと太さは調整されるが、今回はこれまでに比べると最も小さなものになった。本体の先端部分に注連縄状に編んだ藁のツノ（約四十cm）を二本並べて縛り付け、その先端を綱で後方に引いて丸味のあるツノの形にする。竜の顔になる部分に大きなナスを二つ竹串で刺し入れ、目にする。芯にした縄の先端部分が口に、ナスが目になり、ツノと共に竜の顔を表現する。持ち手にする下げ縄はない。

〔綱の取扱い〕

迎えの出発前に共同墓地に置かれてからのボンヅナにはホトケサマが乗っているので、「ボンヅナを跨いではいけない」といわれる。間違って跨いでしまった者は、ボンヅナのシッポでたたかれる。

また、「地区まわりの途中でボンヅナを地面に置いてはいけない」ともいわれる。

行事終了後のボンヅナは、公民館に隣接する修善院の薬師堂の軒下で一年間保存される。今年も、昨年のボンヅナを八月十三日の午前九時四十五分頃から、子供会の役員によって、公民館の駐車場で焼却された。特別な儀式はなかった。

写真９　ボンヅナの顔の部分

写真10　修善院薬師堂の軒下で１年間保存されたボンヅナ

写真11　８月13日に燃やされる前年のボンヅナ

〔各家の盆行事〕

お盆の一週間ほど前から、墓そうじ（墓みがき）・家の掃除・庭の掃除などを始める。他人から見られるような場所、例えば自分の家の畑などの草抜きなども、競うようにして行う。「あの家はやっていない」と言われるのが、とにかく嫌だったという。

ホトケサマの送りは、家ごとに行われる。八月十五日の夜か十六日の朝に共同墓地に提灯や線香を持って送って行く。

〔歴史的変遷〕

○　参加人数の減少

昭和三十四年生まれ（六十一歳）の話者が参加していた頃（昭和四十～四十八年頃）は、同級生が五～六人いて、全体で四十人以上の子供たちが参加していた。参加者が多かったので、最年少の頃は尻尾にも触われないくらいだったという。

昭和五十三年生まれ（四十二歳）の話者が参加していた頃（昭和六十年～平成四年頃）は、二十人くらいの子供が参加していた。その時代のボン

ヅナは十m以上の長さがあった。

※　茨城県立歴史館に保存されている昭和四十八年（一九七三）に使われた立延のボンヅナは、長さが七m八十cmで最大の直径は三十三cmある。

○　かけ声の変化

かつては、出発前の共同墓地で「ノーラッセ、ノーラッセ、ホトケサマノーラッセ」と唱え、各家の庭で揉む時は「ワッショイ」、家に投げ入れる時は「ソレー」と声を上げていた。昭和の最後の頃には、すべて「ワッショイ」に変わった。

○　材料の変化

かつては、材料として麦藁と稲藁の二種類を使った。麦藁はボンヅナの原型を作る際、最初に竹に巻き付けた。稲藁よりもつぶれにくいので、より軽量でかさを稼ぐことができた。稲藁は仕上げの時に表面を覆う藁として使った。

現在は、麦藁が手に入らないことから、すべてに稲藁が使われている。また、今はコンバインで稲刈り作業をしてしまうため、藁が細かく裁断されてしまうので、ボンヅナ用に手刈りをしてもらう農家を特別に依頼して、材料集めをしている。

かつては、材料の藁そのものを子供たちが集めにまわっていたが、現在は一戸に付き五百円の藁代を集めている。

竹は公民館近くの竹林から、当日朝とってくる。枝は切り落としておく。竹とともに芯にする綱は、現在は荒縄を撚ったものであるが、かつてはつるべ井戸に使っていた井戸縄の古い物を使った。

○　子供会との関連

二十五年前ほどから、盆綱は子供会の行事として認識されるようになり、全戸が対象になるようになった。昔は子供が実施したが、子供会の行事ではなかった。

○　接待とお小遣い

かつては、お菓子やお金をくれる家はほとんどなかった。

○　移動方法の変化

今は離れた家に移動する場合は、軽トラックや乗用車を利用する場合もあるが、かつては全行程をすべて歩いた。

○　前日の準備

八月十二日の夜は、子供の参加者全員が公民館に泊まって、本番に備えていた。平成三十年（二〇一八）も実施したが、令和元年（二〇一九）は参加者の減少とコロナウイルスの影響で、宿泊は中止となった。

〔所見〕

住民の盆綱についての意識は高く、先祖供養のためには欠かせない行事との考えが受け継がれている。しかし、最近の新型コロナ感染症の問題以外にも、積み重なってきている問題が多くあり、伝統的な方法での盆綱行事実施が難しくなってきている。来年の参加人数は五人になることは確実なため、子供だけでの実施はできないだろうと予想されている。そのため、保存会の立ち上げと大人の参加が検討されている。現実的状況の変化に対応した形態の変化はやむを得ないため、「来年どういう形でこの行事が行われているのかを注目して見てもらいたい」との住民の意見があった。是非、立延の盆綱がどのような工夫・変化をして継続されるのか実見したい。

〔情報提供者〕

伊野　勝亮さん（昭和五十三年生まれ）
伊野　秀茂さん（昭和三十四年生まれ）

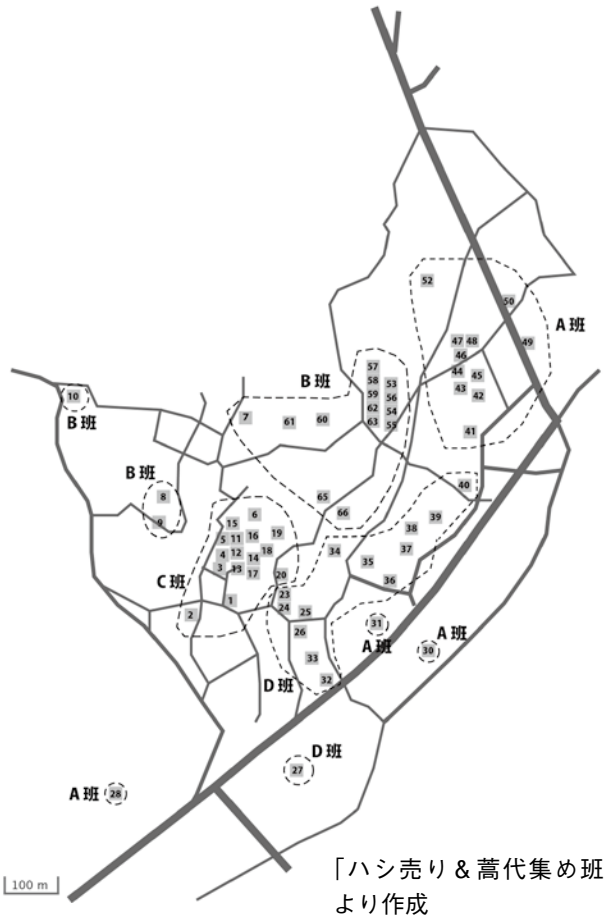
〔参考文献〕

『茨城県の祭り・行事』平成二十二年　茨城県教育委員会
『小川町史　上巻』昭和五十七年　小川町
『小川町史　下巻』昭和六十三年　小川町
『角川　日本地名辞典』昭和五十三年　角川書店
『茨城県の地名』昭和五十七年　平凡社
広報「おみたま」平成二十八年三月十日
「ハシ売り&藁代集め班分布図」立延地区作成

写真12　ボンヅナ製作地点・「迎え」終了地点（立延公民館付近）　左：旧消防小屋　中：公民館　右：修善院薬師堂

写真13　盆綱の出発点（共同墓地）

〔参考図〕



「ハシ売り＆蒿代集め班分布図」より作成

「ハシ売り＆藁代集め班分布図」（立延地区作成）

かつて、立延地区では７月20日頃に、悪疫退散・無病息災を祈りカヤで作った箸でうどんを食べる「アオヤサマ」行事が行われていた。その際、カヤの箸を地区全体にもれなく配る（ハシ売り）ため、まわる順番を決めた図を作った。

現在も盆綱の「藁代集め」や「迎え」は、この図の順番に従って行われている。

（大津　忠男）

四　下馬場（小美玉市）の盆綱

〔地区名〕

小美玉市下馬場

〔地区の概況〕

小美玉市下馬場地区は、茨城県のほぼ中央部に位置する。平成十八年（二〇〇六）に隣接の美野里町・玉里村と合併し小美玉市になる以前は、小川町に属していた。下馬場地区は小美玉市の南端部であり、霞ケ浦の高浜入の北のほとりに位置する。集落は霞ケ浦に向かう傾斜面に存在し、園部川まで続く平地では水田が営まれている。最近は水田耕作からレンコン栽培への転向が進んでいる。行方市の玉造地区に隣接する。現在戸数六十四戸。

〔実施主体〕

小学三～六年生　四人
中学一～三年生　四人
特定の家や個人、宗教者（寺院）の関与はない。

〔実施日〕

①　準備　八月四日　盆綱行事の一～二週間前の日曜日
②　迎え　八月十三日　午前七時三十分から午前八時三十分
③　送り　八月十三日　午後三時三十分から午後八時三十分
　　八月十五日　午後五時から午後九時十分

〔綱の形状〕

長さ三ｍ二十cm、最も太い頭の部分が直径十八cm。頭から尻尾に向けて徐々に細くなっていく。頭に角のようなものはなく、単純な注連縄状の綱である。持ち手になる子供の数に合わせて、取っ手状の下げ縄を付ける。

写真１　カシラの部分

写真２　尻尾の部分

写真３　下げ縄が付いたボンゾナ

〔詳細〕

① 準備

八月四日（日）、下馬場公民館に子供会の会員親子が集合して盆綱行事の起点・終点となる共同墓地の清掃や共同墓地の入口にあたる部分にボンヅナを巻き付ける塚作りを行う。

行事当日の八月十三日午前七時三十分に、共同墓地に隣接する下馬場公民館前に、地区まわりに参加する小・中学生八人と、その保護者、ボンヅナ作りを約三十年指導している石川俊さん（昭和二十五年生まれ）が集合する。

ボンヅナは石川さんの指導のもと、男の保護者三人が中心に製作する。まず、藁三束を縄で締めて直径十八cmほどのカシラの部分をつくる。カシラから三十cmほど先で二叉に分け、左右に藁を継ぎ足しながらそれぞれをねじり、左右の綱を作る。それを一本にねじりあわせて綱に仕上げていく。芯には、竹や木ではなく縄を二重にしたものを使う。子供たちは藁の運搬などの手伝いをする。今回の行事に参加する子供たちが八人なので、四箇所の左右に八人分の下げ縄を取り付けた。三十分程度で、全長三m二十cmのボンヅナが完成した。

作成したボンヅナは共同墓地の入口（南端）にある塚に、カシラを南に向けて巻き付けておく。塚を作る場所は毎年同じ場所である。この墓地の入口は、各家の墓所ではなく、無縁仏を供養するための場所であったといわれている。

② 迎え

八月十三日午後四時に、下馬場公民館に子供たちが親と一緒に集合する。子供たちの服装は、上下白色に統一されている。子供たちだけがボンヅナの置かれている塚の周りに集まり、年長者がリードし、「シャンシャン　シャン　オシャシャシャンシャン」と手をたたきながら声をかけた後に、「乗らっせ、乗らっせ、ホトケサマ（仏さま）乗らっせ」（二回繰り返し）と全員で掛け声をかける。これは、「仏さまに綱に乗ってもらうために」するといわれる。ボンヅナに付けた取っ手状の縄を持ち、

写真４　下馬場公民館でのボンヅナ作り

写真５　完成したボンヅナを塚に巻き付ける

写真６　８月13日午後３時30分　塚で仏さまを盆綱に乗せて墓地を出発

写真７　８月13日午後４時30分頃、地区をまわる子供たち

墓地に接する道を鹿島神社方面（北東方向）に向かって出発する。

カシラ近くを年長者の男子（中学三年生の村山勝哉さん、今回で七回経験）が持ち、次からは尻尾に向かって年齢順に持つ。最前列の男子がリーダー役になるが、役に対する特別な呼称はない。最後尾の尻尾の部分を持つ者は「帳面つけ」と呼ばれ、訪問した家からいただいた謝礼金をノートに記録し、最後に均等分配する会計係を担う。

共同墓地を出発点として、反時計回りに地区を一周するが、六十戸をまわるには約五時間かかる（**順路図**参照）。

共同墓地は、下馬場公民館に隣接する昔からの墓地と、新しく作られた鹿島神社脇の新共同墓地がある（八戸分）。新共同墓地でも出発点の墓地と同手順・掛け声で仏さまをボンヅナに乗せる。

訪問宅での行動は、次の順に行う。

ア　「こんにちは」と元気よく挨拶すると、家の人が玄関や仏壇のある部屋のドアを開けてくれる。

イ　その軒先に移動し、ボンヅナを前後に揺らしてリズムを取りながら、

写真８　掛け声とともに家の中にボンヅナを投げ入れる

「オジラッセ、オジラッセ、仏さまオジラッセ」を二回繰り返した後、綱を家の中に投げ入れる。これで、「仏さまを届けた」ことになる。子供たちが座敷に上がり込むことはない。

※　倉持康弘氏宅では、ボンヅナが投げ込まれるとすぐに、家の主人が仏壇に線香をあげた。「仏さまが家の仏壇に帰って来てくれたので」と説明してくれた。

ウ　家人は礼を言い、謝金を「帳面つけ」に渡す。謝金は通常千円～三千円であるが、新盆（にゅうぼん）の家では一万円程度になる場合が多い。その他に、お菓子・ジュースなどを接待してくれる家も多くある。

ボンヅナを家の中から回収し、御礼を言い、家を出る。

※　令和元年は、例年より新盆の家が多く、五軒あった。

地区全体をまわり、下馬場の共同墓地まで戻って来ると、午後八時三十分になってしまう。最後に、共同墓地のボンヅナを塚に巻き付けて終了となる。子供たちの保護者が公民館に迎えに来てくれるので、一緒に帰宅する。

「帳面付け」役の子は、その場で謝金を合計し（今回は、合計約十五万円）参加した八人の子供たちに均等に分配する。会計係であった中学二年生の倉持未夢さんによると、一人あたり一万八千円であったとのことであった。

分家や引っ越しなどで地区内に新たに家を構え、集落（自治会）に入っても、その家で亡くなった人がまだいない家は「仏さまがいない家」と呼ばれる。集落としての付き合いはしているので、盆綱は訪問するが、墓から乗せてきた仏さまはいないので、ボンヅナを投げ入れる一連の行為は行わない。その家でも家人と挨拶をし、謝金をもらうことが多い。

写真９　「送り」出発前
８月13日から塚に置かれている綱

写真10　８月15日「送り」
訪問した家で、ボンゾナを投げ入れる

③　送り

八月十五日午後四時三十分頃に、「迎え」の時と同じ子供たちが下馬場公民館に集合する。午後五時に、八月十三日夜から塚に置かれていたボンゾナを吊り下げて共同墓地前を出発する。

「迎え」の時に行った塚での「仏さまを乗せる」行為はせずに出発した。出発時には「仏さまは各家にいて、ボンゾナに仏さまは乗っていないので、何もしない」とのことであった。子供たちの並び順は同じだが、「帳面付け」役が同学年の子供に交代していた。子供たちの服装は八月十三日の「迎え」の時と同様である。訪問順も同様で、共同墓地を起点として反時計回りに地区を一周する。訪問先での行動も同じだが、掛け声は「乗らっせ、乗らっせ、仏さま乗らっせ」となる。

最後に共同墓地に戻り、ボンゾナを塚に巻いて終了となる。午後九時十分に終了した。

その後、その場で謝金を合計し、参加した八人の子供たちで均等に分配する点も「迎え」と同様である。

〔綱の取扱い〕

・　家々をまわっている時の禁忌

「ボンゾナを跨いではいけない」と言われ、跨いでしまった者は、ボンゾナの尻尾でたたかれる。

「歩いている途中でボンゾナを地面に置いてはいけない」ともいわれる。

・　行事終了後の扱い

昔は、一年間共同墓地の塚の部分に置いておいたが、現在は行事終了の数日後に、大人が焼いて処分してしまう。

〔各家の盆行事〕

盆綱によるいわば「公的」な仏さま迎え・送りとは別に、家々の門口で行われる「個別的」な迎え火・送り火・墓参りなどがひっそりと続けられている。地区の人々は「行事は行事だが、家のことは家のこと」と、その点に特に矛盾は感じていない様子である。

各家ではお盆の期間中に次のようなことが行われる。

・　八月十二日か十三日の午前中に自分の家の墓に行き、掃除をして花や線香を供えて、お盆の準備をする。

・　八月十三日夕方、盆綱とは別に、墓につながる道の角や水田の畦で、藁を燃やしたり、線香を焚いたりして、迎え火をする。仏さまを迎えに来たのではなく、「気を付けて、帰って来てね」という感覚だという。盆綱が家に来た後に墓参りする家もある。その理由は明確ではないが、仏さまは家に帰っていて、お墓にはいないとわかっているが、線香を上げに行くという。

・　盆の期間中は盆棚の御膳に三食供える。

・　地区に新盆の家があるとき時は、新盆見舞いに行く。

・　新盆の家の庭には、「高灯篭」を立てる家があった。かつては、どの家も立てたが、今は新盆でもすべての家で立てるとは限らない。

写真11　新盆の家の「盆棚」

写真13　新盆の家の庭に立てられた「高灯篭」

写真12　各家での「迎え火」の跡

・八月十六日の朝には、盆棚に上げてあった供物を墓に運び、墓前に供える。

〔歴史的変遷〕

子供の数が減少したため、綱の太さや長さが小型になった。昭和三十年代には担い手となる子供が三十五人位いて、綱のカシラの部分は大人が両手でやっと抱えられるほどの太さがあり、長さも二十mを超えるものであった。現在のようにぶら下げる形の持ち方ではなく、肩に担ぐようにしていた。かなりの重量があり、子供が担いで歩くのは相当大変だった。昭和の末頃でも、二十人は超えていた。子供が多かった時代は、ボンヅナを持てるのは男子だけだった。さらに、家に男子の兄弟が複数いても一人しか出られない時もあった。

かつてボンヅナの材料の稲藁は、子供たちが近所の家々をまわって集めていた。綱は編む前に、霞ケ浦の水に浸すのが習わしだった。今は、藁を取っておいてくれる家が決まっていて、大人が数日前に集めて、公民館の倉庫に入れておくようになった。

また、人数が多かった時代は、現在のように統制のとれたおとなしい行事ではなく、訪問した家の庭でボンヅナを持って暴れることもあった。子供たちが、いただき物を入れるリュックを背負うこともなかった。

「盆綱はどうしても欠かせないものだから、台風や大雨でも中止はしない。カッパを着てでもやる」と言われてきており、細かい部分での変化はあっても基本的な部分は継続して実施されている。

〔所見〕

集落としての盆行事である「盆綱」と、各家の個別的盆行事の一部分が重なるが、その両方に矛盾を感じることなく行うことができている事実が、非常に興味深い。他の場面でもこのような状況が生まれることがあるのか、

より深く調査をしてみたいという思いがある。

また、ボンヅナの製作は大人が行うが、地区をまわる一連の行動は全て子供たちだけで行われる。救護車に乗った保護者が一人行列の最後につくものの、行動には一切関与しない。二日間の盆行事を年長者を中心とした子供たちだけで実施すること、そしてそれが、順次引き継がれていくことは、地域の年齢集団的組織の構築に大変大きな意味をもつことであると感じられた。さらに、それだけでなく、地区全体六十戸を万遍なくまわることによる地域の地理的把握や、訪問時の大人とのやり取り・会話などを通じての地域の人々との接触は地域人としての将来に大きな影響を与えることになると思われる。

また、八月十三日の「迎え」はなるべく早い時間に、八月十五日の「送り」はなるべく遅い時間に行うのが良いとされている。仏さまが家に居られる時間を少しでも長くするようにとの配慮だといわれる。実際に「迎え」と「送り」のスタート時間には差をつけて実施することを継続している点が興味深い。

〔情報提供者〕

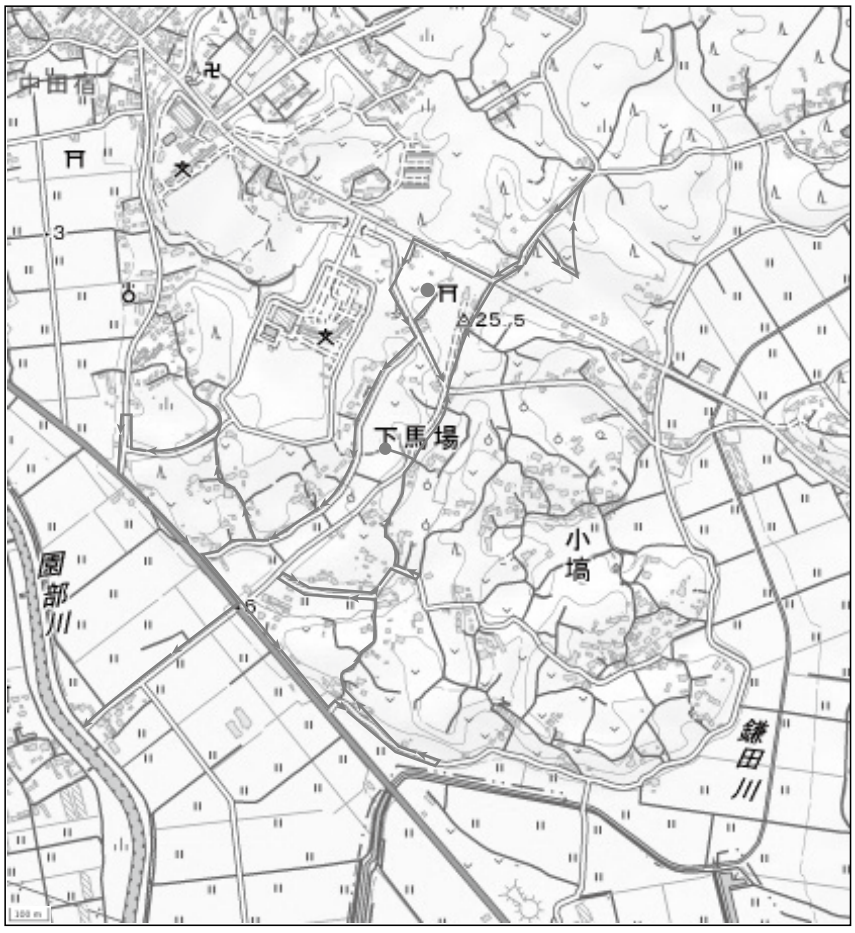
倉持　康弘さん（昭和四十七年生まれ）
藤本　芳一さん（昭和二十三年生まれ）

〔参考文献〕

『盆行事Ⅳ』無形の民俗文化財記録第43集　文化庁文化財保護部、二〇〇〇年

〔その他〕

下馬場地区では、「神葬祭」で葬式を行う家が多い。江戸時代には鹿島神社近くに「徳蔵寺」という寺院があったが、明治初期に廃寺になってしまった。大正期に一時復活したが、地区の人々はすでに神式で葬儀を行うようになってしまっていて、檀家が少なく、すぐに廃寺に戻ってしまった。共同墓地の墓碑銘は、江戸期のものは仏式が多く、明治以降は神式のものが目立っている。盆綱の行事に、神式・仏式の差はないと言われている。



（大津　忠男）

五　平山（ひらやま）（小美玉市下玉里）の盆綱

〔地区名〕

小美玉市下玉里平山

〔地区の概況〕

①大字下玉里の概観

大字下玉里は小美玉市の東南に位置し、霞ケ浦の高浜入に向かって突き出た半島の一角を占める。湖辺の低地には水田が広がり、微高地上や台地縁辺を中心に複数の集落が所在する。台地上には畑が広がり、権現山古墳・愛宕塚古墳・山田峰古墳などが点在する。古墳は霞ケ浦を臨むかたちで立地しており、水上交通を掌握した有力首長層の墓とみられる。また、中世に香取社（香取神宮）へ供祭料（神祭物）を納めた海夫の津（港）のひとつ「大枝津」は、下玉里（大井戸）の地に比定されている。海夫は津を拠点に漁業を営み、物資の輸送に従事した人々のことで、このことからも、下玉里が古くから水運の拠点として重要な地域であったことが分かる。近世の下玉里村は、慶長七年（一六〇二）に幕府領となり、元和八年（一六二二）には水戸藩領となった。下玉里村地先の霞ケ浦は、水戸藩の専用漁場「玉里御留川」であった。明治二十二年（一八八九）の町村制施行により下玉里は玉川村の大字となり、昭和三十年（一九五五）に玉里村下玉里、平成十八年（二〇〇六）に小美玉市下玉里と変遷している。

霞ケ浦の湖岸堤防が整備される以前、汀には複数の船着き場があった。戦前は帆引網漁に従事するものも多くいて、明治時代に帆引網漁法の改良を施したことで著名な樋木音次郎は、下玉里（平山）の出身である。農業については、昭和三十年代には稲作に加えて養豚・酪農・蔬菜などの生産を営む「プラスアルファ方式」の農業経営が行われ、先進的な試みとして脚光を浴びた。なお、低地の水田の大部分は、現在レンコン栽培の蓮田となっている。

②平山集落

大字下玉里の行政区は、岡地区・大井戸平山地区に分かれる。ここで報告をするのは、大井戸平山地区のうちの平山集落である。なお、盆綱は隣接する大井戸集落でも行われており、大字下玉里内の根玉里や田畑・橋下でもみられる。盆綱そのものは、集落単位で行われている。平山・大井戸は隣接する集落だが、盆綱そのものを一緒に行うことはない。

前述のとおり、下玉里地先の霞ケ浦は水戸藩の「御留川」であった。霞ケ浦はもともと海夫の系譜をひく「霞ケ浦四十八津」の入会の湖であったが、水戸藩は下玉里村大井戸の稲荷森（稲荷神社）と、対岸の安食村（かすみがうら市安食）の柊塚を結んだ線よりも西側について、藩へ運上を納めさせる専用漁場に設定した。このことで平山地先の霞ケ浦は、御留川の内となっている。

また水戸藩は、凶荒に備えて貯穀するための倉庫「稗蔵」を平山に置き、稗蔵への荷の出入りのための稗蔵河岸を設けた。かつて稗蔵が置かれていたあたりが、盆綱の起点・終点となる場所である。平山集落の西にある越番河岸は対岸の八木（石岡市）への船便が行き来きした「渡し」であり、宍倉（かすみがうら市）方面へ連絡したが、昭和十五年に廃止された。

平山集落の戸数は七十戸ほどである。屋敷の多くは、霞ケ浦沿いの低地より上がったエリア、台地の裾部に展開している（**写真1**）。集落を東西に

写真1　平山の盆綱（左手奥にみえるのは蓮田と霞ケ浦）

走る道があり、このうち霞ケ浦（地元ではカワとよぶ）沿いの道を下道、一本中に入った台地側の道を上道と呼ぶ。盆綱の出発点となるのは、下道と上道が交わる三本辻のところで、ここに地蔵が祀られている。前述の「稗蔵」があった場所に近接して「稗蔵」のバス停が立つ。すぐ近くには消防団の小屋があり、かつては平山会館（集会所）もあった。地蔵のある辻は集落の中心的な場所といえる（なお、集会所は今はなく、集会などには市の公民館を利用している）。

平山は天台宗の円妙寺、浄土宗の昭光寺の檀家で、神式（神葬祭）の家も多い。墓地は家ごとにまとまり、散在して分布をしているが、「ソウラントウ」と呼ばれる共同墓地が一か所ある。このソウラントウへ向かう坂道は、先の地蔵が祀られている辻につながっている。各家では坂の途中まで行き、提灯に火を点すことで、十三日に仏さまを迎え、十五日に送りをするのが慣例である。盆綱が辻を出発地点にしているのは、ソウラントウへ向かう坂の入口にあたるからだとの説明も聞くことができた。

〔実施主体〕

① 準　備　ボンヅナを作れる大人（現在は撫木信夫氏）、小学五～六年生

② 盆綱当日　幼稚園年長（来年度の小学一年生）、小学生

〔実施日〕

① 準備

八月十三日より前の数日間（不定）

② 迎え

八月十三日の夕方

③ 送り

八月十五日の夕方

〔綱の形状〕

藁製のボンヅナは「大蛇」とも呼ばれ、頭（カシラ）から尻尾までヘビのかたちに作られている。令和二年（二〇二〇）に作られたボンヅナは、全長で七・八ｍを超え近年になく長いものであった。令和二年は新型コロナウイルス感染症への対策として、子供同士の身体的距離を確保できるよう、例年よりもやや長めに胴体を製作した。ボンヅナの詳細は第五章の実測図も参照いただきたい。

平山のボンヅナの形態的な特徴は、ヘビの頭に似せた本格的な頭（ただし角がつく）にある。頭は上顎と下顎に分かれ、その間に舌がつく。目はナスとホオズキで作る。ナスの下部に穴をあけ、ほぐしてつぼめたホオズキを挿して目玉とする（目玉はすぐに取れて無くなってしまうため、今は発泡スチロールで作った模造品で代用している）。かつて、頭と胴体は別々に製作してつなぎ合わせていたが、現在は頭から芯となる縄を胴体まで通して、一体的に作り出す形になっている。

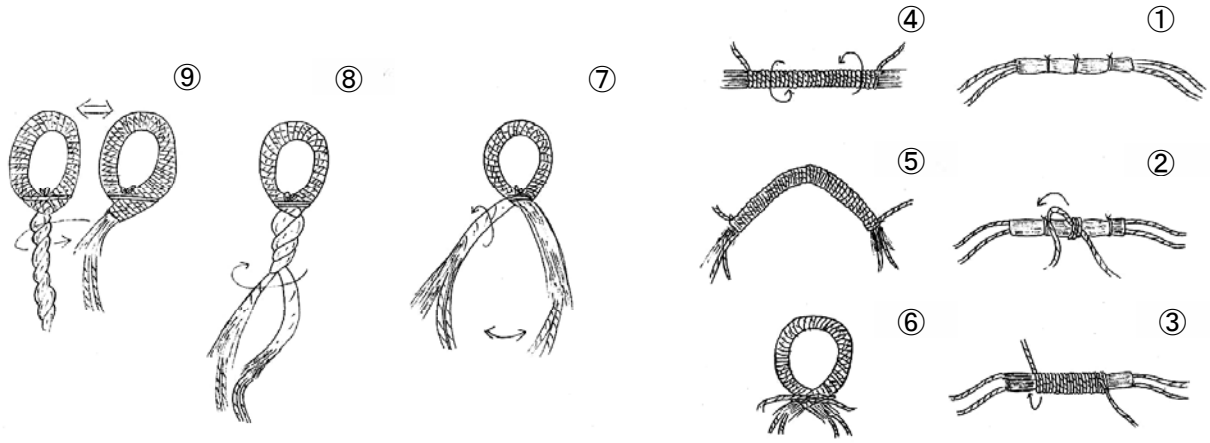
頭は縁側に叩きつける所作のため、ある程度の重さをもたせて作られる。頭には持ち手となる綱（現在はトラロープを使用）が四本取りつく。

〔詳細〕

以下、令和二年の平山の盆綱の記録である。迎えは同年八月十三日に、送りは同十五日に見学した。ボンヅナを作る作業は数日かけて行われるため、同年八月九日の仕上げ作業を実見した（ただし工程の確認のため、令和三年八月七日に補足調査を実施した）。

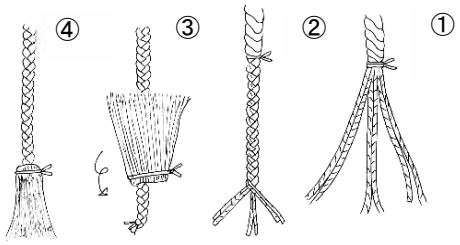
① 準備

ボンヅナは撫木信夫氏（昭和二十六年生）が、高学年の子供たちの手伝いを受けながら自宅で制作している。撫木氏がボンヅナづくりに携わるようになってから、二十年くらいが経ったという。盆綱行事が途絶えてしまってはいけないと思い、他の人に誘われたこともあって、一緒に先輩のとこ



ボンツナの芯となる長縄を折り返して、その中間部分に藁を束ねて 3 か所を紐で括る（①）。束ねた藁の中央から左右に向かって、縄をきつく巻きつけていく（②〜④）。巻きつけた縄の先端を縛って固定すると、中央部を膝で押さえつけながら左右を手前に引き付けて、少しずつ折り曲げていく（⑤）。完全に折り曲げたら重ねて根元になる部分を縄で束ねる（⑥）。下顎側が完成するので、同じように上顎側をつくる。下顎側は左右 2 本 1 組の長縄を芯にして交差させながら、ここに藁束を足しながらよりをかけて綱とする（⑦・⑧）。下顎側の綱に、上顎を重ねて仮止めし、上顎側の 2 本 1 組の長縄を芯にして下顎側の綱に添わせながら藁を足して編み、上下の顎から伸びる綱を一体化させる（⑨）。

図 1　頭から胴部の製作工程（模式図）



綱を巻き終えると（①）、芯にしていた長縄（3 組 6 本）を三つ編みにする（②）。縄の最後を縛り、束ねた藁を添えてまとめ（③）、束ねた藁を折り返してきつく縛る（④）。

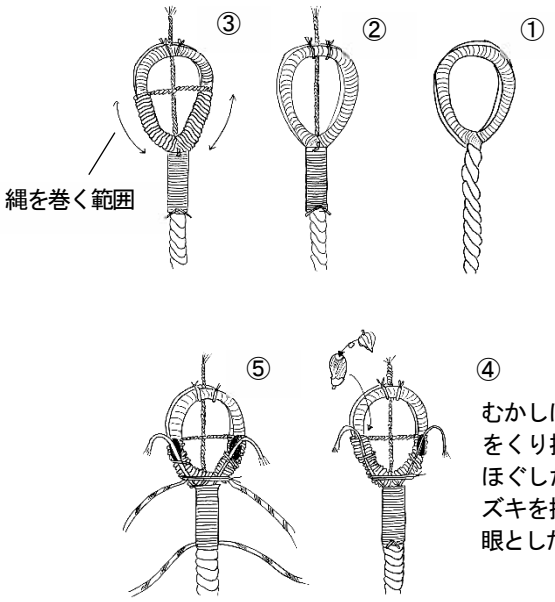
図 2　尾の製作工程（模式図）

写真 2　コロナ禍での密集・密接を避けたボンゾナづくり

写真 3　ボンゾナの頭をつくる作業

ろへボンゾナの作り方を習いにいった。平山の場合、特定の家筋の人がボンゾナをつくるということはなく、できる人や興味のある人が代々継承をしてきたという。現在のボンゾナづくりは、撫木氏に一任されている。八月に入ると子供たちからボンゾナづくりを頼まれる。依頼を受けると、農作業の合間をみながら少しずつボンゾナを作り始める。

子供たちにはボンゾナの胴体の綱を撚る時に集まってもらい、作業を手伝ってもらう。作業としては二〜三時間ほどである。この作業は小学五・六年生の高学年だけだが、令和元年度は保護者たちの手も借りた。ただし、令和二年は、コロナ禍での盆綱となったため、子供たちの手伝いは受けず、撫木さんが奥さんの手を借りながらすべての作業を実施した（**写真 2**）。



上下の顎の仮止めを外し（①）、舌となる縄を差し込み口元をおさえる。首元は縄をきつくまいて補強する（②）。上下の顎を一体化させるため左右それぞれ縄をまき、先端部分を頭の内側でつなぐ。舌と直交する形になる（③）。目（現在は模造）と角をつける（④）。頭に持ち手のロープをつける（⑤）。

図３　頭（カシラ）の製作工程（模式図）

ボンヅナは頭から作り始める（**図１**）。ボンヅナ全体の芯となる長縄の周りに藁を束ね、その藁束にきつく縄を巻きつけながら絞っていく。上顎と下顎は同じ形に作っていく。上顎と下顎が完成すると仮止めをしてずれないように固定し、胴体の製作に入る。胴体は顎からつながる三組六本の長縄を芯にして作る。芯となる縄のうち、まず二組四本の縄に藁を束ねて捩りながら撚りをかけ綱を編んでいく。できあがった綱は仮止めをして、残りの一組の長縄を芯にしながら、同じように藁を足して撚りをかけて綱に絡ませて太くする。尾に近づくと藁の量を減らして細くする。綱ができあがると、三組六本の藁を三つ編みにする。そして、三つ編みの最後の部分に藁を束ねて折り返し、尾を作り出す（**図２**）。

全体の形ができあがると顔の製作にうつる（**図３・写真３**）。上顎と下顎の仮止めを外して、別に編んでおいた縄を差し込んで舌とする。舌が抜けないように正面の部分で上顎と下顎を結ぶとともに、顔の下半分にあたる上顎・下顎は縄を巻いて一体化させる。一体化させた縄の最後は顔の内側で結び、顔の中で舌と十字になる。縄を三つ編みにして作った角を二本取りつけ、その付け根には目をつける（現在は発泡スチロールの目玉を代用）。余計な藁を鋏で取り除き、全体の形を整えて完成する。完成したボンヅナは十三日まで撫木さんの家で保管しておく。

なお、八月に入ると子供たちは集金と藁あつめを行っていたが、現在は撫木氏が藁を準備してくれるので、子供たちは集金だけを行っている。藁は、撫木氏が知り合いの方に頼んで取っておいてもらったものを使用している。

② 迎え

八月十三日の午後四時三十分、子供たちと保護者が消防団前に集まってきた（**写真４**）。例年であれば、高学年の子供たちは集合する前に撫木氏宅に行き、作ってもらったボンヅナを受けとるのだが、今年は諸事情により撫木氏自身が軽トラックで届けることになった。

写真４　出発するため地蔵のある辻に集まった子供たち

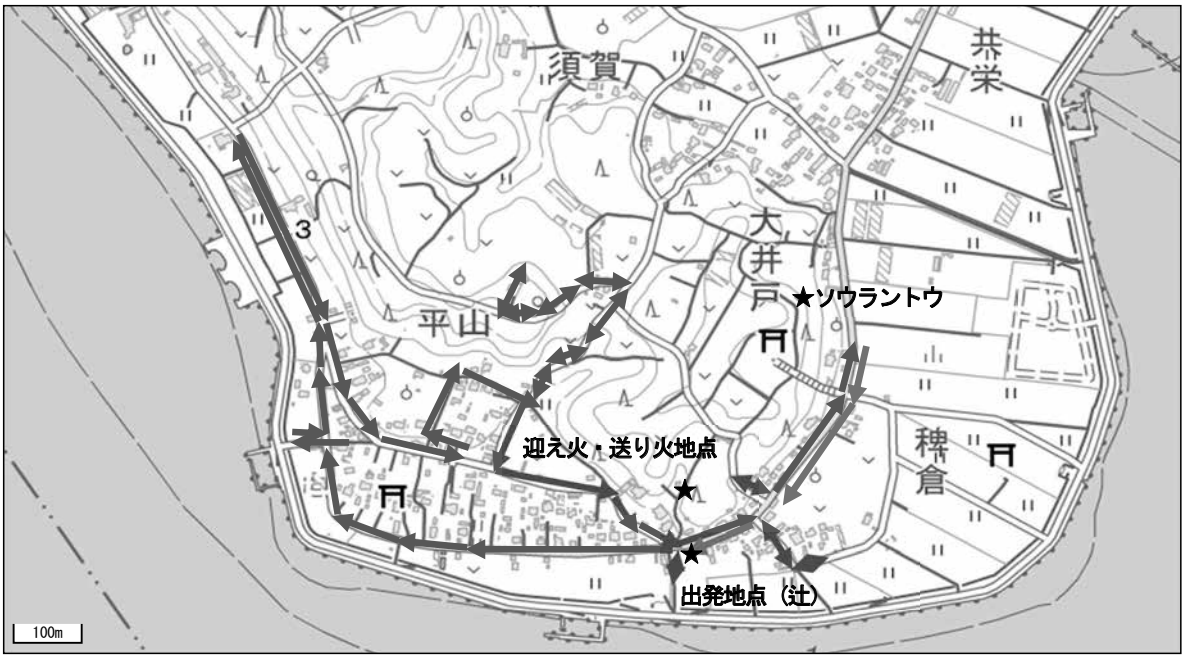
届けられたボンヅナは、地蔵尊前の辻に置かれた。コロナの感染防止のため、子供たち全員にマウスシールドが配られた。子供たちの服装は白の鉢巻きに、Tシャツに短パン、靴下、白の運動靴で統一されている。衣装は盆綱のためにわざわざ揃えているという。男の子は襷をかけているが、これも自前で揃えている。令和二年は幼稚園の年長から小学六年生まで十名が参加し

た。男子が四名、女子が六名であった。学年構成では小学六年生が四名、五年生が二名、四年生が一名、三年生が二名で年長が一名であった。六年生は親方とよばれ、全体の指示を出す。本来であれば前年に親方を務めた中学一年生が「年寄株」として親方のサポートにつくが、去年は六年生がいなかったため、今年はその役を務める子供を欠いていた。出発前に親方らは湖岸で花火を打ち上げる。

午後四時五十分、準備が整ったところで、六年生が「せーの」と声を掛けて全員で「先祖代々皆乗れ」と唱和し、出発となった。提灯持ちの子供二人が先頭に立ち、親方（六年生の男子）らが大蛇の頭につけたロープを持って歩く。一番後ろも六年生（女子）で、体に尾を巻き付けて歩く。胴体部分は他の子供たちがうけもつ。ゆっくりとした口調で「仏さまごーざった」と唱えながら、家の庭の中に入っていくと、家の人が縁側を開けて盆綱を迎える。家によっては縁側に茣蓙を用意しておく。そして、子供たちは語気を強めながら「仏さまごーざった」を連呼して縁側に頭を叩きつける（**写真5**）。終わると親方が提灯もちに促して頭側から庭を出ていく。

写真５　ボンヅナの頭を縁側に叩きつける

写真６　新盆の家では座敷にあがり、盆棚の前でボンヅナの頭を叩きつける



巡行図

これを集落のすべての家で繰り返した。

新盆の家と抜け盆（昨年に新盆だった家）では、親方たちが縁側から座敷に上がり込み、盆棚の前で強く叩きつける（**写真６**）。本来であれば、新盆の家では子供たちに対してジュースやスイカ、おにぎりなどの振る舞いをするのだが、今年はコロナの関係で行わないことを事前に申し合わせていた。その代わり、保護者の家などで適宜休憩をとっていった。

また、例年であれば地蔵を祀る辻のところまで戻ったところで夕食をとるのだが、この年は途中で雨が激しく降ってきたため、高台の家に着いたところで夕食となった（午後七時十五分）。夕食は母親たちが手作りしていたが、コロナの関係で今年は弁当を購入した。雨があがって出発する際、提灯に火を灯した。（提灯の火は暗くなった時に点け、決まった場所で点けることはない）。途中でロウソクの火が消えてしまうため、自転車でついて歩く育成会の親たちが、そのたびに火を灯してあげていた。

七十軒の家をすべて回り終えると、再び地蔵の辻まで戻ってきて、大蛇を下ろす（午後九時四十分）。そして消防小屋にトグロを巻く形にして大蛇を納めると、湖岸の堤防へ行き、全員で手持ち花火を楽しんだ。

③送り

十五日の午後五時、子供と保護者が地蔵を祀る辻に集まって来る。「迎え」は早く、「送り」はゆっくり（遅く）行うのがよいとされ、送りの日は三十分くらい遅い時間帯に集まる。上級生は消防小屋にしまっておいた大蛇を、辻の地蔵のところまで運び出して伸ばす。出発前に親方が湖岸に出て花火を打ち上げる。

子供たち全員が集まると出発する。ゆっくりとした口調で「仏さま、お戻りだ」の掛け声を全員でかけながら歩き出し、十三日の迎えと同じルートで各家の庭の中に入っていく。そして、子供たちは語気を強めながら「仏さま、お戻りだ」を連呼して縁側に頭を叩きつける。迎えと同様に新盆の家と抜け盆の家では、親方たちが座敷に上がり込み、盆棚の前で叩きつける。唱え言の文言が異なるだけで、順路や所作などは迎えの時（十三日）と一緒である。

途中で提灯に明かりを灯すが、やはりロウソクの火がすぐに消えてしまうため、自転車でついてまわる育成会の親たちがたびたび点火をしてあげた。この日は、例年通り辻のところまできて夕食となった。

夕食後、再び盆綱が出発し、辻よりも東側にある家をめぐっていく。そして、七十軒の家をすべてまわり終えると、再び地蔵のある辻まで戻ってボンヅナを下ろした（**写真７**）。この時に「先祖代々みな降りろ」と全員で唱え、盆綱行事は終了となる。そして消防小屋に大蛇を納め、堤防へ出て全員で花火を行った。

写真７　送りをおえて地蔵の辻へ戻った子供たち

〔綱の取り扱い〕

大蛇（ボンヅナ）には先祖が乗っていると認識されており、綱をまたいではいけないとされる。また、現在は抱えて運んでいるが、かつては肩にかけて担ぐものであったという。撫木氏が盆綱に参加していた頃は、先祖を乗せているのだから「大切にしろ」と言われ、肩で担がないと親方に怒られたという。

ボンヅナの始末については、近年は霞ケ浦に流しているが、それ以前はソウラントウへ上がる坂のところにトグロを巻いて置いておき、朽ちるままにしていた。また、燃やしたこともあったようだ。令和二年は、送りの終了後に消防小屋の中にトグロを巻いて置いておいた。例年であれば翌日

（十六日）に霞ケ浦に流してしまうが、今年は近年になく長い大蛇が完成したため、小美玉市玉里史料館に寄贈することが決まり、後日史料館に引き取られた。

〔各家の盆行事〕

お盆前、日にちは定まっていないが、新盆の家（仏式のみ）ではトウロウを立てる。マケや近所の人に手伝ってもらう。以前は一斉に墓掃除をする日を決めていたが現在はない。

八月十三日、盆綱が家に来たあと、提灯をもって先祖の霊を迎えに行く。迎えに行くのは、辻の地蔵からソウラントウへ向かう坂を少し上がったところまでで、実際に墓地まで行くことはない。提灯に火を点して家に霊を迎える。各家では盆棚を用意している。

八月十四日、新盆の親戚などに行く。仏式の家ではお墓参りに行く家もある。

写真８　ソウラントウへ向かう坂の途中で線香に火を灯して「送り」をする人たち

写真９　ソウラントウ（盆綱がいくことはない）

八月十五日、盆綱が家に来たあと、提灯に火を点して先祖の霊を送りに行く（**写真８**）。辻の地蔵から坂を上がったところの途中までで、墓地へは行かない。線香を手向けて提灯の火を消し自宅に帰る。このとき後ろを振り返ってはいけないなどともいう。

〔歴史的変遷〕

盆綱に女子が参加するようになってから、令和二年で三回目となった。少子化によって、男子だけでは維持できなくなったからである。かつて女子たちは、浴衣姿で提灯を持って盆綱が通るのを見守ったそうで、その景色はたいへん風情があったとされる。今年は女子の参加が多かったこともあって、何人かの地区の人たちは、「すっかり女の子の行事になってしまった」と呟いていた。

ボンヅナを製作する場所は、かつては平山会館（集会所）の庭先であったが、子供たちの人数が少なくなったこともあり、十年ほど前からは撫木氏の家に集まってもらうようにしたという。

かつて、ナスとホオズキで作った目は、巡行が始まるとすぐに取れてなくなってしまった。現在は実際のナス・ホオズキの目はやめて、模造品で代用しており、外れないようにしっかりと固定している。

ボンヅナは縁側そのものが壊れるくらいに叩きつけたこともあった。そのため迎えの日（十三日）が終わると、頭が「クタっ」となってしまったという。撫木氏がボンヅナづくりを習った当初は、頭と胴体を別々に作り出してつないでいたため、巡行が始めると頭がすぐに外れてしまった。迎えと送りの二日間で百五十軒近い家を回る必要があり、ボンヅナを最後までもたせるために、仕方なく一緒に歩きながら補修をしたという。そのことがあって、撫木氏はボンヅナの頭から胴体まで縄を芯にして一体的につくる工夫を施した。頭と胴体が分離する可能性はなくなり、今はついて歩く必要がなくなった。

〔所見〕

平山では十三日に迎えを、十五日に送りをする。十三日の出発時には「先祖代々、皆乗れ」と唱え、各家の縁側には「仏様、ござった」と連呼しながらボンヅナ（大蛇）の頭を縁側に叩きつける。新盆の家では座敷に上がり込み、盆棚の前で叩く。十五日には何も唱えずに出発し、各家の縁側に「仏様、お戻りだ」と連呼して、迎えと同様にボンヅナを縁側に叩きつけてまわる。十三日・十五日とも巡行経路（家をまわる順番）は同じである。そして十五日にすべての家を巡り終えると、出発地点にあたる辻（地蔵が祀られている）に戻り、「先祖代々皆降りろ」と唱え終了する。ボンヅナには先祖が乗っていると認識されており、綱をまたいではいけないという禁忌もある。以上の唱えごとや所作から判断して、平山地区の盆綱は仏の送迎に伴う行事であることは明白である。

ただし、平山の場合、他の事例にみられるような墓地に先祖の霊を迎えに行くことはしない。出発地点は集落内の辻にあたる場所で、地蔵が祀られている。ここはソウラントウ（共同墓地、**写真９**）へ行くための坂の入口でもあり、共同墓地までは遠くて行けないことから、その入口にあたる坂のところで、先祖の霊を乗せているのではないかとの解釈もあった。しかし、ソウラントウに平山のすべての墓地が集約されているわけではなく、家ごとに墓地をもっている例が散見される。盆綱の出発点がなぜ地蔵の辻なのか、そこが先祖の霊が乗る地点として本当に観念されているのかについては、ひとまずは見解を保留にしたい。

なお、盆綱とは別に各家では迎え火・送り火をしており、その際にソウラントウに墓地を有する家では、辻から坂を少し上がったところで、迎え火・送り火を焚いていた。盆綱によって先祖の霊を迎え送るとともに、家ごとにも先祖の霊を迎えて送る儀礼があり、仏の送迎が二重に行われている点は、他の事例とも共通するものである。

〔情報提供者〕

撫木　信夫氏（昭和二十六年生）
柴﨑　誠氏（昭和五十五年生）

〔参考文献〕

玉里村史編纂委員会編『玉里村史』、玉里村教育委員会、一九七五年
『茨城県の地名』（日本歴史地名体系八）、平凡社、一九八二年
玉里村史編纂委員会編『玉里村の歴史』、玉里村・玉里村立史料館、二〇〇六年
小美玉市玉里古文書調査研究会編『水戸藩玉里御留川―近世霞ケ浦の漁業と漁民―』、小美玉市玉里古文書調査研究会発行、二〇一〇年

（萩谷良太）

六　南川又（茨城町）の盆綱

〔地区名〕
茨城町南川又

〔地区の概況〕
南川又地区は涸沼川の左岸に位置する農村である。茨城町の北西端にあたり、北側から西側は笠間市（旧友部町）に接している。地区の南を画する涸沼川と、西側を画する枝折川沿いに水田地帯が広がる。集落は涸沼川沿いの水田地帯を南に望む台地上と台地裾部から県道十六号（大洗友部線）沿いに展開している。五十軒弱の家で構成されている。以下、『茨城町史』地誌編の記述を参照しながら概観する。

江戸時代は秋田氏領ののち、天領・旗本領、さらに宍戸藩との相給などとなり明治時代を迎えている。南川又の地名は近世まで「川又村」であり、近代以降に南川又とよばれるようになったとされる。川又の地名は、涸沼川と枝折川との合流地点に由来するものと考えられている。

地区内には斎宮明神、稲荷神社などがある。また、南川又農村集落センターの敷地内に阿弥陀堂がある。阿弥陀堂はもともと台地上の字阿弥陀にあったが、野火のため類焼し現在地に移ったとされる。本尊の阿弥陀如来の半身が焼けているのはこのためだと伝わる。大日如来や薬師如来の木像も安置され、以前は「びしゃもん様」（三月三日）、「弘法様」（毎月二十一日）、「おたうえ」（六月七日）、「数珠くり」などの行事があり、信仰の中心的な場所であった。南川又の盆綱は阿弥陀堂の前で作られ、集落の巡行はここを出発点としている。

〔実施主体〕
小学生～中学二年生の男女

〔実施日〕
八月十三日　盆綱

〔綱の形状〕
南川又のボンヅナは割竹を芯にして藁を束ね、縄をコイル状にまきつけてつくられている（**写真1**）。かつてのボンヅナは藤蔓を芯にしていたというが、調査時点では竹を芯にして作られていた（『茨城町史』地誌編の記載によれば、縄を十本くらいまとめて芯にしていた時期もあったようである）。また、昔は頭の方を太く作り出し、尾の方が細くなるように作られていたという。昔は稲藁を二束程度持ち寄ってもらい作っていた。

ボンヅナには子供たちの人数に応じて持ち手となる荒縄がとりつけられる。現在はホームセンターで購入しているが、かつては縄を綯っていた。ボンヅナの長さはおよそ四m、直径は十～十五cmほどである。

写真1　ボンヅナ（後ろの建物は阿弥陀堂）

〔詳細〕
新型コロナウイルス感染症拡大により盆綱が中止されたことにより、令和三年度に予定されていた現地調査を実施することができなかった。以下、平成二十三年（二〇一一）の筆者調査時の記録を中心に報告を行い、最後に令和元年八月十三日に行われた現況調査時の記録をもって補足しておきたい。

①ボンゾナづくり

八月十三日の午前八時三十分、南川又農村集落センターの前に子供たちや父兄が集まってくる。集落センター建物前は広場になっており、ここでボンゾナづくりが行われる。センターの北側には阿弥陀堂があり、堂の前には昨年度のボンゾナがそのままとり置かれていた。阿弥陀堂の周囲には墓や葬式小屋などもある。

ボンゾナづくりに参加するのは小学生から中学二年生までの男女と親たちである。二〇一一年は十七人の子供が参加していた。このうち親方となる中学二年生は四人で、男子が一人、女子が三人であった。

まず子供たちは、用意された藁すぐりを使って、藁のハカマをとる作業をおこなう。男親たちは阿弥陀堂前に置かれていた昨年度のボンゾナをみて大きさなどを確認し、作業にとりかかる。芯となる竹を準備する。切った竹を軽トラックのタイヤで踏み割り、垂直方向に割く。そして、割れた竹を紐で三ヶ所束ねて芯とする。竹をあらかじめ割っておくことにより、ボンゾナを地面に強くたたきつけたときに折れるのを防ぐという。できた割竹を芯にして、子供たちが選った藁を束ねて足しながら、縄できつく巻いていく（**写真2・3**）。先端は大人がきつく締めるが、体部に縄を巻き付ける作業は中学生の男子も手伝った。芯となる竹全体を巻き終えると、綱を少し巻き戻すようにして留め、藁束の飛び出した部分を適当な長さに切って整える。子供たちも、鋏を使って余計な藁や飛び出た縄を切って形を整える。こうしてできたボンゾナに水をかけて湿らせ、全体を密着させボンゾナ本体が完成する。

写真2　割った竹を芯にして藁を束ねる

写真3　束ねた藁に縄を巻き付けていく

続いてボンゾナに取り付ける縄を準備する。あらかじめ湿らせておいた荒縄をボンゾナに結び付けて持ち手とする。子供たちがボンゾナの両脇に整列をして、それぞれの持ち手を取り付ける間隔を決めた（親方四人と提灯持ちの最年少の子供たち二人を除くため、実際にボンゾナを持つのは十一人となる）。ボンゾナの頭側から左右に分かれて持てるように五ヶ所に荒縄を結び付け、最後に一本足して、十一人分の持ち手が完成した。でき上ったボンゾナは阿弥陀堂の前に運んで安置をしておく。ここまでの作業時間はおよそ二時間半ほどであった。

作業の終わりに、親方の男子が、午後三時に集合すること、軍手・タオル・帽子を持参することを知らせた。また、ボンゾナをまたがないようにと注意をした。ボンゾナを「またいだら呪われます」と話し、ボンゾナづくりは終了し解散した。

②巡行

午後三時に子供たちや親が集まってくる。服装はそれぞれであるが、親方から言われたとおりボンゾナをもつ子供たちは軍手を持参している。

親たちは提灯の準備をしたり、ボンゾナの荒縄がしっかりと結ばれているかを確認して、午後三時半前に阿弥陀堂前のボンゾナを持ち出し出発した。特に墓地を回ったり、阿弥陀堂で所作や唱えごとはしない。ただ出発時には「わっしょい、わっしょい、わっしょい」と唱えた。「わっしょい」

は歩いている間も唱え続ける。行列の先頭は親方の四名で、男子はお金を入れておくための袋をもっている。他の親方の女の子たちは、ボンヅナの持ち手が切れたときのために、荒縄をもっている。ボンヅナの前には提灯をもつ子供が二人立つ。ボンヅナを先頭で引っ張るのは中学一年生である。移動するときには、ボンヅナをぶら下げるような形で進む。親たちも子供たちの安全のため同行した。

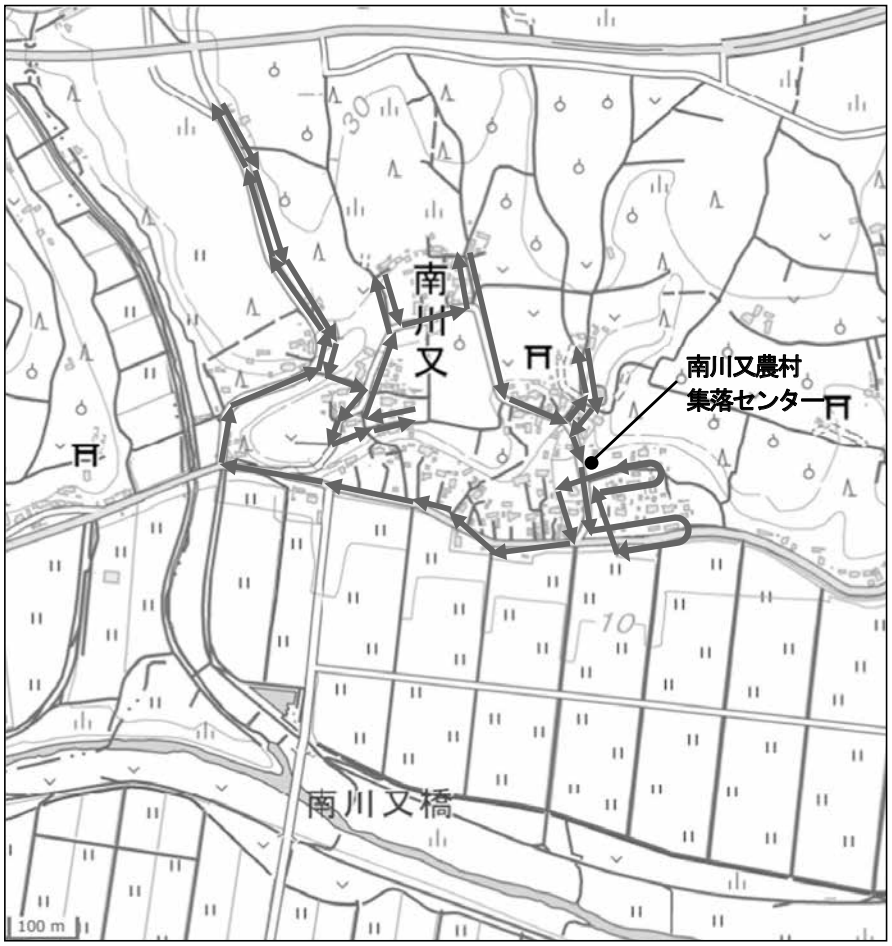


写真４　ボンヅナを振り上げる

写真５　ボンヅナを地面に叩きつける

ボンヅナは県道に出て、集落東端から順番に四十七軒ほどある家々を巡っていく。一行は門をくぐって屋敷の中に入ると、家人が出てくるのを待つ。家人は玄関先や縁側などから、親方におひねり（金額は千円が多い）を渡すと、タイミングを合わせてボンヅナを振り上げて勢いよく下ろし、地面に激しく叩きつける（**写真４・５**）。このときも「わっしょい。わっしょい。わっしょい」と唱えながら三回行う。ボンヅナが主屋のなかに上がったりすることはない。これを各家の庭で繰り返していく。県道に沿って集落の西側へ進み、その後は台地にあがっていく。途中休憩をとりながら、最終的には台地を降りて集落センターへ戻り、阿弥陀堂前にボンヅナを納める。この年は午後七時ちょうどに終了した。

ボンヅナを納めると、集落センターで親方が集めたお金を分配する。お金の分配も親方の大事な役割だという。

③令和元年の盆綱

以上の記録は平成二十三年のものであるが、本調査事業開始年度の令和

元年に現況確認として吉川明宏氏による調査が行われているので、参考に記しておく。令和元年は子供の数が少なくなり、親方となる中学二年生は女子ひとり、小学生は六年生の男子一名と、一年生の女子二名の合計四名であった。このため中学三年生の男子が手伝いとして参加していた。ボンヅナは四人で運ばれたため、持ち手は四本であった。長さは三メートルほどであった。ボンヅナの作り方や基本的な所作などは以前と同じで、午後四時に出発をして巡行し、午後六時過ぎに終了した。

〔綱の取り扱い〕

ボンヅナをまたいではいけないという禁忌がある。墓地などに寄ることはないが、先祖の霊が乗っているという観念はあるようで、盆綱は「先祖が乗ってくるという意味でやっている」と話してくれた話者もいた。

昔は行事が終了すると、ボンヅナを土手に持っていって燃やしたということだが、現在は翌年まで阿弥陀堂の前にそのまま置かれている。そして、翌年のボンヅナ作りの作業の参考にしたあと、軽トラックで前年のものは運び出されて余った藁と一緒に始末される。

〔各家の盆行事〕

八月十三日、南川又の各家では、それぞれの墓地へ行く道の途中で、迎え火の提灯に火をともして先祖を迎える。

〔歴史的変遷〕

むかしは男子だけの行事であったが、二十年前（二〇一一年の調査時点）から女子も参加をするようになった。かつては子供の数が多かったため、ボンヅナの長さは十ｍくらいになったという。

〔所見〕

南川又の盆綱は先祖の霊を迎えるものとして認識されている。ただし、墓地に行ったりすることはなく、先祖の迎えに関わる唱え事などもない。特徴的なのはボンヅナを各家の庭で激しくたたきつける点である。

なお、墓地は出発点である阿弥陀堂周辺に比較的まとまってみられるが、他は散在しているという。

（萩谷良太）

〔参考文献〕

『茨城町史』地誌編、茨城町史編さん委員会、一九九三年

七　奥谷（茨城町）の盆綱ひき

〔地区名〕

茨城町奥谷

〔地区の概況〕

涸沼川の河岸段丘上に位置する。古くは水戸街道にほど近い集落であった。かつてはおおむね稲作農業を主とし、一部が商業に従事していた。かつては二百戸以上あった時期もあったが（時期不明）、現在は入区している戸数で一五四戸である（令和元年（二〇一九）八月一日現在）。

〔実施主体〕

小学一～六年生、中学一～三年生（男女）

ボンヅナの製作は、三十代～八十代の男性が中心となり、子供たち及びその母親である二十代～三十代女性が加わる。

〔実施日〕

① 準備　八月十二日　午前九時から正午

② 迎え　八月十三日　午後六時から午後八時三十分

〔綱の形状〕

本体部分は四七〇cm、引き綱部分が八三〇cmである。本体部分は稲藁を二十五cmほどの太さで綯いながら、間に茅を挟み込み、房状にしていく。龍の姿を模していると言われているが、特に角や目などの装飾は施していない（**写真1**）。本体の先端から八m超ほどの長さの引き綱が二本出ており、一本につき約十人の子供が等間隔に並び、片手で綱を持って引くようになっている。

なお、令和元年（二〇一九）の本体部分の長さは四七〇cmであったが、更科公護による昭和四十二年（一九六七）の報告には「長さは昔は一〇メートル以上もあったが、現在は三メートルくらいである」（更科論文、一九六七年、五十五頁）とある。十mを超えた時期があったということは特筆に値するが、一方で子供の数が多かった一九六〇年代には現在よりも短いボンヅナを製作していたことからも理解されるように、単純に綱を引く子供の数によってボンヅナの長さが決まるということではないようである。

〔詳細〕

① 準備

八月三日に、材料採取を行う。藁はお願いしている農家にもらいに行き、茅萱は集落内で採取する。並行して寄付を集めることになっており、八月

写真1　ボンヅナの本体

写真2　ボンヅナの製作

十三日までに、各家から五百円ずつ集めておく。

ボンヅナの製作は八月十二日に行う。高齢者クラブの長老の指導を受けながら、高齢者クラブ、竹根の会（子供育成会ＯＢの組織）、子供育成会が製作にあたる（**写真２**）。子供たちは茅萱と稲藁を整形して束にする作業を行う。昭和五十九年（一九八四）の中断までは、準備が終了した後中学三年生がボンヅナの番として公民館に宿泊していた。

なお、昭和四十二年（一九六七）の報告では、ボンヅナの製作は十一日におこなっており、「子供たちはローソクを点じて交代しながら二晩寝ずの番をする」（傍点引用者）と述べられている（更科、前掲論文、五十六頁）。

②　迎え

八月十三日午後六時に子供たちが御霊神社に集合し、中学三年生を先頭に、小学一年生まで二列で整列する。中学三年生は、提灯を持って先導する役を担う。子供育成会の担当者（自身も小学生の子供をもつ）が音頭をとって掛け声の練習と準備運動（伸脚、屈伸）を行う。参加は二十一人（男十三人、女八人）。衣装は私服、頭には白いハチマキをしめ、軍手をする。かつては出発前にボンヅナに水をかけていたが（更科、前掲論文、五十六頁）、現在はそのようなことはしていない。

午後六時三十分に御霊神社をスタートし、引き綱を子供たちが引きながら桜ヶ丘霊園まで走る。墓地の前で「仏さんの道は糸より細い」と歌った（**写真３**）後に、墓地にボンヅナを引き入れ、「オノリナンショ」の掛け声で先祖をボンヅナに「乗せる」（**写真４**）。道を挟んだ墓地でも同じことを繰り返す。その後、集落の端にある奥谷共同墓地まで走り、同様に先祖を乗せる。

上記三か所で先祖を乗せた後は、集落の道を走って巡行する（**写真５**）。速度は小学生の全速力に合わせるため、脱落者も出る。中高年の大人たち

写真３　墓地の前で歌う

写真４　先祖を乗せる

写真５　ボンヅナを引く

写真６　迎え火

はついて行くことができないため、途中の道を端折る場合もある。車の通行量の多い道であるため、周囲で育成会・竹根の会メンバーが片側通行止めの差配をする。列の後ろから救護車と消防団の消防車が追走する。この間、掛け声は基本的にずっと「わっしょい」と声を合わせている。

沿道の各家では、ボンヅナが近づくと歩道上で藁に火をつけて迎え火（**写真6**）とし、ボンヅナの前を走っている提灯を持った中学生が迎え火を蹴る。その際、完全に消えるまで蹴り続けることもあれば、時間の都合で完全に消すことなく二～三度蹴るだけに止めることもある。この迎え火を蹴る仕草については「先祖が家に帰ってきた合図」と説明される。

新盆の家の前を通る時は、止まることはないものの、走る速度をやや緩め、「オーリナンショ（お降りなんしょ）」と声を揃える。令和元年（二〇一九）の盆綱では、十二軒が新盆であった。集落のウエ（西側）をまわった後に、午後七時十分頃いったん御霊神社に戻り休憩する。保護者や育成会などによって麦茶などが振舞われる。休憩後はシタ（東側）をまわり、涸沼川の高橋まで到着したところで終了となる。全員で御霊神社に戻ってから解散する。子供たちには参加賞として図書カードが分けられる。

〔綱の取扱い〕

移動は、本体部分は地面に置いて、引き綱で引っ張り、引きずるような形で動かす。集落の面積が広いこともあり、基本的には小学生が全速力で走るくらいの速度で集落をまわる。そのため、行事の終了後にはある程度擦り傷などができ、全体的に摩耗した状態になっている。

ボンヅナの扱いについて、昭和四十二年（一九六七）の時点では子供たちは「盆綱を跨ぐようなことは絶対にしない」（更科、前掲論文、五十六頁）ということであったが、現在は禁忌事項などは特に言われていない。

〔各家の盆行事〕

新盆の家では、ボンヅナが家の前を通るのに先立ち、迎え火を焚く。

〔歴史的変遷〕

盆綱がいつから行われているかは長老に聞いても定かではない。「今生きていれば一二〇歳を超える人」が子供の時にはすでに今と同じような形で実施していたという話を聞いている。聞き取りによれば、昔（時期不詳）はボンヅナを龍に見立てて角を立てていたというが、話者の直接の経験では、角や目などの装飾を施していた時期はないという。昭和五十九年（一九八四）に中断するまでは、ルートも御霊神社をスタートして、最初にウエの共同墓地に向かうルートであった。中学三年生がボンヅナの番をして一泊することも、終了後にボンヅナを高橋から川に流すことも、当時の習慣であった。その時期までは、ボンヅナの製作以外ではほとんど大人の力を借りることはなく、すべて子供たちだけで運営していた。新盆の家がどこであるかも中学三年生が事前に把握して運営していた。参加は男の子のみで女性は全く関わらなかった。昭和五十九年までは参加賞は現金で、しかも中学三年生に分配の権利があったため、ほとんどを中学三年生が持ち帰ったという。

昭和五十九年の盆綱で、参加していた子供が自動車と接触する事故があり、盆綱行事が取りやめられた。盆綱に参加した最後の世代が親になり、子供育成会のメンバーとなった頃に、盆綱を再開したいという機運が高まり、子供育成会の主導で平成十六年（二〇〇四）に盆綱が再開した。再開にあたっては、ルートを変更して御霊神社からすぐに大通りに出るのではなく、先に桜ヶ丘霊園に行ってからウエの共同墓地に向かうようになった。また、中学生三年生が全てを取り仕切る（その代わりに分け前も持っていく）スタイルではなく、最初から最後まで子供育成会が主導する形になったのも、女子が参加するようになったのも、再開後のことである。

かつては男の子供だけで六十人から七十人ほどが綱を引いており、道を二車線とも通行止めにして道いっぱいに広がっていた。また、小学四年生以上だけが綱を引き、また中学生が大将として引っ張っていたため、今よりも走るスピードが早く、常に全速力で走っていた。

最近は、参加する子供の数が急減しており、この年もその前年と比べて該当する子供が五人も減っていた。低学年になるに従って数は減っているため、その後も減少し続ける見通しである。子供だけで綱を引くのはほぼ限界に近づいており、来年も盆綱ができるかどうか、というのが現実的な悩みになりつつある。

〔所見〕

集落の範囲自体が非常に広大であるため、約九十分にわたり終始走って巡回する形になる。子供たちも体力勝負の行事であると捉えているようで、運動の得意な子供がリーダーシップを発揮する形になる。この点は奥谷ならではの特徴といえるかもしれない。

また、不慮の事故による中断を経て再開したという経緯があるが、中断の前後でほぼ子供たち任せで運営されていたものが、育成会の主催によるものへと変化したことも興味深い。

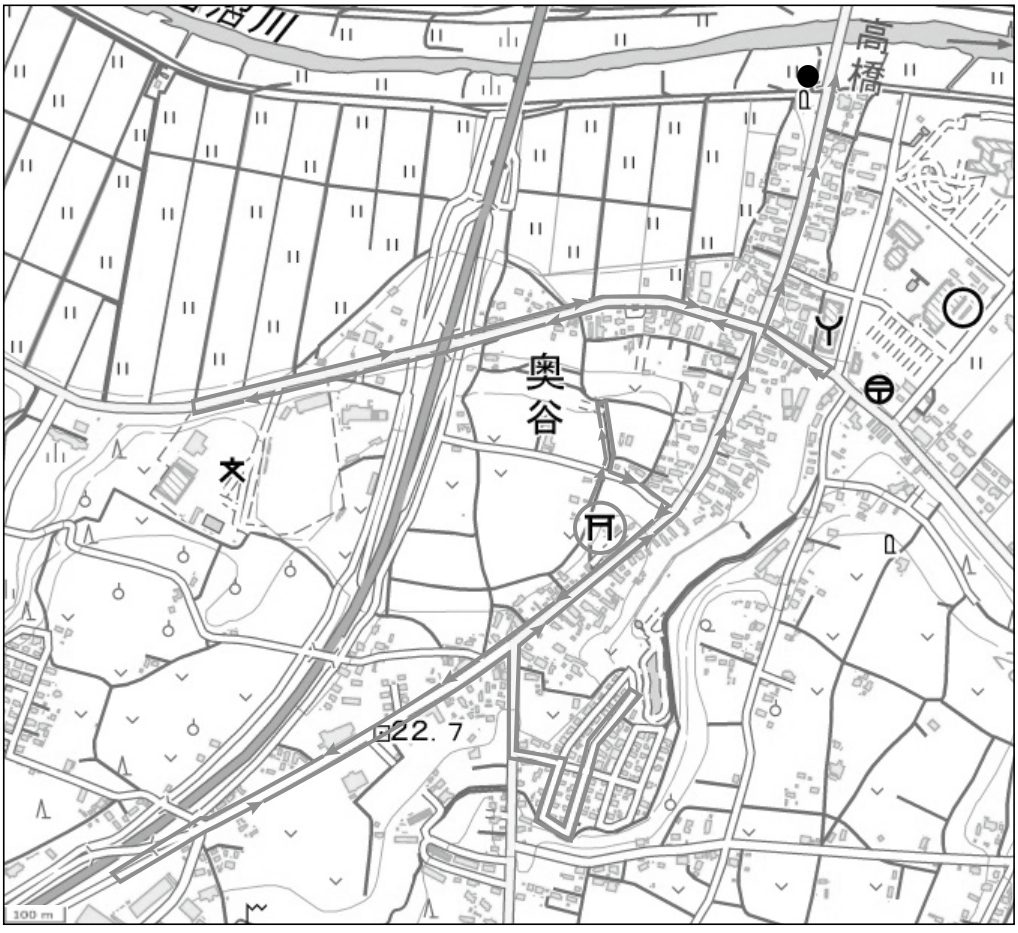
〔情報提供者〕

鬼沢　洋一さん（昭和二十四年生まれ）

〔参考文献〕

更科公護「盆綱引きの意義」（『茨城県史研究』第七号）一九六七年

（塚原　伸治）



八　金上（かねあげ）（行方市三和（みわ））の盆綱

三和金上においては、令和二、三年ともコロナウイルス感染拡大のため、盆綱行事は行われなかった。そのため、聞き書きによって確認できた内容ならびに行方市教育委員会を通じてご提供いただいた画像、動画データ（令和元年八月十三日撮影）に基づいて報告する。

〔地区名〕

行方市三和金上地区

〔地区の概況〕

三和金上地区は、霞ケ浦湖畔に近い一班、二班と、西側の山側に入った場所に位置する三班から構成され、戸数は一班と二班が三十三軒で、三班は十三軒である。地区としては一班が古く、そこから家が増加して二班が形成され、更に三班が形成されたと思われる。

同地区は霞ケ浦湖畔に形成された集落で、船による流通とも関わりがある。金上の集落名は、鍛冶が行われていた地区であったからとする話も聞かれる。集落には、四Hクラブ（戦後全国的に設けられた農業者を中心とする青年の集まり）、青年会、婦人会、子供会、子供育成会などが構成されている。

集落で住民が集合し協議の場となるのは、元旦のハツサンカイ（初参会。金上農村集落センターで行われる。同施設は旧小学校校舎）、二月八日のサンドウサイ（祭頭祭）、六月十五日のタチモミ（太刀揉。巨大な木刀を造り高貴神社に奉納する夏の厄払い行事。小学生男子によって行われる）である多くの家が臨済宗自性寺の檀家である。自性寺は檀家が六百戸を超える大寺である。墓地は、集落神社の高貴神社（祭神、タカムスビノカミ、タケハヤスサノオノカミ、オオモノヌシノカミ）の背後に共同墓地があり、ここを盆綱行事の起点とする。もう一つ、比較的新しい共同墓地が山側（道祖神遺跡側）にもある。

約二十年前まで共同墓地では土葬が行われていた。ロクシャク（墓穴掘りの役目の者）が二m程の深さの墓穴を掘り、そこに埋葬し、印として太さが一尺程もある木の角塔婆を建てていた。土葬の時点では石塔墓は建てていなかったと言う。火葬が行われるようになって、各家で代々墓を建て、火葬骨をカロートに納めるようになった。

写真１　現在のボンヅナの形状

共同墓地の現況を確認すると、砂を含んだ土壌であり、盛り土に花が供えられた土葬跡が多数あり、一部に先祖代々と印した石塔や、カロート付きの石塔墓が建てられている。古くなり横倒しとなった角塔婆も見られる。墓地の中央には、石組みが設けられ、ここにボンヅナが巻き付けられる。

〔実施主体〕

ボンヅナの製作は、子供会役員の男性と初盆の家の男性で行う。

ボンヅナを運ぶのは、現在は小学一年生から六年生の男女である。元は男児のみであったが、子供が少なくなったため、初参会で協議して女児も加えることにした。

〔実施日〕

ボンヅナの製作は八月十日に行う。八月十三日の迎えにボンヅナを出す。十五日の送りには行事は行われない。

写真２　共同墓地に置かれた綱

〔綱の形状〕

太さ十五㎝、長さ三ｍ程の綱を左綯でなった綱を束ねて作り、子供が持ち上げ地面に叩き付けるための短い綱を子供の人数分付ける。材料はすべて藁で、麻縄などは使わない。現在のボンゾナには、芯に成る竹や杉の丸太などは用いられておらず、自由に曲がる形状である（**写真１**）。しかしながら、以前撮影された写真では、子供たちが肩に担いでボンゾナを運んでおり、当時は何らかの芯材が用いられていた可能性もある。

〔綱の取り扱い〕

かつては綱を横から縛ることもなかったため、曳いている間に切れやすく、切れるとその場で修理していた。かけ声にも「切れたらつなげ」の言葉がある。綱についての禁忌は聞かれない。完成した綱は、共同墓地の石組みに時計回りに巻き付けておく（**写真２**）。

〔詳細〕

①　準備

かつては八月十日、現在は八月十三日に盆綱に参加する集落の子供たちと子供会役員の男性及び初盆宅の男性が高貴神社に集合してボンゾナを製作する。藁を日曜日に前もって集めておく。ボンゾナの長さは、その年に参加する子供の数で変わってくる。近年は少なくなってきたので、短くなっている。綱についての禁忌は聞かれない。完成した綱は、共同墓地の石組みに巻き付けておく。以下は、令和元年八月十日の記録に基づく。

この年は、八月十三日の午後一時頃、高倉神社の境内に子供たちが集まり、大人の指導の下で、ボンゾナを製作した。集めた藁を千歯扱きですいてきれいに揃える（**写真３**）。揃えた藁を水で湿らせて木槌で叩いたり（**写真４**）圧搾機で押したりして（**写真５**）、縄に綯いやすいように繊維を柔らかくする。これらはいずれも子供の手作業で行う。揃えられ柔らかくなった藁を、大人たちが五㎝程の太めの綱に綯ってゆく。また、引き上げる為の細い縄を子供たちが大人の指導を受けながら綯う。太めの綱三本を撚り合わせて、ボンゾナの本体部分とする（**写真６**）。本体には子供たちが持ち上げるための細い縄を結んでゆく。胴体部分のほか、先端部分と末端部分にも細い縄を結ぶ。約一時間でボンゾナが完成するが、これを子供たちが神社の境内で一度引き上げて地面に叩き付け、本番の練習とする（**写真７**）。その後、子供たちは細縄でボンゾナを脛ほどの高さに持ち上げて、共同墓地に運び、墓地中央の石組みの周りを反時計回りに三回回り（**写真８**）、ボンゾナを地面に降ろして解散する。

写真３　千歯扱きで藁を揃える

写真４　木槌で藁を柔らかくする

写真５　藁を圧搾する

②　迎え

八月十三日の午後一時頃から共同墓地に子供たちが集合し、二時に出発する。子供たちの服装は、現在は、学校の体育の授業で着用するジャージなどだが、かつては新品の

写真８　墓地で三回回る

写真７　境内で綱を打ち付ける

写真６　ボンゾナを綯う

真っ白いランニングシャツと短パンに、同じく白い鉢巻きを締めて行った。小学校の運動会もそうであるが、ハレの日なので、子供なりに正装したとの説明が聞かれた。

共同墓地近くの湖畔寄りの家からまわり始め、地図の順路で、一班、二班とまわり、少し離れた三班には車で移動する。各家に着くと庭先にボンゾナを運び入れ、まず、家の方に挨拶してお金を納めてもらう（**写真９**）。それぞれの家では、庭から盆棚から見通せるよう縁側の戸を開け放しておく。ボンゾナをその近くまで運び入れると、勢いよく綱を持ち上げては地面に叩き付ける（**写真10、写真11**）。綱を持ち上げ、叩き付けるタイミングに合わせて「やんさのボンゾナ、切れたらつなげ、じーさん、ばーさん乗せて来た」とかけ声を掛ける。ボンゾナは家の中には差し込まない。家々では盆棚を設けているが、盆棚に対する儀礼もない。新盆宅も同様である。

家々では、子供たちに対して、お金とお菓子を与える。新盆宅では多めにお金を渡す（千円程度）。お金は、かつては、六年生のリーダーが集め、学齢に応じて金額を調整して分配したが、現在は公平に分けている。

すべての家をまわり終わると、共同墓地に戻って再び石組みに綱を巻き付けて行事を終える。かつては、帆津倉集落との境界の溝

写真11　綱を庭に打ち付ける

写真10　綱を持ち上げる

写真９　お金を納める

に綱を送って放置していたとされ、令和元年度もその場所に綱を投げ込んで放置している（**写真12、写真13**）。

〔各家の盆行事〕

各家では八月に入って墓掃除を行う。

八月十三日　盆綱が行われる。各家では仏壇前などに盆棚を設け、お膳や果物などを供える。新盆宅では親族から送られた提灯を並べる。無縁さまに対する供物はない。夕刻、まだ明るい内に家の前の道などで迎え火（藁）を焚く。迎え火は出来るだけ早く焚くのが良いとされる。また、家の墓に行き、線香を上げる。

八月十四日　墓に、混ぜご飯、茄子やキュウリを細かく切って生米と混ぜたものを供える。

八月十五日　送り火を焚き、墓に行き線香をあげて先祖を送る。

〔歴史的変遷〕

子供の人数の減少により、かつては小学生の男児のみで行っていた行事に女児が加わるようになっている。一方で、同じ子供主体の行事である六月のタチモミ（木刀の集落神社への奉納行事）は、現在でも男児のみで行われており、女児を加えようという意見は出

写真12　綱を境界まで運ぶ

写真13　綱を道路脇に投げる

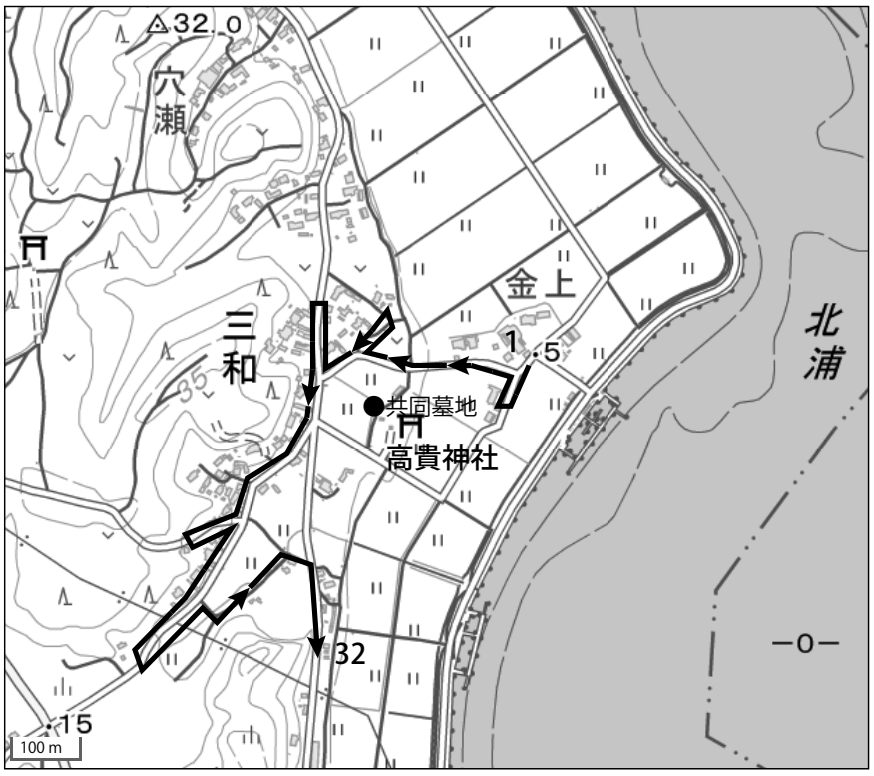
ていない。参加する子供の減少により綱も短くなっており、また、綱が切れないように、三十cm感覚で綱を縄で縛るようにもなっている。かつての作り方とは変わっていると思われるが、時代に合わせて出来る形で行っていこうという考えで行っている。

〔所見〕

金上のボンゾナには竜頭などの装飾は見られず、藁綱と曳縄からなる形態であり、かけ声にも綱が切れた場合の言葉が織り込まれるなどの特徴が見られる。共同墓地を起点・終点とするが、令和元年は、家をまわった後、集落の境界に綱を遺棄しており、行事内容に変化も見られる。各家でも庭先でのかけ声のみであり、家屋内に差し入れるなどの行為は見られない。これも変化した後の形態であるのか興味が持たれる。

また、同地区で行われている夏季の鎮送儀礼と考えられるタチモミ（太刀揉）が現在も男児のみで行われているのに対して、盆綱には女児も加わるようになっており、共同体における子供行事への性差の意識に差異が見られる点も興味深い。家々に子供たちがそれぞれの先祖を迎えるための盆綱行事は、先祖（祖父母）と孫というイメージから性差を超えて行うことを容認しやすいものであったとも考えられる。令和二年度と三年度はコロナウイルス感染症の流行により、盆綱行事は行われなかったが、状況が改善した年度には再開する予定であり、今後も継続されて行くことが期待される。

（徳丸　亞木）



〔情報提供者〕

河野　勝雄さん

〔参考文献〕

河野勝雄「武田川図志」『郷土北浦』第四四号
北浦郷土文化研究会令和三年三月三十一日

九　沖洲（おきす）（行方市）の盆綱

〔地区名〕

行方市沖洲地区

〔地区の概況〕

沖洲地区は、霞ケ浦北東岸の沖積地に位置し、北側を小美玉市小塙（No.18）・下馬場（No.19）に接する。行方市高須地区（No.63）の北側にあたる。古代における霞ケ浦の有力な統治者との関連が指摘されている三昧塚古墳、勅使塚古墳、大日塚古墳といった沖洲古墳群がこの地区内に点在している。近世期は麻生藩領に属し、明治二十二年（一八八九）に立花村、その後、昭和三十年（一九五五）に玉造町に属した。明治二十四年の戸数は六十七戸、人口三八三人、令和二年四月一日現在の統計では、一九五世帯、四五六人が沖洲地区に居住している。

〔実施主体〕

行事の準備（綱の製作）は、子ども会育成会の役員が中心となり、大人五名程度が作業に当たる。子供はその場で見学するのみで、製作にはほとんど関与しない。

行事の本番（盆綱担ぎ）は、近年では小学生十名前後が主体となって行っている。

〔実施日〕

① 準備　八月十二日　午後一時から午後三時
② 迎え　八月十三日　午後一時から午後六時三十分
③ 送り　なし

〔綱の形状〕

頭部から尾までの全長は、現在では三ｍから四ｍである。特別な装飾はしない。平成五年前後は十ｍぐらいであったが、これも行事に参加する子供の数に合わせて小型化し、現在に至る。

〔詳細〕

① 準備

行事前日の午後一時から三時まで、約二時間かけて大人だけで準備する。今から三十年ほど前（平成五年頃）は、地域のボランティアが指導しながら子供たちで準備を行ったが、子供の数が減ったため、現在の形となった。

綱に必要な材料のうち、荒縄と稲藁をホームセンターで購入し、竹は地域の竹林の所有者から譲り受ける。午後一時から、地区内にある集落センター（常福寺に隣接）に集まって製作を始める。作り方は、竹を心棒にして藁を周りに束ねて縛り、さらにその周囲を荒縄で巻いていく。

頭部、尾尾ともに特別な装飾はしない。前方に二本、後方には一本の縄を結び付け、それぞれの場所を子供たちが持って移動する。これらの

写真１　頭部の形状と「ひげ」

写真２　尻尾の形状と「しっぽ」

縄は、前方から伸びる縄が「ひげ」で、後方の縄が「しっぽ」と呼ばれている。また、尻尾の部分は荒縄を厚めに巻いて強度を上げる工夫が施される（**写真1・2**）。

② 迎え

午後一時、巡行の起点である共同墓地（地図上の○印）に子供たちが集合する。スタートの時刻は、他地域で見られるような、各家庭の墓参りを待ってからというような慣わしはない。

巡行は、基本的に子供たちが綱を担いで徒歩で行う。綱本体を六～八人で担ぐほかに、ひげ二名、しっぽ一名、提灯持ち一名に役割が分けられている（写真3）。起点と終点が決まっている以外は、「子供たちに負担の少ない順路」を最優先に考えて、巡行のルートを保護者が設定している。

順路図に従って行程の概略を記すと、午後一時、共同墓地（順路図中の○印）を出発し、まず国道三五五号線の北側のエリアを回る。その後、多くの住宅が密集する国道三五五号線の旧道沿いを巡行していく。途中、何度か休憩を挟みながら、国道の南側の家々、続いて霞ケ浦湖岸を北上し、最後に集落センター（順路図中の●印）へ戻ってくるルートとなっている。沖洲地区百四十戸あるうちの八十軒程度の家々を、約五時間かけてまわり終える。

行事の際のかけ声には、次の四通りがある。

写真 3　先導役の提灯持ち

・共同墓地を出発する時「ほーとけさーま、のりらっしょ」
・道中にて「ほーとけさーま、めーらっしょ」
・各家に着いた時「ほーとけさーま、おりらっしょ」
・次の目的地へ出発する時「ほーとけさーま、あがらっしょ」

各家に着くと、盆棚の前、家の縁側に綱を下ろすのが通例で、仏さまを送り届けて来た子供たちへ御礼が渡される。いただいた御礼は、綱の製作に要した材料費を引いて、参加した子供たちに均等に分けられ、端数は子供会費に繰り入れることになっている。

写真 4　巡行の様子

〔綱の取扱い〕

綱を跨いではならないとされており、この慣わしは現在でも実践されている。巡行の最後、終点である集落センターに着くと、担ぎ手全員で綱を投げる。綱は、そのまま集落センターに放置される。

〔各家の盆行事〕

各家の墓掃除は、早い例で八月六日か七日頃に行う家があるが、近年では十二日か十三日に行う家も多い。盆綱とは別に各家で行う先祖のお迎えは、十三日の夕方に墓地へ行き、線香を上げ、米と胡瓜と茄子を混ぜた供物を墓石に供える。屋敷の門先または墓地から家までの決まった場所で、藁や線香を燃して迎え火とする。

各家では、仏間や床の間に盆棚を設える。棚の上には位牌と、お膳、茄子と胡瓜で作った馬などを置く。新盆宅には、「見舞い」と称して、親戚や付き合いのある家の人がお金を持って訪れる。

〔歴史的変遷〕

順路や綱の形状は、実施団体の事情や時代状況に合わせて変わってきているものの、行事が仏様のお迎えと認識されていることは現在も変わっていない。

『玉造町史』（一九八五）に、沖洲の盆綱の様子が次のように紹介されている。

「十三日は仏様迎えをする。手賀舟津と高須、沖洲では、仏様迎えに「盆綱」といって竜を型どり、藁で胴を二間くらいの長さに太く作り『仏様ござらっしゃった』といってまわる風習がある、現在は沖洲地区だけに引き継がれている。」（四七七頁）。

右の引用箇所からは、一九八〇年代当時、周辺地域の盆綱行事が沖須地区を除いて途絶えていたことを伺わせる記述もみられるが、詳しい状況は確認できていない。行事の基本的な形としては、現在までの間に、大きくは変わっていないようである。

ただし、細部については、三十年ほど前に経験した方（昭和五十七年生まれの男性）から得た情報と比較すると、この三十年の間に次の点が変わってきている。

① 行事の準備や綱の製作

現在は、大人だけで準備が進められるが、かつては、地域の高齢者やボランティアの指導のもと、子供たちが主体で行うのが通例であった。

② 参加者

幼稚園生（年長）も含めた、三十名程度の参加者（担ぎ手）があった。

③ 巡行の終点

現在のように、集落センター（常福寺）が終点となったのは近年になってからのことであり、三十年前は、集落の北側に鎮座する於岐都説神社が終点であった。

④ 各家からの御礼の分配

現在は大人が御礼の集約と参加者への分配を行っているが、三十年前は、小学六年生が取り仕切る伝統があった。その当時の慣例として、六年生には一万円が配分された。これは、単に年齢による傾斜をつけたものではなく、盆綱行事の準備から本番までを仕切り、年下の面倒を見ながら、まとめ役としての大役を果たした六年生の児童を労う意味があった。六年生以下の児童については、これもやはり慣例としてであるが、五年生が五千円、四年生四千五百円、三年生四千円、二年生三千五百円、一年生三千円というように、学年差を一つの指標として配分された。

〔所見〕

集落センター（常福寺）が終点となったのは近年であり、もともとの終点は地区の北端にあたる神社であった。その頃、行事後に綱をどう処理していたかについての情報は得られなかった。神社の立地からの推測にすぎないが、霞ケ浦に流していた可能性も考えられる。

〔情報提供者〕

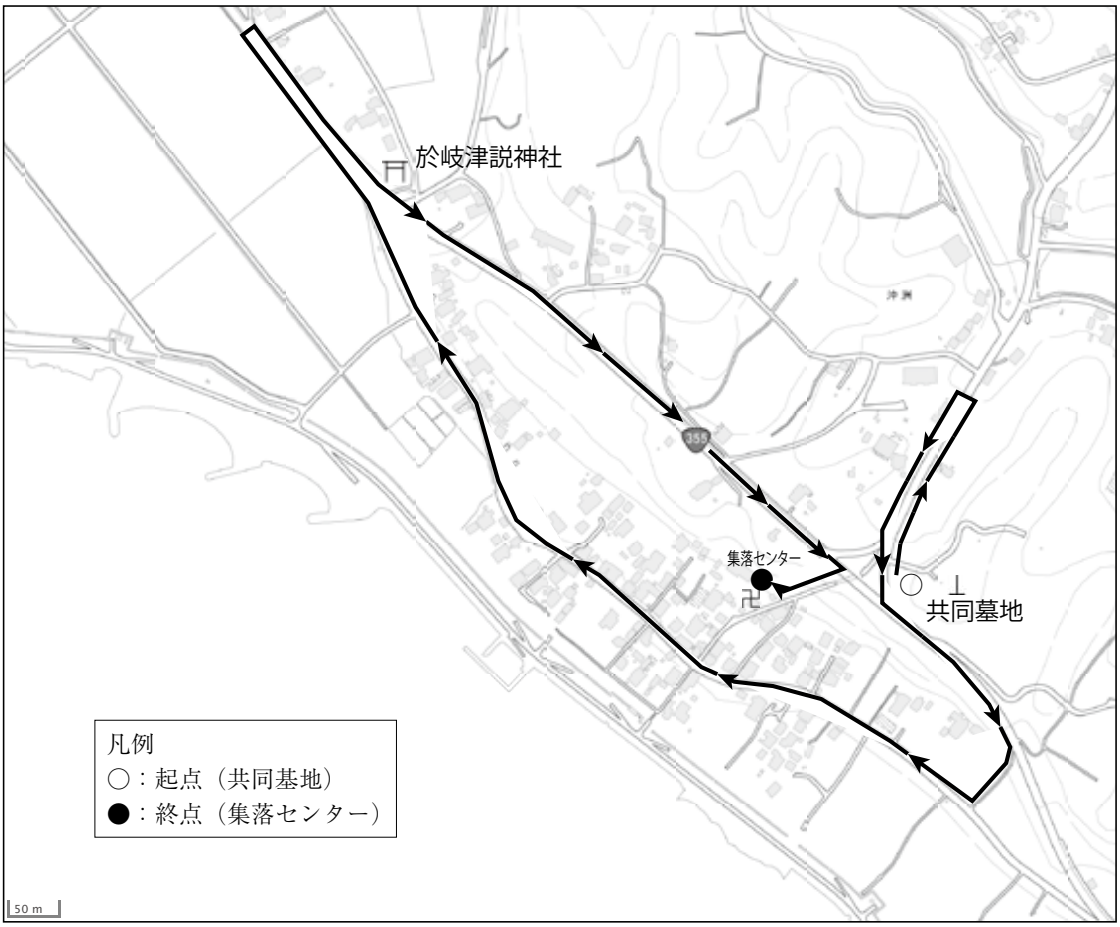
岡田　祐樹さん（昭和五十七年生まれ。前 沖洲子供会育成会会長）

〔参考文献〕
『茨城県の地名』（日本歴史地名体系）一九八二年
『玉造町史』一九八五年

〔その他〕
行方市ウェブサイト
https://www.city.namegata.ibaraki.jp/page/page000435.html（最終閲覧日：二〇二一年三月三十日）

本報告は、情報提供者からの聞き取りと、令和二年八月十三日の現地調査をもとに執筆した。

（林　圭史）



一〇　高須（行方市玉造）の大蛇担ぎ

〔地区名〕

行方市玉造高須地区

〔地区の概況〕

高須地区は、小美玉市から行方市にかけての県中央部を流れる梶無川下流域の沖積低地に位置する。地区の西側から南側を霞ケ浦に面し、霞ケ浦大橋のたもとに集落が広がる。行政区画としての高須地区は、玉造甲に属し、一四三一世帯、三六四二人が居住している。

〔実施主体〕

小学一～六年生（男女）

世話役となる地区内の大人が、準備から行事までを支援する。特定の家や個人、宗教者（寺院）の関与はない。

〔実施日〕

① 準備　八月十三日　午前六時三十分から午前九時
② 迎え　八月十三日　午後五時から午後九時三十分
③ 送り　なし

〔綱の形状〕

頭部から尾までの全長は約三m、胴回りは六十cm、角の長さは根本まで含めると三十五cmである。令和二年（二〇二〇）の場合、綱の全長は例年より規模を小さくして製作された。参加する子供の減少により、もとから綱の大きさは縮小される傾向にあったが、この年は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、前年までは子供たちが一列になって担いでいたものを、一度に担ぐ人数を減らして、二グループが交代で担ぐ方法が取られた。

〔詳細〕

① 準備

行事当日の午前六時三十分頃から九時頃まで準備を行う。作業は基本的に大人だけで行っている。

・材料　午前六時三十分頃、地区の消防小屋（旧高須公民館）に、大蛇の作成に関わる大人たちが集まり出し、軽トラックに積んである材料を降ろす。事前に用意される材料は、大蛇の胴体の芯になる竹、笹、棕櫚皮、胴体に巻く稲藁、胴体を巻き上げる玉縄のほか、大蛇の頭部、木製の目玉と角、藁製の円座（サンダワラ）に竹を挟んだものである。このサンダワラは、大蛇の上顎と下顎になる。以上の材料のうち、目、角、舌、口は、行事が終わっても保管しておき、翌年も同じものを使用する。

消防小屋のコンクリート製の床に、藁を縦に細長く敷き広げ、藁の上に竹を置く。竹を心棒にして藁を周りに束ねてゆく。この時、束ねた藁が崩れないように数か所を藁で結び、固定していく。首から尾の部分へと少し細くなっていく完成形のイメージに合わせ、必要な部分には藁を加えて成形する（**写真1**）。

・胴体　次は、玉縄を使って首側から尾までを巻き上げる工程である。小屋の外にビールケースを二つ置き、その上に大蛇の胴体を乗せて頭側から玉縄を巻いていく。尾の部分には笹をあてがい、笹の上から縄を巻き締める。尾側の縄で巻いた部分からは、四十cmほど藁の穂先が飛び出すようにし、そこからさらに青笹が飛び出すように形を整える（**写真2**）。仕上げに胴体から飛び出ている藁の穂先を剪定し、ここまでで胴体がほぼ完成する。

・頭部　胴体の後は、頭部を整形する工程に移る。大蛇のたてがみとなる棕櫚の皮を置き、木製の角を二本突き刺して棕櫚皮を固定する。頭側の断面に木製の目玉を差し込む。この目玉には、かつては茄子を用いた。続いて、藁の円座の下顎と上顎、舌をそれぞれ差し込む。顎は、まず下顎を差し込んだ後、細長い木で作った舌、その上から太い舌、最後に上顎を差し込んで大蛇の頭部が完成する。

完成した大蛇は、軽トラックに載せて、巡行の起点となる共同墓地へ運んで置いておく（**写真３**）。

写真１　竹の芯に藁が巻かれた状態

写真２　尾（青笹）の成形

②　迎え

午後六時、大蛇担ぎの起点である共同墓地に子供たちが集合する。開始時刻は特に定められているわけではないが、現在の担い手たちが認識するところでは、「各家の墓参りが終わってからでなければ大蛇担ぎは出来ない」とされている。現在の世話役の方もその慣わしに従って開始時刻を決めているという。午後五時を過ぎる頃、共同墓地には集落内の人たちが先祖様を迎えに来る姿が見え始める。その後、大蛇担ぎに参加する子供たちが集まり始める。子供たちは、それぞれ肩当てを用意してくる。綱を運ぶ時の肩の痛みを軽減させるためである。世話役の保護者が、子供の身長差を考慮しながら、集まった子供たちを五～六人のグループに分ける。今年は二つのグループに編制され、交代で担いでまわることになった。

巡行は、基本的に子供たちが大蛇を担ぎ上げながら徒歩で行われるが、歩いて移動することが困難な数か所については、軽トラックに大蛇を乗せて移動することになる。後掲の順路図に従って行程を概説すると、午後六時三十分、共同墓地（順路図中の〇印）を出発し（**写真４**）、地区の東端（順路図中**１**）までトラックで移動、そこから地区南側（順路図中**２**）の家々を徒歩でまわる。続いて霞ケ浦湖岸の地区西側を徒歩で廻り、高須崎公園方向へ向かって巡行は続く。ここまでで訪問先は二十軒を超え、ようやく行程の半分が済んだことになる。

写真３　完成して共同墓地に置かれた状態

写真４　共同墓地を出発

高須崎公園の手前（順路図中**３**）からは、大蛇をトラックに積み込み、

二度目の車移動に変わる。地区の中央部にある四軒程をトラックで廻った後、再び徒歩での移動、さらに国道三五四号線の南側にある家まで仏様を届け終えたところで、三度目の車移動となる。ここから最後までは車での移動となり、地区の北部を流れる梶無川方面を目指す。以上が所定のルートである。

子供たちは、「やんさの盆さ、仏さまござった」との掛け声を上げながら各家をまわり（**写真５**）、家人の接待を受けると、また次の目的地に向かっていく。各家に到着した時には、家の縁側に大蛇の頭部を立てかけるのが通例となっている（**写真６**）。午後九時を回る頃、集落の北端にある三十六軒目の家（順路図中**４**）を訪問し終えると、梶無川のほとりまで担いで移動し（順路図中の●印）、そこで待っていた大人の手で川の中に大蛇が投げ込まれる。

以上で巡行の全行程が終了となり、行事の最後に、交流センターに集まった子供たちには、各家からいただいたお菓子が配られ、解散となる。

〔綱の取扱い〕

子供たちの肩の高さまで担ぎ上げて移動する。跨ぐことや地面に置くことが明確に禁じられているわけではないが、各家に到着した際に縁側に大蛇の頭部を立てかけるように置く以外は、大蛇は担ぎ上げられたままである。

〔各家の盆行事〕

午後五時頃になると、集落の人が戸別に墓参りに行く姿が見られる。これらは大蛇担ぎの行事が始まる前の時間帯である。一部の墓石には、胡瓜と茄子のお供え物が供えられている。

〔歴史的変遷〕

共同墓地を起点に、集落の東端、南、北へと移動する経路の理由については、今日の担い手たちの間ではっきりと認識されていない。令和二年で七十歳を迎える経験者の記憶の限りでは、少なくとも戦後から今日までの間、巡行のルートは変わっていないという。

綱に飾る提灯は、現在は世話役で用意するが、新盆の家が買うのが通例とされていたこともあった。

〔所見〕

行事の名称は「大蛇担ぎ」で、高須では「盆綱」の呼称は聞かれない。各家の巡行を終えた後に、川に流す（投げ入れる）のが高須の大蛇担ぎに見られる特徴である。

行事の継承に関わる課題として、担い手である子供が減少していることのほかに、大蛇の主要パーツの一つであるサンダワラの調達がある。現在、地区内の古老が石臼を台にしてサンダワラを製作しているが、この技能を持つ人が地区内には一人しかいなくなっている。

写真５　巡行中の子供たち

写真６　接待を受ける休憩中の子供たち

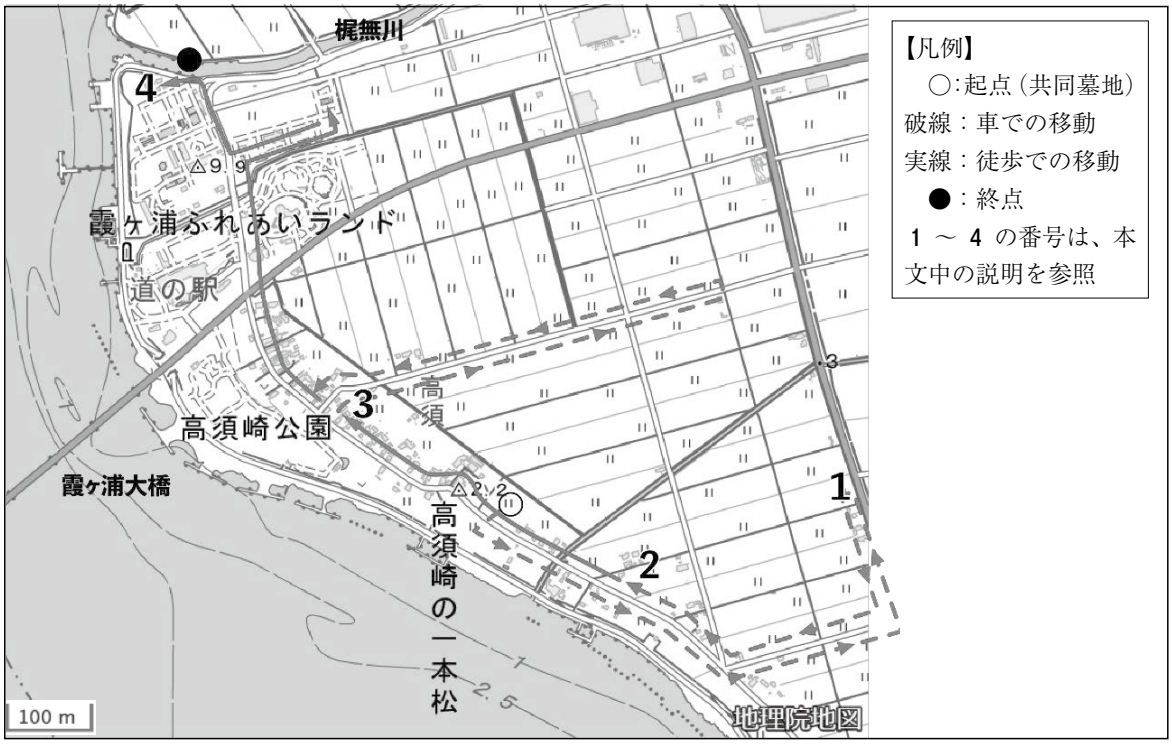
〔情報提供者〕
橋本　拓也さん（昭和六十一年生まれ）
栗山　義雄さん（昭和二十五年生まれ）

〔参考文献〕
『茨城県の地名』（日本歴史地名体系）一九八二年
『玉造町史』一九八五年

〔その他〕
行方市ウェブサイト
https://www.city.namegata.ibaraki.jp/page/page000435.html（最終閲覧日：二〇二一年三月三十日）

本報告は、林圭史、徳丸亞木の調査票を統合して執筆した。

（林　圭史、徳丸　亞木）



一一　冷水（ひやみず）（鉾田市）の盆綱

〔地区名〕

鉾田市冷水地区

〔地区の概況〕

冷水地区は、鉾田市北部の太平洋側に位置し、約五十戸で構成される地区である。平成二十七年（二〇一五）度の国勢調査によれば、総人口二二三人、七十六世帯から構成される［総務省統計局　二〇一五a、総務省統計局　二〇一五b］。地区は南からマエ・ナカ・ウシロの三組に分けられる。冷水ではサツマイモやサトイモなどの作物が生産されているが、現在農業を営む家は少なく、田畑を所有する家も兼業農家や委託農家が殆どである。海に近いという立地から、昭和中期まで地引き網などを用いた漁業を営む家も存在したが、現在は見られない。前述の国勢調査によれば、農業従事者八十六人、農林漁業就業者世帯は七十六世帯となっている［総務省統計局　二〇一五c］。

地区内の多くは、新鉾田の天台宗三光院の檀家である。地区の南には玉沢稲荷神社が鎮座しており、盆終わりに組ごとに行う境内掃除や、十一月に地区外に住む「禰宜さま」の主導で行われる祭りが、神社の行事として行われる。

『旭村の歴史　通史編』によれば、冷水はもともと隣接する勝下地区の一部であったが、明治初頭に現在の位置に集落が置かれたとされている。当初は十四軒程の家々で構成される地域であったが、昭和十年には二十軒、戦後には三十軒程に規模が拡大した。

〔実施主体〕

運び手　小学一年～六年生、中学一年～三年生（男女）
運び手となる子供たちの父親や冷水地区子供会に所属する男性

〔実施日〕

① 準備　八月十三日　午前七時～午前九時
② 迎え　八月十三日　午後六時三十分～午後八時
③ 送り　なし

〔綱の形状〕

令和二年のボンヅナは、長さ十四m、太さ十cm程で、例年と比べると細長いものである。これは、新型コロナウイルスによる影響を受け、運び手の子供同士の間隔を十分に確保するために、意図的に太さを削り、長さを伸ばした造形となっている。そのため、ボンヅナが地区内を巡行する際、沿道からは「細長くなった」などと、例年と異なるボンヅナの形状に言及する声が多く聞かれた。

冷水のボンヅナには、先頭に長さ八十cm程の木の枝で作られた取っ手がある。また、先頭から最後尾まで等間隔に、長さ一m程の藁縄製の取っ手が付けられている（**写真1**）。この他、先頭から二m程の箇所に、フジウツギと思われる花が付けられている。これらは、子供会会長を中心とした父親たちが、年長者からの指導を受けながら製作したものである。

写真1　冷水地区のボンヅナ

〔詳細〕

① 準備

午前七時頃、盆綱に参加する子供とその父親たちが、田園都市センター内に生えているタブノキから手頃な長さの枝を切り出し、センター内の木に藁縄を用いて括り付ける。この枝は、先頭を歩く子供の持ち手となる。枝を括り付けた木から十数m離れた位置に軽トラックが止められ、枝とトラックの間を二往復程するかたちで藁縄が張られた。この藁縄がボンゾナの軸となる。その後軸を包むように稲藁を括りつけ、ボンゾナの本体が形作られる。十四mの軸を全て包み終わると、細い藁縄で取っ手が作られる。取っ手は数十センチの間隔で本体に七対設置され、それぞれの取っ手は一mほどの長さがある。取っ手が完成すると、先頭から二m程の位置にボンバナと呼ばれるフジウツギ属の花が設置される。このボンバナが、先祖が乗る位置であるとされる。完成したボンゾナは十四m程の長さであった。

ボンゾナの製作は大人が行い、子供たちが手伝う場面はほとんど見られない。

写真２　子供たちによるボンゾナの巡行

完成したボンゾナは、例年、巡行が始まる午後五時まで新盆の墓前に置かれることになっており、ボンゾナが墓前に置かれた時点で一旦解散となる。令和二年には、新盆の墓が地区外に位置していたため、その墓まで軽トラックでボンゾナを運び、トグロを巻くような形で安置された。

② 迎え

午後五時に、ボンゾナを運ぶ子供と巡行をサポートする父親数名が、田園都市センターに集合する。例年は新盆の墓前からボンゾナが出発するが、この年は、軽トラックで地区外の墓から同センターまでボンゾナを運んで来て、そこからボンゾナの巡行が始まった。小学六年生二人がボンゾナの先頭に立ち、持ち手となるタブノキの枝を持つ。そして、先頭側から学年の低い順に並んでボンゾナを持つ（**写真２**）。中学生は最後尾を担当する。ボンゾナは、地区内で外回りを三周、内回りを二周する。外回りの掛け声は「ヤッサーヤッサーヤッサノボンズナエー、オージーサンモオーバーサンモミーンナ『ノー』ラッショー」である。これに対して内回りの掛け声は「ヤッサーヤッサーヤッサノボンズナエー、オージーサンモオーバーサンモミーンナ『オリ』ラッショー」となる。

令和二年の盆綱では、巡行の途中から雨が降り始めたため、外回りを二周、内回りを一周に省略された。ボンゾナが巡行している時、地区内の人々の多くは庭先やベランダ、辻に出向き、子供たちに声援を送り、子供たちのの声が小さい場合には軽く叱咤する。冷水の盆綱では、綱を地面に引きずってはならないとされ、もし引きずってしまった場合、巡行が終わるまで引きずり続ける必要がある。子供たち父親は、ボンゾナを引きずらないように注意するとともに、ボンゾナが道路に出た時の交通整理などを行う。

写真３　ボンゾナを海に流す子供会長

巡行が終わると、田園都市センターに集合する。巡行が終わった時点でボンゾナには先祖が乗っていないという認識となり、引きずってもよいという。役目を終えたボンゾナは海に流すため、小学四年生以上の男子（令和二年は小学四年生以上の女子も参加）とその父親がボンゾナを持って海に下りる。多くの子供たちにとってこの行為は一つの楽しみとなっているが、夜の海辺

が危険であることや、過去に浜辺付近で事件があったことなどから、海に下りることを快く思っていない大人たちが少なくないようである。

ボンヅナを海に流す行為は、全体の取りまとめ役の子供会会長が行う。会長は小学六年生の父親が務めるため、毎年入れ替わる。そのため「今年は○○さんが濡れる番で、来年は××さんが濡れる番だ」などと言い合いながら、海に下りて行くのが通例であるようだ。波打ち際では、ボンヅナが波に押し返されてしまう。会長も出来る限り濡れたくないため、浅い所でボンヅナを流しては、押し返されるという繰り返しであるという（**写真3**）。最終的には会長が腰の高さまで海水に浸かる所までボンヅナを運び、しっかり流れたかを見届けてから引き揚げる。

田園都市センターに戻ると、新盆宅から提供された菓子類を皆で分け合い、解散となる。

〔各家の盆行事〕

十三日のボンヅナ巡行中は、沿道や庭先に出てボンヅナを見送るが、それ以外の盆の習慣は家ごとに異なる。

送り盆は、各家で八月十五日の午後九時から午後十一時までの間に行われることが多い。特徴的なのは、藁を庭先で燃やすことである。藁は市販のものを使用する家が多いが、田を所有する家では自作の稲藁を用いる場合もある。藁を燃やす際の禁忌や注意点などは特になく、ライターなどで着火する。藁が燃え終わるまで家族で見守り、藁が燃え尽きたら水をかける。焼却後は家ごとに若干の違いがあるが、庭先に放置する場合と藁を墓前まで持参して供養する場合がある。

〔綱の取り扱い〕

移動する際には取っ手を持ち、腰の高さにボンヅナを保って運ぶ。また、ボンヅナを引き摺ってはならないこととされているが、万が一引き摺ってしまった場合は、それ以降の行程は、常にボンヅナを引き摺って移動する。

〔歴史的変遷〕

冷水における盆綱は、昭和五十年（一九七五）頃まで子供のみで行われる行事であった。ボンヅナの材料に関しては、地域の大人たちが収集を手伝ったが、ボンヅナの製作から巡行、海への移動などの行程は、小学一年生から六年生の男子によって行われた。当時のボンヅナ製作は、共同墓地の馬頭観音像近くの広場で古老による指導のもと行われた。大人が参加するようになったのは、昭和六十年代である。その時期は現在より子供が少なく、ボンヅナを運搬するために必要な児童が地区内におらず、人手の足りない分を父親たちが務めたことが始まりである。

現在では、田園都市センターの木と軽トラックに藁縄を渡してボンヅナの軸を作るが、かつて墓にある広場でボンヅナを製作した頃は適当な間隔にある木に藁縄を渡したという。製作工程は現在と殆ど変わらないが、当時のボンヅナはより太く短い作りであった。特に令和二年のボンヅナは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、子供同士の距離を保つため、例年より細長い構造となっている。

昭和五十年当時の盆綱の巡行では、盆綱を見守る地域住民も現在のように声援を掛けるだけでなく、水を用意してボンヅナを運ぶ子供たちに振りかけるという所作を行っていたという。そのため、雨が降り出した際に行程を省略することもなかった。巡行後、海へボンヅナを流す行為も子供たちが行っていたという。

〔所見〕

令和二年度の新型コロナウイルスの影響により、多くの地域で盆綱の実施が見送られたが、冷水地区では新盆の家からの強い希望があり、開催に踏み切った。これは、冷水地区において盆綱という行事が、地域住民にとっ

て重要な意味をもつことを、端的に表していると考えられる。感染防止を念頭に製作されたボンヅナは、子供同士の距離を確保するために工夫がなされ、十四mという例年より長いものとなった。ボンヅナ巡行の際も、子供たちはマスクを着用するなど、コロナ禍の民俗的事象の一形態を見ることができたといえる。

ボンヅナ巡行の際に、その順路を指導するのは子供会の役員たちであり、先導役は自転車で移動し、順路の下見を行う者と車道における交通整備を行う者がいる。また子供たちの掛け声が小さい時には、大人が主導して掛け声をかけ、子供たちに促すような様子も多く見られた。

ボンヅナの先頭は、子供会会長の子供（小学六年生）が担当し、名目上は盆綱のリーダーとして巡行に臨むが、リーダーとして権限を行使することはない。このように冷水の盆綱は、子供会役員である父親たちの「主催する者」としての役割、子供たちの「運び手」としての役割というように、分担がある程度明確になっているように思われる。また、子供たちにとっては、中学生と小学生が一堂に会し、地域の行事を共に支え合う特別な機会として親しまれている面もあるのではないだろうか。

〔情報提供者〕

米川　正男さん

〔参考文献〕

旭村史編さん委員会編『旭村の歴史通史編』旭村教育委員会、一九九八年

〔総務省統計局　二〇一五a〕「男女別人口及び世帯数―町丁・字等」政府統計の総合窓口　https://bit.ly/3uCMHsW

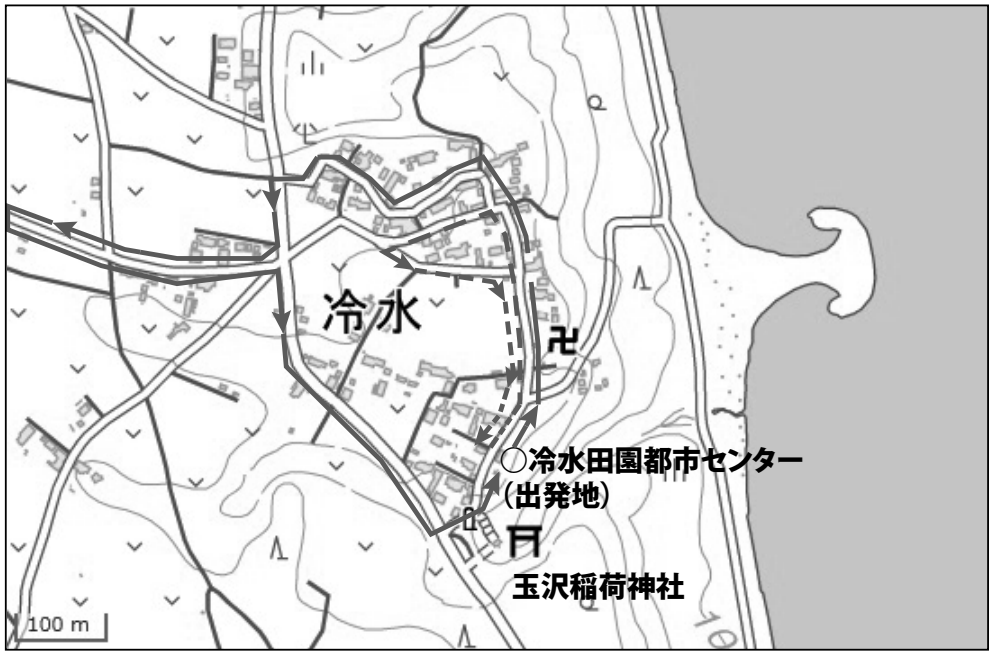
（最終閲覧日：二〇二一年二月二十八日）

〔総務省統計局　二〇一五b〕「産業（大分類）、男女別15歳以上就業者数―町丁・字等」政府統計の総合窓口　https://bit.ly/3bKZli7

（最終閲覧日：二〇二一年二月二十八日）

〔総務省統計局　二〇一五c〕「世帯の経済構成(12区分)別一般世帯数―町丁・字等」　https://bit.ly/3uxDeDf

（最終閲覧日：二〇二一年二月二十八日）



（横田　慶一）

一二　徳宿新田（鉾田市）の盆綱

〔地区名〕

鉾田市徳宿新田

〔地区の概況〕

①　徳宿地区の歴史

近世村であった徳宿村は、明治二十二年（一八八九）の町村施行により、新たな徳宿村として発足した。昭和三十年（一九五五）に町村合併したことで、新・鉾田町が発足して徳宿村は廃止された。

②　人口の推移

徳宿村の人口の推移は、次のとおりである。

明治二十四年（一八九一）　一四六九人
明治四十二年（一九〇九）　三四三六人
大正九年（一九二〇）　三五六二人
昭和十年（一九三五）　三八一三人
昭和二十五年（一九五〇）　五五四二人

なお、平成二十七年の国勢調査によると徳宿地区の人口は、男性一一九七人、女性一〇五四人、合計二二五一人である。

③　世帯数の推移

大正九年（一九二〇）　七一六戸
昭和十年（一九三五）　六九〇戸
昭和二十五年（一九五〇）　九五八戸

平成二十七年の国勢調査によると徳宿地区の世帯数は、八〇三戸である。

④　寺院

徳宿地内の安房には、大同年間に開基した曹洞宗安祥寺がある。文禄年間には佐竹氏の庇護を受け五十石の禄を授かった。現在でも棟には佐竹氏の家紋がつけられている。盆綱行事に携わる人たちの家も、ほとんどがこの寺の檀家である。

〔実施主体〕

ボンヅナ製作時
小学生（一年一人、五年一人、六年一人）計三人
中学生（二年一人）計一人
保護者　六人

ボンヅナ曳きまわし時
小学生　十人
中学生　一人
保護者　八人

特定の家や個人、宗教者（寺院）などの関与はない。
子供会に所属する子供と、その親によって実施している。

〔実施日〕

①　準備　八月十三日　午後一時から午後三時まで
②　迎え　八月十三日　午後四時から午後八時三十分まで
③　送り　なし

〔詳細〕

①　準備

鹿島臨海鉄道の徳宿駅から南へ二百ｍほど離れたところにある共同墓地近くの空き地で、ボンヅナを製作する。ボンヅナを作る時には子供たちも手伝うが、中心となるのはその保護者である父親たちである。

まずは、近所の竹林から刈り取ってきた七ｍ余りの青竹をこの空き地に

持ち込み、根元側から鉈で徐々に枝払いをする。穂先の青葉が茂っている枝を残すように、鉈を穂先側から根元側へ向けて払うよう刈り取る。ところどころで子供たちにも鉈を持たせて、枝払いを経験させるようにしている。途中で竹の根元から五m余りのところを鋸によって切断する。それからも大人と子供の共同作業で、穂先側の枝は徐々に刈り取られていく。根元側の竹は切り口に鉈をあてて、ハンマーで叩きながら竹を縦に割っていく。この時に注意しないと割れ方が偏ってしまうので、最も気を遣う作業だという。途中まで割り進むと竹の両側を持って一挙に手の力で割ってしまう。二本に割った竹の根元側の節の二か所をハンマーで叩いて外す。この節を除く作業はあえて子供たちに経験させていた。この箇所はボンヅナを引く時に最先端になる箇所であり、大きく上に曲げなければならない。この後で竹の穂先部分と根元部分を並べて、ほぼ同じ長さであることを確認する。二本に割られた竹の根元部分から二つ目の節のあたりに、鋸でV字型の切り込みを入れる。切り込みを入れる時には、出来るだけ深くするが、竹自体が切れてしまわない程度にするのがコツである。二本に割った竹に、それぞれ切り込みを入れると、竹の表皮側からカセット式のバーナーで炎をあてて徐々に曲げていく（**写真1**）。炎をあてる人と竹を支える人の二人一組で行う。数分間かけて竹の表皮の緑色が黄色に変化する頃には曲がるようになる。おおよそ六十度くらいの角度に曲げて、曲げた箇所の温度が下がり、形が安定するまで手で保持する。落ち着いたところで、曲げた箇所の両側一か所ずつに電動ドリルで穴を開けて針金を通し、道具（ハッカー）を用いて結束する。この作業によって曲げが固定される。二本に割られた竹の根元部分がこれで上側に曲がったが、これらを並べてその曲がった箇所の先の内側を鋸で斜めに切り取り合わせる。その後、二本の竹は並べられてそのやや外側に電動ドリルで穴を開けて、そこへ荒縄を通していく。穴の間隔は四十cmくらいである。これらの作業と並行して、空き地の別の場所では、竹の穂先部分に荒縄がぐるぐると巻き付けられる。この穂先部分が本体となり二本に割られた竹の上に載せて、先ほど竹に開けられた穴を通した荒縄によって縛られていく。これらの作業によって、割られた竹が地面を引きずる時に橇の役目を果たし、本体を縛っている縄は地面に擦られずに済む仕組みになる。穂先部分には約六十cmだけ葉が残され、そこから下側には、藁を巻き込んでその上に藁縄をぐるぐる巻きにする（**写真2**）。ぐるぐる巻きの先端部分（葉の元の部分）には二本の長い縄が括られる。土台部分の割竹の上に載った穂先部分の曲がりはじめのところへ、別の四十cm程の割り竹を横方向へ針金を使って固定する。この割り竹の両端には穴が穿かれており、ここに先端部分からの縄を通して、土台になる割り竹の穴に固定する。横に置かれた割り竹から土台となる割り竹の穴（前から三番目の穴）までは三十cm程離れている。二本の綱によって括ることと、横に置かれた割り竹を介することにより、穂先が天を向き左右に傾かないようにすることがコツである。本体には左右五か所に引き綱が括られている。引き綱を括る場所は、本体と土台を結びつけている縄

写真１　竹の根元側を曲げる

写真２　ボンヅナ本体へ藁縄で藁を巻き付ける

のところである。

ボンヅナが出来上ると、早速空き地の隣にある共同墓地へ引き綱を引いて持っていく。ボンヅナ本体は持ち上げずに、地面を擦るようにして引き綱を引く。そうして、夕方になるまでの間、墓地の通路脇に一時仮置きしておく（**写真3**）。

② 迎え

午後四時になると、再び子供とその保護者が共同墓地へ参集する。共同墓地のほぼ中央の通路上で、子供たちが引き綱を引きながら「ホトケサマ、ノランショ」という掛け声をかけつつ、右回りにその場で三回回る。現在は墓地の通路が狭いので、その年のボンヅナの大きさに合わせて、その場で回ったこととして実際には回さないこともあるという。この行為によって仏さまがボンヅナに跨いで乗るというイメージを持つという。墓地を出ると、町内の各家を巡る。移動する時には、ボンヅナの土台になっている竹の根元部分（割って上に反らせてある方）が前側になる。葉が残っている穂先部分は後ろ側になる。移動中は、特に掛け声などはかけない。家の敷地に入る時には、「ホトケサマ、イラッシャッタ」という掛け声をかけながら入って行く。庭の中央部分に到着すると、保護者に「回って、回って」と促され、子供たちは、「ホトケサマ、オリラッショ」という大きな掛け声をかけながら、ボンヅナをその場で右回りに三回回す（**写真4**）。そうすると家の中からその家の主人が出て来て、慰労の言葉とともにお礼のお金を子供に渡す。子供の中には、この謝礼のお金を受け取る係の者がいて、肩からポシェットをかけて、その中にお金をしまう。謝礼のお金は、千円札が多いようである。家人も保護者たちへ声はかけるが、あくまでもこの行事の主役は子供であるように振る舞う。そして、保護者たちに「次に行きまーす」と声をかけられて、子供たちは庭先から道路へと戻り、次の家を目指す。保護者たちは、手持ちの地図に記された家を確認しながら、次の家へ向かう。経路には狭いところもあるので、長いボンヅナをうまく操作しながら引くことは難儀なことである。その都度、保護者たちが声をかけて、フェンスや道路ブロックにぶつからないように上手に導いている。現在では、用心のために保護者の父親が運転する軽トラック一台が後ろから付いて来て、万一に備えている。実際にボンヅナを引きまわす時に、そのほとんどの重量を引き受けるのは、先頭の引き綱を引く二人である。ここは年長の子供が担うようになる。そのほかの綱は持っているだけで、実際の牽引力にはなっていない。一番後ろ側につき、穂先を持つ子供は、舵取り役のような役割をもつ。この調査時には、この穂先を持つ子供が謝礼を受け取る会計の係を担当していた。家によってはペットボトルの冷たい飲み物を用意しておいてくれるところもある。なお、行事中にはボンヅナは跨がないようにしているという。地区内では、三十五軒をまわる。ほぼ半分程まわったところで、再びボンヅナを製作した共同墓地近くの空き地に到着する。ここで一旦休憩となり、バーベキューをすることになってい

写真3　共同墓地に仮置きされるボンヅナ

写真4　家人が見守る庭先でボンヅナを回す

る。子供たちにとっては、この休憩がなによりの楽しみだという。

先祖の霊をすべて送り届けた後のボンゾナは、以前は鉾田川に流していたという。しかし、現在では環境問題のこともあり、区長が市の処理場へ持って行って処理している。

③　送り

当地区では、盆綱による「送り」の行事はない。

〔綱の形状〕

ボンゾナ製作の基本的な素材は、七m余りの一本の竹である。これをほぼ真ん中で切り離し、根元側を縦に二本に割り、丸い表皮側を縦に並べて土台とし、その上に穂先側に藁縄を巻いて上部構造とする（**写真5**）。土台部分は、地面を擦りながら移動できるようになっている。ボンゾナの本体である穂先部分は、先端の六十cmにだけ葉を残しておき、後の部分は藁縄をぐるぐる巻きにしておく。土台に載せた穂先部分は穂先を上に反らせるように固定する。この時に四十cm程の割り竹を横にして、穂先部分に繋ぎとめた縄をその左右の端の穴に通して本体の穴に繋いで固定する。土台には左右の各五か所に穴を開けて縄を通して穂先（本体）部分を固定する。あわせてこの五か所には引き綱がつけられる。ボンゾナを引く時に前側になるのは、竹の根元側である。後ろ側は竹の葉が残った穂先になる。

ボンゾナの全長は、五・二六mであった。しかし、本調査時も、現場では試行錯誤しながらボンゾナを製作しているところから、その形態や大きさはその都度違っていることが推察できた。また、材料については、竹は地区内の竹林から採取したものであり、藁縄は近隣のホームセンターから購入したものだという。道具も電動のドリルやカセット式バーナーを用いている。反り返させた穂先を維持するために横に置いた四十cm程の割り竹を本体に結び付けたり、先頭部分の反りを維持したりするために、針金も用いている。これを結束するための用具であるハッカーも使われており、堅固な構造になっている。時代に合わせて素材や用具を活用している。

このように、その年ごとにボンゾナの形状は変わっている。区長の高橋久男氏によると、八十年程前にはボンゾナは大縄であったという。一度途絶えたが、その後再び実施することになった。復活した正確な年代は不明だが、子供会育成会の塙健氏からの聞き書きによると、三十年くらい前のことではないかと推察される。この復活した頃には、たたみ一畳にもなるような大きなボンゾナであったという。これ程までに大きくなると持ち上げることは勿論、引き回すことも大変な作業になるであろうから、相応の子供の人数がいたのであろう。

〔綱の取扱い〕

・移動の仕方は、地面に置いて引っ張る。
・取り扱う上で注意することとしては、ボンゾナは跨がないようにする。

写真5　藁を巻いた竹の穂先部分（本体）

写真6　出来上がったボンゾナを共同墓地へ運び入れる

〔各家の盆行事〕

迎え火、送り火をする。先祖はこのボンゾナで家に帰って来ると思っている。送りの盆綱行事はないが、それぞれの祖先は行事がなくても、そのままあの世へ還るものだと思っている。

〔歴史的変遷〕

徳宿新田集落における盆綱行事の起源は定かではないが、約八十年前には実施していたという。途中でしばらくの間、途絶えていた時期もあったが、現在の親の世代が子供の頃に復活した。復活した当時のボンゾナは、たたみ一畳程に縄と竹を編んで用いていたという。その後、現在のような形になった（それぞれの具体的な時期は不詳である）。運営主体は子供会であるが、ボンゾナ作りは子供会に属する子の保護者（ほとんどは父親）が担う。彼ら自身もまた子供の頃に盆綱行事を担った経験がある。この他に、区も廃棄物の処理などについて協力している。

写真７　かけ声を唱えながらボンゾナを回す

写真８　家人から謝礼を受け取る子供

行事の内容は、八月十三日の早朝（現在は昼過ぎ）に藁で編んだ大縄を共同墓地に巻いて置き、夕方に小学生が集まって、先祖の霊を乗せるために「ホトケサマ、ノリラッショ」と唱えながら、右回りに三回回った後で、先祖の霊を乗せたボンゾナを子供たちが引きながら、集落内の各家を練り歩く。各家の庭先では、先祖の霊を降ろすために「ホトケサマ、マイラッショ（オリラッショ）」と唱えながら右回りに三回回る。先祖の霊を降ろしてもらった家からは、子供たちにお菓子や金品をいただくことができる。

先祖の霊をすべて降ろし終わったボンゾナは、鉾田川へ流していたが、現在では区長が処理をしてくれることになっている。

〔所見〕

当地区におけるボンゾナ行事は、子供たち主体の行事とはいえ、子供たちの親世代が主導的な立場になって実施されている。自分たちが子供の頃にしていた伝統行事を、自分の子供たちにも体験させてあげたいという意識によって継承されている。

ボンゾナが家に入る時にかける「ホトケサマ、イラッシャッタ」という掛け声は、その家の人へボンゾナが来たことを告げる役割もある。

子供たちにとっては、子供会の行事として意識されているが、毎年やるべき行事としてその役割を果たしている。この行事で各家からいただく謝礼は、子供会のものとしており、子供たちが自由に使える資金となっている。

小学校の低学年の子供にとっては、たとえ夕方から夜にかけてとはいえ、猛暑の中を数㎞にわたって歩くことは大変な行事である。経路が長いので、途中でボンゾナを製作した共同墓地の近くにある空き地で、休憩を兼ねてバーベキューをしてから後半の経路へ向かうことになっている。午後四時から始まり、途中休憩をはさむにしても、終わるのは午後八時過ぎである。

行事の前半で休憩場所へ戻る時に丘の上に登る坂道がある。ここでは疲

れた子供たちに代わり、大人たちがボンヅナを引いていた。

駒木根地区における盆綱行事とは、巡り歩く地区が一部重複していることもあり、途中で出会う場合がある。出会った時に特別なしきたりはない。

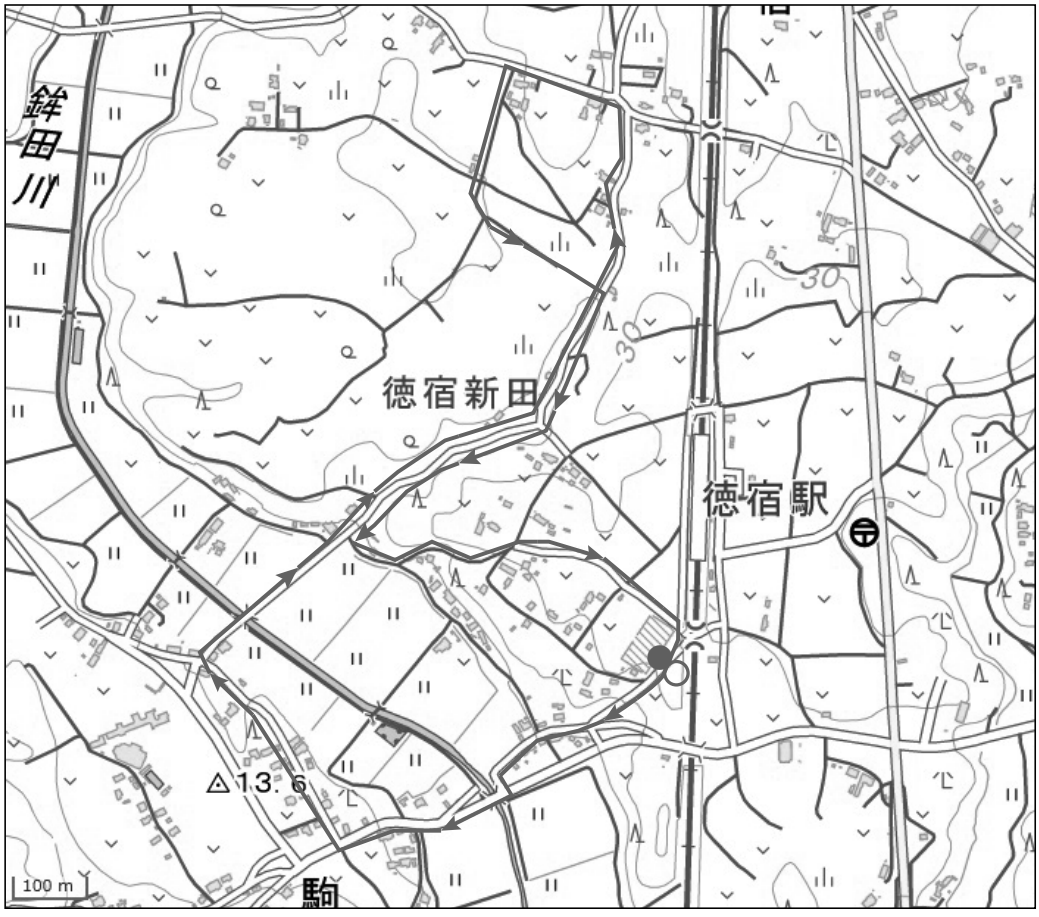
本調査は、令和元年八月十三日に実施した現地調査によるものである。調査にあたり、茨城キリスト教大学文学部文化交流学科学生の住谷茉菜美さん、藤原雅史さん、益子南さんの三名に多大なるご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

〔情報提供者〕

塙　健さん　子供会育成会
髙橋　久雄さん　徳宿新田区長

〔参考文献〕

鉾田町史編さん委員会『鉾田町史 通史編 下巻』、鉾田町、二〇〇一年
角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典 八 茨城県』、角川書店、一九八三年



（清水　博之）

一三　駒木根（鉾田市）の盆綱

〔地区名〕

鉾田市駒木根

〔地区の概況〕

駒木根は、北浦へと流れ込む七瀬川（鉾田川）右岸の台地上の農村集落である。村の東側を北から南に七瀬川が流れる形になる。

『新編常陸国誌』によれば、古くは駒木根新田と称したというが、江戸時代中期には駒木根村と呼ばれた。涸沼と北浦の中間にあたるため、江戸時代は河川交通の拠点として重視され、河岸問屋などもあったようである。明治二十二年（一八八九）、駒木根を含む六か村が合併して徳宿村となり、その後昭和三十年（一九五五）からは鉾田町、平成十七年（二〇〇五）には鉾田市の大字となっている。

駒木根の鎮守社は三渡神社（駒木根神社）で、集落の全戸が氏子となっている。また檀那寺は決まっているわけではないが、鉾田の三光院の檀家が多い。令和二年（二〇二〇）現在の戸数は三十六～三十八戸程である。

〔実施主体〕

平成十年代頃までは、小学三、四年生から受験生を除く中学生までの男子が、年長者をリーダーに、全ての準備と行事全般を行った。準備の際に飲む飲み物なども、中学生が皆おごってくれたという。大人はたまに見に来て、多少手伝う程度であった。子供だけで作ったボンヅナは、引っ張っている途中で崩れてしまうこともあったが、かまわずにそれを引いて歩いたものであった。

その後、子供の数が減ってきたこともあり、平成十年頃から女子も参加するようになった。夕方の集合時間や持ち手の班割・配置、こづかいの分配などを決め、采配する役も男女関係なく中学生の最年長者が行うようになっている。

また、同じ頃より子供会の父親たちが組織的に手伝うようになった。このため、大人の都合に合わせて、準備も八月十三日の午前中にまとめて行うようになっている。子供会の会長は一年交代であるが、前年に副会長も補佐を行うことになっているので、この二年間で行事内容の引継ぎがなされる形である。但し、大人は工具の使い方などを教える程度にとどめ、作業は子供たちが主体的に取り組むよう配慮がされている。

なお、新盆、すなわち前年の盆以降に葬式を出した家の者は、子供も大人も参加しないこととなっている。

令和二年に盆綱を行った子供たちは小学生八人、中学生九人の合計十七人であった。

〔実施日〕

① 準備

平成十年頃以前　八月十三日以前に二、三日かけて子供たちがボンヅナを作った。

平成十年頃以降　八月十三日の午前中に子供と大人でボンヅナを作る。

② 迎え

八月十三日の夕方四時半頃から夜の八時頃まで

〔綱の形状〕

駒木根のボンヅナの造作上の特徴は、綱として綯うのではなく、骨組みとなる竹に藁束をずらしながら縄で縛りつけて作ることにある。更に、この本体を橇の役割を果たす一対の割竹に乗せ、地面との摩擦を減らして引きまわしやすくしている。作り手の意識としては「龍」であるともいうが、

名称はあくまで「ボンヅナ」で、頭にあたるものは作らない。

ただし、こだわりとして、尻尾にあたる最後尾部分が最も重要とされ、笹竹の先端を残してふさふさとしたところまできっちりと縄を巻き、ピンと尾を立てたように作る。この尾が長いほど格好良いとされるが、長すぎると折れやすくなってしまう。ここを持つのは中学生の「偉い人」で、尾が途中で折れないように注意し、また後ろから全体を見る舵取り役となる。またボンヅナの先頭もやはり中学生が持ち、向きを先導する。形状は昔からさほど変わらず、ただ昭和期には、櫂となる割竹はまっすぐなままであったが、いつしか道を引きやすいように先を折り曲げるようになったという。

〔詳細〕

① 準備

令和二年は、八月十三日の午前八時半頃から十時半頃まで、子供たちと保護者らが準備作業を行った。本来は共同墓地で行うもので、そうするとご先祖様も作るところを楽しみながら見ていてくれるのだ、といわれている。しかし、墓地は木陰がなく暑さが厳しいため、令和二年は熱中症対策として駒木根公民館の前の木陰で作業した。竹切りや枝打ち、ドリルでの穴あけなど、工具を用いた加工の部分は、大人が手本を示すが、作業そのものは子供たちが行う。

駒木根のボンヅナ

通常は太さ二十㎝、長さ約八m程のボンヅナを作るが、令和二年は熱中症対策、そして新型コロナウイルスの感染防止のため、ボンヅナのサイズを例年の三分の二程度の約六m六十㎝程にして製作時間を短縮した。また引き歩く人数も半分ずつ交代にして、間隔を空けて持つよう配慮がなされた。

製作工程

(1) 竹を伐り出す…材料として、墓地の向かい側の竹薮から真竹の太いものと細いものを一本ずつ伐り出す。細い竹は先端を一五〇㎝程残して、鉈で枝葉を払っておく。太い竹は先を切り落とし、枝葉もすべて払う。

(2) 竹を割る…太い方の竹は元から二つ割りにしておく。

(3) 藁束を巻く…枝葉のついた細い竹を寝かせた隣に、根元の方から端を合わせて藁束を一抱えずつ一列に置いていく（**写真1**）。この時、前に置いた束の先方半分程に次の束の根元を重ねて置くようにする。竹の

写真1　藁束を並べる

写真2　竹の芯に藁束を巻く

枝葉の残る部分より二十cm手前くらいまでの長さに並べる。藁束を並べ終わったらその上に、竹を置き、藁で包み込みながら巻いて、束ごとに藁縄で縛っていく（**写真2**）。

（4）尾の部分に藁縄を巻き付ける…藁束の最先端部七十cm程のところから、藁縄をぐるぐるときつく巻き上げていく（**写真3**）。細くなってきたら二重にして強化し、枝葉の部分まできたら、今度はバサバサしている枝葉を軽くまとめるように螺旋状に先端まで巻いていき、結んでおく。

（5）割竹を折り曲げる…割竹は外側が下に来るように並べて置き、所々にドリルで穴を空けて針金を通し、二本を固定する。また、あとで本体を縛るための針金も先に通しておく。割竹の根元から五十cmのあたりをガスバーナー（以前は焚火）であぶり、少し鋭角になる程度に折り曲げる（**写真4**）。

（6）割竹の上に本体を乗せる…割竹を並べた上に（4）で出来上がった本体を乗せる。割竹を折り曲げた方に本体の元の方を乗せるようにする。（5）で割竹の所々に通しておいた針金で、本体を巻いて縛り固定する。

写真３　藁縄を巻き付ける

写真４　割竹を折り曲げる

割竹がボンヅナ本体の櫂のようになる。

（7）持ち手をつける…一八〇cm程の長さに切った縄を引き手の人数分用意し、本体を縛った縄の所々に結んで、一人ずつの持ち手にする。

（8）尾をピンと立てる…竹の枝葉の先まで巻いておいた縄を引いて、格好良く湾曲させ、縄の端を本体に結んで固定したら完成である（**写真5**）。盆綱を引き歩く時には竹の元の方が先頭となり、ピンと張った竹の先端の方が龍の尻尾のようになる。

ボンヅナを作り終えたら、一度解散し、夕方、また集まる。

②　迎え

午後四時半　墓地でボンヅナに仏さまを乗せる…共同墓地に子供たちが集合し全ての墓をまわって土盛りの土や墓石についた苔を一つまみずつ集めて（**写真6・7**）、ボンヅナの隙間に詰める（**写真8**）。この土や苔にそれぞれ仏さまの魂が入っているとみなされる。個人墓も含めて全ての墓の土や苔を入れると、仏さまが全員乗ったことになるので、乗せ忘れがないよ

写真５　割竹に本体を乗せ、尾を立てる

写真６　墓の土を一つまみずつ集める

うに気をつけなければいけないという。

また、以前は共同墓地に入っていない墓もあったため、十三日の夕方に、それぞれの墓に土や苔を取りに行った。特に一つだけ、山の頂上にぽつんと離れた墓があり、小さい子が二人組でその墓の苔を取りに行かされた。盆綱に参加する度胸試しのような意味もあったという。

かつて昭和三十年代頃までは、墓地を出発する時に「仏さま、のーらっしょ（乗らっしょ）」と声をかけてから出発していたというが、現在は行われていない。

午後五時　各家をまわり「仏さま」を送り届ける：墓地を出発して（**写真9**）「仏さま、めーらした（参らした）」と言いながら、集落内の家を一軒ずつ順にまわる（**写真10**～**12**）。盆綱で「各家に仏さまを届ける」のだという。昔は歩く間ずっと声を掛け続けていたというが、平成の頃からは、訪ねる家に近づいたら、少し手前から声をかけるようにしている。まわる家は集落内の仏さまのある（仏壇のある）家だけで、新宅（分家）など、まだ仏さま（死者）を出していない家はまわらない。また、近年になって駒木根

写真７　墓石の苔を集める

写真８　土や苔をボンヅナに入れる

写真９　墓地を出発する

写真11　主屋の前で仏さまを下ろす

写真10　掛け声をかけながら屋敷に入る

写真12　各家をまわる

集落に移入した家の場合、元いた地区と付き合いを継続していることもあるため、それらの家はまわらない。逆に距離が少し離れていても、付き合いが続いている家はまわっている。

例年ボンヅナがまわってくる家では、あらかじめこづかいを用意し、子供たちに渡す。金額は、令和二年の時点で一軒あたり大体千円～三千円くらいで、新盆の家（**写真13**）では他より金額が多い。

午後七時半頃　駒木根公民館に到着…現在は駒木根公民館に戻って盆綱行事は終了となる（**写真14**）。特にかけ声などはない。

ただし、昭和の頃までは終着点は七瀬川に架かる駒木根橋で、橋の上から川にボンヅナを投げて終了となった。橋から落とす際には「仏さま、おりらっしょ（降りらっしょ）」と掛け声をかけていた。そしてそのまま暗い中、橋の上でお金を数えて分配し、ここで解散したという。

午後七時四十分頃　こづかいの分配…行事終了後、子供たちは公民館でこづかいを山分けする（**写真15**）。厳密な分け方は決めておらず、年ごとに年長の年代の子供が決めてよいことになっている。

写真13　灯籠の立つ新盆の家

写真14　駒木根公民館に戻る

午後八時頃　解散

〔綱の取扱い〕

昭和の頃までは、全戸まわり終わると、駒木根橋のところに来て「仏さまおりらっしょ」と声をかけ、ボンヅナを橋上から落として七瀬川に流した。

流したボンヅナは二、三日はそのまま引っかかって漂っていたので、子供たちは川に入って盆綱に乗って遊んだものだという。現在は、川には流さず、公民館に戻し、翌日の午前中などに大人たちで解体して燃やしたりゴミに出したりして処分している。

〔各家の盆行事〕

八月十三日…各家で、仏壇の前や床の間の前に盆棚を作る。季節の果物や野菜を供え、提灯を飾る。家によっては、墓地の近くや屋敷地の入口などで藁を燃やして迎え火を焚く家もある（**写真16**）。昔は、盆棚を飾った「奥

写真15　中学生の年長者がこづかいを分配する

写真16　各家の迎え火の跡

の間」の入口の前に、「仏さまが入る時に足を洗う」ための「足洗い水」を桶に汲んでおいたものであったという。

またこの日の夕方にはうどんを供える家も多かった。夕飯にはつゆにつけて食べるツケうどんを食べた。かつて小麦を作っていた農家は自分の家でうどんを打ったという。

八月十四日…今は特に決まった食べ物などはないが、昔はこの日の朝に餅を搗いて食べた。醤油仕立てで、油揚と餅だけのような簡単な雑煮やあんこ餅などを朝食とした。仏さまには餅にあんこなどを添えて供えた。昼以降は「盆参り」などで親戚や村の人たちが客として来るため、昼食・夕食は決まったものは無く、あり合わせのものであった。

八月十五日…この日を盆の終わりとして送り火を焚く家もある。

八月十六日…十六日の午前中に盆棚を片付ける。片付けるのがあまり早いと、仏さまを追い出すようだといって、午前中の遅めの時間に片付ける。家によってはナスに棒をさした「馬」を作って飾り、これで仏さまを送っていく、という家もある。この時に送り火を行う家もある。

新盆参り

新盆の家では、盆棚もいつもより立派なものを作る（**写真17**）。また屋敷地内の主屋の前に高灯籠を建てる。以前は手作りであったが、近年は葬祭業者に頼むことが多い。

十三日の夕方から十四日は、「新盆参り」として親戚や親しい家の人が盆棚にお参りに来る。通常はそのまま奥の間に上がって焼香をするが、令和二年は新型コロナウイルス対策で、縁側から家の中に入らずに拝むなどの対策が取られた。

写真17　新盆の盆棚

〔歴史的変遷〕

江戸時代の終わり頃から行われているともいうが、さだかではない。

〔徳宿新田の盆綱との関係〕

駒木根に隣接する徳宿新田地区、通称「新田」もまた盆綱を行っている地域である。同じ小学校に通う両地区の子供たちにとって、同じ日に行う盆綱行事については、互いに何となく対抗意識があったという。かつては、両地区の出発時間も行程も大体決まっており、毎年、徳宿小学校（平成二十七年に廃校）の下にあった農協の前あたりで行き会うのが通例であった。出会ったときにはぶつけ合いごっこになることもあった。新田のボンヅナは、今でこそ駒木根と似た形のものであるが、昔はゾウリのように編んだムシロ、その後、少し厚みのある畳を引っ張るというものであった。丁度、ゴザや畳に仏さまたちが乗る感じで、駒木根のボンヅナとは昔から全く違っていたという。一方、駒木根のボンヅナも昔は今と異なり、橇になる部分の竹の先端を曲げずにそのまま突き出していた。このため、ぶつけ合うと、新田のボンヅナの畳に、駒木根の竹の先を突き刺すような形になったという。しかし、現在は新田のボンヅナは工程の一部を軽トラックを使うなどしているため、すれ違うことがほとんどなくなり、互いに意識することもなくなったようである。

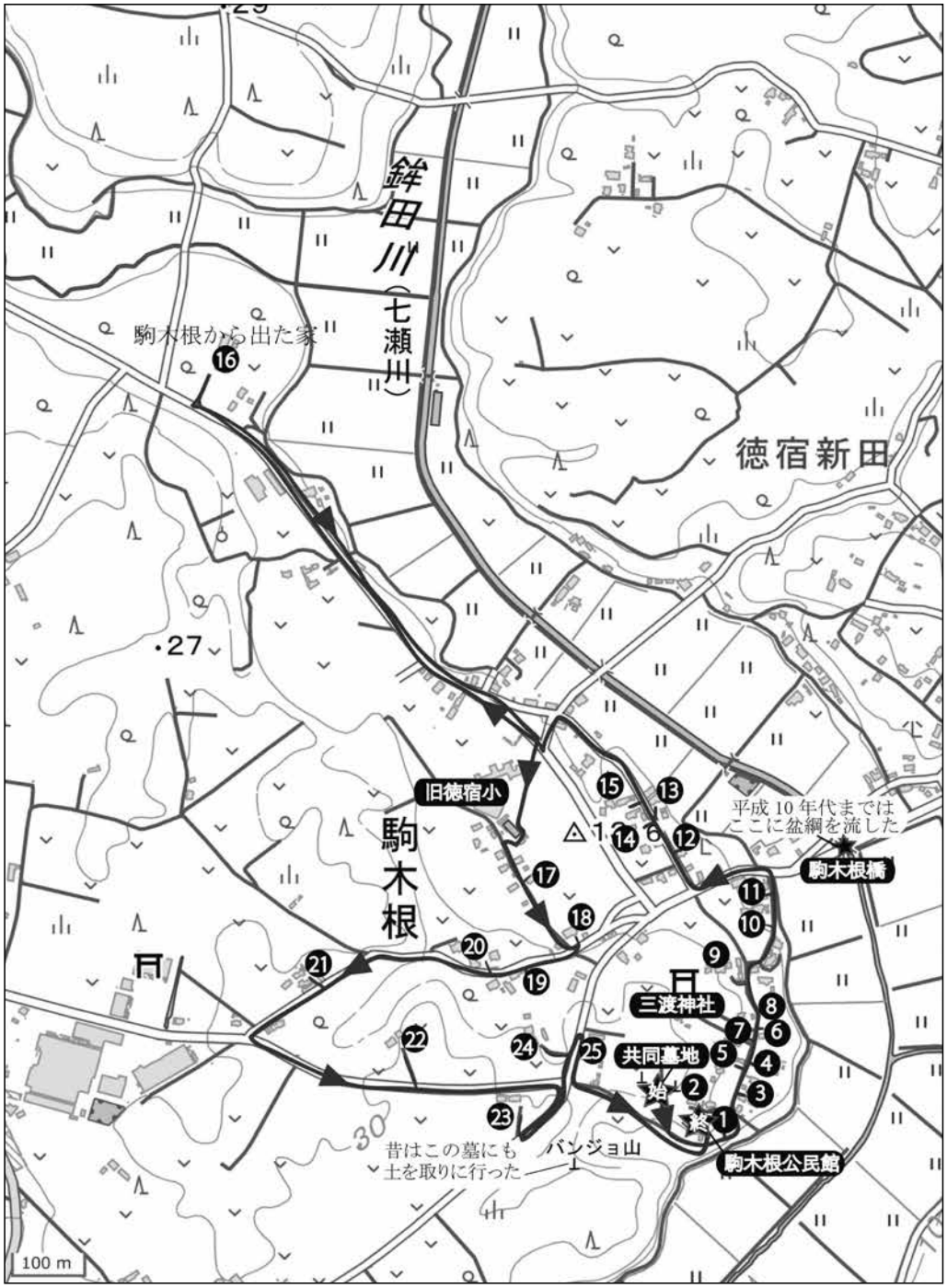
〔所見〕

駒木根の盆綱行事では、出発前に全ての墓の土や苔を一つまみずつ集めてボンヅナに入れることで「仏さまを乗せた」とみなしている。集める場所も現在は共同墓地だけとなったが、かつては山の上の墓にもわざわざ行って「乗せ忘れ」がないようにしていたという。ボンヅナを亡くなった

先祖の乗り物とする考え方は茨城県の盆綱行事で一般的なものであるが、駒木根では墓そのものを先祖の霊一人ずつにあてはめ、実際にその一部をボンヅナに乗せるという具体的な行為によって、この考え方を目に見える形で表わしている。各家の事例を見ても分かるように、基本的に盆行事は個々の家で先祖を迎える行事である。しかし、個々の祖霊をボンヅナという村公共の乗り物で迎え、村の空間全域をまわって送り届けることで、これを社会的な行事へと変換させている。

また、隣接する徳宿新田の盆綱と対抗意識があることも興味深い。『茨城の民俗』第三号の盆行事の報告によると、旧鉾田町では明治末期まで巴地区や安塚地区で、また昭和三十年代まで当間地区の地蔵尊で盆綱行事が行われていたという。このうち、安塚の盆綱が廃止された理由は、綱を往来に張って金銭を強要したりしたために禁じられたとのことで、その囃子文句は「ヤヅナノボヅナ、キレタラハジヨ、カツタラテガラ」というものであった。「切れたら恥よ、勝ったら手柄」という文句には、勝ち負け勝負の要素が見受けられる。駒木根の盆綱の正当な意味はあくまで仏の送迎であるが、それとは別にこれを引き歩く者の心情としては、近隣村どうしの競争意識もいくらか働いていたように思われる。

もちろんこの競争意識は、行事を自分たち自身のものと認識していればこそ生じるものである。盆綱では子供たちが文字通り主役となって行事全てを取り仕切り、こづかいという正当な報酬を手にする。これにより地区の成員としての責任感や連帯感が育まれ、またその充実感こ



そが子供たちの楽しみとなって、積極的に行事を続けるための動機となってきたのであろう。

駒木根の盆綱は、家ごとの祖霊迎えの習俗を社会的に共有するための装置であり、一方で子供たちにとっては初めて、しかも特権的な立場で社会の成員としての役割を果たす一つの儀礼としての意味も持つものである。

〔情報提供者〕

鬼澤　勝さん
鬼澤　豊和さん
鬼崎　賢治さん
鬼澤　朝美さん

〔参考文献〕

角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典　八　茨城県』一九八三年
新堀猛「鉾田町巴地区（盆行事）」、池田信義「鉾田町大字安塚（盆行事）」金沢直人編『茨城の民俗』第三号、茨城民俗の会、一九六四年
下中邦彦編『日本歴史地名体系八　茨城県の地名』平凡社、一九八二年
宮崎報恩会版『新編常陸国誌』崙書房、一九七六年

（榎　美香）

一四　佐野子（土浦市）の盆綱

〔地区名〕

土浦市佐野子

〔地区の概況〕

佐野子の地名については、「千代田村佐谷（古代の佐野郷の遺称地と考えられている）方面からの移住者による開拓地であるという説と「サノ」とは狭い平地の意味であるところから、桜川下流にできた狭い平地の意ではないかとする説がある。」（『土浦市史』五二三頁）

同地区は桜川の左岸に位置し、堤防沿いの微高地にある。昭和二十七年（一九五二）の河川敷整備拡大工事にあたっては、河川沿いの住宅及び佐野子公民館等が現在の位置まで一斉に数m移動している。

現在の佐野子の世帯数は、佐野子内のホンデン、シンデンの両集落を総合して六十九世帯、人口は一五四人である（「土浦市地区別（町丁目）人口及び世帯数一覧（令和二年五月一日現在）」より）。佐野子の盆綱行事ではこのホンデンとシンデンを巡行し、およそ五十世帯を訪れる。

佐野子には三か所の共同墓地があり、盆綱ではこの三か所をまわって先祖の霊を綱に乗せる。一つ目は佐野子公民館脇にある。公民館の敷地はかつて真言宗の満蔵寺の土地であった。遺体を埋葬する埋め墓と、参詣するための石塔などが建つ参り墓とが分かれる二つの墓のあり方を両墓制というが、この共同墓地は参り墓にあたり、土葬の時代はここに遺体を埋葬してはいけないと言われていたという。火葬になった現在は、この墓地の石塔にお骨を納めている。またここには戦没者の慰霊碑があり、満蔵寺に工事が入った際に出土した多数の石仏が共に並んでいる。同敷地内には河童のお堂もあり、近年六月には河童祭が行われ河童の手のミイラが公開されている。

二つ目の共同墓地はシンデンとホンデンの間にあり、ここがかつての埋め墓にあたる。現在も墓が新設されている。

三つ目の共同墓地は二つ目に近く、雑木林の中にある。市の文化財に指定されている「石造五輪塔」が建ち、現在は新しく越して来た世帯がこの敷地に墓を建てている。ここもかつての埋め墓であったとみられるが、この土地にはかつて桜川の支流と思われる名称不明の小川が流れており、その一帯は湿地であった。そのため、土葬の時代には、埋葬した遺体が「浮いて（土から出てきてしまって）」ひどい匂いだったこともあったという話が残っている。

〔実施主体〕

ボンヅナを持って家々をまわるのは、主に小学一年から六年生と、中学一年から三年生の育成会に所属する佐野子在住の子供たちで、令和元年（二〇一九）の参加人数は十一人であった。育成会に所属していない、例えば親の帰省に連れられて来たような子供たちは参加しない。

列の先頭で、ボンヅナの龍の頭を持つのは最年長の子供で、あとはおよそ年齢順に並ぶ。令和元年は中学生の男女が先頭であった。

特定の家や個人、宗教者（寺院）の関与等は特にない。ただし、ボンヅナの製作及び迎え盆当日の出発地点は、以前満蔵寺という寺院が建っていた場所に建設された、佐野子公民館である。

〔実施日〕

① 準備　八月十二日　午後一時から午後四時頃
② 迎え　八月十三日　午後五時三十分から午後九時三十分頃
③ 送り　八月十五日　地区の行事としては特に行わない

写真１　ボンゾナ全体像

〔綱の形状〕

佐野子のボンゾナは龍の形を模して作られている。頭部は、竹の心棒に、編み込んだ藁を肉付けして作られる。

半円形の頭に三日月型の長い日本の角が付き、耳と、ナスの目、舌が取りつけられる。タテガミのような藁束の下から、胴体及びシッポとなる長い藁の縄が下がっており、子供たちは、先頭の子が心棒を、それ以外の子がこのシッポを持って各家をまわる。

〔綱の取扱い〕

巡行の際は、心棒部分を持った子供が龍の頭を目線の高さに、他の子がシッポを持つが、この時は脇に抱えるような格好で、特に高く掲げたりすることはない。ボンゾナは地面には付けずに移動する。

使用したボンゾナは、年長の子供たち数人に保護者が付き添って捨てにいく。かつては桜川の中に投げ入れていたが、現在は河川敷の藪の中に落とし自然に朽ちるのを待つのである。

準備から迎え盆の当日まで調査した中では、綱を取り扱う上での禁止事項は特に無いように見受けられたが、子供たちはボンゾナの上に亡くなった人の霊魂が乗っていると認識しているようである。

例えば、縄の処理に行く際、靴紐を結び直している子供がいるのでどうしたのか尋ねると、「まだ綱の上に残っている人がいる」ので、「とり憑かれないように」、綱を投げ捨てたらすぐに公民館まで走って帰るのだという。「最後の子にはお化けが憑く」ので、置いて行かれないよう紐を結び直していたのである。このことは、大人に聞くと昔から言い伝えられている類のものではないとのことだが、子供たちによる綱の扱いと、その意味の解釈として興味深い例と考えられる。各家に迎えられる霊は「ご先祖様」だが、迎え入れられず綱に残っている霊は「お化け」と表現されている点も興味深い。

〔詳細〕

①　準備

準備は八月十二日の午後一時頃より佐野子公民館において行われる。昼過ぎになると、区長をはじめとする大人たちと、当日ボンゾナを担ぐ子供たち、そしてその保護者である育成会の人々が公民館に集合する。以前は、送り盆当日の十三日の午前中にボンゾナを製作し、夕方に出来上がったものを担いで出発という流れだったが、育成会との相談の結果、前日に準備を行うようになった。

綱製作の中心は大人の男性である。二年ほど前までは梅澤清左衛門さんがこれを主導し、ほぼ一人で製作してくれていたが、現在はそれを引継いだ有志が中心となり、大人たち数名で協力し製作している。製作方法は梅澤さんに特別に教わりに行ったということはなく、毎年の作業を見ながら覚え、みんなで相談しながら作る。子供と保護者たちは製作を見学しながら手伝いや、かき氷や飲み物を配る役割をする。

材料は、全体の肉付けに使用する稲藁、頭部の心棒となる竹、目に使用するナス、そして固定や成形のための藁紐と針金である。

まず、龍の頭部分から作り始める。大きさと形の目安にしやすい、下半分のみに分解した石臼を作業台にし、その上に藁を放射状に広げる。石臼の上に乗って足で藁を押さえながら、端をぐるっと円周を囲むように編んでいき、サン俵（米俵の両端に取り付ける蓋部分）を作る要領で円形にす

る。この時、予め藁を水に浸けておくなどすると、乾燥して割れることがなく、しなやかに曲がるので扱いやすい。形が出来ると端の編み込みを針金で巻いて補強する。次にこのサン俵を、編み込んだ面を内側にして半円形に折る。これが頭となる。折ったところは口になる。

龍の舌と耳二本はほぼ同じ長さに作るが、若干舌の方に厚みと幅をつける。藁を小さい束にし、長い三つ編みにする。それを半分に折って、端を縄と針金で止め、形を作る。

二本の角は舌と耳より長い。男性四人掛かりで三束に分けた藁をねじりながら作る。それぞれ上向きの三日月型にし、補強や角の反り具合を整えるために針金を巻き付ける。角二本を接合するには、繋いだ部分の四方向から竹を当て、上から縄で縛って固定する。

次に各パーツを固定していく。舌を頭に固定する際には、サン俵の中心にあいている穴に舌を結び付けた縄を通して結び、口の両端を針金で閉じて固定する。

写真２　石臼の上で頭部分の円を編む

写真３　出来上がった各部位

その後、龍の胴体からシッポ部分を作る。このシッポは担ぐ子供の数により毎年長さが異なり、令和元年は約二ｍであった。シッポの製作は、公民館の庭に立っている電柱に芯となる藁縄を結び、引っ張りながら編んで、更に周りに藁を肉付けする。この年は、二ｍ編んだところで藁の端を縄で結んだ。この後、飛び出た藁を切り揃えるために、子供たちや保護者がハサミをもって手伝いに来る。

頭とシッポがそれぞれ出来上がると、全体の組み立て作業に入る。まず藁の頭に竹の心棒をつける。この時の竹の長さは、当日先頭に立つ予定の子供に実際に持たせて決める。龍の頭は竹の、上から一節目に取り付ける。次に、この頭が、先頭の子供の目線の高さになるよう子供に持たせてみる。その時、竹の下部が足元に当たらないよう、余分は切り取って調整する。頭の位置と竹の長さが決まったら、軸となる竹の約三節目あたりまで真っ直ぐな藁で肉付けし、その後、頭とシッポを取り付ける。

この後は、角二本を竹軸に固定し、舌の入った頭を角の真中に固定。ま

写真４　龍の胴体からシッポを編む

写真５　出来上がった部位を組み立てていく

た両耳を角と頭の間に挿し込み、目を固定して完成である。

目の部分には生のナスを使用する。ナスは藁縄にビーズのように等間隔で通し、それを頭にぐるっと回して結び付ける。なお、当日午前中の頃ならば付けたままでも良いが、準備は前日であるので、傷んでしまわないよう、ナスは位置を決めた後は一度取り外して冷やしておく。

完成したボンゾナは、翌日の出発まで公民館の外壁に立てかけておく。子供たちは自由にその周りを行き来し、特に縄を跨いではいけない、あるいは潜ってはいけないという言説は無いようである。

② 迎え

十三日の午後五時になると、盆綱に参加する小・中学生、保護者、区長はじめ大人たちが公民館に集合する。令和元年は中学三年までの男女が十一人と、手伝いの高校生が一人参加した。

揃いの服装はないが、子供たちは全員新しい手拭いで頬かむりをする。これには、この世のものではない装いをするという意味があるという（茨城ビデオパック「佐野子の盆綱行事」『土浦の年中行事』より）。現在は手拭いの他、白いタオルを用いることもある。加えて二十年ほど前までは顔に消し炭を塗って黒くしていたというが、この風習は現在は無くなっている。

写真６　頬かむりをして集落を巡行する

公民館を出発するのは午後五時三十分頃である。公民館脇の共同墓地から始まり、三か所の墓地を順にまわって先祖の霊を綱に乗せる。墓地では子供たち全員で「のーらっせ（乗らっせ＝お乗りなさい）、のーらっせ。ほーとけさーま（仏さま）、のーらっせ。」と節を付けて繰り返し声を掛ける。これは、墓地にいる先祖の霊に向けた掛け声である。

墓地をまわった後、午後七時三十分頃からは、各戸に先祖霊を送り届けるために巡行を始める。シンデンとホンデン両方のほぼ全ての家をまわるが、新しく越してきた世帯や、子供夫婦が新しく家を建てるなどしたシンケ（新家）の場合は、まだその家から亡くなった人、つまり先祖が出ていないので立ち止まらない。

各家へ向かう道中の掛け声は「ごーざった（御座った＝いらっしゃった）、ごーざった。ほーとけさーま、ごーざった」である。これは、各戸の人々に先祖の霊が来たことを知らせるためのものである。

盆綱の行列が一軒あたりに留まる時間はおよそ二十秒ほどである。子供たちの掛け声を聞くか、前の順番の近所の人から知らせを受けて、家人が玄関先や縁側でこれを出迎える。本来は縁側で先祖を迎えるのが正しく、何軒かの家では先祖が足を洗うための、水の入った盥とタオルを用意する。

子供たちは道中は歩いて移動するが、家の敷地に入ると「おーりなっせ（降りなっせ＝お降りなさい）、おりなっせ、ほーとけさーま、おりなっせー」の掛け声と共に縁側、もしくは玄関先へ駆け寄り、ボンゾナから先祖の霊を振り落とすような動作をする。この動作は勢いよく、また最後の「おりなっせ」は大きな声で発声することが重要であり、これが足りないと周りの大人たちから指

写真７　縁側に盥を用意して待つ人々

摘される。掛け声は、墓地をまわっている最中の「乗りなっせ」、また各家に先祖の霊を降ろす時の「おりなっせ」は、ボンゾナに乗っている先祖の霊に対するものと想定する。これに対し、集落をまわっている際の「ござった」の掛け声は先祖の霊を待つ各家の人々に対するものと思われ、生者と死者の双方に同様に言葉を掛けることが興味深い。

また、すべての家で子供たちにおひねりが用意されており、先祖の霊を送り届けた後、おひねり用の袋を持つ係の子供が列から出て来て、これを受け取る。

新盆の家は、その年の盆綱で子供たちのための休憩所の役目にあたる。この年はシンデンとホンデンそれぞれに一軒ずつ新盆の家があり、シンデンの方は自宅を開放し、ホンデンの方は公民館を休憩所として用意した。年によっては新盆の家がなく公民館まで休憩しないこともある。反対に各集落に複数の新盆の家がある場合は、合同で準備をする。休憩所ではおにぎりや牛丼、焼き鳥などの食事や飲み物を提供する。子供たちの方は、新盆の家とそれ以外の家で動作や掛け声が異なることはない。

すべての家をまわり終えると、一旦公民館に戻り、年長の子供たちと保護者のみでボンゾナの処理に向かう。公民館には新盆の家から提供された食事が用意されており、大人や年少の子供たちが食事をとっている間に、年長の子供がもらったおひねりの分配を行う。誰がどのくらいのおひねりをもらえるかは、子供たちの間で、保護者の見守りのもと決定され、年少の者は文句を言わないのが決まりである。年長になるほど金額が増え、最年長の中学三年生で八千五百円ほどになる。大人は原則これに介入しない。なお、手伝いで参加した高校生の場合は、分配金の対象には入らない。分配金を袋に入れて配り、これが終わると解散する。

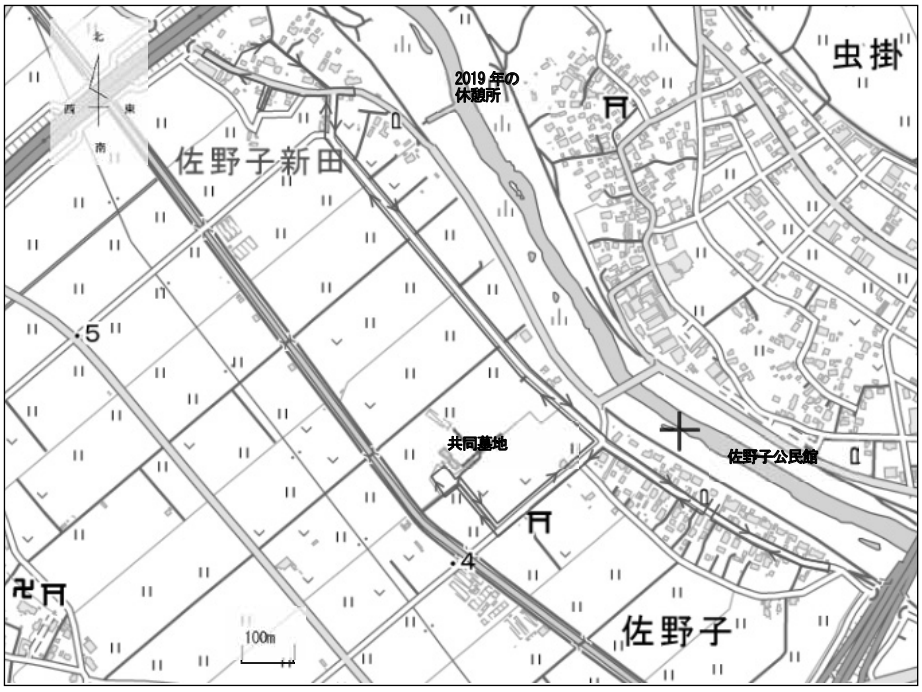
③　送り

各家で行い、地区共同の盆綱行事は行わない。

〔各家の盆行事〕

十二日には、新盆の家に真言宗豊山派般若寺（土浦市宍塚）の僧侶が読経にまわる。座敷には祭壇が設けられ、新仏の写真や果物、花などが供えられる。

十三日は午前中から午後にかけて僧侶が、シンデン、ホンデンの順に家々をまわる。また各家では夕方までに墓参りに行き、迎え火を焚く。迎え火は線香の束を、田んぼの中の共同墓地から集落への道へ伸びる最初の四つ



順　路　図

辻、そして家への道中の曲がり角等に置き、先祖の帰り道の目印にする。
送り盆では、十五日の夜に各家の庭で送り火を焚いて先祖を送る。

〔歴史的変遷〕

まずは、ボンヅナに用いられる材料とその入手方法に変化がみられる。かつて稲藁は、正月飾りなどの注連縄に使われていた長い藁を解いて再利用していた。藁はボンヅナ製作前に子供たちが各戸をまわって集めた。現在は、コンバインで刈った長さの短い藁を使用している。

また子供たちの装いにも変化がみられ、前述のように、頬かむりに使われていた手拭いはタオルで代用されることもある。また顔に塗っていた炭が、現在は省略されている。

次に、盆綱行事に参加する子供の範囲である。元々、ホンデン、シンデン両地区の家をまわるにも関わらず、盆綱に参加出来るのはホンデンの男子（長男でも次男でもよい）のみという決まりであった。その後、シンデンの男子も参加出来るようになったが、女子の参加が可能になったのは、今から約十年前からとのことである。令和元年は、十一人の子供たちのうち半数ほどが女子で、先頭の龍の頭を持つ役目は、最年長の中学三年生の女子が担っていた。

ボンヅナの扱いにも変化がみられる。かつては藁の龍を川に投げ入れて流していたが、現在は河川敷の草地にボンヅナを投げ落とすように変化している。

〔所見〕

正月飾りの注連縄を、盆に子供たちが回収し龍の造形の素材として再利用する、龍の頭にサン俵を用いる、子供たちの顔に炭を顔に塗るなど、盆綱行事は他の年中行事や農耕との深い関わりをもちながら営まれてきたことが分かる。したがって、農業の在り方や年中行事の様相が変わるにつれ、盆綱も同じように材料や、装いを少しずつ変化させながら現在まで存続しているのである。

また、子供たちの間で共有される、ボンヅナの上に残った霊がとり憑くという言説は、大人に教えられたわけでもなく自然と作り出され、年長者から年少者へ伝えられた習慣であると考えられる。

また、盆綱に参加する子供の範囲は時代と共に拡大してきた。これは、男女やシンデン、ホンデンの別を分ける必要性が感じられなくなったこともあるだろうが、子供の数が減少し、限られた条件の子供たちだけでは行事が継続出来ないという状況に直面したことが大きな理由であると推察される。

集落全体として、盆綱行事に参加する世帯数にも変化が現れている。調査中、子供たちが訪ねて行き声を掛けても、家人が年配のため子供たちの掛け声やチャイムの音が聞こえない、もしくは、応答しない家が複数あった。保護者たちからは「最近は出て来てくれない家も増えてきた」「面倒くさいのかねえ」といった言葉が聞かれた。

参加する子どもの数や世帯数については、その他の神事、祭礼、地域的な行事と同様、造形の製作方法の伝承、少子化による担い手確保の難しさ、応対してくれる家の減少などが課題として挙げられるだろう。

〔参考文献〕

土浦市史編さん委員会『土浦市史　民俗編』土浦市役所、一九八〇年

〔参考資料〕

土浦市地区別（町丁目）　人口及び世帯数一覧 二〇二〇年五月一日現在
(http://www.city.tsuchiura.lg.jp/data/doc/1386139073_doc_8.pdf)
茨城ビデオパック「佐野子の盆綱行事」『土浦の年中行事』ＤＶＤ、土浦市立博物館、一九八六年

（森戸　日咲子）

一五　東田中（石岡市）の盆綱

東田中は、東地区、西地区で実施の主体が分かれているため、実施主体からの報告は東地区、西地区に分けて行う。

〔地区名〕

石岡市東田中東地区・西地区

〔地区の概況〕

東田中地区は、山王川周囲に広がる水田と丘陵の麓に形成された集落からなる。東地区は、台・沖・新田の三班から、西地区は西・和田の二班からなる。東田中の区長は、五班から一年毎の輪番で一名を出してゆく。東田中の氏神は香取神社で、ほぼ全戸が氏子である。七五三のまつりなどは、香取神社で行う。東田中の集落は、不動院に帰属する二十世帯程の各家と西福院に帰属するほぼ同数の各家に二分される。いずれも開基約六〇〇年ほどの天台宗円妙寺の末寺である。不動院は開基約一二〇〇年とされ、盆の前に、代表者が円妙寺に行き、施餓鬼供養を受けて卒塔婆をいただき、お堂に納める。不動院の祭礼は、現在一月二十八日と七月二十八日に行っている。かつては一、五、七、九月と年四回行っていた。祭礼では不動明王と墨書された幟を一対立てていた。西福院は既に廃寺となっており、年に一度、新年会という形で集まりが行われる程度である。不動院と西福院の区別は、盆綱では示されず、東田中全体で行う。

西地区のボンヅナは「ボンドノ」と称されるが、これに参加するのは二十二世帯程である。

Ⅰ　東地区の盆綱

写真１　地区内を進むジャーメ

〔実施主体〕

小学一年生から六年生の児童が主体となり、最も年長の者が頭領となる。東地区のボンヅナは「ジャーメ」と呼ばれ、その製作は野田家の戸主が代々引き継いで行っているが、地区の男性たちも手伝う。

〔実施日〕

令和元年八月十三日

〔綱の形状〕

四ｍ程の杉を芯として稲藁を縄で巻き付け、尾の部分に杉の葉を出す。竹で藁を挟み板状にしたものを頭と顎とその間の舌とし、茄子を眼とする。二本の角を立てて幣束を結ぶ。

〔詳細〕

①　準備

午前八時頃から子供たちが各家をまわって藁を集める。藁を出せない家では、藁代として五〇〇円を納める。胴体の芯には山から切り出した杉の木を用いるため、東田中のジャーメは重い。盆綱は西方の北根本でもかつては行っていたが、ジャーメの芯に竹を用いていた。東田中では、杉の木を用い、尻尾に杉の葉っぱを残す。

②　迎え

現在は、盆綱は昼間に行っているが、昔は暗くなってから行った。暗く

ならないと雰囲気が出ないとの声も聞かれる。

ジャーメを担ぐのは、小学校一年生から六年生の児童で、かつては男児のみであったが、現在は女児も参加している。子供会はあるが、その全員が参加するわけではない。六年生が頭になり、ジャーメを担ぐ児童の他に、ジャーメの先頭を、提灯を下げて歩くチョウチンモチ（提灯持ち）、爆竹を鳴らすハナビモチ（花火持ち）、まわった各家からお金を集めるオカネモチ（お金持ち）という役割がある。背の高い六年生が先頭を担ぎ、背の低い低学年の子供たちは後ろを受け持つ（**写真1**）。

かけ声は「盆どのござった、仏さま乗せて来た」で、昔から変わらない。順路は、共同墓地に近い上手の家から、下がって行き、集落外れの三叉路まで運ぶ。

ジャーメがまわる各家では、昔は子供たちがジャーメの胴体の藁を抜いて盆棚に向かって投げる。一本か二本、あるいはもっと多く投げることもある。投げ込まれた藁は盆棚に納める。盆が終わって、盆棚を片付ける際に一緒に処分する。川に流すなど特別な処分はしない。新盆宅でも、ジャーメを迎えるのに特別なことはしないが、子供に与えるお金は一般の家よりも多い。

現在では、昼間の炎天下にジャーメを運ぶので、まわる各家で、フルマイ（アイスや飲み物など）が出されるが、以前は夕食を終え、午後五時頃から八時頃まで行われたので、そのようなお接待はなかった。最後に、お金を勘定する菊池善衛さんの家は、いつも梨を出してくれた。児童が多かった頃は、下級生はジャーメを担げず、触れられないこともあった。「担ぎてーな」とこぼすこともあった。

最後にジャーメを納めるのは、東西集落の東と西の境にある集会所の近くの三叉路であり、これを「ポイステ」と呼んだ。藁と木なので、そのまま自然に腐って無くなってしまうという。

東と西とでジャーメを担ぐ子供たちが争い、東側では「西が攻めてくる」などと言っていた。西のジャーメを見かけると東の子供がそこまで走って行って、担いでいるジャーメを叩き落としたり、藁を毟ったりした。西では、ジャーメを担ぐ前に、お墓から先祖を背負ってジャーメに乗せる所作をするが東ではこのような動作は行わない。

写真２　藁を集める子供たち

写真３　不動院からの出発

令和元年八月十三日の行事概要

藁集め（午前八時十三分より）四名の子供に、男性二名、女性二名の大人が付き添い、東集落内の各家をまわってジャーメに用いる藁を集める。現在はコンバインを用いて収穫するので、藁を提供できる家が少なくなっている。各家を訪れ、玄関で子供が挨拶し藁を受け取る。そして一輪車を押して、その上にいただいた藁を積んで運ぶ。十軒の家をまわると一輪車にほぼ山積みになった（**写真２**）。この後、不動院でジャーメを製作する（午前八時二十七分より十時四十六分、詳細は後述）。完成後、ジャーメを不動堂の入口前に運び、参加する子供たち（男児六名、女児五名）が横一列に並び記念

写真４　ウエノハカからの出発

写真５　藁を盆棚に向けて投げ入れる

撮影する。この後休憩に入る。

不動院からウエノハカへの出発：子供たちが境内に集まりはじめる（十二時二十二分）。各家からお金を集めるオカネモチを務める子供に、お金を入れる布袋が渡される。ジャーメが縁側から下ろされる（同二十六分）。お堂前の参道の石畳に、頭を鳥居に向けて置く。頭の下には藁束の台が置かれる。子供たちがジャーメを担ぎ上げる。背の高い男児が先頭で、その後、背の高さの順に頭から尾に向けて、左右に分かれて並んで担ぐ（**写真３**）。先頭には、オカネモチと藁の台を担いだ子供が立つ（同二十九分）。鳥居を潜って、ウエノハカ（東集落共同墓地）へ出発する。どこの家にも立ち寄らず、ウエノハカに向かう。ウエノハカの入り口から急坂を上って墓地に到着する（同三十八分）。墓地の周りに設けられた通路に平行して、墓地区画を囲うフェンスの外の地面にジャーメを横たえる。ジャーメの頭は墓地の奥を向く。その後休憩となるが、子供がジャーメを跨いでしまったので、跨いだ子供は墓地の周りを一周走って回る。面白がって跨ごうとする

写真６　集落を巡ったジャーメを捨てる

写真７　お金の分配

低学年の子に「跨いじゃいけないよ」と上級生が声を掛ける。墓地の下の道路に、自宅で休んできた世話人の野口さんが到着し、そこから墓地の子供たちに一人一人、ジャーメを担ぐ際のかけ声を指示する。子供たちは各々声を出し、声が小さいともっと大きな声で出すように言われ、発声を繰り返す（同四十六分～五十六分）。

ウエノハカを出発：子供たちが再びジャーメを担ぎ上げ、ウエノハカを出発する（**写真４**）（午後一時四十二分）。肩を痛めないように、ジャーメにはタオルが当てられる。線香をあげるなどの行為は特に見られないが、墓地区画のフェンスの中に一度、ジャーメを運び込み、反時計回りに一度回った後、再び通路に出る。また、ジャーメの前に提灯持ちが一名つく。「盆どのござった、仏さま乗せて来た」を全員で声を合わせて唱えながら、ウエノハカから下りて行く。炎天下、声を上げながら順路図に従って進んで行く。

訪ねた家での所作：子供たちは「盆どのござった、仏さま乗せて来た」と唱えながら、屋敷に入り、縁側にジャーメの頭を盆棚に向けて乗せる。家の造

りによっては、サッシの窓から盆棚に向けて直接ジャーメを差し入れる。家人が、用意しておいたお金をオカネモチの袋に入れる、子供たちの一人が、ジャーメの胴体から藁を一本抜き取り、根の側を先にして、盆棚に向けて投げ入れる（**写真5**）。盆棚まで届かない場合、家人はそれを拾って、盆棚に供える。最初は、投げ込むのは一本だけだったが、徐々に子供たちが投げ込むようになり、最後の家では全員が藁を投げ込んでいた。子供たちは炎天下でもあるので、家人からアイスクリームやジュースなどを受け取り、約二十分休憩する。休憩が終わると、縁側から後ろ向きにジャーメを引き出して、次の家に行く。全部で二十九軒の家を廻る（午後一時五十分から五時三十分）。

写真8　胴体の杉の芯

写真9　胴体に藁を巻く

ジャーメの処分：ジャーメを納める三叉路に到着する（午後五時三十分）。正面は水田で、道の右側の竹藪の横にジャーメを全員で放り投げる（**写真6**）。

お金の分配：この年は孫が六年生で頭を務めた菊池善衛さん宅で貰ったお金やお菓子を分配した（午後七時より）。菊池家では毎年子供たちに梨を振る舞っている（**写真7**）。

〔綱の製作過程〕

ジャーメには雄と雌があり、東地区が雄の年は、西地区が雌、その翌年は、西が雄で東が雌と決まっていた。ジャーメの頭に立てる幣束の色が、雌の時は赤、雄の時は白となる。子供が多かった時代のジャーメは今より大きかった。以下、製作の様子をその形状とともに解説する。

写真10　頭と顎、舌を結びつける

写真11　頭に幣束を立てる、背中には杉の枝を刺す

藁を集め終わると、集落の水田沿いの道を進み不動院の境内に行く。不動院の右側の縁には、ジャーメの芯となる杉の丸太が用意されている。尻尾にあたる枝先には杉の青葉が残されている。世話人の野田さんは、既に藁で頭を製作している。藁を横に束ね、ビニール紐でつなぎ、ジャーメの頭上部と顎、そして舌とする。また直径二cm程の笹竹を鉈で二つに割って、平らにつないだジャーメの頭と顎の根元側から三か所を、上下から竹で挟んでその左右をビニール紐で縛って固定する。境内では、ジャーメの胴体に巻き付ける藁縄を大人たちが綯っている。子供たちもそれを見て藁縄を綯う練習を行う。境内には藁束のほか、ジャーメの背中に挟み込む杉の葉も用意されている。頭上部と顎を重ねて大きさが合っているかを確認する。次に三本の藁縄を撚り合わせて、ジャーメの角を作る。きれ

写真12　ジャーメの頭部、眼は茄子を用いる

写真13　ジャーメを跨いだ子供は墓地の周囲を巡る

いな形に撚り合わせるため幾度かやり直す。撚り合わせて飛び出した藁先をはさみで丁寧に切って行く。大人たちは、きれいに藁を選別する方法などを教えながら作業を進める。長さ四十cmほどの日本の角が完成する。さらに次はジャーメの胴体の製作となる（**写真9**）。杉の丸太の根元側に頭と顎、舌を固定する。それぞれ丸太を挟んで重ね、ビニール紐で横に渡した竹を三か所丸太に縛り付ける。まず顎にあたる藁束に丸太を乗せる。丸太には割木が水平に縛り付けられており固定が容易で、しっかり結びつけられるように工夫されている。胴体を持ち上げ、その上に舌と頭を重ねて、頭の根元側を顎と舌を含めて更に縛り付けていく（**写真10**）。顎と舌の間に丸太が入るため隙間が出来るが、そこに角になる藁束を左右から差し込みビニール紐で縛って固定する。続けて、胴体に藁を巻いて行く。藁の根元を一掴みして束として、飛び出した短い藁を除いてまとめ、杉の芯棒の横に、根元を頭側にして並べていく。藁を芯棒に沿わせて被せ、皆で綯った藁縄で縛り付けていく。結び目はジャーメの背中に突き出すようにし、十五cm程の長さで切り揃える。十五cmほどの間隔で縛っていき、藁が先端に近づくと、次の藁を根元側が頭になるように重ねて縛っていく。全体で藁が五段重ねられると、先端が杉の枝先に届き、芯棒全体が藁で覆われる。結び目は全部で十五か所である。続いて背中の藁縄の結び目の七か所に杉の青葉を差し込んで行く。五cmほどの竹棒にシデを差し込んだ幣束を、頭の付け根付近に一本立てる（**写真11**）。頭の部分は芯棒に根元しか結ばれていないので、口が大きく開くようになっている。角の付け根に茄子を差し込みジャーメの目とする。ジャーメを更に整形した後、二本の角の先にもシデを下げる（**写真12**）。続いて藁を二十cm程に束ね、ジャーメの頭を置くための台を一つ製作してジャーメが完成する。残った藁や杉の葉は、境内で燃やされる。

〔綱の取り扱い〕

ジャーメは子供たちが肩に担いで運ぶ。休憩する際には、訪れた家の縁側に頭を差し入れ、仏壇や盆棚に頭が向くようにする。ジャーメを子供たちが跨いでしまうと、ジャーメに乗っている仏さまを蹴飛ばして落としたことになるので、もう一度ジャーメを共同墓地まで戻して、墓地の周りを三度回り、仏さまを乗せなければならないとされていた。今では、ジャーメ自体は戻さないが、跨いだ子供は一度墓地まで戻って、墓の周りを三度回ることになっている（**写真13**）。ジャーメを三叉路の脇に納める際には投げ捨てる様な所作をする。

〔各家の盆行事〕

東地区の盆行事については、菊池善衛さん宅で調査した。

八月十二日：共同墓地にある墓石や樹木の根元に線香を立てるツチモリ（土盛り）を作る。これは家の門口に至るまで、道の辻など数か所に作る。

八月十三日：盆の入りである十三日に、仏壇の前に盆棚を設けて位牌を

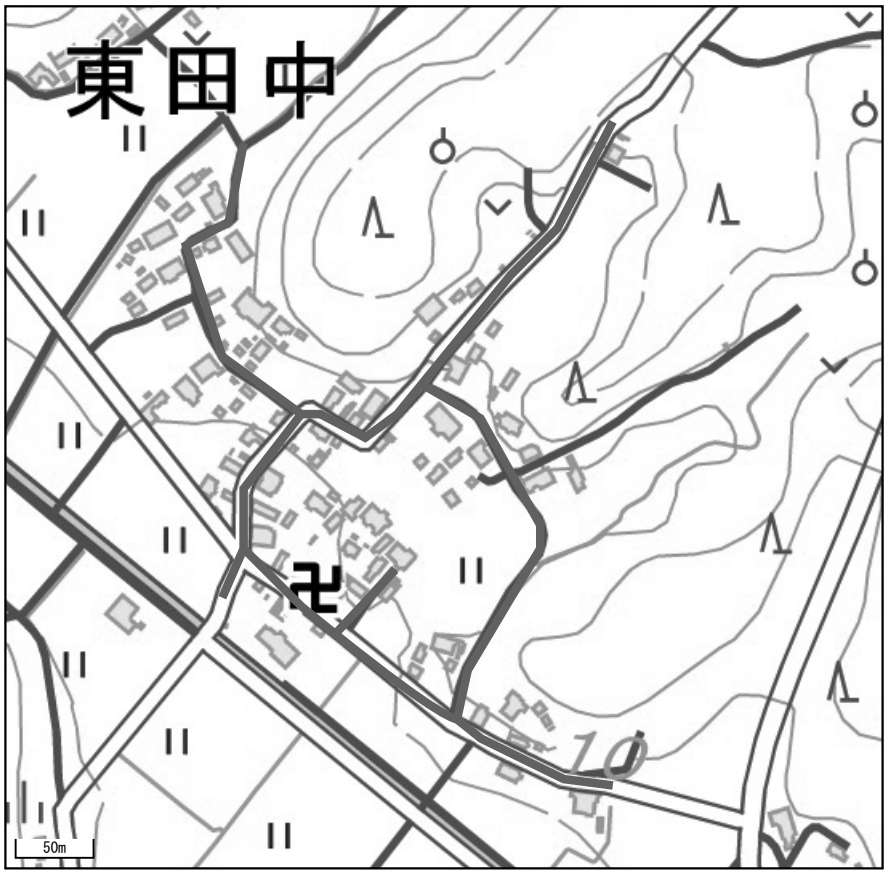
並べ、片側だけの太い青竹を柱として水盆棚の上に水平に渡した細い青竹に家人が綯った藁縄を巻き付け、杉の葉を差し込んだものを飾る。盆棚の供物としては、青果、野菜などで灯明と線香を供える。餅をついて餡子で包んだ牡丹餅を、お膳に載せて盆棚に供える。家で祀られる先祖の数だけミソバギの茎を折って作った箸を供える。転居する前の古い家では、トシヨリバアサン（祖母）が無縁仏にお膳と箸を用意して、盆棚の下に供えていた。今では、このようなことはしないが、盆棚のお膳にできるだけ沢山の箸を供える。これは、先祖だけでなく無縁仏も供物を食べることができるようにとの意味である。夕方になると、早めに仏さまを迎えに出る。この時は提灯に灯は灯さない。共同墓地の菊池家の墓に着くと、そこで墓に蝋燭に火を灯し線香を供え、提灯にその火を移し、墓地の墓石や樹木の根元のツチモリに線香を立て、仏さまを案内する。辻や門口のツチモリにも線香を立てまで仏さまを迎える。

八月十四日：朝、昼、晩と家族の食事と同じおかずや果物などを供えるが、「盆中は日に六度の上げ供え」と言って、食間にもお茶やおやつを供えて先祖が空腹にならないようにする。

八月十五日：仏さまを送る際には、仏壇に線香をあげて、灯明の火を提灯に移して墓まで行き、墓に灯明を灯し線香を供える。墓から帰る時には提灯には火を灯さず、線香も持たない。

〔歴史的変遷〕

文書等の資料は残されていないため、不明な点は多いが、話者の記憶にある限りで、東西集落で分かれてジャーメも行っており、その雌雄を一年ごとに交替していた。女児がジャーメを担ぐようになったのは、男児のみでは人数が足りなくなったためで、平成二十七年に地区で相談して、小学校一年生から六年生の男女で構成するようになったが、今後も子供が少なくなるとすれば、やがては、大人も担がなくてはならなくなるのではないかとの考えも聞かれる。



Ⅱ　西地区の盆綱

〔地区の概況〕

小高い山と多くの水田に囲まれる。盆綱に参加する世帯数は二十二世帯程で、隣の東地区とは水田を挟んでいる。

〔実施主体〕

幼稚園年長、小学一～六年生（男女）

〔実施日〕

準備は、八月十三日の午前七時頃から午後十時頃、迎えは、八月十三日の午後一時頃から午後五時頃、送りは、八月十五日の午後六時頃から午後十一時頃にかけて行われる。

〔綱の形状〕

ボンヅナをボンドノと称する。中心に杉を一本芯として通しているため、直線的な造形をしている。ボンドノは竜の形を模しているとされ、背側には杉の葉が用いられる。小さな御幣が四本挿してある。頭部は熊手のような造形をしており、目を表すナスと藁で作られた角が挿されている。頭部の角は綺麗に製作することが困難であるため、上手く製作できた角は数年に渡って使われる。

写真13　盆殿の組み立てを行う大人

〔詳細〕

①　準備

午前七時頃地区内でボンドノを製作することができる古老が、樹齢五年程の杉と藁で形作られた角、稲藁、ナス、篠、杉の葉、小型の御幣をそれぞれ用意し、共同墓地付近の空き地へ持ち込む。そこから地区内の男性数人でボンドノの製作を行う。ボンドノは杉を芯に使い、杉の周りを稲藁で包んで胴体を作る（**写真13**）。ボンドノの背側には杉の葉と御幣を挿す。頭部は篠を縦に割ったもので稲藁を挟み、口の形を作る。角を接着した後、ナスで目を作る。完成したボンドノは迎え盆が始まる午後一時まで共同墓地に隣接する個人墓地に安置される。

子供たちは午前七時半頃から集合し、ボンドノを製作中の大人たちに挨拶をする。その後送り盆に使う盛り土の製作に向かうため、軽トラックに乗り町内をまわる。盛り土とは町内の辻に置かれるもので、送り盆の際、道案内として線香を挿すために製作する。西地区では盛り土の形を綺麗に整えることが吉とされるため、粘土質の土を鉢に入れてある程度固めてから地面にひっくり返し、製作する。

②　迎え

午後一時に四名の子供が集合する。墓地にある各墓前で先祖を「背負う」所作を行う（**写真14**）。全ての墓前を巡り終わるまで、背負うために後ろ手に組んだ手は解いてはならない。もし解いてしまうと、それまで背負った先祖を全て落としてしまうことになるため、もう一度最初に訪れた墓前から背負い直さなければならない。全ての墓前を巡り終わったら背負った先祖をボンドノの上に下ろす所作を行う。先祖が乗った状態のボンドノを跨ぐ行為は禁止されている。せっかく乗った先祖を蹴落としてしまうためである。跨いだ場合は、落としてしまった先祖を背負い直し、ボンドノの上に戻す所作を行う。

写真14　おんぶして先祖を背負う所作

子供のうち、もっとも経験のある者が「トウリョウ（頭領）」に選ばれる。頭領は子供たちのリーダー的役割を持ち、ボンドノの進む順路を決め、各家を回る際にお金を集める役割も務める。また、子供達のうち小学校に上がっていない者はボンドノを担ぐことはなく、ボンドノを置く時に敷く「マクラ（枕）」を運ぶ係になる。この役職は「マクラモチ（枕持ち）」と呼ばれる。

ボンドノを持った子供たちは、順番に西地区内の各家をまわる（順路図参照）。その際子供たちは「ボーンドーノーゴーザッタ、ホートケサーマーノセテキタ」と掛け声をかけながら歩く。ボンドノを担ぐ際、真ん中のポジションが一番楽であるため、交代しながら歩く（**写真15**）。家に着くと縁側にマクラを置き、その上にボンドノの頭を乗せて安置し、ボンドノから先祖を背負い、縁側や玄関に下ろす所作が行われる。地区内の各家はボンドノが来ることに備え、子供たちへのお菓子や飲み物を用意し、頭領に渡すお金（千円程）を用意する。ボンドノを迎え入れる家が用意するお菓子は家ごとに違いがあり、子供たちの喜ぶ甘いものを出す家と、塩分の採れる塩気のある菓子を提供する家がある。全ての家に共通するのは子供たちが脱水症状にならないように多量の飲み物を提供することである。また、家によっては毎年自家製の梅干しを振る舞う所もあり、そのような家では子供たちに昨年の梅干しの出来栄えと今年の出来栄えを比較してもらうというような光景も見られる。ボンドノが訪れた際に住民が不在であった家がある場合、盆綱から先祖を下ろす所作は行われず後回しになる。ボンドノに乗っているのは共同墓地に埋葬された先祖たちであるが、西地区内には共同墓地に墓を持たない家もある。しかしそのような家にもボンドノは訪れ、先祖を下ろす所作がなされる（**写真16**）。西地区の住民は、盆の時期にはボンドノが訪れることを念頭に置いており、外出などは控えるというような暗黙の了解があると語っている。そのためどうしても盆に外出する際は、近隣の住民に一言声をかけることが多い。また東地区とは数百ｍほどしか離れていないが、盆の間は互いに交流が無いため、西地区における住民のほとんどは盆の時期に東地区でどのような行事が行われているのか把握していない。

地区内二十二軒を巡った後、公民館下の空き地でボンドノの解体が行われる。ボンドノの角や御幣などは翌年のボンドノに再利用されることもある。ボンドノの芯に使われる杉や、杉に巻き付けてある稲藁など、ボンドノの大部分は空き地に放置される。放置されたボンドノは次の年までにはどこかへ消えてしまうと西地区の住民は語る。

解体が終わり次第、頭領の集めたお金は一度大人が回収し、頭領宅で子供たちに分配される。基本的に頭領が少し多めにお金をもらうことができる。お金が分配が終わり次第解散となる。また、地区内の各家は、ボンドノが訪れた後改めて個人的に共同墓地に迎えに行くことが通例である。

ボンドノは現在、担ぎ手となる子供たちの親や、地区内の大人によって製作されるが、戦前まではボンドノの製作まで子供たちによって行われていた。当時は十から十二歳の男子が頭領になり、ボンドノを製作する日取りから製作する場所まで決めた。また当時は、農業を営む家庭が多かったため、材料は子供たちが各々持ち寄った。また麦を耕作していた家が多く、現在では稲藁が用いられているボンドノの胴は戦前まで麦藁で作られていた。当時の子供たちは、ある程度の（最低でも小学校一年生に相当する）年齢になるまで担ぎ手になれないという決ま

写真15　ボンドノを運ぶ子供たち

写真16　先祖を移す所作

りがあったため、ボンドノの担ぎ手は迎え盆の花形であるという自負があった。東田中の盆綱の実施主体が東西の地区で分かれているため、戦前から戦後間も無くは両地区の間で「喧嘩」が行われたという。喧嘩は両地区の子供たちが相手地区の盛り土を崩すところから始まった。またボンドノを担いでいる際、相手地区のボンドノが視界に入った時点で勝負を仕掛けに行くことが常であった。ボンドノに挿されている杉の葉は触ると痛みを感じるため、子供たちの「根性」を鍛えるために挿してあると語る者もいるが、喧嘩の際に用いるために付けられたとする者も多い。戦前当時は現在の何倍も多く杉の葉が搭載されており、杉の葉を武器にして相手地区の担ぎ手を痛めつけたとされている。喧嘩はいずれかのボンドノがバラバラになるまで行われた。

③　送り

送り盆の際はボンドノを製作しない。送り盆ではそれぞれの家庭で親戚などを集めた宴会が行われる。地区内で分家と本家という関係性の家が多く、本家方に集合する家庭が多い。盆綱など、地区内共通の送りの方式が無いため、宴会の始まる時間や終わる時間はまちまちであり、宴会が済んだ後、各々先祖を共同墓地まで送る。

先祖が滞在している盆棚に線香を焚き、提灯を膨らませて家の者たちが共同墓地に向けて出発する。共同墓地への道には所々に盛り土がなされているため、土に線香を挿しながら進む。また盛り土がないところにも線香を置く場合もある。こうした行為は、先祖が迷わないように目印をつけるという目的があるとされる。共同墓地の入口まで着くと、墓前までは行かず、入口にある地蔵の前に線香と小銭を置いて引き返す。墓所から家までは提灯の火を消し、その他の明かりもつけずに帰路につく。また先祖が戻って来てしまうため、振り返ってはならないという決まりもあるが、この決まりを意識している住民は少ない。

〔綱の取扱い〕

ボンドノは担いで運ぶ。また、先祖を蹴落としてしまうことになるため、ボンドノを跨ぐ行為は禁止されている。枕を敷けば地面に置いても構わないが、あまり好まれる行為ではない。基本的にボンドノを置く際は縁側に枕を置き、頭部を枕に預ける。共同墓地や各家の縁側などで先祖を背負ったり下ろしたりする際に後ろ手に組んだ腕を離すことは禁止されている。特に共同墓地では今までに担いだ先祖を全て落としてしまうことになるため、もし腕を解いてしまった場合、最初に背負った先祖の墓前から共同墓地全ての墓前で背負い直す必要がある。

〔各家の盆行事〕

各家は迎え盆の際は外出せずにボンドノの到着を待つ。ボンドノを担ぐ子供たちの到着に備えて前日までにお菓子や飲み物を用意しておく。ボンドノが到着した後改めて共同墓地へ向かい、先祖を迎える。盆の間は先祖を祀る盆棚に三食のご飯を備える。

送り盆の際は、親戚などと宴会をした後、線香と提灯を持って共同墓地へ向かう。辻の盛り土に線香を挿しながら共同墓地前まで来ると、入口の地蔵に小銭と線香を手向けて帰る。帰り道は明かりをつけず、振り返らずに帰らなければならない。新盆宅はかなり遅い時間に送りを行う。亡くなったばかりの先祖は家が名残惜しいと考えるからである。また、十六日になってから先祖を送る新盆宅もある。

〔歴史的変遷〕

ジャーメが行われ始めた時期は正確にわかっていない。しかし、地区内の話者によれば戦時中も行われていたとされる。当時、現在の頭領にあたる子供は「オヤカタ（親方）」と呼ばれた。小学生になるまではボンドノに触れることはできないため、ボンドノを担ぐことにプライドを持ってい

た。親方がボンドノを組み立てる日程や時間帯を決め、地区内の子供を集める。また、ボンドノの組み立ても戦前は子供たちの担当であった。

当時のボンドノの主な材料は麦藁であり、まだ農業を営む家庭が多かったため、藁が豊富に手に入った。藁は、芯となる杉を包むように使われる。稲藁は外縁に使われる。麦藁は稲藁よりも太く、クッション性が高い。また、現在よりも杉の葉が多く使われており、「東地区との喧嘩」の際によく用いられていたとされる。「東地区との喧嘩」は現在では見られないが、戦後しばらく続いていた。喧嘩は地区内の盛り土を崩し合うことから始まる。ジャーメの最中に相手地区のボンドノが目に入ると戦いを挑みに行く。担いでいるボンドノから杉の葉などを取り、それを武器にして喧嘩を行う。ボンドノがバラバラに解体されてしまうこともあったという。少子化の影響から平成二十六年から女子の参加が認められた。令和元年度の西地区の頭領は女子が担当した。また、西地区では令和二年度以降のジャーメ開催の為、中学生の参加も検討されている。

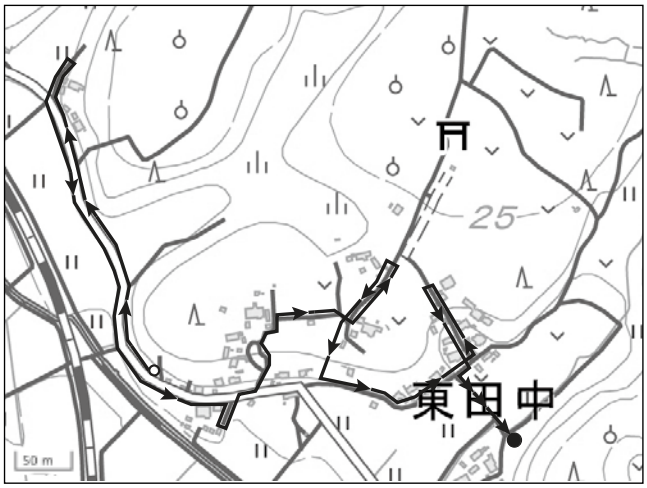
〔所見〕

東田中のボンヅナは、東地区・西地区とも現在も丁寧に作成されており、行事自体は良好に保存・継承されていると言える。児童数は減少しており、少ない児童数でも継承可能な形に変更が加えられているが、行事の先祖を墓地から共同で迎えるとする意識や、先祖を背負う所作（西地区）や胴体から引き抜いた藁を盆棚に投げる所作（東地区）、ならびにボンヅナを跨ぐと墓地を周回しなければならないことなど特徴的な儀礼行為が現時点でも継承されている。東地区については、ウエノハカ以外に屋敷地の裏側の山林に家墓を有していた家もあったが、その墓は現在使われておらず、盆綱行事にも関係していない。起点となる共同墓地（ウエノハカ）は墓石から見て、そこまで古くなく、新しく設けられたものと思われるが、共同墓地形成以前の盆綱の起点がどこであったかも留意される。共同体行事としての盆綱が共同墓地のみ先祖迎えの場所としていることからも、共同墓地成立に伴う地域の墓制の変化が、盆綱行事に及ぼした影響についても検討する必要がある。東集落と西集落とで、雄と雌、それぞれのジャーメを一年交替で製作していたことや、行事においても両集落間で対抗的な意識が見られた点などは、盆綱の対抗儀礼としての意味を考える上でも留意される点である。ジャーメを納める三叉路には、かつて東集落の集会所があり、集落境界の公共性を有する広場空間であったと考えられ、そこにジャーメを捨てる様に処分する点も留意が必要である。

〔情報提供者〕

菊池　善衛さん（東地区）、野口　武雄さん（東地区）

木村　直文さん（西地区）



（徳丸　亞木、関口　東亜）

一六　宮渕町千秋（龍ケ崎市）の盆綱

〔地区名〕

龍ケ崎市宮渕町千秋地区

〔地区の概況〕

宮渕町は、龍ケ崎市の東南に位置し、江戸時代は宮渕村として独立していたが、明治二十二年（一八八九）に近隣の大徳村、佐沼村と合併して大宮村となり、昭和二十九年（一九五四）には龍ケ崎市宮渕町となった。上と下、そして飛び地である千秋の三つの地区に分かれているが、このうちの千秋地区に、龍ケ崎市内で唯一残る盆綱が伝承されている。千秋の集落は南東部で新利根川に接している。戸数は四十戸程の時代が長かったが、その後少しずつ減っており、令和元年（二〇一九）現在は三十二戸である。宮渕の本町と同様、ほとんどが天台宗万願寺の檀家であり、また同じ鹿島神社の氏子ではあるが、千秋には独自の鹿島神社が祀られており、拝殿につながる集会所が建てられている。盆綱行事はこの鹿島神社境内の集会所を拠点に行われる。

千秋の盆綱は、昭和五十五年（一九八〇）に一度中断し、平成十三年（二〇〇一）に再開した。

〔実施主体〕

もとは小学一年生から中学三年生までの男子が行う行事であり、女子は触らせてもらえなかったという。ところが子供の数が減ったことにより、現在は女子や高校生、また就学前の幼児も親が同伴して参加する。また、かつては準備も含めて、あくまでも子供が主体であったが、現在は大人が主導する形になっている。二十歳～五十歳代の十数名の有志と、指導者として「長老」と呼ばれる八十歳代の鳶職の男性らが準備や運営を行っている。

〔実施日〕

昭和五十五年以前の実施日

① 準備　八月一日から八月十三日の夕方
② 迎え　八月十三日　午後六時半頃から午後八時半頃

平成十三年以降の実施日

① 準備　八月十日前後の土曜か日曜の一日と八月十三日午前中
② 迎え　八月十三日　午後六時頃から午後八時半頃

〔綱の形状〕

ボンヅナは龍であるといい、藁で、顎、持ち手、頭のノウボッチ、胴体を組んで荒縄で縛って固定する。本体の長さは五～六m、尾の部分を含めると全長約十m程である。ただし、近年の少子化で担ぎ手の数が少ないため、次第に小型化される傾向にある。

〔詳細〕

① 準備

昭和五十五年以前の準備

昭和期までは、中学三年生が大将になって千秋地区の男子全員で準備を行っていた。準備で最も大変なのはボンヅナの龍を作ることである。夏休み中の八月一日になると、子供たちがリヤカーもしくは一輪車などを引いて各家をまわり、藁をもらって歩いた。もらってきた藁は集会所に集めて干し、乾いたら龍の頭・尻尾・持ち手・頭に乗せるノウボッチなどのパーツを作っておく。毎日少しずつ先輩に教わりながら作った。昔は各家で縄を綯う機会も多かったので、子供たちも大体のものは作ることができたし、

中学生の先輩がよく分かっていて下の者に教えてくれたという。

八月十三日の午前中は、仕上がっていない部分を間に合わせるために子供たちが集会所に集まって、龍のパーツを完成させた。ただし、本体になる龍の胴については、子供だけで大縄を綯うのが大変なので、八月十三日夕方の迎え盆の直前に、仕事を終えた大人たちも集会所に集まって綯ってくれた。こうしてできた、胴体、そして子供たちが作っておいた顎、持ち手、頭のノウボッチを大人たちが組んで荒縄で縛って固定し、龍の全身を完成させる。

各部の造作は次のとおり。

（頭）

龍の頭の部分は、上顎と下顎からなる。柳の枝を二本、早い時期に採ってきてあらかじめ大きくたわめて細縄で端を縛って癖をつけておく。U字形に形が固まったら枝全体に藁を巻き、これをやはり藁で綯った細縄でぐるぐると巻いて顎にする。今は細縄のかわりに麻紐を使う。

写真１　ボンヅナの龍の頭

写真２　ノウボッチ

写真３　胴体の太縄

（角・持ち手）

持ち手兼角の部分は、近くで採ってきた竹二本に藁を巻き付けて、細縄でぐるぐる巻き、これを×字形に組む（**写真１**）。

（頭に乗せるノウボッチ）

農作物の霜よけにするため、藁を円錐形に広げて中心を編んだものをノウボッチと呼ぶが、これを作って龍の頭にかぶせる（**写真２**）。ノウボッチの編み方は難しいため、大人がいないと作れなかった。

（胴体）

まず荒縄二本の端を神社のそばの松の木に縛って縒りをかけ、少し太い二本取りの縄を三本作る。更にこれをまた松に縛り、三人がそれぞれの端を持ち、右縒りをかけながら三本取りの縄に綯う。これが胴体の芯になる。この芯の縄にさらに藁を三束、縒りをかけながら継ぎ足し、巻き付けながら太くして胴体とした。頭の方が太く、後ろにいくに従って徐々に細くする。藁が巻き付けてある本体部分は五～六ｍで、後ろの方は藁を巻き付け

ずに芯の縄だけが尻尾となる（**写真３**）。尻尾まで入れた全長は十ｍ程である。

（組み方）

まず角となる竹をＸに交差し、荒縄で結ぶ。その中心に胴体となる大綱の根元を二十㎝程出して荒縄で結ぶ。大綱の根元を上下で挟むように、顎を麻紐で結んで固定する。最後にノウボッチを頭に乗せて形を整え、麻紐で縛って完成する。

（松明）

長さ一ｍ五十㎝程の竹二本を用意し、その先に麦藁を巻いて細縄または麻紐で縛り松明を二本作る（**写真４**）。麦藁は、昔は小麦を作っている人からもらってきた。かつては川がよく氾濫したので、利根川べりで救荒用の裏作として小麦を作っている家があった。

平成十三年以降の準備

令和元年は八月十一日に準備を行った。現在は龍作りには子供たちは関わらず、準備はすべて昔経験のある有志の大人たちが集まって作っている。藁も入手が難しくなっているため、指導者でもある長老が盆綱用の田を別に作って、そこで青刈りした藁を用意してくれている。松明用の麦藁は、集落内では麦畑がなくなってしまったため、つてを頼ってつくば市の農業研究所から譲り受けている。

毎年、ボンヅナを全部作り直すのは大変なので、使えるパーツは例年

写真４　松明作り

とっておいて再利用し、破損が激しくなったものだけを作り変えるようにしている。作り方は、昭和の頃と変わらないが、胴体の芯縄を作るのは大変であるため、龍ケ崎の「つく舞」で舞い手が結ぶ丈夫な布縄を祭礼の終了後にもらって、これを利用している。なお、頭のノウボッチだけは大人でも作り方が難しく、長老の指導がないと作れないという。

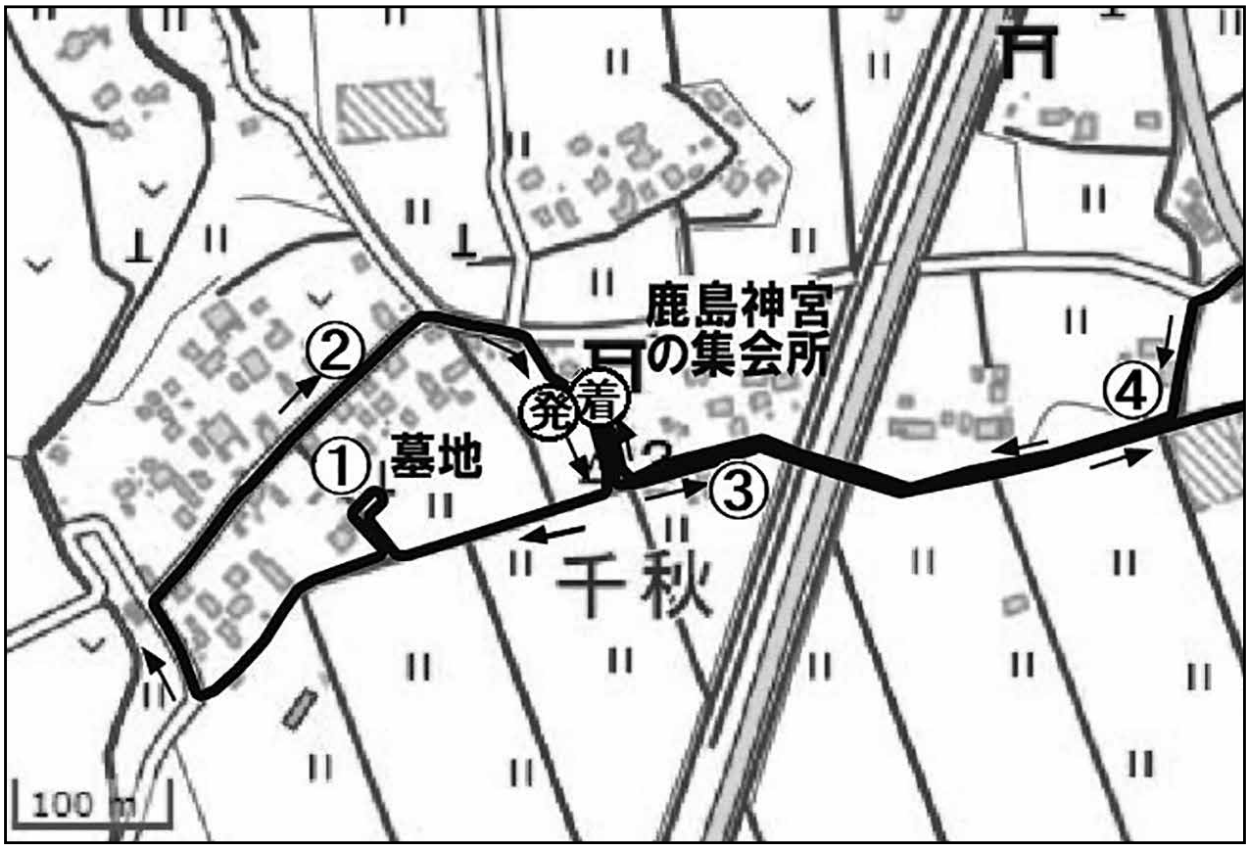
八月十三日の午前中には大人たちが集まり、子供に振る舞うかき氷や焼きそばの材料の買い出しやテント立て、道具の準備を行う。また、麦藁の松明もこの時に作っておく。夕方五時頃に再び集まり、龍のパーツを組み立てて縛り、頭にノウボッチを被せる。

①　迎え

盆綱引きのやりかたは、かつても今もあまり変わりはない。十三日の夕方に、子供たちがボンヅナを持って共同墓地と集落の各戸をまわるのである。基本的には全戸をまわるが、現在は、家の事情で訪問を遠慮する、という家も数軒ある。

午後六時頃、子供たちだけで集会所を出発する。これに先立ち、先導役の大人二名が一本ずつ松明を持ち、共同墓地に行って龍を待つ。また共同墓地までの途中の曲がり角で、大人が藁の束を燃やす。子供たちは最初にボンヅナを持って共同墓地に行き、墓地内を反時計回りに回る（**写真５**・平成元年度は二巡）。

写真５　共同墓地をまわる



これで仏さまが龍に乗ったことになるという。

その後、子供たちは「ワッショイ、ガッショイ」という掛け声を掛けながら、ボンヅナを持って千秋の各家をまわる（**写真6**）。この掛け声の「ガッショイ」とは、仏さまに「合掌」することからきているともいう。かつては子供たちだけで歩いたが、今は大人たちも後ろから付き添う。但し、ボンヅナを持つのはあくまでも子供たちだけである。各家では、玄関先までボンヅナを持って行くと、掛け声を聞いた家の人が玄関先に出てきてくれる。ボンヅナの前に立って子供が「仏さま送ってきました」と声をかけると、家の人が「ご苦労様でした」とおひねりを渡す（**写真7**）。これを受け取る役の子供も決まっており、「ありがとうございました」と礼を言って、また次の家に入って行く。昔は子供も多く、ボンヅナを各家の庭先で揉んだりもした。わざとボンヅナの尻尾を振り回して植木などを壊しても、怒られはするものの「仏さまだから仕方がない」と言って許してもらえるも

写真6　各家をまわる

写真7　各戸をまわっておひねりをもらう

のだったという。なお、特に新盆の家ではおひねりの金額も少し多めで、また飲み物や菓子、スイカなどが振る舞われることが多い。

ルートは、最初墓地から出て時計回りに一軒ずつまわって行き、一旦集会所に戻る。ここでスイカやかき氷などが振る舞われるので、休憩してから日没の頃に再度出発する。今度は県道を渡り、東側の家々をまわって歩く（**写真8**）。全戸に仏さまを届け終えたら、そのまま掛け声をやめて集会所に戻る。かつては村域をぐるりとまわって戻ってきたが、今は県道が昔の道を分断していて通れないため、同じルートを引き返して帰ってくる。午後八時三十分頃に集会所に戻り、行事は終了となる。

かつては、この後、もらったおひねりを中学三年生が集めて集計し、子供たち全員に分配した。年上の者が多く、年下の者は少ないと決まっており、昭和四十年代には小学校低学年は百円余り、中学三年生の大将は六百円程をもらっていたという。子供たちは、このおひねりが楽しみであった。現在は、鹿島神社境内に大人たちがテントを張って、かき氷や焼きそばの振る舞いも用意している。またおひねりは、実行委員長の大人が子供たちと共に集計して分配している。

写真８　集落内をまわる（日没）

〔綱の取扱い〕

ボンゾナの持ち方は、中学生が二名で両脇から頭の持ち手を抱え、年齢順に大きい子が前の太い胴を、小さい子たちが尾の方を持って歩く。行事終了後は、昭和初期以前は用水堀や新川に持って行って流したというが、昭和の中頃には、頭以外の胴体は境内の裏手の木の上に掛けておいて、しばらくは子供たちがぶら下がるなどして遊び、あとは自然に朽ちるまで置いていたようである。現在は処分せずにとっておいて翌年も利用することもあれば、作り替える際の見本とすることもある。作り替えた後の古いものはお焚き上げするか焼却場へ持って行く。

〔各家の盆行事〕

八月十二日までに共同墓地の各家の墓の前に、竹の脚が付いた真菰（マコモ）の台を設置する。昭和四十五、六年頃までは土葬であったため、石の墓だけでなく土盛りの墓も多く残っており、それぞれの墓の前にこれらの台を立てるのである。割竹の四つ脚に真菰のゴザを挟み込んだもの（**写真9**）、十字に組んだ竹ひごの中心から真菰を四角形に編み回し、ひごをたわませて地面に差すもの（**写真10**）、また墓石に直接、真菰のゴザを敷くこともある。花と線香を供え、そのほかに供物として蓮の葉にナスとキュウリをサイの目に切って供えたり、季節の野菜や果物などを供えることもある。

また、各家でも、座敷の仏壇の前に台を置いてその上に真菰のゴザを敷き、花や果物、菓子などを供える。またナスの牛とキュウリの馬を作って飾る。仏さまが来る時は馬に乗って早く

写真９　墓前の台１

写真10　墓前の台２

来て、帰る時は牛に乗ってゆっくり帰るのだという。台の上には細縄を張って、縄目にほおづきを挟んで吊り下げる。この他、杉の葉を間に挟む家もある。

八月十三日には、夕方までに、家を出てすぐの角などで真菰を燃やす。仏さまの目印であるという。但し、千秋では、墓地に仏さまを迎えにいったり迎え火を焚いたりはしない。仏さまは盆綱の龍に乗って各家に届けてもらうので不要だという。

八月十四日には、仏さまは家にいるということになっており、仏壇の前の台にもお膳を供える。ここに蓮の葉にナスとキュウリのサイの目切りを乗せて供える家もある。

八月十五日の夕方に仏さまを送る。各家で提灯を持って、墓まで仏さまを送って行く。家によっては送り火を焚くこともある。送り火は、やはり昔は真菰、今はボンヅナの残りの藁を燃やす。

〔歴史的変遷〕

千秋の盆綱は、昭和五十五年に一度中断した。子供たちも少なくなり、負担になってきたことや、藁が手に入りにくくなったことなどが理由である。しかし、平成十三年に家人が亡くなり新盆を出した家があり、その供養のために、有志が集まり再開した。その時のメンバーがその後も有志として主導し、現在も継続している。

〔所見〕

現地では、「盆綱はお盆に仏さまをお迎えに行って、これに乗せ、各家にお届けするというもの。いわば仏さまの配達人のような感じ。また、盆綱をやることが仏さまの供養になる。」という意識がある。千秋でも盆綱を「保存会」形式で行ってはどうか、という声もあるが、「この行事は亡くなった人の霊を慰めるためのものであり、形だけを保存するイベントのようになってしまうことには抵抗がある」とのことであった。

一度、中断したものの、新盆の家の供養として再開したこの地域の盆綱は、現在、子供たちは製作に全く携わっておらず、昭和五十五年までに参加経験のある大人たちがやめてしまえば、その後の継承は困難と思われる。但し、技術や形式という観点とは別に、「盆綱は供養のための行事」という認識は深い部分で地域に根付いて今も引き継がれている。その思いにより、千秋の盆綱は伝承されていくであろう。

〔情報提供者〕

中村　康夫さん
寺本　信男さん
寺本　富男さん
糸賀　勉さん

〔参考文献〕

『龍ケ崎市　伝統的祭礼調査報告書』（財）龍ケ崎市まちづくり・文化財団、二〇一三年
龍ケ崎市史編さん委員会編『龍ケ崎市史 民俗編』龍ケ崎市教育委員会、一九九三年
藤田稔「茨城の盆綱」（『茨城の民俗』第三号、茨城民俗学会）、一九六四年
嶋田尚「蛇型綱の習俗に就いて―茨城の盆綱のルーツに関する一考察（一）」（『茨城の民俗』第二七号、茨城民俗学会」、一九八八年

（榎　美香）

一七　田宮（牛久市）の盆綱

〔地区名〕

牛久市田宮・田宮町

〔地区の概況〕

旧田宮地区は牛久市西部、牛久駅より北の常磐線西側から旧水戸街道、現在の国道六号線沿いの両側の商店街と、その後背部の造成団地からなる。現在は六号線より東側を田宮、西側を田宮町として区分されている。昭和三十年代までは、水戸街道沿いに約四十五戸の家が並ぶ農村集落で、その後背には雑木林と松山が広がっていた。特に国道より西側は、集落の裏手に谷津が入り組み、水田が作られていた。昭和四十年代になると奥の台地を削り谷津を埋め立てる形で宅地造成が進み、急速に戸数が増えた。住宅団地が開発されて、現在は新住民の方が圧倒的に多くなっている。

〔実施主体〕

かつては、田宮集落の小学一年生から中学三年生までの男子が主体で、これに大人が三～四人くらい手伝って行う行事であった。当時は一軒あたりの子供の数が多く、集落全体で二十～四十人くらいの人数が参加したという。準備や発着の場所は薬師寺（真言宗豊山派）であったが、昭和二十六年頃までは無住であったため、盆綱に宗教者の関与はなかった。

その後、昭和三十年代になると盆綱は次第に行われなくなり、昭和三十五、六年を最後に一時中断した。一方、薬師寺は昭和後期に住職が入り、寺院主体の行事も盛んに行われるようになっていった。そして昭和五十四年、田宮祭保存有志会により盆綱が再び復活したのであるが、そのうち藁や茅でボンゾナを作ることが難しくなってきた。このため、平成八年（一九九六）に薬師寺住職が中国で龍舞用の龍を購入し、以後はこれを利用した盆綱行事が行われるようになった。現在は、薬師寺の僧侶と檀家総代・役員、また地区の子供会が主体となり、巡行も集落各戸をまわるのではなく、薬師寺境内と共同墓地、霊園内を一巡する形で行われるようになっている。準備も大人が行い、また当日は大人が支える龍の作り物に結びつけられた紐を、子供会（小学生）の男女児が引いている。

〔実施日〕

昭和初期～三十五、六年まで

① 準備　七月中旬頃から八月十三日の午前中

② 迎え　八月十三日（昭和初期頃までは七月十三日）の午後四時頃から午後九時頃

平成八年以降現在まで

① 準備　八月十三日の午前中、午後三時頃から午後四時

② 迎え　八月十三日の午後四時から午後五時

〔綱の形状〕

昭和初期～三十五、六年まで

ボンゾナは、藁で作ったジャ（蛇）で、全長は十m位であった（**図1**）。ジャの頭は、溜池に浸してズッシリと重くなった丸太を芯にして、俵ボッチを二枚重ねた口をつけ、ナスを目にした。真菰（マコモ）を三つ編みにしたものを角（または耳）の

写真１　昭和30年代の田宮の盆綱
（藤田稔「茨城の盆綱」より）

ようにして頭に付けた。本体の頭の方は藁で太綱を編み始めるが、途中でチガヤを差し込み、胴体の方はチガヤで編んでいく。本体を編むときには、寺の梁に掛けて、また幼稚園が出来てからは園庭のブランコに上から掛けて作ったこともあったという。チガヤは根元の赤い方を外にボサボサと出すようにして編み込み、ジャの鱗のように作った。また、各自がジャを持つための持ち手の縄を、たくさん付けておいた。

平成八年以降、現在まで

中国の四川省から購入した龍舞用の龍の作り物を利用している。黄色い布製で、蛇腹を数本の棒で下から支えている。全長はやはり十m程である。

〔詳細〕

① 準備

昭和初期～三十五、六年まで

この頃、ボンゾナのジャは毎年、小中学生の男子が自分たちで作っていた。本体はほぼチガヤで作り、縛る縄は藁を使った。また、角にあたる部分は真菰で編んだ。子供たちは夏休みに入るとすぐに毎日のように寺に集まり、山の方でチガヤを刈り取ってきて、干しておいた。集落の裏手に広がっていた雑木や松の山に面した道路脇は草っ原で、チガヤはそのような場所に生えていた。チガヤはススキに似た穂が出るが、ススキより短く、しなやかで、根に近い方の茎や土の中に潜っている部分が赤っぽい色をしているのが特徴である。これを鎌で刈って束にして寺に運び、境内や茅葺屋根の本堂の広縁に広げる。こうして天日干しにする作業を何度か行い、ボンゾナの材料を作っておく。干すと半分くらいの分量になった。

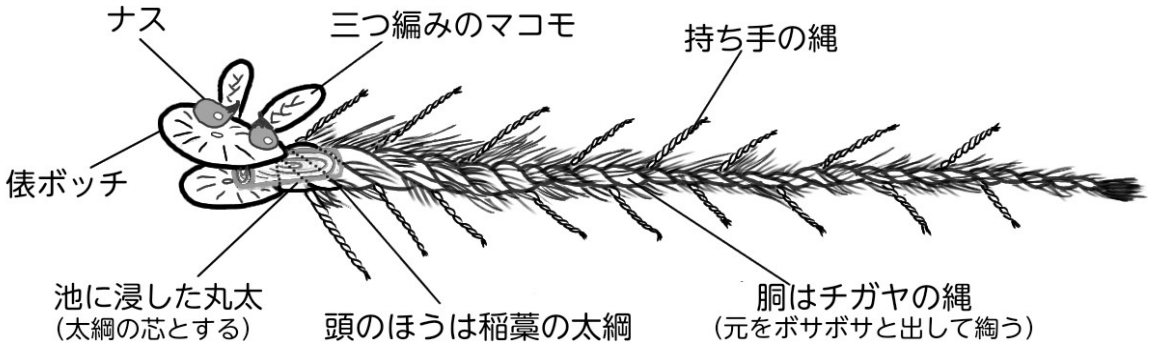


図１　昭和35，6 年頃までのボンゾナの形状

また、田宮町の低地には湧き水の溜池があり、ここに長さ五十cm程の樫の木などの丸太を半年程前から中学生が浸しておく。水に十分浸すと重くなり、これをジャの頭の芯にした。この溜池は、山の水が「絞れて」湧いている池で、田んぼに引いていたものであった。農家の人たちが定期的に土をさらっていたため、いつもきれいで、夏は子供たちが水浴びして遊んでいた。田んぼの種まきの前に種籾を浸しておくことにも使っていた。

頭や本体を作るのは子供だけではできなかったので、集落の器用な長老が教えてくれた。また、その年新盆にあたる家の大人が八月十三日の午前中に二～三人来て、手伝ってくれた。縄用の藁も大人が持って来てくれた。

平成八年以降、現在まで

八月十三日の午前中に、薬師寺に住職と檀家総代、寺世話人などの役員が揃いの半天を着用して、龍を倉庫から出し、本堂の前に飾っておく。また子供会の大人たちが、子供に渡すお菓子の袋詰めや紙製の花飾りなどを作っておく。また、午後三時頃から大人たちが集まり、マイクの調整や会場の準備などを整える。

② 迎え

昭和初期～三十五、六年まで

八月十三日を迎え盆といい、子供たちがボンヅナを持って墓地で仏さまを乗せ、集落をまわって各家に送り届けた。

まず、夕方に各家の人たちが手作りの提灯を持って共同墓地に集まって来る。五時頃になると、子供たちが中学三年生を先頭にそれぞれジャの持ち手を持って、まず共同墓地に行き、「乗ーらっせ、乗ーらっせ、ほーとけさーま乗ーらっせ」と大声で言いながら、棺箱を置くために墓地中央に設置されていた大谷石の台の周りを一周回る。これによって、仏さまがボンヅナに乗ったことになる。その後、薬師寺の参道から国道六号線に出て北に向かい、街道沿いの田宮の各家を「おーんじゃった、おんじゃった、ほーとけさーま、おんじゃった」と声を掛けながら、一軒ずつまわった。各家の玄関先まで来ると、「ほーとけさーま、わーたしますよー」と声を掛け、重い丸太の入ったジャの頭で建物を壊す真似をするような感じで、

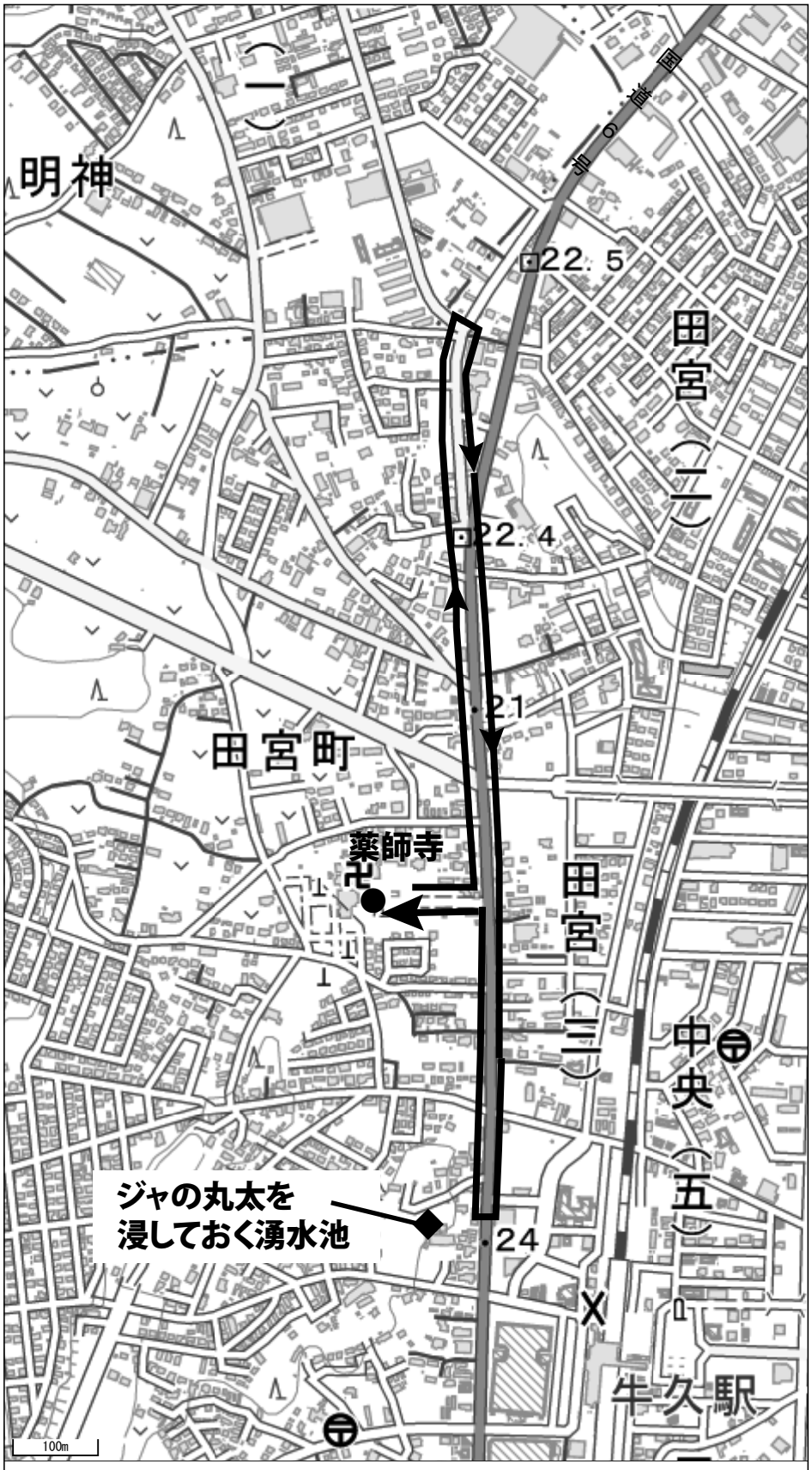


図２　昭和35，6年頃までの順路（集落全戸をまわった）

玄関の敷居などをドンドンドンと激しく叩いた。そのままだと家が傷むので、各家ではあらかじめ潰してもよいようなリンゴ箱などの木箱を用意していて、これを叩いて潰すようにした。中には臼にムシロをかぶせて用意しておく家もあった。ボンヅナで叩いて仏さまを降ろすと、家の人が当時で二百円～三百円くらいの「おこづかい」や菓子をくれた。新盆の家では、他よりも多くの「おこづかい」を渡してくれた。

国道六号線の西側の家をまわりながら北上し、途中で旧道に入り、地区の北端の家まで来たら折り返して、今度は元の道の東側の家をまわりながら道沿いに南下する。薬師寺の前を通過し、集落の南端の家までまわり終わったら、再び折り返して残った西側の家をまわりながら薬師寺まで戻ってきた。

二～三時間で全戸をまわって薬師寺に戻ると、境内の一角にある集会所に集まって、子供たちだけで飲み物や駄菓子などで慰労会を行った。また、集めた「おこづかい」で改めて別の日におやつやジュースなどを買うこともできたので、子供たちは盆綱が楽しみであったという。最後に、ボンヅナを墓地の近くに捨てて終わりとなった。

平成八年以降、現在まで

集落全体をまわることはせず、薬師寺の境内と付属の墓地をまわる形になっている。

八月十三日の午後四時頃、田宮地区の子供会の子供たちが二十名余り集まる。子供たちは頭に花飾りをつけ、一旦本堂で掛け声の練習を行う。手伝いの女性がマイクで説明し、何度か発声練習をする。

掛け声の練習後、龍の持ち手の棒を檀家総代や寺世話人などの男性が持ち、龍から伸びている紅白の紐を子供たちが持って、掛け声を掛けながら歩いて出発する。先頭の子供二名は「子供の箱　浄財」と書かれた木箱を胸の前に下げて持つ。行列の先頭は、薬師寺の若住職が鈴（りん）を持って先導し、役員の提灯、高提灯、太鼓、僧侶の鈸（シンバルのような楽器）

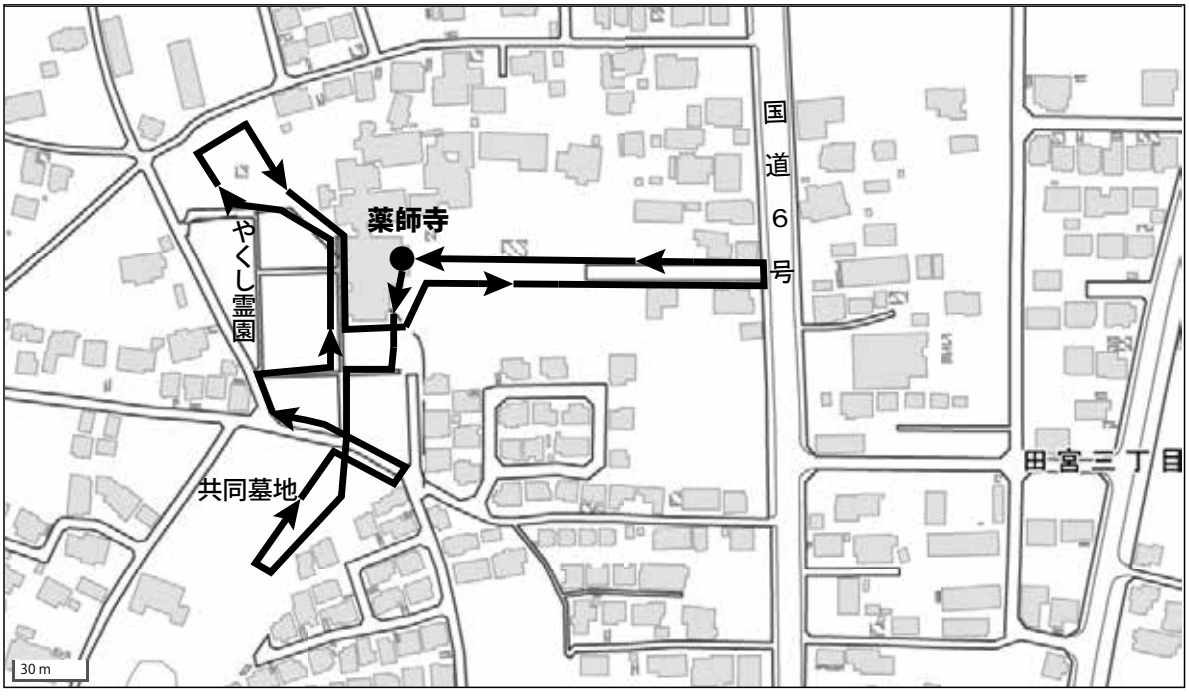


図３　現在の順路（薬師寺境内と墓地をまわる）

が続いた後に、子供たちの龍が続く（**写真２**）。子供には親も付き添う。ハンドマイクの女性や指導をする男性に促されて、子供たちは掛け声をかけながら、龍の綱を持って歩く。墓地と霊園をまわるまでは、仏さまをお迎えする掛け声として「のーらっせ、のーらっせ、ほーとけさーまのーらっせ」と繰り返す（**写真３・４**）。一旦休憩をとって、墓地を過ぎた後は仏さまが龍に乗ったということで、「おーんじゃった、おんじゃった、ほーとけさーま、おんじゃった」と声を掛ける。本堂の前まで戻ってきたら、最後に仏さまを各家にお渡しするという意味で「ほーとけさーま、わーたしますよー」と声を掛けて龍を台の上に戻す。

その後、住職が参加者の前で読経し、全員で合掌して盆綱行事は終了となる。子供たちはその後一人ずつ菓子の袋をもらって解散する。

一方、各々で墓参りを済ませた人々は、盆綱行事が終了するのを待って、境内屋外にしつらえた大きな盆棚に灯された蝋燭から、持参した提灯に火を移してもらい、家まで持ち帰る（**写真５**）。

写真２　現在の田宮の盆綱

写真３　僧や檀家役員の先導で墓地をまわる

写真４　墓地をまわる

写真５　行事終了後、境内の盆棚の火を各家の提灯に移す

〔綱の取扱い〕

昭和初期～三十五、六年まで

子供たちがジャに取り付けた細い縄を一人ずつ持ち、引いて歩いた。

平成八年以降現在まで

張りぼての龍についている棒を大人が差し上げて支え、持ち手の細い紐を子供たちが持って歩く。

〔各家の盆行事〕

田宮の盆は、昭和初期頃までは七月、その後は八月の十三日～十六日に行われる。かつては十二日までに牛久沼で真菰を刈ってきて、縁側などに干しておいた。八月十二日には、竹を×の形に組んで三方に紙を貼り、真菰で綯った縄をつけた提灯を作る。更に、墓の前に備える真菰の「盆棚」、同じく墓前に備える真菰の「イス」を作っておいた。竹の提灯は仏壇の前

に置いておく。昭和三十五、六年頃までは土葬であったため、墓地には土饅頭の墓が並んでいた。十二日のうちに墓地に行き、真菰の盆棚とイスを墓前の地面に刺して、その上に蓮の葉を置き、サイの目状に刻んだナスやキュウリ、米を供える。

十三日夕方は「迎え盆」である。作っておいた竹の提灯に蝋燭を立て、共同墓地に提げて行く。しかし、各家で「迎え盆」はするものの、仏さまはボンヅナに乗って来る、という意識があったという。十四・十五・十六日の各日、仏さま用の小さな黒漆の膳に、朝はご飯、昼はうどんや素麺などを供えた。十六日夕方は「送り盆」で、各家で竹の提灯に再び火を灯して、墓に仏さまを送って行く。提灯はそのまま墓に置いてきた。なお、家人が亡くなって最初の盆は「新盆」と言い、新盆を迎える家には、親戚や付き合いのある家の人たちが、新しい盆提灯を買って持って来てくれる。このため、新盆の家では四～五個の提灯が玄関や廊下に下げられていた。

しかし、今は墓地もきれいに整備されており、こうした手作り品を作ることはなくなった。ただ、市販の提灯を用いて墓地に仏さまを送迎することは今も行われている。

〔歴史的変遷〕

かつては、男児が藁蛇を作り、仏を迎えて各家に降ろしてまわる行事であったが、昭和三十年代に一度中断し、五十年代に再開した。しかし、やはり継続が難しくなり、ボンヅナは作られなくなった。再度中断しそうなところを、平成八年からは薬師寺の僧が主導し、恒常的な作り物の龍を使用し、境内と墓地のみをまわる行事へと変貌した。

〔所見〕

かつて、牛久市では岡見、東猫穴地区でも盆綱が行われていたが、現在も行われているのは田宮地区だけとなっている。田宮では盆綱は仏迎えの行事と考えられており、墓地で乗せた仏を各家に送り届ける子供主体の行事であった。少子化や材料が入手困難なことから、そのままでは廃絶していたのではないかと思われる。しかし、この行事を絶やすには忍びないという寺院側の積極的な働きかけにより、形を変えて存続できるようになった。現代の新しいスタイルの盆綱といえる。

なお、田宮の盆綱は、昭和期の行事内容については藤田稔氏が、また現行の内容については、泉田慧による報告が既に刊行されている（参考文献参照）。従って本稿では、これらの記述を補う形で、特に昭和期の事例についての聞き書きを中心に報告した。

〔情報提供者〕

羽生　香苗さん
山脇　和明さん
村松　功岳さん

〔参考文献〕

藤田稔「茨城の盆綱」（『茨城の民俗』第三号、茨城民俗学会）、一九六四年
嶋田尚「蛇型綱の習俗に就いて―茨城の盆綱のルーツに関する一考察（一）」（『茨城の民俗』第二七号、茨城民俗学会）、一九八八年
『牛久市史　民俗』牛久市史編さん委員会編、二〇〇二年
泉田慧「田宮の蛇祭り」（『茨城県の祭り・行事―茨城県祭り・行事調査報告書』茨城県教育委員会）、二〇一〇年

（榎　美香）

一八　小茎（おぐき）（つくば市）の盆綱

〔地区名〕

つくば市小茎

〔地区の概況〕

小茎は、つくば市の南部に位置している。稲敷台地の端にあたり、標高二十五m以下の比較的平坦地である。稲荷川と東谷田川に挟まれて位置しており、東谷田川側には昭和五十年代初頭に開発された森の里住宅団地が広がっている（『茎崎町史』、一九九四年、以下、町史）。川に接する地域であるため、近隣の交通手段として陸路以外に渡船があった。現在も天神下に渡船場跡があり、当時の名残を知ることができる（天神下に平成十五年（二〇〇三）につくば市教育委員会が設置した「天神下の渡し場」の看板あり）。昭和八年（一九三三）には小茎と庄兵衛新田を結ぶ小茎橋が完成し、この時期から対岸集落との交通が、渡船から架橋による陸路に変遷した（竹内編、一九八三年）。集落の中心を野田牛久線（県道四十六号）が通っており、国道六号線や常磐線牛久駅、牛久市市街地につながるこの道路は時間帯によっては交通量が多くなる。

小茎地区の人口は令和二年（二〇二〇）時点で、五〇六人（男二四七／女二五九）となっている。集落内に素戔嗚命を祀る文明年間「一四六九～一四八七」創建、元治元年（一八六四）再建の八坂神社がある。この八坂神社の神体は、もとは上岩崎にあった神体が牛久沼に流され、それを拾い上げて祀ったものとされている（町史）。近世末までは福寿院という真言宗寺院が存在していたが、明治初年に廃寺となり、その跡地に明治六年（一八七三）小茎小学校が開校した。同十九年に同小学校が高崎小学校に合併され、その跡地には茎崎村役場が設置された（町史）。茎崎村は、同二十一年の市制町村制公布によって小茎村を含めた近隣十一か村が合併してできた村である。その茎崎村の行政の中心であった村役場が、村のほぼ中央にあった旧小茎小学校跡地に設置されていたことからもわかるように、小茎は旧茎崎村の中央に位置している（町史）。

小茎の盆綱は、小茎に居住する子供とその保護者らが組織する子供会が中心となって活動しているが、参加する子供は現在も男子のみとなっている。集落の中心部には小茎農村集落センター（以下、センター）があり、ボンヅナの材料となる真菰（マコモ）の乾燥作業やボンヅナ作り、休憩などはこのセンターで行われる。

〔実施主体〕

小学三～六年生、中学一～三年生（男子）

子供会に所属する子供の保護者（子供会で毎年盆綱担当が決められる）

盆綱に関わる条件としては、男子であり、小茎以外の出身者であっても小茎に居住していればよい。令和元年（二〇一九）の盆綱に関わった保護者の中には、小茎以外の出身者もいた。

〔実施日〕

① 準備　八月三日　午前八時から午前九時半

　八月十三日　午前八時から午前十一時

② 迎え　八月十三日　午後四時から午後十時

③ 送り　なし

〔詳細〕

① 準備

真菰刈り　八月三日の午前八時にセンターに集合して、軽トラック二台と

乗用車に乗り合わせて近隣の水田に向かう。真菰を保護者が刈り、それを子供たちがトラックの荷台に運び入れていく（**写真1**）。二台分刈るとセンターに戻る。

センターでは真菰の枯れた部分を取り除き、向きを揃えて荒縄で束ね、同センターの倉庫に保管する。令和元年は十七束作成した。これを八月四日から十二日までの間、中学生が中心となって、早朝から露天にさらして干し（**写真2**）、夕方に取り込む作業を繰り返す。

ボンヅナ作り　八月十三日の午前八時に同センターに集合する。この時間は、真菰刈りの際に子供たちが決めた時間である。この日の早朝に保護者が切ってきた青竹二本を、大人が上下一対六くらいのところで十字に組み、針金（番線）で固定する。この間に子供たちは、既製品の荒縄を棒結びにしてバケツの水に浸す。こうすることで、荒縄が柔らかくなり作業しやすくなる。

写真１　真菰を刈り取る

写真２　真菰を干す

荒縄を浸したら、真菰の束を二束ずつ互い違いに合わせて、両端を中学生が持ち、お互いに別の方向に全身を使って捩じりあう。捩じりきって、真菰が半円状になったらその端を荒縄で束ねる。この作業は力が必要なので、小学生は参加せず中学生のみで行う。この作業を二回繰り返し、上顎と下顎を作る（**写真3**）。両顎で竹を挟むようにして縛り付ける。頭からはみ出る真菰を継ぐように竹の軸に真菰をまとわせ、中学生がそれを押さえながら荒縄で巻いていく。荒縄は真結びに結んで継いでいく。巻く作業は中学三年生から順に行い、小学三年生まで回ると、また中学生からこれを繰り返す。荒縄は、水に浸すことで作業がしやすくなった半面、切れやすくもなるので、力の入れすぎに注意する必要がある。荒縄を胴に巻きつつ、同時並行でその縄から飛び出た真菰も鋏で剪定する。軸の竹がなくなると残りの真菰を残して、荒縄を結ぶ。残った真菰はしっぽのようになる。

写真３　顎部分を捩じりあって作る

胴が出来ると、子供たちはボンヅナの脇に立ち、各自の配置を確認する。

確認が終了すると、胴に荒縄で持ち手を付ける。胴から横に出ている青竹部分は、中学一、二年生が持つ。持ち手が出来上がるとセンターの縁側に立てかけて各自家に帰り、夕方再び集合する。

②　迎え

夕方になると、子供たちは午前中に確認した配置でボンヅナを持ち、集落の集合墓地三か所をまわってか

ら全戸をまわる（**写真４**）。ボンヅナは中学二年生を先頭に学年順に並んで持つ。最上級生の中学三年生は提灯担当と集金担当、誘導担当などを担う。保護者はボンヅナの周囲で車両などの整理や休憩の呼びかけを行う。墓地では「ほーとけさーま、のりなっせ」と三回唱える。墓地を三か所まわると、ボンヅナに祖先が乗ったといい、以降はボンヅナを地面に直接置くこと、跨ぐことを避ける。

各家にボンヅナが来ると、玄関か仏間側の縁側の戸が開く。掛け声は中学生の「せーの」ではじまり「ほーとけさーま、おりらっせ」を二回唱えた後、中学生の「もう一丁」の掛け声で三回目を唱える。

一般の家では盆綱に対し、五百円から千円、新盆の家では三千円程を渡す。不在の家にも盆綱は寄るが、神道の家や新宅で仏壇のない家には寄らない。盆綱でインターホンを鳴らすのは「違和感がある」という理由で避けられ、最上級生の「盆綱です」の声掛けで家人が出てくるのを待つ。

写真４　巡行するボンヅナ

写真５　ボンヅナを足の上にのせて休憩

写真６　ボンヅナを茎崎橋の欄干から落とす

休憩では、各自持参した水筒で水分補給するほか、納められたお金から中学生が飲料や菓子、パンなどを購入して子供たちに配る。休憩中は体育座りでボンヅナを足の上に置いてボンヅナが地面に接しないようにする（**写真５**）。センターでの休憩では子供会の盆綱担当の保護者（女性）が飲み物などを用意して待機している。彼女らは終了後の弁当の手配もする。

保護者はセンターの休憩（午後七時頃）で前半後半に分けて随伴し、中学三年生だけでは困難な交通整理や道順の補佐などを行う。

小茎全戸をまわると、ボンヅナを茎崎橋の中央の欄干から東谷田川に落として（**写真６**）集会所に戻り、弁当やお菓子を飲食する。その間に中学三年生は別室でお金を数えて、年功序列で分配額を決める。

かつて分配を経験した保護者たち曰く、同級生が多いと最高学年の中学三年生でも取り分が減るそうである。小学生でも最低金額が決められており、配られたお金は子供にとっては夏の大事な収入となった。そして取り分の少ないうちは「いつか中学三年生になったら」と期待をしていたという。

盆綱は中学三年生で終わり、高校生になると携わることはない。彼らが大人になって、自分の子供が盆綱をする年齢になると再び関わるようになる。それも含めて保護者たちは中学生に「お前らが大人になったら子供らに教えなきゃいけないんだからよく見ておけ」と声をかけていた。

③　送り
なし

〔綱の形状〕

頭部に真菰で作った上顎と下顎を持つ。胴は青竹を軸に真菰をまとい、尾の部分を除いて、真菰の上に荒縄が巻かれている。どのような人数規模でも一つしか作成されない。令和元年のボンヅナの全長は約五四〇cmである。

その他、頭部分は約七十cm、尾の部分は九十cmとなっている（**図**）。

〔綱の取扱い〕

子供たちは、胴部分につけた持ち手を持って移動する。

また、共同墓地をまわった後は、先祖の霊が乗っているとして、ボンヅナを地面に置くことや跨ぐことを禁じている。

〔各家の盆行事〕

かつて、新盆の家ではタカドウロウ（高灯篭）を杉の木を目印に建てた。やがては集会所前に共同で立てるようになったが今は建てていない。迎え盆では、盆綱が家に先祖を送って来るが、各家でも盆綱が家に来る前に墓地に行って先祖を迎える。墓地に行くと提灯の蝋燭に火を灯す。この火に先祖の魂が乗るといわれているため、その火で仏壇の蝋燭を付ける。

〔歴史的変遷〕

小茎の盆綱は、盆行事の一つとして、地域に広く受け入れられている。しかし、その始まりについては明らかになっていない。『茎崎町史』によると、盆の精霊が大蛇に乗って去来するという信仰に由来するとされている。

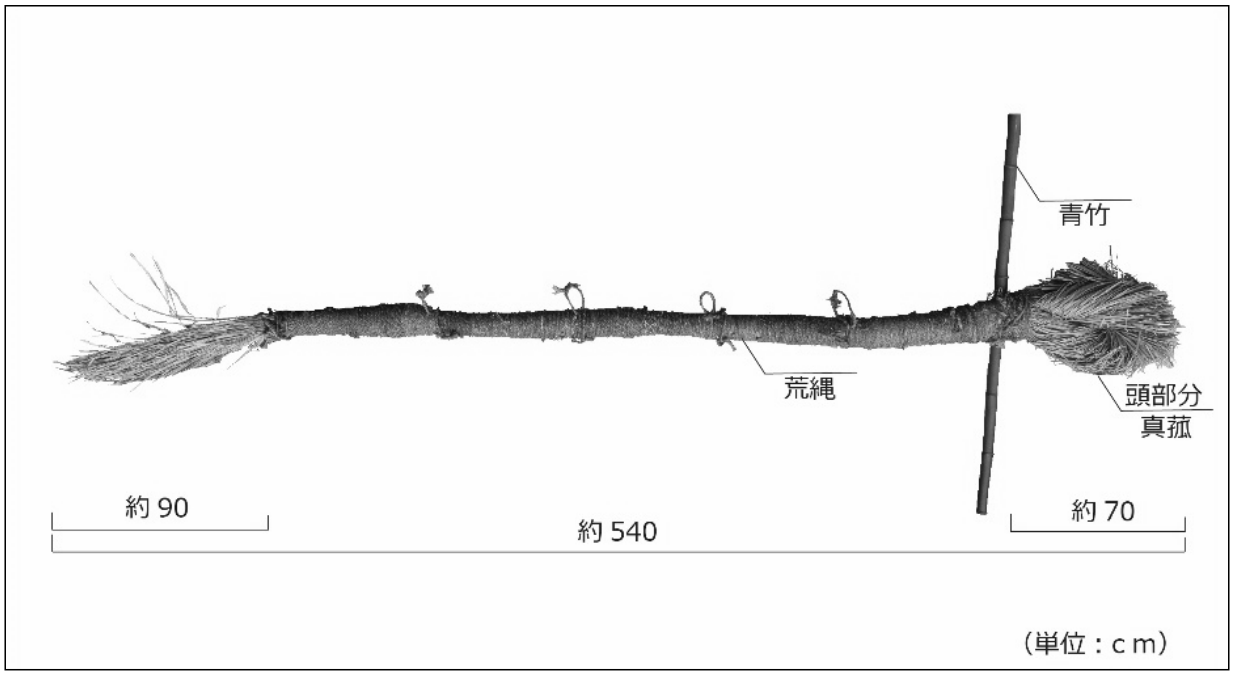


図　小茎のボンヅナ

時代によって人数は異なり、昭和三十一年（一九五六）生まれの男性の子供時代は三十人程で、更に、昭和四十八年生まれの男性の子供時代は五十人程で盆綱を行っていたという。その一方、保護者たちの記憶によると、最小は四人だったという。しかしどんなに人数が増減しても、ボンヅナは一つしか作らないという。

なお、四十歳前後の男性の話では、二十五年前までは保護者は同伴せず子供だけで盆綱をしていたが、今は交通量の問題から同伴する必要があるという。

現在は真菰を田んぼの脇で刈るが、昭和三十一年生まれの男性の頃は、船を持っている人から船を借りて、牛久沼の浮島で真菰を採っていた。

また、かつてはボンヅナを橋の欄干から投げ落とす際に火をつけていたが、落下した後に、火のついたボンヅナが牛久沼の浮島に流れ着いて延焼騒ぎになったことから、火をつけなくなった。

〔所見〕

行事は子供が主体であるという認識が、小茎の盆綱行事の特徴の一つであろう。子供会をはじめ、大人が行事の手配をしてはいるが、ボンヅナの先導や集金、子供たちの統率と日時の決定、金銭の分配は、特に中学三年生が一任されている。女性の保護者もいたが、弁当手配などの裏方役としてセンターに常駐していたのに対し、付き添いや指導を成人男性が行っていることから、主として男性が携わる行事である。

かつて盆綱を経験した保護者は、「こういう行事はあった方がいい。何も知らずに大人になるよりずっといい。今から何か新しくする気もない」という。盆綱が単なる盆行事ではなく、子供たちの成長面に何らかの影響を促すものとして捉えられているようだ。また、ボンヅナに関しては、人数が多い頃は現在のもの（令和元年は胴部分の最も太い部分の直径は三十cmであった）より太く重かったという。そのため、ボンヅナの素材や作成方法は同じでも、年によって全長や幅に変化はあると考えられ、それによる移動の機動性が変化するので、今年のボンヅナの全長や行事の時間はあくまで目安として捉えるべきである。

小茎の盆綱は、集合墓地三か所はまわるが、その周辺にある個人墓にボンヅナは行かない。そして三か所の集合墓地をまわった後は「仏さんが乗った」として、地面に置くことも跨ぐことも避けられている。また、盆綱と並行して個々の家での盆行事が営まれていることから、ボンヅナは精霊が墓地から家々へ向かうための乗り物であり、小茎の盆綱は特定の家を軸に行われるのではなく、集落全体としての盆行事と言える。

〔情報提供者〕

片野　隆さん
片野　淳一さん

〔参考文献〕

茎崎町史編さん委員会編『茎崎町史編さん資料　近世・近代史料集』茎崎町、一九九三年
茎崎町史編さん委員会編『茎崎町史』茎崎町、一九九四年
茎崎村教育委員会編『茎崎村史』茎崎村　一九七三年
竹内理三編『角川日本地名大辞典　8　茨城県』角川書店、一九八三年
細谷益見編『茨城県町村沿革誌』弘文社、一八九七年

〔参考資料〕

国土地理院うぉっちず（http://maps.gsi.go.jp）
つくば市令和元年度行政区別人口表（https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/jinkohyo/1007028.html）

（渡瀬　綾乃）

一九　下岩崎（つくば市）の盆綱

〔地区名〕

つくば市下岩崎地区

〔地区の概況〕

大字下岩崎は、つくば市の南東に位置し、龍ケ崎市と境を接する。牛久沼に向かって半島状に突き出た地形の一画を占め、水辺の低地には水田が広がり、そこから一段上がった台地上に集落と畑が展開している。かつては牛久沼の中にも水田があり、人々は田舟に乗って農作業に出掛けた。これは「浮田」とよばれるもので、沼に生い茂っている真菰（マコモ）を刈り採り、浅瀬につなぎとめ、冬に沼の泥を掻き揚げて土を確保することで水田化したものである。沼では漁もできたし、子どもたちは水泳をした。地域の人々にとって牛久沼は、まさに生業・生活の場であった。

大字下岩崎の南端にある泊崎城跡は、中世に小田治朝の六男岡野宮内小輔康朝が館を構えたとされ、その子孫が岩崎勘解由といい、この地を支配した。もともとは岩崎下村と呼ばれていたが、元禄期（一六八八～一七〇四）に下岩崎村へ改称したという。寛政七年（一七九五）は幕府領と旗本領、幕末は前橋藩領と旗本領の相給地であった。明治二十二年（一八八九）の町村制施行により、河内郡茎崎村下岩崎となった（明治二十九年に河内郡は信太郡と合併して稲敷郡となっている）。その後、昭和五十八年（一九八三）に単独町制施行により茎崎町下岩崎となり、平成十四年（二〇〇二）につくば市へ編入されて、つくば市下岩崎となった（以上の記述は主に『茎崎町史』による）。

大字下岩崎には、下岩崎・泊崎・細見・小山地区、さらに新興住宅地のあしび野・自由ヶ丘・富士見台地区があり、それぞれが行政区となっている。大字下岩崎の範囲は、江戸時代には下岩崎村として把握されていたわけだが、元禄八年（一六九五）の下岩崎村の「五人組帳」には、「八崎村」（泊崎村）、「細見村」といった小字を冠した村名称がみえる。このことから、大字下岩崎のなかには、江戸時代の段階から実態としてひとつの村（ムラ）として把握される単位があり、それが現在の行政区の一部に引き継がれているものと理解できる。そして、今回報告を行う「下岩崎の盆綱」とは、大字下岩崎のうち下岩崎地区において伝承されているそれであり、泊崎・細見地区などは含まれない。

下岩崎地区の戸数は九十五軒ほどである（平成三十一年時点の世帯数は一三七、人口は四二一人）。地区の内部は、「内山口」・「宿口」・「館山」・「出口」の四つの集落に分かれている。このうち館山は、前述した岩崎氏の継嗣岡野左衛門が館を築き居住したところとされている。

下岩崎地区内にある寺社のうち、曹洞宗の岩崎山守徳寺は、岩崎勘解由が母の菩提を弔うため天文三年（一五三四）年に創建したと伝えられる。下岩崎地区の家はほとんどが檀家になっている。境内にある墓地は、盆綱の時に先祖の霊を乗せる場所となる。貴船神社は、岡野康朝が応永年間に山城国の貴布祢神社を勧請したものという。岡野家の守護として祀られ、後に下岩崎村の鎮守になった。このほか文禄元年（一五九二）の建立と伝わる観音堂があり、その境内には「下岩崎集落センター」が建てられている。地区内の人々が日常的に集まる場所であり、ボンヅナをつくる作業は境内の広場で行われている。

写真１　守徳寺の山門をくぐるボンヅナ

〔実施主体〕

小学生、中学一・二年生（年長者となる中学二年生はアタマとかオヤカタと呼ばれる。以下、「親方」で記述を統一）、新盆の家の男性、親方の家族、塚本和男さん

〔実施日〕

① 準備

七月最後の土曜日ごろ（真菰を集める）

八月十三日の朝（ボンヅナをつくる）

② 迎え

八月十三日の夕方

③ 送り

なし

〔綱の形状〕

下岩崎では綱自体のことを「ボンヅナ」と呼んでいる。「ジャ」の形につくるといわれ、麦藁の部分が頭に、真菰の部分が胴体に見立てられる。令和元年に製作したボンヅナは、頭部が一m、胴部は四mであった。頭部にはボンヅナを引くための井戸綱がV字につく。井戸綱から胴先までのボンヅナ全体の長さは十二メートルであった。

胴部を形づくる真菰は、根元を束ねた状態のままで編みこんでいく。編みこみの際には、根元側を長く突き出すようにして真菰を足していくため、胴部は芒（ノギ）のような形態になる。このほか、胴部にはボンヅナを引く際に舵取りをするための「引き綱」が取り付けられる。これは集落内を巡行する際、道の角々でボンヅナを自分の側に引きつけて曲げるためのもので、中学生が主に操作をする。

〔詳細〕

① 準備

ボンヅナに使用する真菰は、各家が牛久沼で予め刈り採っておき、子供たちが集めにきた時に渡す。真菰を集めるのは七月最後の土曜日が多く、その日程については回覧板で各家に知らせておく。集めた真菰は下岩崎集落センター敷地内の小屋に保管する。真菰を集める際には集金も行われる。子供が盆綱に参加する家は千円、子供をださない家は千五百円、新盆の家は二千円を集めている。集めたお金は子供たちの飲み物や食事代に充てられ、行事の最後に図書券などの形で分配される。

ボンヅナは八月十三日の朝に作る。ボンヅナを作るのは、新盆の家の男性たちの役割であり、小学生と中学生（中学二年生まで）の子供たちがこれを補佐する。しかし、現在は人手不足や世代交代の関係から、塚本和男さん（昭和三十三年生まれ）がボンヅナを作るにあたって中心的な役割を果たしており、親方の家族も製作を手伝っている。

以下、令和元年（二〇一九）のボンヅナを作る様子について記す。この年に参加した子供たちは男女あわせて十九名（小学生十四名・中学生五名）であった。親方にあたる中学二年生は三名いた。朝のボンヅナ作りに参加した大人は、六軒の新盆の家の人たち、親方の家族（祖父や母親など）、塚本さんらで十三名であった。

作業は午前八時三十分から集落センター敷地の広場で始まった。人々が集まったところで、塚本さんが声をかけ、促された子供たちが小屋に保管し

写真2　ボンヅナをつくる

てあった真菰を外へ運びだし、広場に積みあげた。この間に塚本さんは麦藁・井戸綱（二本）・縄などを用意して作業の段取りをした。麦藁は、地区内で麦を育てる農家がなくなってしまったため、塚本さんがつくばみらい市の知り合いの農家に頼んで確保している。井戸綱は、昔は実際に家の井戸で使用していたものを譲りうけていたが、今は運動会の綱引き用の綱を使っている（したがって、厳密には井戸綱とは呼べないが、地元の方たちの呼び方に即して以下、「井戸綱」と表記する。なお、ボンヅナの部分名称は特に定まったものはないが、「ジャ」の形につくるということから、麦藁で作る先頭の部分を「頭」、真菰の部分を「胴体」と仮称して記述する）。

準備が整うと、初めにボンヅナの頭から作り始めた。まず、高さを揃えた麦藁を大人が一抱えになるくらいの太さにして束ね、根元の部分を縄で縛る。次に、束ねた麦藁の半分の位置に井戸綱（井戸綱Aとする。以下、同じ）を通して折り返し、そのまま引っ張って両端の長さを揃える（**図1-①**）。この井戸綱Aは、子供たちがボンヅナを引っぱる時の引き綱になる。次に、もう一本の井戸綱Bを、井戸綱Aと直交するよう麦藁の束の外側に回して結ぶ（**図1-②**）。井戸綱Aと井戸綱Bは、麦藁を介して大きく咬み合うような形になる。この井戸綱Bはボンヅナの胴体を編む際に芯となる綱である。続いて麦藁のもう片方を縄できつく巻いて、井戸綱Bを押さえる。藁を束ねるために巻いた上下の縄に縛りつける形で、三本の長い縄を伸ばしていく（**図1-③**）。この三本の縄は真菰と一体化させながら撚

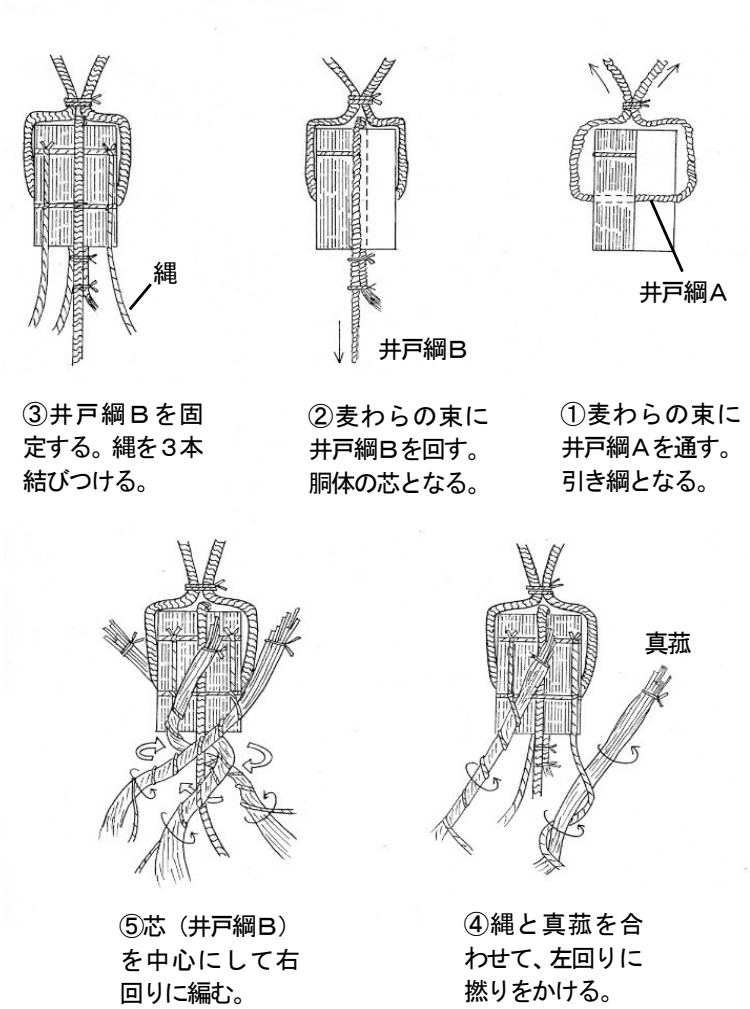


図1　ボンヅナ頭部から胴部の製作工程模式図

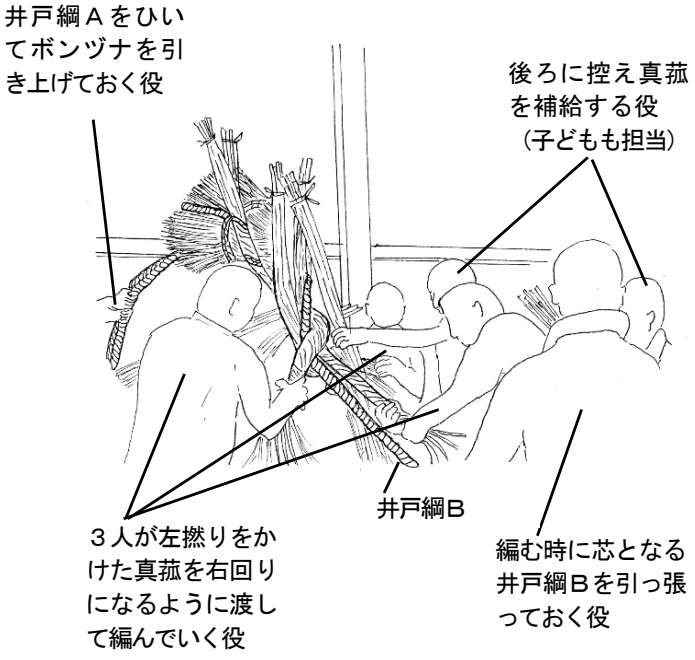


図2　ボンヅナを編むときの役割

りをかけていくためのもので、どの程度の長さの胴体に仕上げるかに応じて必要な寸法が決まってくる。

ここまで完成したら、真菰を使って胴体部分を編んでいく。敷地内のカーポートの桁にアタマの部分をあてて、井戸綱A・Bをそれぞれ引き合うように固定する（むかしは敷地の大木や火の見櫓を利用した）。大人三人がそれぞれ真菰と縄を一体にさせながら左回り（反時計回り）に撚りをかける（**図1-④**）。三本とも同時に撚りをかけ、その撚りが戻らないように強く握ったまま、井戸綱Bを芯にして右回り（時計回り）方向の人に手渡して綱を編む（**図1-⑤、図2**）。編む人は後ろに控えている人から真菰の束を受け取って付け足し、左回りに撚りをかけ、右回りに渡すことを繰り返す。真菰を補充する作業は小学生（低学年）たちも手伝った。編み進めていくと、次第に胴体が重たくなってボンヅナが下がってしまうので、作業の便を助けるために頭側には梯子をかませておく（**写真2**）。

予定した長さになると、真菰を足すのをやめて、そのまま三つ編みにする。最後はほどけないように数か所を縄で縛る。胴体が完成するとボンヅナを下ろして、舵取り用の縄と頭に台車を取り付ける。舵取り用の縄はボンヅナが曲がるときに胴体の向きを操るためのものである。台車は板に車をつけた簡易なもので、ボンヅナを引く子供が少なくなったことから、頭の下に取りつけられるようになった。もっとも、昔は舗装されていないでこぼこ道だったので、アスファルト舗装がされた現代だからこそできる工夫だという。

写真3　完成したタカバリ

写真4　完成して辻に運ばれたボンヅナ

写真5　ボンヅナの出発

ボンヅナを作る作業に並行して、中学生やその母親たちによって集落センターの玄関前で「タカバリ」がつくられた。タカバリはボンヅナが巡行するときに行列の先頭に立つもので、高さ約二mの竹でつくられる。その名称からして「高張提灯」に由来するものであろう。実際に下げられる提灯は新盆に用いられる白い盆提灯で、提灯の上部には六方向に竹ひごを伸ばしたものがとりつく。この竹ひごには様々な色を取り合わせた折り紙を貼りつけ、先端にはジャガイモを挿し、小さな盆提灯を下げる（**写真3**）。提灯の内部には蝋燭を立てて火をともしていたが、提灯を燃やしてしまうため、今は電球を下げるようになった。

ボンヅナをつくる作業が四十分程で終了すると、親方が宿口の入口にあたる辻までボンヅナを引いて行き、道路の端に寄せておいた（**写真4**）。この日は雨の心配があったためブルーシートがかけられた。ボンヅナを作り終えた参加者たちは集落センターに上がって、親方の母親たちが用意したアイスやお茶をいただき、しばらく談笑して解散した。

② 迎え

午後六時頃になると、子供たちがボンヅナの置かれた辻に三々五々集まってきた。子供たちは体操服姿で学年ごとに色分けされた鉢巻をしめ、提灯を手にしている。

六時十五分、親方が鳴らした爆竹を合図に守徳寺へ向けて出発した。小学六年生がタカバリを掲げて行列の先頭に立つ。ボンヅナは親方の男子が先頭で引っ張り、その後ろに小学一年生から六年生が学年順に並んで綱を引く。胴体に付けられた舵取り用の縄は中学一・二年生たちが受けもつ。掛け声は「わっしょい、がっしょい」の連呼で、ボンヅナは引きずられる形で道を進んだ。

定められたルートを通り五分ほどで守徳寺山門の坂下に到着すると、親方が爆竹を鳴らし、ボンヅナは山門をくぐり抜けて境内に入った（**写真1**参照）。このときには、先祖のお迎えにきた人たちが境内にたくさん集まっていて盆綱の様子を見守る。山門から本堂の近くまで直進すると、ボンヅナをおろして休憩になる。寺からは飲み物の振る舞い（接待）があった。この休憩の時間を使って、タカバリや子供たちのもつ提灯に火がともされる。提灯へ火がともることはボンヅナに先祖が乗った「印」だとされる。

十分ほど休憩をとると、寺を出発して巡行が始まった。館山を通って、出口から内山口へと決められたルートを進む。下岩崎では家一軒一軒に立ち寄ることはなく、綱を引きずり生活道路を歩くだけである。掛け声

写真6　守徳寺（墓地）で提灯に火をともす

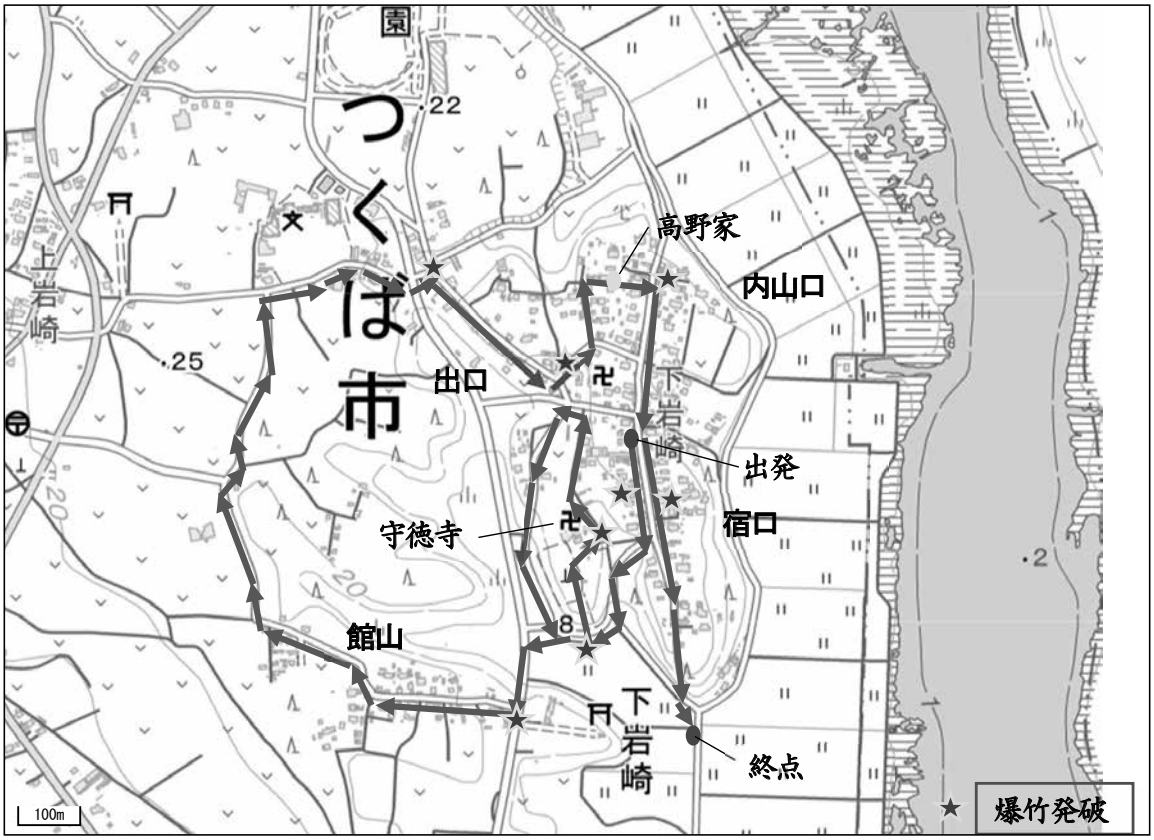


図3　順路図

写真７　集落内の巡行を見守る人たち

写真８　高野家での休憩

は終始「わっしょい、がっしょい」で、声が小さいと中学生たちから「声をだして」と檄が飛ぶ。途中、民家が途切れた後、再び民家に近づく時には親方が爆竹を鳴らして盆綱がやって来たことを知らせる。ルート沿いの家では門口まで出て、盆綱が通るのを見守ったり、子供たちに声をかけたりしていた（**写真７**）。この日は暑かったことから、水分補給のための小休止が二回あった。

七時二十五分、内山口にある高野家に着くと子供たちへの振る舞い（お茶出し）があり、長めの休憩をとった。高野家が休憩場所となるのは、守徳寺と高野家との古い関わりに由来するとされる。また、高野家が集落の北端にあり、この家だけは庭を通過して集落東側の通りに出ないと、盆綱がルートを逆戻りすることになってしまうからだともいう。

二十分ほどの休憩を終えると、再び通りに出て、そのまま宿口の集落内を南下して台地を下り、水田へ出た。そして、水田脇の通行の邪魔にならない場所にボンヅナが下ろされた。親方はその近くで余った爆竹を鳴らし、そのまま皆で歩いてセンターへ戻った。時刻はちょうど八時であった。

センターへ戻ると、母親たちが手配しておいた弁当が用意されていた。子供たちは弁当を食し、最後に図書カードなどが分配されて盆綱の行事は終了した。

〔綱の取り扱い〕

下岩崎では、ボンヅナを跨いではいけないなどという禁忌はなかった。むしろ、昔は上級生が盆綱に跨って邪魔をしてしまい、重たくなったボンヅナを引くのが大変だったという。「小さな子供たちにとっては試練だった」と語る話者もいた。雨が降るとボンヅナが水を吸ってさらに重みが増してしまい、大変だったそうだ。

盆綱の翌朝（十四日）、ボンヅナは親たちが燃やして処分される。その際に井戸綱や台車は回収する。実際の井戸綱を使っていた頃は使い古しだったので、取り外さずにそのまま一緒に焼却することができた。

写真９　水田脇におかれたボンヅナ、タカバリ

〔各家の盆行事〕

墓掃除は家ごとに行い、集落で一斉に実施することはない。

新盆の家では八月九日頃に高灯籠を庭に立てる風習があった。しかし、各家単位で高灯籠を立てるのは大変なので、いつの頃からか新盆の家の人たちが、共同で集落センターの敷地に一基だけ立てるようになった。そのため、お盆の期間は新盆の人たちが集落センターにつめていた。だが、二十年程前に高灯籠の風習はな

くなったという。

八月十三日、早い家では朝から墓地（守徳寺）に行ってお供えをし、提灯に火をともして先祖を迎える。お供えは里芋の葉に細かく刻んだナスとアラヨネを載せたもので、むかしはお供え用の棚を作った。多くの家では夕方に墓地へ迎えにいって、盆綱が出発するのを見守りながら提灯に火を灯して家に持ち帰る。提灯の火を仏壇に移すことにより、先祖の霊を迎えた。各家で盆棚を作ることはない。盥などを縁側に用意することもない。

八月十四日・十五日は新盆の家に挨拶にいく。

八月十六日は、午前中に守徳寺で施餓鬼（新盆大施食会）が行われるので、新盆の家が出席をする。また午後には、新盆の家と希望者へ塔婆が授けられる。この日は各家の送りの日になっており、提灯に火をともしてお寺へ送っていく。

〔歴史的変遷〕

① 実施主体について

盆綱は、小学三年生～中学二年生までの男子が行うものだった。それが遅くとも昭和四十五年までには小学一年生から参加するようになり、子供が少なくなったことで、十年以上前から女子も参加するようになった。四十～五十人もの子供たちが参加していた頃の盆綱は、現在の二倍を超える長さがあったという。当時は舵取り役の中学生がたくさんいたので、長いボンヅナを引きずっていても、道の角を曲がるのは容易だった。

かつて、真菰の準備は子供たちだけで行っていた。牛久沼に田舟を出して真菰を刈り取り、材料の準備をした。夏休みになると、毎日のように田舟がでていたという。しかし、子供たちだけでの真菰の準備が難しくなったことから、現在は各家で用意をしてもらうようになった。頭部に台車をつけるようになったのも、少ない子供たちで引けるようにした工夫である。

ある年配者は、盆綱は子供たちが初めて体験する経済活動だったと語ってくれた。昔は集めたお金を親方がいかに使い、どの位を取り分として残せるかが子供たちの関心事であった。残ったお金は親方らの裁量で分配した。モノが豊かでなかった頃は、お金を工面して残し、自転車に乗ってマチ場で梨やバナナを買い求め、皆で分けた。子どもにとっては大きな楽しみだったという。現在は親たちの管理する部分が大きい。

ボンヅナ自体を編む作業は、昔から大人が担ってきた。ただし、新盆にあたる家の人が出てくることから、毎年決まった人が作ることにはならない。人手不足や世代交代も進んだことから、その製作技術の伝承が難しくなってきた。そのため、塚本さんのような毎年中心的な役割をする方の存在が必要になっている。塚本さんは、小学校低学年から中学生二年生までの年の離れた子供たちが、地区の中で一緒に活動するこの行事を大切にしたいと考えており、協力をしているという。

② 墓地・守徳寺のこと

戦前は、守徳寺境内のお墓の中をボンヅナが回ってから出発した。しかし、墓石が増えてからは、墓地で盆綱を引くのは危なくなりやめた。盆綱が終わると、その晩のうちにタカバリの提灯を守徳寺に持っていって納めた。提灯を持っていくとお寺からお金をもらえたという。その頃は提灯を毎年新調していたが、今は親たちが提灯を保管しておき再利用する。

〔所見〕

①「仏迎え」とその二重性

下岩崎地区の盆綱では、墓地のある守徳寺でタカバリや手持ちの提灯に火を灯すことにより、ボンヅナに先祖の霊が乗り、ボンヅナが巡行することで各家に先祖の霊が迎えられると認識されている。そのため巡行は、墓地（寺）を出発点として集落を大きく一周するような形で行われる。戦前は墓地そのものを回ってから出発していたことや、ボンヅナを編む作業が新盆の家々によって担われてきたことからも、下岩崎の盆綱は「仏迎え」

写真10　先祖の霊を迎えにきた人々とボンゾナ

の行為とみて間違いない。

ただし、各家でも十三日に墓地へ行き、提灯に火を灯して家ごとに先祖を迎えることが並行して行われている。多くの家が夕方に墓地に訪れるため、各家の提灯を持った人々が、盆綱の休憩・出発の場に居合わせることになる（**写真10**）。見守る人々は百名近くもいた。このことは、盆綱によってなされるムラとしての仏迎えと、イエを単位とした仏迎えとが、いわば二重に行われていることを示している。なお、下岩崎では盆綱による迎えはあるが送りはなく、送りは十六日に家ごとに行っている。

②　寺の関与

守徳寺では出発前に接待があり、かつては使用したタカバリの提灯を寺に納めにいた。しかし、住職（僧侶）が読経をしたり、ボンゾナを清めたりすることはなく、行事そのものに直接関与をしている印象はうすい。先にも述べた通り、盆綱は寺としての行事というよりも、境内にある墓地を出発点にした行事と考える方が妥当かと思う。なお、高野家が守徳寺と関わりがあったことから休憩をするという伝承は興味深い。詳細は不明だが、高野家は守徳寺の世話役を務めた家であったといわれる。

③　真菰でつくるボンゾナ

下岩崎地区のボンゾナは、牛久沼の真菰を利用して作られている。真菰は各家から提供を受けているが、これは元々子供たちが集めていた。真菰で綱を作るのは隣接する小茎地区でも同様であり、牛久沼が身近であった地域の特長といえるかもしれない。ただし、小茎のボンゾナとは形態が大きく異なっており、同じ材料を利用しながらも個性があることがうかがえる。

また、タカバリが先頭につくのも下岩崎地区の特長である。これは高張提灯のことであろうが、色紙で飾りをつけ、先端にジャガイモを挿す。盆綱の先頭に大きな提灯が立つのは阿見町実穀にもみられるが、事例としては少ない。なぜ、ジャガイモなのかは不明であった。

〔情報提供者〕

塚本　和男さん（昭和三十三年生まれ）

〔参考文献〕

『茨城県の地名』（日本歴史地名体系八）、平凡社、一九八二年
茎崎町史編さん委員会編『茎崎町史』、茎崎町、一九九四年
茎崎町史編さん委員会編『茎崎町史編さん資料』（近世・近代史料集）、茎崎町、一九九三年

〔その他〕

曹洞宗岩崎山守徳寺ホームページ（最終閲覧日：二〇二〇年五月二十三日）https://shutokujisotoshu.wixsite.com/shutokuji

（萩谷　良太）

二〇　栗原（つくば市）の盆綱

〔地区名〕

つくば市栗原

〔地区の概況〕

つくば市栗原は、茨城県南部、つくば市の中央部に位置し、平成二十七年（二〇一五）年四月一日時点で、世帯数六四五戸（一六一一人）で構成されている地域である〔つくば市、二〇二〇〕。

現在のつくば市の市域は、昭和六十二年（一九八七）の大穂町・豊里町・谷田部町・桜村の合併によるつくば市の成立、翌六十三年の筑波町の合併及び平成十四年（二〇〇二）の茎崎町の合併によって成立したものである〔つくば市、二〇一八①〕。栗原は、このうち桜村に属していた。その桜村は、昭和三十年（一九五五）に栄村・九重村・栗原村が合併してできた村であり、現在の栗原は、この栗原村（明治二十二年（一八八九）に栗原・上野・蓮沼の各村が合併して成立、その後昭和二十八年に蓮沼の一部が大穂町に編入）にあたる〔日本歴史地名大系　第八巻『茨城県の地名』一九八二〕。また『桜村史』には、桜村概況（小字一覧）の中に栗原の記載がある〔『桜村史』上巻、一八九二〕。

栗原は、台坪・中坪・下坪・乾島の四つの地区に分かれている。このうち、現在も盆綱を継承している地区は、下坪を除いた台坪・中坪・乾島の三地区である。

Ⅰ　台坪地区

〔台坪の概況〕

台坪地区は旧栗原村の西部に位置し、地区内を県道一二八号土浦大曽根線が走っている。世帯数は二百程で、一～十二班に分かれている。昭和五十年（一九七五）頃に団地が出来、また転居により新しく家を構える人が増えて世帯数が増加した。昔から存在する班は一班～五班で、特に二班は栗原の下坪地区から最初に台坪に移り住んできた人たちが住んでいるという。

集落の集会場所である台坪研修センターは、昔万福寺という寺院があったと言われている。古くからの家の多くが万福寺の檀家であったが、明治時代頃に万福寺が廃寺になったため、乾島地区に檀那寺を変える家が多かったという。現在は研修センターのほか、墓地やボンヅナの材料となる小麦藁を保管する虚空堂がある（**写真１**）。

写真１　研修センターの虚空堂

〔実施主体〕

実施主体は小学五年生～中学三年生の男女約二十人である。平成三十年（二〇一八）までは、子供は小学六年生以上であったが、令和元年（二〇一九）から小学五年生も含まれるようになった。また、女子が参加するのは四年ぶりのことであるという。

盆綱に参加する子供たちの保護者同士で、「台坪盆綱役員」という組織が結成されている。盆綱の準備から片付けまでの段取りや調整は、盆綱役員の保護者たちが担当している。盆綱役員の長を「親方」と呼び、中学三年生の保護者が務める。令和元年は二人の保護者が親方を務め、一人は警察への道路の使用許可などの外部機関との交渉、もう一人は主に準備の取りまとめを行っていた。

また、ボンヅナ作りの際には、昔から台坪に住んでいる高齢の方が数名参加し

て、子供たちや父親らに作り方を指導する。

盆綱参加者（盆綱役員を構成している家族）は、参加料として一家族当たり千円ずつ収めている。このお金と、台坪地区から支払われる補助金が主な運営費となる。盆綱当日は一家族一合のお米を持参し、終了後の夕飯に充てる。

〔実施日〕

① 準備　親方を中心とする台坪盆綱役員のメンバーが、五月中旬頃から打ち合わせを行い、つくば市役所、つくば中央警察に道路使用届、道路許可申請書を提出する。
　製作　八月四日、十一日、十三日、午前八時～十二時頃　ボンヅナ製作
② 迎え　八月十三日　午後四時～午前零時。雨天決行
③ 送り　なし
④ 片付け　八月十四日午前中

写真２　小麦わらの上から縄を巻く

写真３　ボンヅナの胴体に持ち手を挿す

〔綱の形状〕

主な素材は竹、笹、縄、小麦わらである。小麦わらは、台坪の外に住んでいる小麦を作っている農家にお願いして分けてもらい、研修センター敷地内の虚空堂（**写真１**）の中に保管しておく。竹や笹は、研修センター周辺の竹林所有者の許可を取って採集する。

芯になる竹に縄を巻き、その上に小麦わらを束ね、緩まないよう縄で二～三回締め直す（**写真２**）。持ち手となる竹二本を胴体前部に突き挿した後（**写真３**）、バーナーで炙って曲げた竹の上から、小麦わらを巻いて作った上顎と下顎を付け、さらに竹で作った歯を両顎に突き刺して口を作る（**写真４**）。口の中には提灯や水引も付ける。また、胴体後部には縄で持ち手を作る。胴体の上に笹を乗せ、十三日の朝に研修センター周辺で採集する「トンデンバラ」と呼ばれるトゲのついた植物を尾の部分に付けて、龍の尾を表現する。尾にはこの他に竹で作った鳴子も付け、頭に大工が作ってくれる「御神」を三つ付けて完成である（**写真５**）。

写真４　ボンヅナの口

写真５　完成したボンヅナ

〔綱の取扱い〕

移動する際は、ボンヅナの前部を持つ子供たちは、胴体に刺さった竹の持ち手を握り、後部を持つ子供たちや母親らは、胴体に付けた縄の持ち手を握り、胸の前辺りに持って移動する。

〔詳細〕

① 準備

八月に入ると、台坪研修センターでボンヅナを製作する。まず八月四日に、竹林でボンヅナの芯や持ち手となる竹や笹を切り出し（**写真6**）、研修センターまで運び、胴体や顔を作る。そして十一日は、持ち手の装着までを行い、十三日の午前中に、胴体に顔を取り付ける作業とトンデンバラや笹、「御神」などの飾り付けを行った。

胴体作りは父親たちを中心に行い、子供たちはボンヅナ（龍とも呼ぶ）の牙、持ち手の製作を行った（**写真7**）。若い保護者や他から引越してきた保護者は、ボンヅナの作り方がわからないので、地元の高齢の方から詳しく教わっていた。

また、ボンヅナづくりと並行して、巡行中休憩する際にボンヅナを乗せる枕も作った。この間、母親たちは室内に待機してお茶汲み等を行っていた。

写真6　竹や笹を切り出し研修センターに運ぶ

写真7　牙を作る子供

② 迎え

八月十三日は、午後四時に台坪研修センターに集合する。子供たちは、虚空堂の周りを三周回ってから、出発点までボンヅナを持って移動する。母親たちは、子供たちと一緒にボンヅナを担ぎ（**写真8**）、父親たちは無線で連絡を取り合いながらボンヅナの前後について、警備や交通整理等を行う。ボンヅナの枕を載せた軽トラックも後ろから連いて行く。提灯を持つ子が「ボンダナゴーザッタ」と声を上げると、全員で「ホートケサーマゴーザッター」と続く。

盆綱に来てもらいたい人は、道沿いや家の前で待機している。また、古くからの家を中心に、必ず寄らなければならない家もある。新盆宅は、必ずまわることになっている。提灯を持つ子が家の人からお金を受け取ると、「ありがとうございました」のかけ声と共に、ボンヅナを高く持ち上げる（**写真9**）。

午後九時四十五分頃に巡行を終えると、その場でボンヅナを解体し、軽トラックに積んで、研修センター裏手の空地まで運んで焼却する（**写真10**）。焼

写真8　ボンヅナを持って移動する子供たちと保護者

写真9　掛け声と共にボンヅナを持ち上げる

却には中学生と大人数名が同行するほか、台坪の消防団にも手伝ってもらう。

焼却が終わると研修センターに戻り、母親たちが作ったカレーなどを食べる（**写真11**）。食事をしている間に、中学三年生はお金の分け前を決める。学年を考慮しつつ、準備に多く参加した子供ほどお金をたくさんもらえるという。

その一方で、保護者たちは盆綱の反省会を行う。「家に来てくれない」と不満を言うお年寄りが何人かいたが、昔から台坪に住んでいる人の情報がないと、必ず立ち寄るべき家がどこかわからない。事前に回覧板で住宅地図をまわして、盆綱に来て欲しい家に印を付けてもらうとか、耳が遠くなり盆綱のかけ声が聞こえない人も多いので、太鼓や鈴を鳴らしてみてはどうかという話が上がっていた。

その後食事の片付けをしながら、次年度の親方を誰にするか、保護者同士で話し合う。終わるのは午前零時頃であった。

③　片付け

翌十四日に研修センターの片付けや、ボンゾナ作りをしたセンター前の広場の掃除を行う。前日に決めたお金の分け前に従って、中学三年生が他の子供たちにお金を配る。その後、小麦わら、竹、水引をくれた家に親方が次年度の親方を連れて行き、お礼と次の年に向けた挨拶を行う。

写真10　ボンゾナの焼却

写真11　盆綱終了後の食事風景

〔歴史的変遷〕

昭和三十五年（一九六〇）頃（現在の盆綱の指導者が子供の頃）は、小麦わらは台坪地区内の小麦農家を一軒一軒まわって集めたという。藁がない家は代わりにお金をくれたので、そのお金でジュースなどを買っていた。今は地区内で小麦を作っている家がないため、台坪以外の小麦農家から分けてもらっている。麦の品種も変化しており、現在の小麦わらは昔のわらよりも短くなっているという。

またその頃は、ボンゾナ製作も、中学三年生の指導のもとに子供たち自身で行った。当時は子供が多かったので、ボンゾナに触ることが出来たのは中学生だけで、小学生は触らせてもらえなかった。また、盆綱に参加できるのは男子だけであった。現在よりも、もっと日数をかけて少しずつ作っていた。ボンゾナの太さは現在の倍近くあったという。その日のボンゾナ製作の作業時間が終わると、皆で桜川や天久保池に泳ぎに行っていた。子供はここで泳ぎを覚えるため、ボンゾナ製作に参加していない子供は泳ぐことができなかったという。

家の数も現在より少なかったので、「一番星が出る頃」に巡行を始めていた。当時はボンゾナの枕を軽トラックではなくリアカーで運んでいた。

昭和六十一年（一九八六）（現在の子供たちの父親が子供だった）頃の盆綱は、子供が主体でボンゾナを作っていたものの、実際にはボンゾナ作りに詳しい高齢の方が二～三人で指導していたという。当時は盆綱に参加するのは小学五年生以上で、ラジオ体操の後に準備に取り掛かっていたので、ほとんどの子供が参加していた。

現在は、他所から引っ越して来た家が増え、世帯数が増加しているものの、移住者の中には夜子供たちを歩かせたり、車の交通量が多い道路を巡

行させたりするのは危険だからとの理由で、子供を参加させない家も多い。一方で、以前は古い集落の子供しか参加出来なかったが、それでは子供の数が減り行事を成立させることが難しくなってきたため、新旧関係なく参加を認めている。

移住者が増えたことにより、どの家をまわらなくてはならないか、判断することが難しくなっている。まわる範囲も広がっているため、現在は夕方頃に出発しても、全てまわり終える頃には午後九時を過ぎる頃になってしまう。

〔所見〕

台坪は、世帯数の増加に伴い子供たちの数も増加しているが、移住者は保護者でも盆綱に参加した経験がなく、参加に非協力的である。そのため新旧を問わず子供たちの参加が求められており、準備は保護者を中心に念入りに行わなければならない。これは移住者がほとんどおらず、「盆綱＝男の子の行事」という意識が、地区全体で守られていた中坪とは対照的な特徴である。

また、中坪・乾島両地区のボンヅナはよく似ているものの、台坪のボンヅナは両地区とは形状が異なる。中坪・乾島の盆綱は北斗寺、台坪の盆綱は万福寺跡から出発することから、その地区の檀那寺の影響があるのであろうか。

〔情報提供者〕

台坪区区長、令和元年度盆綱参加者

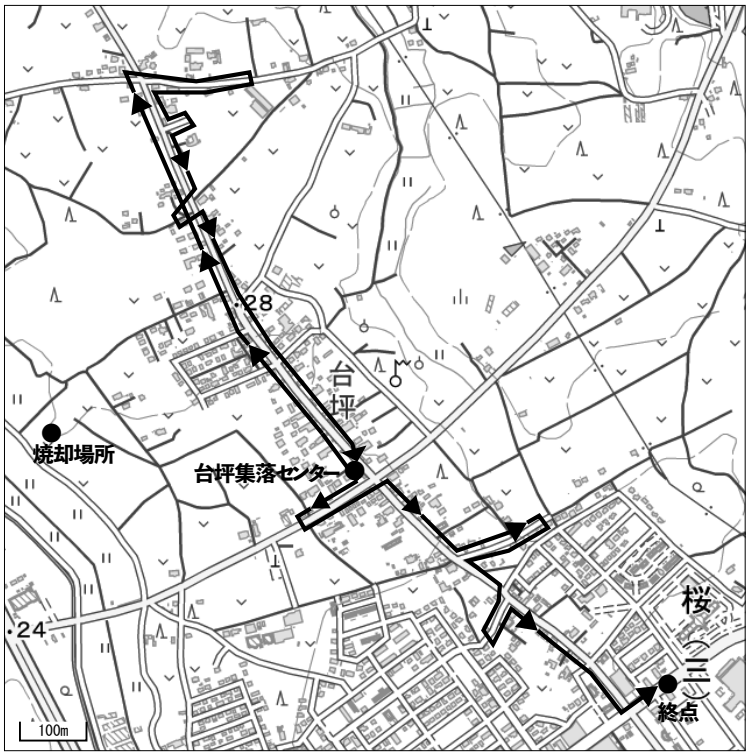
〔参考文献〕

『桜村史』上巻　桜村史編さん委員会編（一九八二）
『茨城県の地名』（日本歴史地名大系８）平凡社（一九八二）

〔参考資料等〕

台坪盆綱役員作「盆綱実施案」

〔つくば市、二〇一八①〕「つくば市年表（市誕生～二〇〇〇年）（二〇〇一～二〇一〇年）」（https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/profile/nenpyo1/index.html）（最終閲覧日：二〇二〇年九月二十八日）
〔つくば市、二〇一八②〕「行政区別人口表について」（https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/jinkohyo/1002340.html）（最終閲覧日：令和二年九月二十八日）
〔つくば市、二〇二〇〕「『茨城県の人口（町丁字別）』―二〇一五年四月一日現在―」（https://www.prefibaraki.jp/kikaku/tokei/fukyu/tokei/betsu/jinko/aza/aza27/index.html#mokuji）（最終閲覧日：二〇二〇年九月二十八日）



（藤崎　綾香）

Ⅱ　乾島（いぬいじま）地区

〔乾島の概況〕

乾島地区は旧栗原村の東部に位置し、周囲は水田に囲まれ、集落の東側には桜川が流れている。また、地区の南側は後述する中坪地区と隣接している。

世帯数は三十五で、地区内は三班に分かれている。集落の中心には北斗寺という真言宗の寺院がある。弘仁十二年（八二一）、僧最仙が勅命によって栗原台に北斗寺を建立し妙見菩薩を安置したが、その後移転を繰り返し、万治二年（一六五九）に現在地に本堂が再建された。寺には真言の秘宝を伝える「北斗寺仏儀次第」（県指定文化財）などが保管されている（『茨城県の地名』（日本歴史地名大系8、一九八二）。

〔実施主体〕

行事当日にボンヅナを引くのは、小学一年生から中学三年生の男女五人と高校生一人の計六人であるが、ボンヅナの製作主体は子供たちの父親である。父親たちがボンヅナを作る間、子供たちは巡行時に手に持つ提灯を作る。

〔実施日〕

① 準備　八月三日　午前八時から十一時半頃
② 迎え　八月十三日　午後六時から八時頃
③ 送り　なし

〔綱の形状〕

主な素材は竹、稲藁、縄である。竹と稲藁は地区内の家から調達し、縄はホームセンターで購入する。これらの材料を準備するのは、すべて子供たちの父親である。

写真１　竹を切る父親たち

写真２　竹の上から稲藁を巻く

盆綱の芯になる竹を四～五ｍの長さに切る（**写真１**）。その上から稲藁の束を紐で括り付ける（**写真２**）。さらにその上から縄を隙間なく、綱の太さが均等になるように巻き付けて胴体を作る。この胴体作りには一時間程かかる。巻き終わると、尾の部分をはさみで整え、胴体の稲藁がささくれた箇所も整えたら完成である（**写真３**）。

〔綱の取扱い〕

移動時は、ボンヅナの胴体に手拭いを括り付け、それを持ってぶら下げるようにして歩く。なお、ボンヅナを跨いではならないと言われている。

〔詳細〕

① 準備

準備は北斗寺に繋がる道沿いで行う。八月三日の朝八時に、子供たちとその父親が集合し、子供たちは乾島研修センターでで提灯づくり（**写真４**）、父親たちと高校生の男子一人は外でブルーシートを敷き、ボンヅナ作りに取りかかる。設計図などはなく、作り方を指導してくれる年配の方もいない。

写真３　完成間近のボンゾナ

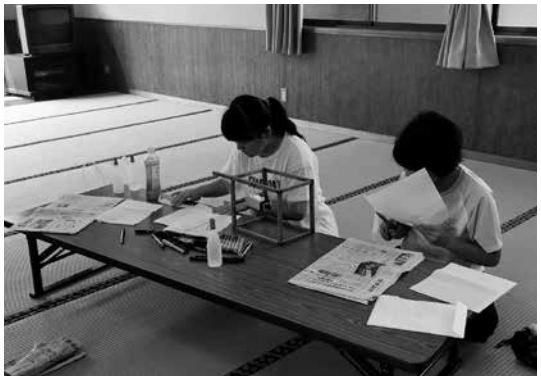


写真４　研修センターで提灯を作る子供たち

父親たちは皆乾島出身で、子供の頃に盆綱を経験しているため、その時の記憶を頼りに製作する。完成したボンゾナは、当日まで乾島研修センターで保管しておく。ボンゾナ作りを二時間程で終えた後は研修センターに戻り、子供たちと一緒にお菓子やスイカを食べて休憩し、一時間程で解散する。

②　迎え

八月十三日は、子供たちとその親が午後五時半頃に研修センターに集合する。ボンゾナの胴体に手拭いを巻き、それを持って巡行する。出発時間は六時に出発し、まず北斗寺でボンゾナの頭に付ける幣束（半紙を縦に半分にした大きさ）をもらってから乾島の各家をまわる（例外的に、乾島から中坪に分家した二軒もまわる）。なお、現地ではこの幣束を「ゴシンタイ」と呼んでいる。巡行する際は「わっしょい」「こらしょ」とかけ声をかける。

家に着くとその家の住人に挨拶し、住人から子供たちの代表者が御礼のお金をもらう。代表者がもらった金額を「〇〇円！」と全員に聞こえるように声を上げると、ボンゾナを持つ子供たちがそれに応えるように「ホートケサーマガゴーザッター」とかけ声を三回発しながらボンゾナを頭上に投げ上げる。一軒からもらえるお金は大体千円から三千円であるが、新盆の家は五千円や一万円くれることもある。

全ての家をまわり終えた後は、大人たちが乾島の北側の桜川の土手でボンゾナを焼却する。その間に子供たちは研修センターに戻り、皆でカレーを食べるが、中学三年生を中心に各家で頂いたお金を子供たちで分け合う作業も行う。お金は翌年の盆綱準備のための費用や今年度の夕飯代、差し入れのお菓子やジュース代を差し引いた金額を、子供たちだけで分ける。この作業に対し、大人は一切干渉しない。中学三年生は、子供たちのリーダーのような存在であり、巡行する際の掛け声の先導も担う。夕飯を食べ終え、お金を分け終えると解散となる。

〔各家の盆行事〕

各家では、八月十三日までに墓掃除を済ませ、家に戒名等が書かれた掛け軸を準備しておく。また、十三日には盆棚を作り、午後になると墓地まで仏さまを迎えに行く。地元の方によると、各家で既に仏さまを迎えに行っているので、盆綱は家に来た仏さまを慰霊する意味があるのではないかとのことであった。十四日以降は、知り合いに新盆の家があればお参りに行く。十六日には送り盆をすると共に、盆棚を片付ける。

〔歴史的変遷〕

子供たちの父親たちが盆綱に参加していた昭和五十年（一九七五）頃は、ボンゾナ製作時から大人は関与せず、子供たちだけで作っていた。ボンゾナの太さも現在のものより太かったので、重かったようだ。現在のボンゾナは、大人が一人で投げ上げることが出来るほどの軽さである。また当時は、ボンゾナの頭の部分は麦藁で作られていた。

製作にかかる日数も、現在は一日で作ってしまうが、当時は、数日かけて作ったという。子供だけで作るため集中力が無く、遊んだり他のことに

気を取られたりしていたので、時間がかかった。

盆綱に大人が介入するようになったのは、集落内の子供の減少が著しくなった十年程前からである。この頃からボンゾナの焼却時に食事（カレーなど）が出るようになった。それまでは各家をまわった時におにぎりや缶ジュースをもらっていた。特に新盆の家は、必ず準備してくれていた。また、昭和五十年頃はボンゾナに参加するのは男子だけであったが、平成十年代に集落内の小中学生が一、二人しかいなくなってしまったことをきっかけに、現在のように女子も参加するようになった。巡行する際に持つ提灯に蝋燭を入れていたが、重くて熱く、しかも途中で消えてしまうことが多いため、二年前から豆電球になった。提灯は二人の子供が持ち、各家からもらったお金を入れる財布を持つ役目の子も一人いたが、ボンゾナを持つ子が少ないので最近は大人が提灯を持っている。

以上のように、昭和五十年頃から現在までに生じた変化は、集落内の子供の減少を契機として、大きく分けて①ボンゾナのサイズの縮小、製作日数の短縮、②大人の介入、③女子の参加である。

〔所見〕

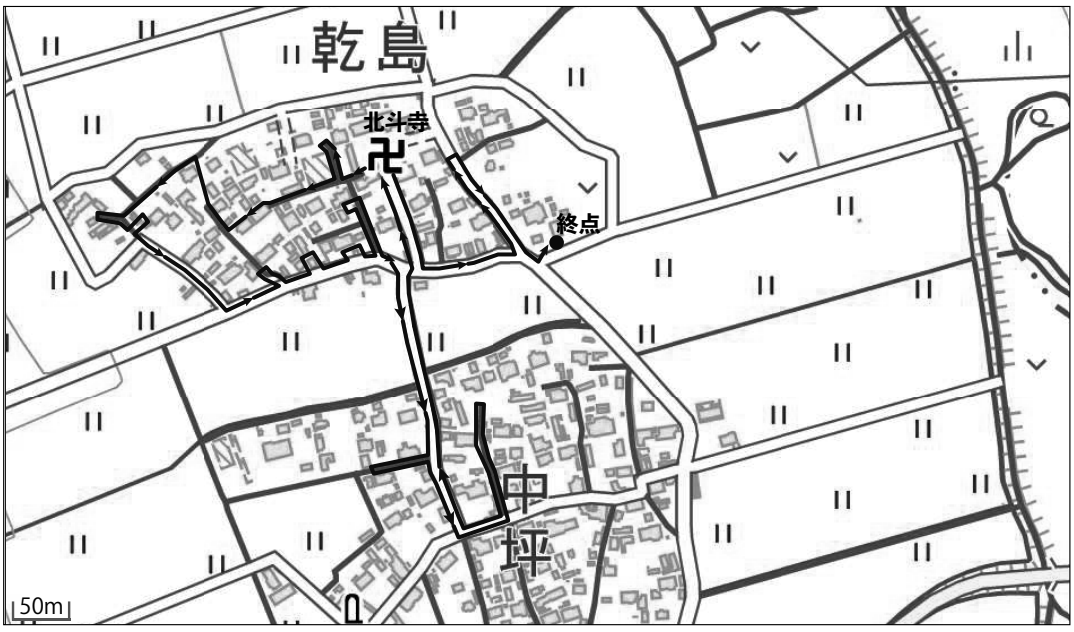
乾島は、台坪や中坪に比べて集落の範囲が狭く、世帯数も少ない。そのため両地区に比べて、参加人数や準備にかかる時間、ボンゾナのサイズが小規模である。

製作時に指導者がいなくても、子供たちの父親が自らの経験を頼りにボンゾナを作ることが出来る。しかしながら、人口減少と相俟って、子供の数も減少傾向にあることから、大人の介入や女子の参加など、変更を加えて何とか維持している状態である。今後も、盆綱をいかに継承していくか、乾島地区が抱える大きな課題になるだろう。

〔情報提供者〕

令和元年度乾島地区区長

令和元年度盆綱参加者の皆さん



（藤崎　綾香）

Ⅲ　中坪（なかつぼ）地区

〔中坪の概況〕

中坪地区は旧栗原村の東部に位置し、周囲は水田に囲まれ、集落の東側には桜川が流れている。北側は乾島地区と隣接している。国の重要文化財である大塚家住宅がある。

世帯数は七十で、地区内は一～五班に分かれている。班は近隣の家で分けている訳では無く、同じ名字の家同士で班を構成している。中坪は大塚・大沼・村野の名字が特に多いが、例えば主に大塚姓の家で構成された班のことを、地元では「大塚さんチーム」と表現する。

なお五班は、中坪に移住してきた人たちが増えたため、新しく作った班である。中坪に家があるものの班に入っていない家もあり、そのような家は「班外」と表記される。また、前述の世帯数については、これは中坪区会の構成世帯として登録されている世帯数である。中坪では、一つの屋敷地に二世代分、二世帯が住む場合があるが、その場合でも区会に登録されるのは一世帯である。そのため、実際の世帯数は七十よりも多い。

〔実施主体〕

小学一～六年生、中学一～三年生の男子十三人。
大人（子供たちの親）は盆綱当日の随行のみ行う。

〔実施日〕

① 準備　八月一、八、九、十三日　午前九時～十時半
② 迎え　八月十三日　午後五時～午後九時五十分頃
③ 送り　なし

〔綱の形状〕

主な素材は竹、稲藁、笹、縄である。竹・笹は数年前までは集落内の竹林から調達していたが、現在はアパートが建ってしまったため、大塚家住宅のご主人の許可を得て、その竹林から調達している。稲藁は、前年の九月頃に次年度中学三年生になる子（親方）の親が、稲作をしている農家や業者に稲藁の提供をお願いする。このように、材料調達の根回しは親方の親が行っている。

ボンヅナの構造は、大きく分けて胴体部と尾部からなる。ボンヅナの芯になる竹は、胴体部四～五m、尾部三m程で、その竹材の上から稲藁を括り付ける。さらにその上から縄を巻き付けて胴体を作る。この作業は、胴体の両脇に中学一～三年生が一人ずつ立ち、縄の束を両側から渡し合いながら強く巻き付ける（**写真1**）。この時小学生たちは、ボンヅナが動かないように押える役目を果たす。尾に笹を付けたら完成である。

写真１　胴体部分に縄を強く巻き付ける

写真２　ボンヅナを足の甲に乗せて休む

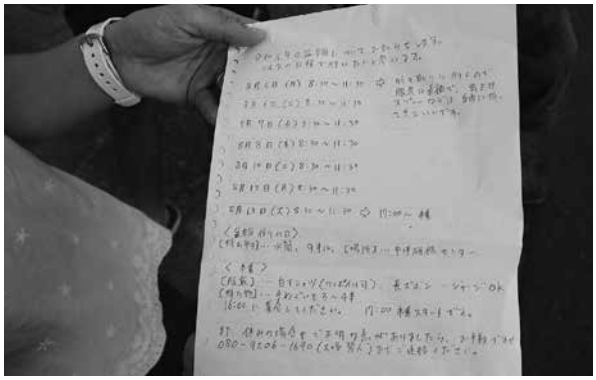


写真３　盆綱参加者に親方が配る予定表

〔綱の取扱い〕

移動時はボンゾナの胴体に手拭いを括り付け、それを持ってぶら下げるようにして歩く。また、ボンゾナを扱う上で、胴体を跨いだり地面に置いたりしてはならないと言われている。そのため巡行の際に休憩する時は、ボンゾナをビールケースや子供たちの足の甲に乗せて休憩する（**写真２**）。

〔詳細〕

①　準備

準備は中学三年生（親方）が中心となり、中坪研修センターで行う。親方は自分でボンゾナ製作の予定表を作成し、他の参加者に配っておかなければならない（**写真３**）。作り方を指導してくれる大人が一人いるが、あくまでも製作主体は子供たちである。準備は七日間に渡って行う。一日目はボンゾナ胴体部の芯になる竹を採取するほか、縄を水に浸しておく。二日目はその竹に稲藁と浸しておいた縄を巻き付け、三日目は尾部に笹を縛り付けて胴体部が完成する。平成三十年までは、提灯の作成も行っていたが、令和元年からは提灯の木枠を大工に作ってもらうようになったため、準備日には提灯に半紙を張り付ける作業のみを行っている。提灯は高さ二十五cm、底面二十四cm四方の直方体で、二十cm程の持ち手がついている。この直方体の四側面に、「お盆」の二文字、墓の絵、「金千円」の文字、盆綱当日の参加者の氏名が書かれている。提灯の作成は親方が行う。

②　迎え

迎えを行う八月十三日は、親方と次年度の親方が千円を持って北斗寺に行き、前述の乾島と同様、盆綱に付ける幣束（半紙を縦に半分にした大きさ）をもらいに行き、これをボンゾナの頭部に付けておく。なお、現地ではこの幣束を「ゴシンタイ」と呼んでいる。

午後五時に中坪研修センターに子供たちと随行する保護者が集合し、頭に付けていたゴシンタイを外してから出発する。提灯は小学一年生が持ち、ボンゾナはその胴体に手拭いを巻き、小学二年生以上がそれを持って歩く（**写真４**）。移動中は「ワッショイ」と掛け声をかけながら歩く。親方はゴシンタイと、各家からもらうお金を持って巡行する。随行は三～五人程が入れ替わりで行う。大人の役割はこの随行のみで、巡行も子供たちが中心となって行う。

家に着き、その家の住人が出てくると「ゴーザッタゴーザッター、ホートケサーマゴーザッター」と三回掛け声をかけながらボンゾナを持ち上げる（**写真５**）。その後住人から千円を受け取ると、次の家に移動する。新

写真４　ボンゾナを持って移動する子供たち

写真５　地区内を巡行する様子

盆の家では、千円以上くれることもある。
全ての家をまわり終えると、最後の家の前でボンヅナを解体する。ここからの作業は大人が中心となって行う。ノコギリで数個に切断し、軽トラックに載せると、桜川の土手まで移動してボンヅナを焼却する。焼却を終えると研修センターに戻り、中学三年生（親方）の保護者が用意したおにぎりやアメリカンドッグなどを食べて、お互いをねぎらう。
また、各家から集めたお金の分配も行う。材料代や食事代を差し引いた金額を、親方を中心に子供たちの間で分ける。概ね学年が上から順に、もらえる金額も多くなるが、準備から当日までの働きに応じてもらえる金額が多少変化することもある。お金の分配と、食事が終わると解散となる。
令和三年は、午後九時半頃の解散であった。

〔各家の盆行事〕

ある家の場合は、普段は仏壇に並べられている位牌を十二日頃に全て出し、盆の間は夏野菜や果物と一緒に盆棚に供える。
また、十三日の午後になると墓地まで仏さまを迎えに行き、十六日には送り盆をするとともに、盆棚を片付ける。

〔歴史的変遷〕

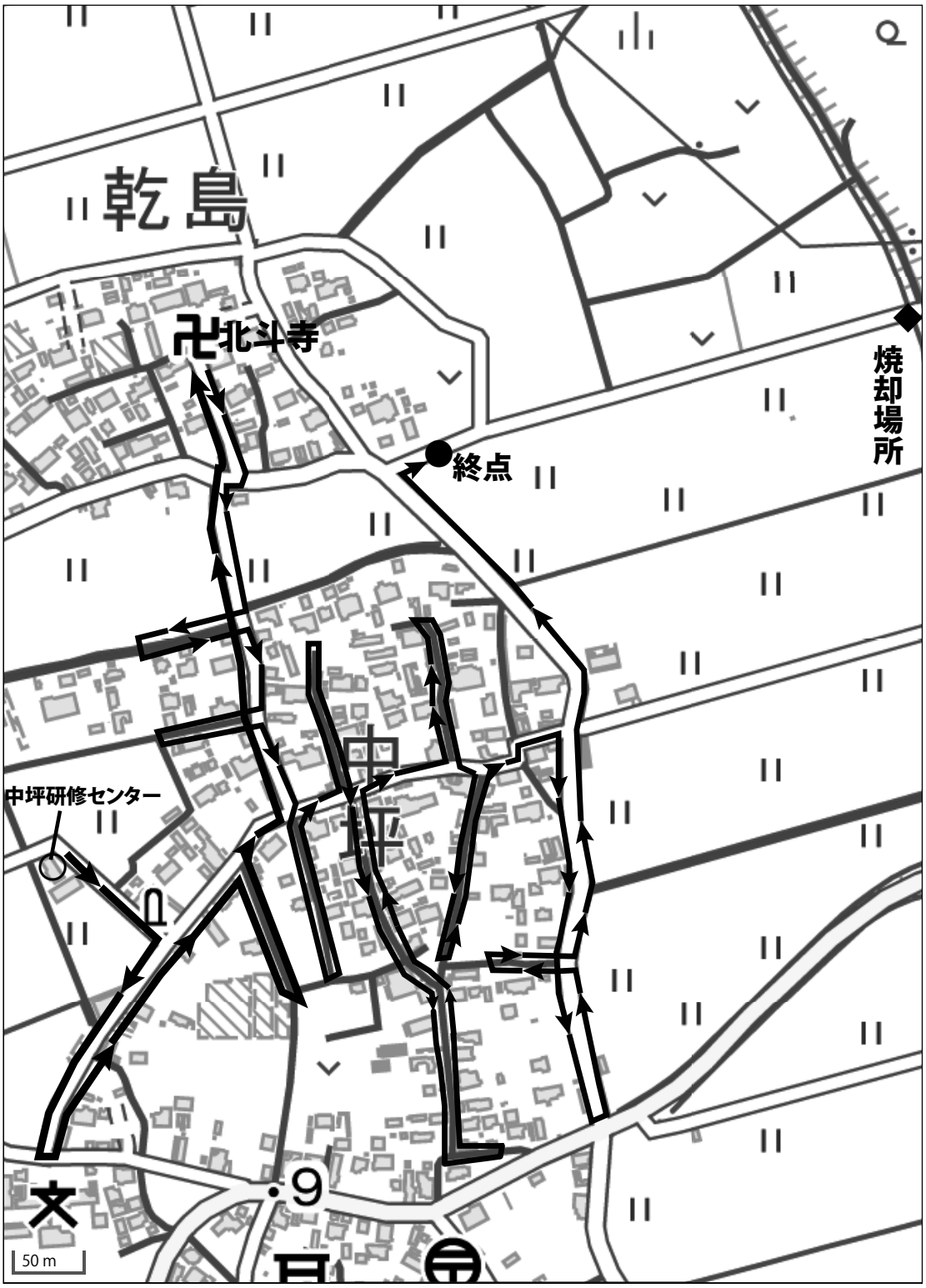
昭和六十年（一九八五）頃の盆綱には、大人は一切関わらなかった。小学一年生～中学三年生の男子三十人程で準備を行った。ボンヅナ作りは、夏休みに入ると当日まで毎日行っていた。ボンヅナの長さは十ｍくらいあり、長すぎて曲がる時に小回りがきかない程であった。また、現在は午後五時に出発しているが、当時は「一番星が見えたらスタートする」と言われていた。巡行する際の服装は、現在は学校のジャージを着用するが、当時は上下白い服装で行うことになっていた。
順路については、現在はボンヅナを保管する中坪研修センターを出発し、その途中で北斗寺に立ち寄っているが、昔は北斗寺から出発していたという。しかし、巡行する効率を考慮して、現在のような順路になったという。ただし、現在の順路も、家の建て替え等の理由で少し変化している。
まわり終えた後の食事は、現在は保護者がスーパーや精肉屋で購入するが、当時は子供たちの母親がおにぎりを作ってくれた。お金の分配は、当時は準備から必ず該当する子供たちが参加していたので、貢献度によってもらえる金額が変動することはなく、厳格に年功序列が守られていた。
このように、参加する子供の減少をはじめとして、様々な変化が起こっているが、参加できるのは男子のみという決まりが現在でも守られているのが、中坪地区の大きな特徴である。

〔所見〕

地元の方の話では、「中坪は土地を売らずに昔から住んでいる家が多いので、男の子が生まれたら盆綱に参加するものだと皆思っている。だから子供たちだけで行うことや、男の子だけで行うという決まりが守られているのではないか」とのことであった。確かに、乾島と比較すると世帯数も多く、また台坪のように他所から移住してきた家も少ないため、「盆綱＝男の子の行事」という意識が地区全体で守られているのだろう。一方で、現在中学三年生以下の子供たちが少なく、今後盆綱をどのように続けていくのかという問題は、中坪地区全体の問題になるだろうとのことであった。
また、一～四班の家は昔からの付き合いで材料の調達を行っているが、新しく移住してきた五班から親方が出る場合は、どのように調達に係る根回しなどを行うのかという懸念も聞かれた。今後も盆綱行事を継承していくために、この行事の意義を地区全体で共有することが求められている。

〔情報提供者〕

令和三年度盆綱参加者



（藤崎　綾香、横田　慶一）

二一　苅間（かりま）（つくば市）の盆綱

〔地区名〕

つくば市苅間

〔地区の概況〕

苅間集落は、つくば市の中心部に位置する。近世期は苅間村、明治二十二年（一八八九）に周辺の村々と合併して葛城村、昭和二十八年（一九五三）に谷田部町となり、昭和六十二年（一九八七）につくば市となった。現在は、原・辻一区・辻二区・上宿・宮本・篠及び古屋敷の六つの「区会」に分かれている。篠と古屋敷はそれぞれ別の小字であるが、一つの区会として扱われている。また、宮本は元来上宿の一部であったが、戸数が増えたため宮本として独立した。宮本は、上宿のうち神社に近い地域を指す。これらの区会の地域的な境は必ずしも明確でない。上宿に住んでいた家が宮本にあたる土地に分家を出した場合、分家は宮本ではなく上宿の区会に入ることができる、という家のつながりがあるためである。

苅間には中世苅間城があった。『谷田部の歴史』によると、「苅間城は小田氏治の与党で、古河公方の旗本柳橋豊前守の妹婿である野中瀬左衛門尉入道鈍斎の居城であ」り、野中瀬鈍斎の死後、「苅間城は廃城となり、その残党がこの地に帰農した」という。篠地区には、「高さ三メートルほどの土塁があった」。古屋敷の大野一族はその子孫と言われており、古屋敷地区の墓地には、集落の成り立ちに関する伝承が刻まれた石碑が建つ（**写真1**）。このような伝承の存在から、苅間は中世以来の集落であることが窺えるが、集落の位置には変遷がみられる。現在蓮沼川の遊水池となっている場所が、かつては谷津田であり、その周りに集落が形成されていたようである。その集落が、江戸時代の初期～中期にかけて、八坂神社の建つ「宿街道」沿いに移動してきたという。現在農業を行う家は少なくなったが、かつての苅間集落では農家が多かった。『茨城県大百科事典』によると、「洪積台地で、水利が悪」かったことから、「水田は少なく、サツマイモや麦類を主とする畑作が中心」であった。集落内には酒屋や万事屋などの商売を行う家もあったが、このような家は比較的新しく集落に入ってきた家のようである。集落には青年団が結成されており、獅子舞等の芸能を披露していたが、現在は解散している。

写真1　古屋敷地区の墓地に立つ石碑

宿街道に面する八坂神社は、「十六郷の神社」と呼ばれる（**写真2**）。『角川日本地名大辞典8 茨城県』によれば、文明三年（一四七一）、小田氏の家臣である野中瀬持氏が京都から神鏡を遷し、この地に祀ったことが始まりとされている。葛城村のうち、苅間・西大橋・岡・島山中・八木橋集落が氏子になっている。八坂神社境内には、鹿嶋神社や熊野神社、愛宕神社、太子堂などが建立されている。

苅間集落では、二つのグループが盆綱行事を行っている。一つは上宿・宮本・篠及び古屋敷地区が合同で、もう一つは辻・原地区が合同でそれぞれ行っているものである。この二グループの盆綱について、Ⅰ・Ⅱで述べる。

写真2　八坂神社

Ⅰ　上宿（かみじゅく）・宮本（みやもと）・篠（しの）／古屋敷（ふるやしき）地区

〔実施主体〕

小学四～六年生、中学一～三年生（男子）

〔実施日〕

① 材料集め　　盆綱の二週間程前（七月下旬）
② 龍・ポンの製作　盆綱実施前の参加者の都合の良い日・良い時間
③ 迎え　　八月十三日　午後四時頃から午後九時頃まで

〔綱の形状〕

綱は「龍」と呼ばれる。龍は藁で作られており、全長一～一・五m程である。龍の顔の部分には、耳にあたる箇所を三つ編みで編み込む。頭の部分から出た藁は、三つに分けて藁を追加しながら捩じって胴体を作っていく。

龍のほかに、藁製の「ポン」と呼ばれる道具を作る。形状としては鬼の金棒のようであり、上部は少し太めで、持ち手の部分は丸みを帯びている。

〔綱の取り扱い〕

頭に三本、胴体には左右それぞれ一本ずつの計二本、尾に一本の、合計六本の持ち手がついており、六人で引きずって歩く。近年は参加する子供が少なくなってきたことから、引きずらずに、抱えて歩くこともあるという。

〔詳細〕

① 準備

盆綱の準備は、七月下旬に行われる材料集めから始まる。この作業を行うのは、小学四～六年生及び中学一～三年生の男子である。保護者が参加することはほとんどなく、子供だけで行う。この日は、集落の各家をまわり、龍とポンを作る材料となる藁と会費を集める。盆綱でまわる家を確認する意味も含まれている。藁がある家は、藁と会費二百円を支払い、藁がない家は会費六百円を支払う。近年は稲作を行う家が減少していることから、集まる藁は年々少なくなっている。集めた藁は、八坂神社境内の倉庫に収納される（**写真3**）。倉庫には、前年までの盆綱で余った藁も保管されている。

龍とポンは、盆綱を行う八月十三日以前に、子供たちが八坂神社に集まって製作する。このとき、子供だけでは製作が難しいため、大人が手伝う。

このほか、藁を縛る縄と、盆綱当日に使う盆花は、会費として集めたお金でホームセンターで購入する。

写真３　藁を収納する倉庫

② 迎え

八月十三日の夕方、八坂神社を出発し、墓地（ラント）に先祖を迎えに行く。この地区には、上宿・宮本の家々の高野ラント・片岡ラント、古屋敷の家々の大野ラント、篠の家々の篠ラント（**写真4**）の四か所の共同墓地がある。それぞれに龍を引いて行き、先祖を迎える。墓地の名称に付く高野・片岡・大野とは姓であり、例えば高野ラントの場合は、高野姓が多いことを示している。共同墓地の他に個人墓地もあるが、個人墓地には盆花を供えに行くのみで、迎えは行わない。

墓地に行くと、「盆綱ござった。仏様ござった」という掛け声を二度言う。「ござった」の「た」のときに、ポンを地面に打ち付ける。墓地で先祖を迎えた後、篠地区の各家からまわり始める。

写真４　篠ラント

盆綱に参加する子供には、龍を先導する「先達」と呼ばれる役、集金する役、龍を引いて行く役がある。先達と集金役はそれぞれ一名で、上級生が担当する。龍を引く役は残りの子供が担当する。龍の頭と尾を引くのは、力の強い子や体格のよい子である。頭を引く子の力がなければ、龍が進まないためである。また、龍が勢いよく角を曲がる時、尾をしっかり持っていなければ龍が飛んで行ってしまうので、尾も体格がよく力のある子が担当する方がよい。

家を訪れる時には、「わーっ」と声を上げながら庭に入る。庭に入るとすぐに、墓地で先祖を迎えたときと同様、「盆綱ござった。仏様ござった」の掛け声を二度言い、「ござった」の「た」でポンを地面に打ち付ける。これで家に先祖を連れて来たことになる。集金役の子が家の人からお金をもらい、次の家に向かう。渡す金額は家によって異なるが、平均すると五百円程である。新盆の家では多めに出すという。近年はお金のほかに、アイスやスイカ、ジュースなどを子供たちに振る舞う家も少なくない。

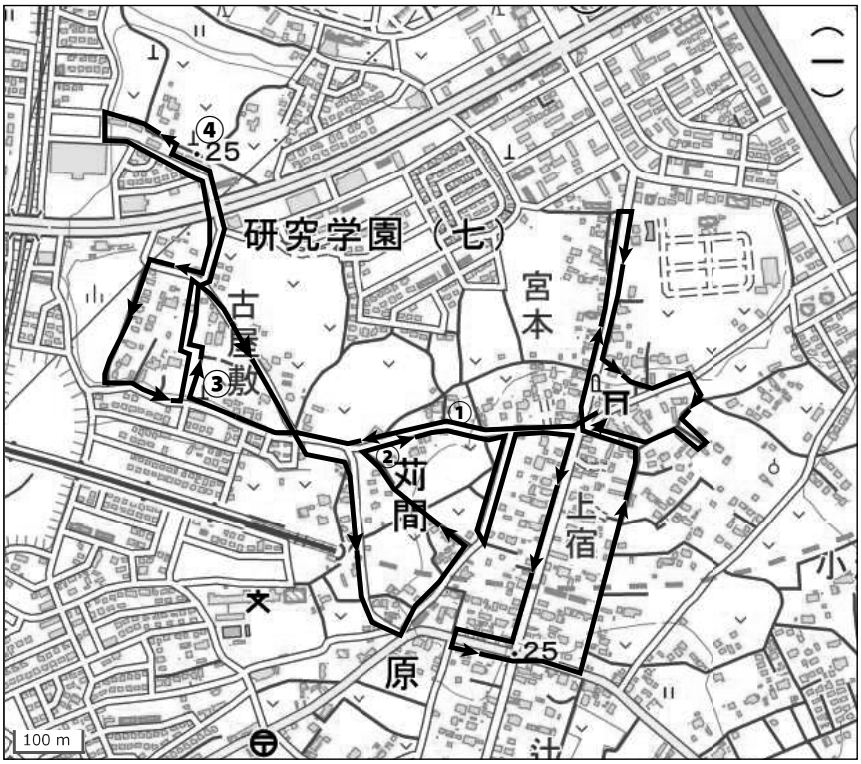
すべての家をまわり終えると、八坂神社に戻る。役目を終えた龍とポンは高野ラントに置いてくる。八坂神社では上級生が中心となって集まったお金を分配し、解散となる。

〔各家の盆行事〕

上宿・宮本・篠／古屋敷地区の盆は、八月十三～十六日である。

十三日は迎え盆であり、墓地に行き先祖を迎える。このとき、提灯と線香を持って行く。また、十三日には家の外で餅つきを行う。臼の持ち手である「手がかり」は北に向け、ついた餅を取り出す際には、北側から取る。餅は、ぼた餅にし、あんこをつけて食べる。餅のほかに、粳米を蒸かしてバラッパの餅も作る。バラッパとは、野茨（サルトリイバラ）の葉を意味する。粳米を蒸かして平らに伸ばし、バラッパで上下を挟んだものにあんこをつけて食べる。固くなった際には、焼いて食べることもある。家によっては、バラッパではなく、茗荷の葉で作ることもあるようである。盆に人が来た時には、ぼた餅やバラッパの餅を振舞ったという。

盆棚に供える物に決まりはないが、畑でとれたサツマイモなどを供える



① 高野ラント　② 片岡ラント　③ 大野ラント　④ 篠ラント
⛩八坂神社

ことがあった。また、ナスを賽の目に切り、サトイモの葉に載せて供えることもあった。十四、十五日は、嫁は子供と夫を連れて里帰りをした。

十六日は送り盆である。墓地に先祖を送る際には、賽の目に刻んだナスを持って行くこともあった。

〔歴史的変遷〕

小学四年～中学三年生の男子が主体となって集落の各家をまわる点には変化がないものの、大きく三つの変化がみられる。

まず、龍の長さの変化である。かつての龍は二～二・五m程あったという。また、持ち手が頭の部分に三本、胴体に六本、尻尾に一本付けられていた。これは、十人で曳くように作られていたものであるが、当時は子供が十人以上いたため、龍を持てずについて歩くだけの子もいたという。しかし近年は、前述のように、龍の持ち手は頭・胴体・尻尾を合わせて六本であり、軽く小さい龍となっている。これは、子供数の減少を受けての変化と考えられる。

二つ目は、ポンの材料の変化である。ポンは掛け声と同時に地面に打ち付けるものであり、大きい音のする方が好まれる。大きな音をさせるために、現在はガマ穂を入れているが、かつては麦藁を入れていた。多くの家が畑作を行い麦を作っており、麦藁が容易に手に入ったためである。近年は麦を作る家がほとんどないため、麦藁の入手が難しくなった。そこでガマ穂が使われるようになったが、麦藁を利用していた頃のポンの音を知る人々にとっては、ガマ穂では麦藁ほどの大きな音が出ないと感じるようである。

三つ目は、墓地で先祖を迎える方法の変化である。主に土葬が行われていた頃、墓地には棺台（遺体を乗せて念仏を唱えるための石）が設けられていた。かつてはその周りを一周した後に「仏様ござった。盆綱ござった」の声をかけて先祖を迎えていたというが、現在では行っていない。また、かつては墓地に先祖を迎えに行くのは日中であった。子供たちは先祖を迎えた後に一度解散し、夕食を摂って午後七時頃からまわり始めた。現在と異なり街灯のない暗闇であったため、先達は提灯を持って歩いた。最後の家をまわり終える頃には、午前零時近くなっていたという。

〔所見〕

令和二、三年は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により盆綱行事が中止となってしまったため、子供たちは非常に残念がっていた。しかし、子供たちだけではなく、集落中の人々が、年に一度の盆綱を楽しみにしていたという。各家では盆綱に訪れる子を今か今かと待ち、子供たちが訪れると「今年の先達はどこのお孫さんだい？」といった声をかける。子供たちが神社に着くと、無事に着いて良かったと皆が安堵する。盆綱行事は、参加する子供たちだけでなく、集落全体を巻き込んだ行事として、人々の心に刻み込まれている。

〔情報提供者〕

高野　武久さん
高野　ひろ子さん

〔参考文献〕

茨城新聞社編『茨城県大百科事典』茨城新聞社、一九八三年
「角川日本地名大辞典」編纂委員編『角川日本地名大辞典８茨城県』角川書店、一九八三年
谷田部の歴史編さん委員会編『谷田部の歴史』谷田部町、一九七五年

（三津山　智香）

Ⅱ　辻（つじ）・原（はら）地区

〔地区の概況〕

辻・原地区は「一ノ矢筑波街道」に沿って家が並ぶつくば市苅間集落のうち南側の二地区である。南端の原地区は国道四〇八号線に接する。これら二地区は、区会としては原・辻一区・辻二区の三つに分かれる。原の区会は戸数約三十戸、辻一区は七十数戸、辻二区は約十四戸である。この戸数は昔からほぼ変わらず、ほとんどが農家であった。この地区の農業は水田よりも畑が主で、大体一町歩程度の畑を耕作する家が多く、東京に向けた野菜などを作っている。

但し、苅間地区は筑波学園都市の開発とともに住宅街が開かれ、新住民が急激に増えたが、それらの家は区会には加入しておらず、盆綱などの行事や冠婚葬祭の付き合いもない。新住民はそもそもまだ墓を持っておらず、墓を持っても共同墓地には入らないため盆綱行事の対象にならないという。

〔実施主体〕

① 昭和四十年代まで…小学一～六年生、中学三年生（男子）
② 昭和四十年代から平成三十年頃まで…小学四～六年生、中学三年生（男子）
③ 平成三十年頃から現在…小学四年～中学三年生（男女）

昭和の中頃までは、小・中学生の男子全員が参加していた。しかし、当時盆綱で集めたお金の分配を中学生が取り仕切っていたことに対して、親の一部から平等に分けるべきだという意見が出た。当時は五十人くらいの男子がいたので、それでは小学一～三年生の小さい子供は参加させない、ということになった。しかし、その後子供の数全体が減少したため、平成三十年頃からは女子も参加するようになっている。

〔実施日〕

昭和期まで

① 材料集めとポン・龍作り　八月の初めから八月十二日まで
② 迎え　八月十三日（ラントで仏さまを乗せる）午後三時から四時頃まで（各家をまわる）午後六時から十一時頃まで

平成～現在

① 材料集めとポン作り　八月初めから八月十二日まで
② 龍作り　八月十三日の午前五時から六時頃
③ 迎え　八月十三日（ラントで仏さまを乗せる）午前中（各家をまわる）午後三時頃から十時頃

〔綱の形状〕

綱は「龍」と呼ばれる。龍の胴体部分を作るため、三本の太縄の根元を縛ったものを、昔は大きなケヤキの木の枝に、現在は谷田部第七分団の火の見櫓に掛けて、捩じりながら藁束を少しずつ差し入れて綯っていく。胴体全体からバサバサと藁の根元の方が出ている感じになる。また頭、中間、後方に左右二本ずつ持ち手用の縄を付ける。この胴体の元部に真菰（マコモ）をぐるりと覆うように被せて頭とするのである。これに藁を三つ編みにして作って置いた角を一緒に束ねてきつく縛り（現在は緩まないように針金（番線）で縛る）、ナスなどを二つ付けて目にする。大体一時間程で出来上がる。昔は、子供が多かったので龍の長さも五m位あり、これに長い持ち手の綱を付けて大勢で引きずって歩いた。しかし、子供の数が減るにつれて龍も小さめに作るようになり、現在では人数は十人以下となり、龍の長さも三m程度になっている。持ち手の縄も以前はたくさん付けていたが、今は三か所に二本ずつ計六本だけ付ける。子供たちはこの縄を持ち、龍を引いて歩くのであるが、少人数で引きずるのは大変になったため、近年は高野正義さんが工夫し、台車を半分に切って龍の前と後ろをこれに乗せて引っ張りやすいようにした。

龍のほか、掛け声を掛ける際に地面を叩いて大きな音を出すための「ポン」を作る。これは芯に藁縄を巻き付け、持ち手は丸く輪にした鬼の金棒のような形状である。ポンの芯の部分は、昔は真菰を使っていたが、真菰が入手しにくくなってきたため、近年はホームセンターで藁縄を購入している。まず藁縄を二つ折りにして芯にするが、この時、輪にした部分が持ち手になる。折った部分を自分の手の大きさに合わせて輪にし、一度縛る。その先から藁縄を隙間なくぐるぐる巻いていく。先まで行ったら、端をもう一度きっちり縛る。大きいものは「ポン大将」と呼ばれることもある。

〔詳細〕

① 準備

盆綱行事の前に龍とポンを作っておく。八月に入るとすぐに子供たちは、辻と原地区の家を一軒ずつまわって藁か、もしくは材料代として現金千円を集める。この時、その年にまわる家や順路を確認出来る。なお、昔はお金を出す人は少なく藁ばかり集まったため、使い切れずに余った藁は、機械で藁縄作りをしている人が買い取ってくれた。しかし、近年は稲刈りの際にコンバインで藁を粉砕してしまう家や水田の耕作をやめる家が多く、藁で出してくれる家がほとんどなくなってしまった。このため、最低限必要な分の藁だけは地区内で水田を作っている人が確保してくれている。集めてきた藁は、昭和期まではオゴヤ（お小屋・位置は巡路図参照）の倉庫にためていたが、平成以降は辻原研修センター（以後センターと表記）の倉庫に置く。準備作業もかつてはオゴヤで行っていたが、センターが出来てからはそこで行うようになった。

また、昔は上級生四人くらいで真菰を用意した。辻のラント（墓地）の北側の水田周辺で、太めの真菰を刈ってリヤカーで運んできた。これを一週間くらい天日干しして、一束分くらいを準備しておいた。近年は龍の分だけ大人が車で手代木の用水池の脇に刈りに行き、センターで干している。

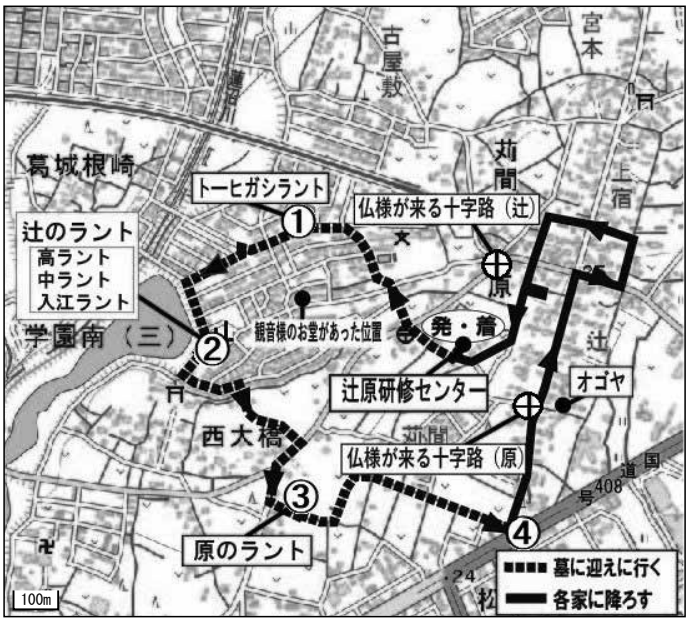
こうして集めた材料で、ポンと龍を作る。ポンは子供たちが自分の分を作るが、龍は子供だけで作れないため、熟練の年配者四人程に頼みに行くことになっている。年配者が龍を作り、中学二、三年生の保護者と子供が手伝う。

一時、龍作りを迎え盆前日の十二日に行い、「これを守る」という名目で中学三年生だけが翌十三日までオゴヤに泊まり込んだこともあったが、今は龍だけは十三日当日の朝五時頃から作ることになっている。

② 迎え

「盆綱はラントで先祖様を乗せて一軒ずつ各家に届ける行事」、「龍は仏さまが乗ってくるもの」であるといわれる。ラントとは墓場のことである。

八月十三日の午前中に子供たちがセンターに集まり、そこから龍を引いて、ラントに仏さまを迎えに行く。龍は六本の引き綱を六人で持って引き、残りの者はポンだけを持って行く。なお、昭和期には十三日の午後三時頃にオゴヤに集まり、ここから出発してラントをまわったという。



ラントは、現在はトーヒガシラント、辻のラント、原のラントの三か所をまわる。辻のラントは、平成二十一年に三つのラントが区画整理で一つにまとめられたもので、

それ以前は高ラント、中ラント、入江ラントの三か所に分かれていた。高ラントは高野家のラント、中ラントは真ん中のラント、入江ラントは入江家のラントのことで、三か所が隣接していた。つまりこの頃までは、五か所のラントをまわっていた。ラントが街道から離れているのは、中世に谷津田周辺にあった苅間集落が、江戸時代に街道筋に移った際、ラントだけ残されたからと言われる。

それぞれのラントでは「ぼーんづーな、ごーざった」と言ったらポンで一回地面を打ち、続けて「ほーとけさーま、ごーざった」でまたポンで地面を打つ。各ラントで、それぞれ二回ずつ掛け声を掛けて、仏さまを乗せてくる。

ラントをまわり終えると、再びセンターに戻り、龍などをここに置いて、子供たちは一旦自宅に戻る。かつてオゴヤから出発していた頃は、国道四〇八号線から集落に入る街道入口近くの貯水池の前の道際に、邪魔にならないように龍を置いて一旦家に戻り、夕飯を食べてからまた集まった。現在は、十三日の午後四時頃に再びセンターに集まり、南の方から各家をまわり始める。南接する松代地区に分家した家が数軒あるので、まずそちらを先にまわり、その後、国道四〇八号線から街道に入って左右の家を順に北上する形で仏さまを降ろしてまわる。近年、女子が参加するようになってからは、上級生の父兄が一緒に付き添い、暗くなると誘導灯で誘導するようになっている。

なお、昭和期頃までは、「盆休み」はどの家も十五日と十六日だけで、十三・十四日は大人は普段同様に忙しかった。十三日も夕方まで家の者たちは畑に行っていて、午後六時頃まで帰ってこなかったので、これを待って出発した。

「ワーッ」と叫びながら村をまわり、各家に入ると前庭を一周してから「盆綱ござった、仏さまござった」の掛け声でポンを打つ（**写真1・2・3**）。各家でこれを二回ずつ、但し新盆宅では三回繰り返す。このように一軒ずつ先祖様を降ろすと、家の人がおひねりを袋に入れてくれる。上級生がおひねりをもらう役で、布袋を持っている。大体一軒あたり五百円から千円くらい、新盆の家はその二倍くらいを入れてくれるという。とはいえ、袋に入れる際にはどの家がいくら入れるのかは分からないため、昔はお金の代わりに薄く切ったキュウリが入っていたという笑い話も伝えられている。

夜の十時から十一時頃、ようやく村を一周し終え、センター（かつてはオゴヤ）に戻ってくる。

全部の家をまわるとおひねりの総額は十万円くらいになる時もある。以前は最年長の中学生たちが分け方を決めたものであるが、今は準備の参加が多い子は多くもらえるなど、平等に分けるようにしているようである。

かつては、翌十四日の朝十時頃に集まり、お金を分けた。といっても、中学生はこのお金でスイカやナシを買ってきて、小さい子たちに分け、残った現金を上級生で分けた。昭和の頃は、小学生はお金でもらうことはあま

写真１　龍を引いて各家をまわる

写真２　各家をまわる盆綱（龍とポン）

写真３　ポンを地面に打ち付ける

りなかったという。

〔綱の取扱い〕

行事終了後の龍やポンの処理について決まりは無い。かつては料亭「山水亭」の裏手にあった山に捨てていた。放っておいても自然に朽ちたという。

〔各家の盆行事〕

かつて、八月十三日は忙しくて、迎え盆に行ってはいられない家が多かった。このため、代わりに子供たちに盆綱で仏さまを迎えに行ってもらう、という意味があったのではないか、といわれる。ただ、仏さまをラントまでは迎えに行かなくても、その代わり、仏さまが自分で村の近くまでやって来る、とされる場所があり、そこまで迎えに行って線香をあげることで迎えとしていた家もあった。辻・原のそれぞれにそうした場所があり、どちらも十文字の道であった（**順路図**参照）。

この日、各家では仏壇の前には盆棚を作って、真菰のゴザの上に位牌を並べ、仏さま専用の小さな塗り物の膳椀にご飯を盛り付けて供える。家によっては餅を搗いたり、真菰で牛や馬を作って供えたり、ぼんぼりを飾る場合もあった。新盆の場合は普通より立派な盆棚を作る。棚の下には「無縁さま」として、もう一つお膳を用意する。

八月十四日には、盆の行事は何もなく、普段どおりの仕事で忙しかった。しかし八月十五日と十六日だけは盆休みになる。十五日は「ノマワリ」と言って、家の主が畑をまわって、野菜を取ってくる。ナスやキュウリ、サツマイモなどを収穫し、里芋の葉に乗せて盆棚に供えておく。

八月十六日は送り盆である。各家で、十五日にノマワリで穫った野菜を蓮の葉や里芋の葉に乗せてラントに供えてくる。家によっては白玉団子を持っていく家もある。但し、近年はカラスなどに荒らされるということで、お供えをしなくなった家も多いという。

〔歴史的変遷〕

中世の頃、村が元あった場所に、ラントを残すという古い集落であるが、盆綱に関する記録は無い。昭和十年代生まれの経験者が、その祖父の世代から「昔からやっていた」と聞いていることから、少なくとも明治時代前期頃には行われていたものと思われる。

〔所見〕

辻・原地区では、八月十三・十四日は大人たちにとって休みの日ではなく、畑仕事に忙しく各家で迎え盆が出来なかったため、代わりに盆綱と子供たちに先祖迎えを託すのだ、という解釈が聞かれた。盆綱を夜に行う理由も、家人が畑から帰って来るのを待つからであるという。茨城県の盆綱で、ムラの先祖迎えとして行われる場合、各イエでも先祖を迎えに行く二重構造が見られるが、その不思議さを説明する理由が苅間にあった。但し、家から遠いラントの代わりに、仏さまが自ら近くまでやって来るから、そこまでは迎えに行く、という場所が想定されており、本来は各家で迎えに行くべき、という意識も見られる。

また、苅間地区の二つの盆綱では、他地域では見られないポンというものを作っている点が特徴的である。苅間のポンは、埼玉・群馬・長野県などで旧十月十日に行われるトオカンヤ行事において、子供たちが各家をまわって地面を打つ「藁鉄砲」とほぼ同じ形状である。行事としては異なる系譜のものであるが、何かをきっかけに、トオカンヤの藁鉄砲が苅間の盆綱に取り入れられた可能性も考えられる。

〔情報提供者〕

高野 正義さん、高野 静夫さん、深沢 常勝さん、高野 禄久さん

（榎　美香）

二二　下須田（稲敷市）の盆綱

〔地区名〕

稲敷市下須田

〔地区の概況〕

稲敷市下須田周辺は、利根川下流域にみられる典型的な水田地帯である。下須田地区の北西側から北側そして南東側は、蛇行して流れる野田奈川によって画され、浮島地区と接している。「新編常陸国誌」に「東ハ霞浦」と記されたように、浮島周辺が埋め立てられ陸続きとなる以前の下須田は霞ケ浦の湖岸であった。また、下須田地区に南接する上須田地区の南側には新利根川が東流しており、下須田地区境を流下してきた野田奈川と合流する。現況の下須田地区は、河川に取り囲まれた低地になっていて、集落は広大な水田の中に位置している。

近世の下須田村は常陸国河内郡に属し、上須田村が下総国香取郡であったことから、両村の境が旧国の境界となっていた（上須田村はその後千葉県に属し、明治三三年〔一九〇〇〕の県境変更により茨城県稲敷郡へ編入された）。下須田村は元禄期・幕末期とも天領として確認される。寛文年間に江戸の鍋屋四郎左衛門が水田開発をして村高一〇四石余りに達したといい、そのことから「鍋屋新田」とも呼ばれる（「稲敷郡郷土史」）。明治二二年の町村制施行により伊崎村大字下須田となり、昭和三十年（一九五五）の合併で東村大字下須田となった。平成八年（一九九六）の町制施行で東町となり、いわゆる平成の大合併で江戸崎町などと合併して稲敷市となって、現在に至る。

地区は微高地上に屋敷がまとまる「本区」と呼ばれる集落と、本区の北西方向で南北方向の街路状に家屋が並ぶ「古新田」集落とに分かれる。「新編常陸国誌」に、「東、古新田、新屋敷、江間尻、前口、中郷等の小名を有す」と小字を確認できるが、新屋敷・前口・東が本区に、古新田が古新田に比定される。「本区」には須田山般舟寺や水神社、下須田公民館などがある。このうち般舟寺は、元禄八（一六九五）年の開基と伝える曹洞宗の寺院である。下須田の盆綱では、公民館に集まった子供たちが般舟寺へ移動をして、ここを出発点に本区と古新田をめぐっていく。

〔実施主体〕

小学生～中学二年生の男子

〔実施日〕

八月十三日　盆綱

八月十四～十五日　子供たちが小屋で過ごす

〔綱の形状〕

写真１　ボンヅナに紙垂をつける子供たち

ボンヅナは十三日以前に子供たちが作っておく。直径十五センチ、長さは六メートルほどの大きさで、太い綱を束ねて芯とし、そこに縄を巻き付けて作られている。両端と途中に持ち手となる手ぬぐいが出ている。

当日、ボンヅナに子供たちが色紙できられた紙垂を取り付けて完成する（**写真１**）。

〔詳細〕

新型コロナウイルス感染症拡大によ

り盆綱が中止されたことにより、令和三年度に予定されていた現地調査を実施することができなかった。以下、平成二十年に行われた「茨城県の祭り・行事」調査時のデータを主として、下須田の盆綱の記録に代えたい。以下に記す迎えの行事は、同年八月十三日に見学したものである。また、下須田では十三日に盆綱が集落を巡行した後、子供たちが小屋に一泊して、翌十四日の早朝に野田奈川へ綱を流しに行く。以下、その内容について述べる。

①八月十三日

二〇〇八年八月十三日の盆綱では、午後三時に下須田公民館へ子供たちが集まった。参加した子供たちは十七人で、全員が男子であった。親方とよばれる中学二年生の四人は中学校の制服で、それ以下の中学一年生や小学生は、体操服姿で参加した。

午後三時に子供たちは本区にある公民館敷地に集合する。親方が行灯の紙に「豊年満作」「商売繁盛」などの文字を入れて絵を描く。行灯が完成すると、親方の掛け声のもと、全員が公民館前に整列する。そして、親方から順番にジュースをもらい、それでまず手を洗い、続いて口を注ぐ（**写真2**）。濡れた手は「拭いてはいけない」との注意が親方から飛ぶ。三種類のジュースが用意されていて、三回同じことを繰り返す。これは盆綱を始める前の「清め」に相当する行為と考えられる。

午後三時半ごろ、集落内にある般舟寺へ移動をする。本堂には子供たちがこの日までに用意しておいたボンヅナがおいてある。子供たちはボンヅナを本堂から境内に引き出して、様々な色の付いた紙垂をとりつける。準備が終わると、ボンヅナを取り囲んで一同が整列し、住職に般若心経を唱えてもらう（**写真3**）。読経が終わると、本堂の前でボンヅナをもち、「豊年満作わっしょい、わっしょい」と唱えながら綱を勢いよく前後に振る。ボンヅナはブランコのように前後に揺れる。この日はカメラマンが複数いたこともあり、本堂を背後にして住職とともに集合写真の撮影が行われた。

続いて、ボンヅナをもって般舟寺から公民館へ戻る。そして、公民館の

写真2　ジュースで手を清める

写真3　般舟寺境内での住職による読経

写真4　稲荷神社などの周囲を回る

写真5　水神社の周囲を回る

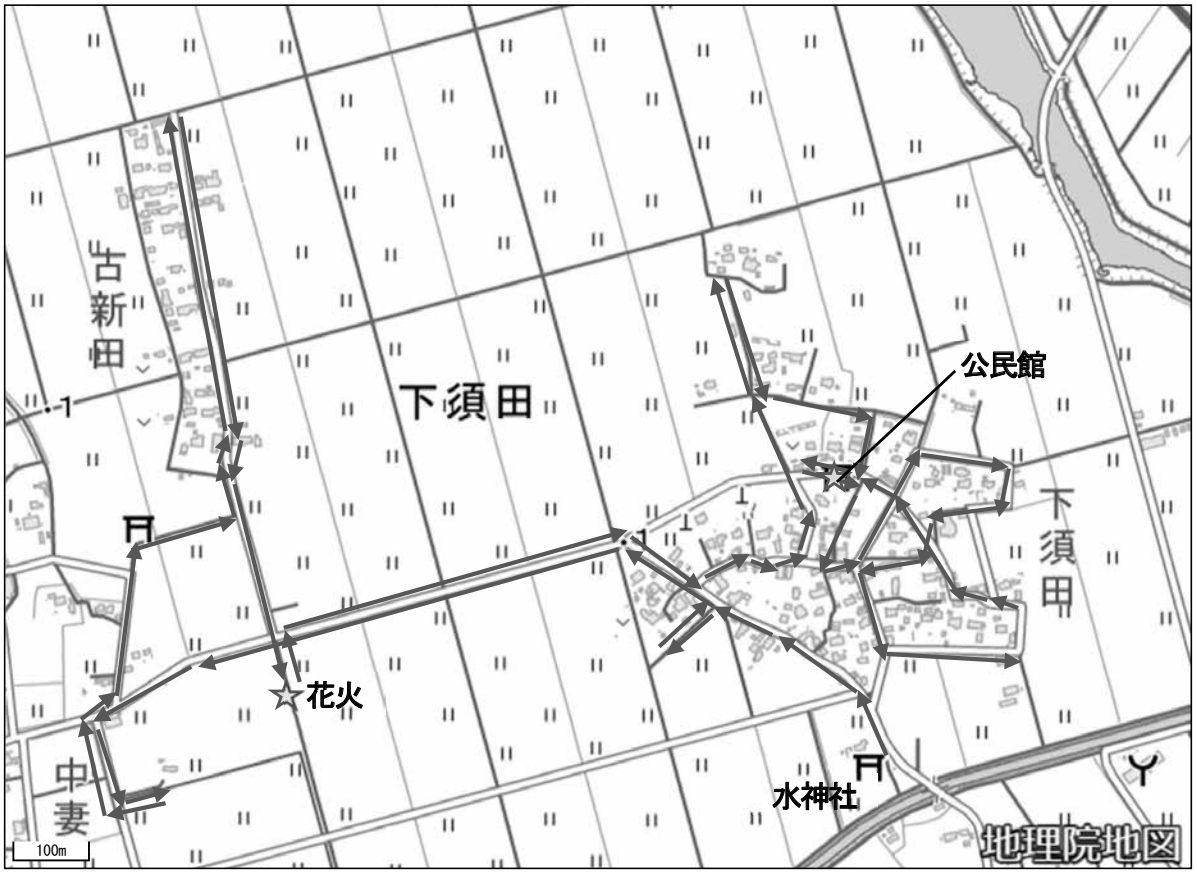
敷地内にある稲荷神社と隣の社の周囲を、ボンヅナをもって勢いよく走りながら左回りに八の字を描くようにして回る（**写真４**）。さらに、本区の南側、上須田地区との境近くの水神社境内へ移動し、同じように社殿の周りを左回りに何周か走る（**写真５**）。七周するのが本来だといわれる。

その後、ボンヅナとともに集落の家を一軒ずつまわり始める。下須田は大きく本区と古新田区というふたつの地区に分かれているが、盆綱は水神社の近くの本区の「前口」から始まり、古新田区へ移動をして、また本区へと戻り、本区の「新屋敷」→「東」の家をたどる経路をとった。

ボンヅナは小学校中学年以上の子供たち五名～六名ほどでもち、低学年の子供は行灯を手にする。親方は提灯（「下須田」「子供中」と書かれている）をもち、まわる家の順番を差配する。最年少の子供は幣束をもち、ボンヅナが門から庭に入ると、家の門口と玄関前の二箇所に幣束を立てる（**写真６**）。そして、農家の庭では「豊年満作、千円ワッショイ、豊年満作、千円ワッショイ」と、商家では「商売繁盛、千円ワッショイ、商売繁盛、千円ワッ

写真６　ボンヅナが入ると門口に幣束を立てる

写真７　庭でボンヅナを前後に振る



巡行経路

ショイ」と唱えながら勢いよく綱を前後にふる（**写真7**）。これらは二回繰り返され、二回目の唱えごとでは金額の部分が二千円になる。各家からはお礼のお金が手渡され、親方が屋号と金額を控えて受け取る。ボンゾナが庭を出る時には、必ず門口に立てた幣束を外しておかなければならない。ボンゾナが幣束よりも先に門をくぐって外へ出ることを忌む。

巡行の途中、親方の家では、子供たちに対してジュースやおにぎりなどの振舞いがだされる。この年は四人の親方がいたので、四軒の家で振る舞いを受けた。また、古新田地区をまわり終えたところで、水田の畔で花火の余興がある。花火を始めた午後六時四十分ごろから、周囲は暗くなってくる。花火にあわせて、行灯や提灯に火を灯す。花火を終えたところで、再びボンゾナを担ぎ、本区の家々を巡っていく。すべての家をまわり終えると、公民館に戻り、ボンゾナを激しくたたきつけて、行事が終了する。すべての家をまわり終えるのは午後十一時半ごろで、十二時を過ぎる年もあるという。

②八月十四日

翌八月十四日はボンゾナを川へ流す。早朝六時、公民館へ親方と小学四年生以上の子供たちが集り、ボンゾナを担いで野田奈川へ向かう。ボンゾナは前日の最後に激しく叩きつけられたため、ところどころ縄がほつれている。六時半ごろ、ボンゾナは子供たちの手によって橋の上から川へ投げ落とされる（**写真8**）。ボンゾナが川を流れていくことを確認すると、子供たちは駆け足で公民館へと戻る（**写真9**）。

盆綱としての行事は以上で一区切りであるが、子供たちは引き続き下須田本区にある共同墓地の前に小屋を作る。親方の親たちが、単管パイプを使って二階建ての小屋の骨組みをつくる。子供たちはパイプを運んだり、ブルーシートを使って屋根をかけたり、周囲にゴザを垂らすなどして小屋を完成させていく（**写真10・11**）。

こうしてできた小屋のなかで、子供たちは十四日～十五日の二日間を一

写真８　ボンゾナを野田奈川に流す

写真10　共同墓地の入口に小屋を作る

写真９　川から走って帰る子供たち

写真11　小屋で子供たちは過ごす

緒にゲームなどをして過ごす。両日には下須田の人たちが墓参りに訪れることから、「小屋の子供たちはお参りにくる人たちを守っている」のだという。

〔綱の取り扱い〕

ボンヅナは八月十四日に野田奈川へ流す（**写真12**）。公民館から運ばれたボンヅナは橋の上から川へ投げ入れられる。子供たちは何度か投げ入れる所作を繰り返しながら、最終的に放り投げる。そして、流れていくのを見届けてから、一斉に走って集落に戻る。後ろを振り返らずに走って帰るのは、土浦市佐野子のボンヅナでも同様である。ボンヅナを流す地点は浮島地区との境であり、かつては霞ケ浦だった場所にあたると考えられる。

〔各家の盆行事〕

八月十三日の夕方、下須田地区の各家では門口や家の近くでマコモを焚いて先祖の霊を迎える「お迎え」が行われる（**写真13**）。十四日、十五日には墓参りにいく。

写真12　川を流れていくボンヅナ

写真13　マコモを焚いて先祖を迎える

〔歴史的変遷〕

墓地の入口につくられる小屋は、かつては親方の指示のもとで子供たちが競い合いながら二つないし三つ作ったという。竹を集めてきて作った。

現在は子供が少なくなったこともあり、親方の男親が単管パイプを組み合わせて二階建てにしてつくるようになった。

図 2　盆綱行事に関係する地点

〔所見〕

下須田の盆綱行事は他地域のそれと比べて、いくつかの特徴を有する。以下に列挙しておきたい。

①寺院を出発点とし、かつ住職による読経がなされている。

②寺院を出発したあとに、稲荷神社や水神社の社殿の周りをボンヅナをもって走って回る。それから集落の巡行が始まる。

③盆綱行事の際の唱えごとからも分か

るように、豊作祈願として行われている。

④翌日、ボンヅナを野田奈川へ流した後に、子供たちは小屋をつくって一緒に過ごす。

佐々木尊久氏は下須田の盆綱を八月十三日に行われる点や、「迎え火などと同じような意味を果たしているとされる」ことをもって、下須田のそれを「ホトケ迎え」を主とする盆綱であると評価した（佐々木、二〇〇七）。しかし、①寺院を出発点とするもののそこは墓地ではなく、②巡行前に神社の社殿を周回していること、③唱えごとから豊作祈願を念頭においていることが明瞭である。もちろん、盆の初日の行事として行われている点や、子供たちが墓地に小屋をつくり遊ぶ、すなわちお籠りをする点などは、先祖の霊をまつることと不可分な行事であることを示唆する。しかし、単純に仏迎えの行事と位置付けることには留保が必要であろう。

またその意味を考えるうえで見逃せないのは、隣接する上須田地区では、同じ八月十三日に「オタチ行事」が行われている点である。上須田地区のオタチについては、高畠直之の詳細な報告がなされている（高畠、二〇〇七）。それによると、約一ｍ四十㎝の木刀で、表面に「奉納結佐大明神御太刀御守護」、裏面に「五穀豊穣　家内安全」などと書かれたものを東寿院の住職から受け、東寿院を出発点として「今年も豊年満作だ」などと唱えながら各家の巡行をするという。下須田のボンヅナが木太刀に置き換わった行事にもみえ、そこには先祖の霊を迎える意識は希薄である。

下須田の盆綱の実態と上須田のオタチ行事を勘案すれば、下須田の盆綱は仏迎えというものよりも、お盆の時期に行われる豊作祈願の行事として評価できるのではないか、そのように考える。

（萩谷良太）

〔参考文献〕

『東町史』民俗編、東町史編纂委員会、一九九七年
『無形の民俗文化財記録』第四三集盆行事、文化庁文化財保護部、二〇〇〇年
佐々木尊久「地域社会と盆行事―茨城県稲敷市下須田地区の「ボンヅナ」を事例として―」『利根川下流域村落の伝統と現在―茨城県稲敷市上須田・下須田地区の調査報告』フィールドワーク報告書第二二集、常磐大学人間科学部現代社会学科社会学コース、二〇〇七年
高畠直之「伝統行事の継承と保存―茨城県稲敷市上須田地区の「オタチ」を事例として―」（同前掲書）
「下須田の盆綱」『茨城県の祭り・行事』、茨城県教育委員会、二〇一〇年

二三　島津（阿見町）の盆綱

〔地区名〕

阿見町島津（上島津地区）

〔地区の概況〕

上島津地区は霞ケ浦（西浦）南西岸に位置する集落である。大字島津は上島津、下島津、南島津の地区から構成され、上島津は大字島津の西部にあたり、およそ一五〇世帯が住む。盆綱を実施しているのは上島津のみである。

大字島津は、『角川日本地名大辞典』によれば、「嶋津郷」として天平期にその名が見られ、江戸期から明治二十二年（一八八九）までは信太郡に含まれていた。同年から昭和三十年（一九五〇）までは舟島村、それ以降は現在まで阿見町の大字となる。

幕藩体制下では、旗本領・天領の相給村落であった［内山ａ、一九八一］。明治末期には地方改良運動の展開の中で、舟島村が「県是実行模範村」に指定され、農村開拓が進められた。また戦後の農地改革における農民運動では、舟島村は霞ケ浦川の水田の冠水被害を背景とした未墾地開放の要請から、日農舟島支部が結成され、地主側と激しく対立した。これにより町村合併時、舟島村は分村となり、大字島津は新阿見町へと編入合併することとなった［内山ｂ、一九八一］。

〔実施主体〕

小学四～六年生（男女）、中学生・高校生（男女、有志）

上島津地区の住民の主な檀那寺は長泰寺（曹洞宗）であるが、盆綱行事には全く関与しない。また、本事例においては自治会や子供会といった運営主体となりうる住民組織を持たない。

〔実施日〕

①　準備　八月第一日曜日（令和元年は八月四日）
　　午前七時三十分から午前八時十分
②　迎え　八月十三日　午後三時から午後十時
③　送り　八月十五日　午後三時から午後九時十分

〔綱の形状〕

綱は全長一五〇cm程で、うるち米の藁を用いて左綯いで編まれる。最も太い頭の部分は直径十五cm程で、尾に向かって細くなっていく。綱の途中に差し込まれる藁束は、長さ二十cm程で、差し込む本数に特に決まりはない（**写真１**）。

〔詳細〕

①　準備

綱編みは例年八月第一日曜日に行われ、藁は田地を保有している農家が

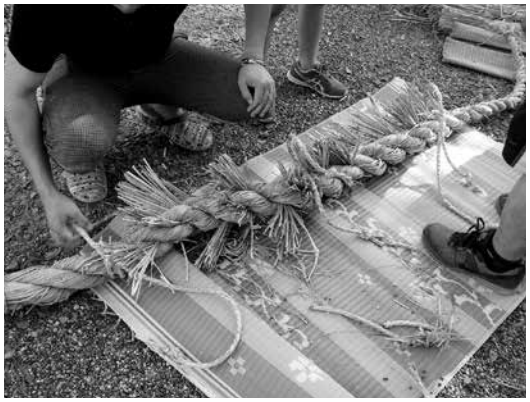


写真１　ボンヅナ

写真２　綱編み

事前に刈り取って保管しているものを用いる。藁を提供する農家は、親類が盆綱行事に参加している家が選ばれる。

綱編みに関してもこの農家が中心となり、参加する小学六年生男女の保護者がそれを手伝う。小学生の参加は必須ではないが、親について来る形で参加するケースもある。

綱は左綯いで編まれ（**写真2**）、一本編まれた後、編み始めの部分を「頭」として紐で目（話者によっては角）をかたどった飾りが結ばれ、その後胴体部分に藁束が等間隔に差し込まれる。最後に盆綱当日に子供たちの取っ手となる縄が両側面に三対結びつけられる。

② 迎え

令和元年の迎え盆には、小学生五人、中学生六人、高校生一人が参加した。保護者のうち男性三人が盆綱に随行し、また女性は飲み物等の準備、会計、終了後の弁当の手配等を担う。八月十三日午後三時に上島津農村集落センター（以下、「集落センター」と表記）に集合すると、飲み物等の準備を済ませ、長泰寺に向けて出発する。梵鐘の下に置かれたボンヅナは、三対の取っ手と末端（尾）を七人で持ち、一人は盆と袋を持ち、謝礼をもらう役を担う。この役は六年生が適宜交替して担当する。まわる順序は決まっているが、家の数は増減することがある。この年は百軒をまわった。

午後三時二十分頃、長泰寺を出発する。出発時に口上や特殊な所作等はない。巡行する際は「ヤンセー、ゴンセー」と声を上げながら進む。各家に到着すると、「ヤンセ、ゴンセ」と短く声を上げながら、末端の持ち手を中心として反時計回りに三周した（**写真3**）のち、「せーの、オー」という掛け声とともに綱を頭上に振り上げる。回る空間が確保できない場合は、敷地外に出て道路等で回り、その間保護者が車の誘導を行う。その後仏間に最も近い出入口ないし出窓に綱の先端をつけ、全員で「仏さまをお連れしました」と述べる。これを「仏さまをつける」（**写真4**）という。初盆の家は小さな棚や盆提灯を外に向けて出す家があるが、仏間から遠い場合は仏間に近い出入口が優先される。その後謝礼をもらい、再び「ヤンセー、ゴンセー」と繰り返しながら次の家へと向かう。途中数度の休憩や持ち手の交替をはさみつつ、午後八時三十分頃に百軒目までまわり終えると、その家のそばにある電柱に綱を置き、集落センターへと戻る。

集落センターで食事した後、女性保護者が謝礼から食事、飲み物代等を清算し、その残額が参加者に配られ、午後九時過ぎに各自解散となる。

写真３　家の前で回る様子

写真４　「仏さまをつける」様子

③ 送り

八月十五日午後三時に集落センターに集合した後、迎え盆で綱を置いた場所に向かい、送り盆の盆綱が始まる。送り盆は迎え盆の逆の順序で各家をまわる。基本的な形は迎え盆と同様で、綱の先端を家の上がり口につける際、「仏さまをお迎えに来ました」と口上を述べる。午後七時三十分過ぎに百軒をまわり終えると、そのまま長泰寺に向かう。長泰寺の墓地の一角に綱を置くと、送り盆の盆綱が終了となる。この際も特別な所作や綱の

処理等はなく、綱は置いたままにされる。

この後、四十分程花火をしてから、集落センターに戻って食事をする。食事や歓談の後、謝礼の清算や片付けが終わると、五年生の保護者へ備品等の引き継ぎを済ませて、各自解散となる。

〔綱の取扱い〕

綱編み後、ボンヅナは長泰寺の梵鐘の下に保管され、上からブルーシートが掛けられる。

盆綱の当日は、ボンヅナに結ばれた三対の取っ手と末端（尾）を計七人で持ち、ぶら下げる格好で持ち歩く。途中休憩時や行事後に綱を地面に置く場合は、頭部が上に位置するように、トグロを巻くような形で置かれる。

〔各家の盆行事〕

十二日までに各家では、盆棚や盆提灯の準備と墓の掃除を行う程度である。ただし、十三日（迎え盆）の午前中に墓掃除を行う家もある。

十三日の朝、長泰寺境内に卒塔婆が並べられるので、各自これを受け取って墓に立てる。現在はごく少数であるが、初盆の家では縁側に十五日（送り盆）まで精霊棚を設置する家もある。

また、迎え火・送り火を焚く家もある。「迎えは早く、送りは遅く」焚くのがよいとされているが、実際には火を焚く時間は家によってさまざまで、迎え火は日没前から焚く家もあれば、盆綱を迎えてから焚く家もある。また送り火は、盆綱を迎えた後や日没後、日付が変わる前などに焚くようである。火を焚く場所は、家から最も近い辻（角）や、墓地などである。送り盆では、長泰寺まで提灯を提げて向かう事例も見られた（午後七時四十分頃）。

〔歴史的変遷〕

昭和五十年代後半までは、小学五～六年生の男子のみで盆綱を行っていた。当時の参加者は二十人程であり、五年生が綱を持ち、六年生が随伴する形で行われ、綱も現在より長く、重いものだったという。少なくともこの時点で、上島津地区の盆綱は現在の形となった。平成の初頭に南平台に団地が建ち、子供が一時的に増加したものの、その世代が成長するにつれ少子化が深刻化し、平成十年代に四年生男子も参加するようになった。

平成二十年頃になると、子供の激減に伴い断絶寸前となったため、継続するか否か問われることとなった。盆綱は寺院や行政区、子供会といった運営主体を持たないため、その判断を伺うことができず、当時の保護者が集まって議論がなされた。女子の参加を認め、以後継続が難しくなった際にはより下の学年を参加可能にする形で継続することが決められ、この時から男性保護者が随伴するようになった。

平成三十年中高生（参加する小中学生の兄姉）が任意で参加するようになり、謝礼の一部（小学生より少ない金額）が渡されるようになった。

〔所見〕

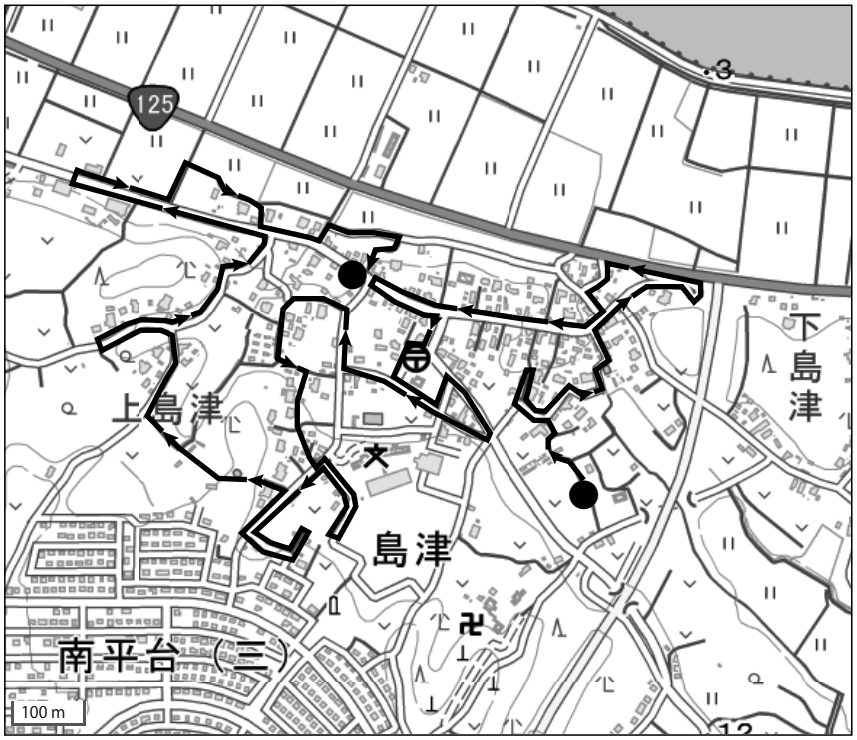
上島津地区の盆綱は、「仏さまをつける」際の口上にみられるように、盆行事として祖先の霊を送迎するという趣旨が顕著にみられる。

かつては小学校五～六年生のみで行われてきた盆綱が、参加年齢の拡大と保護者の直接的な参与によって今後どう変容していくか、「子供が主体となる行事」という視点から本事例を捉えていく必要性があると考えられる。

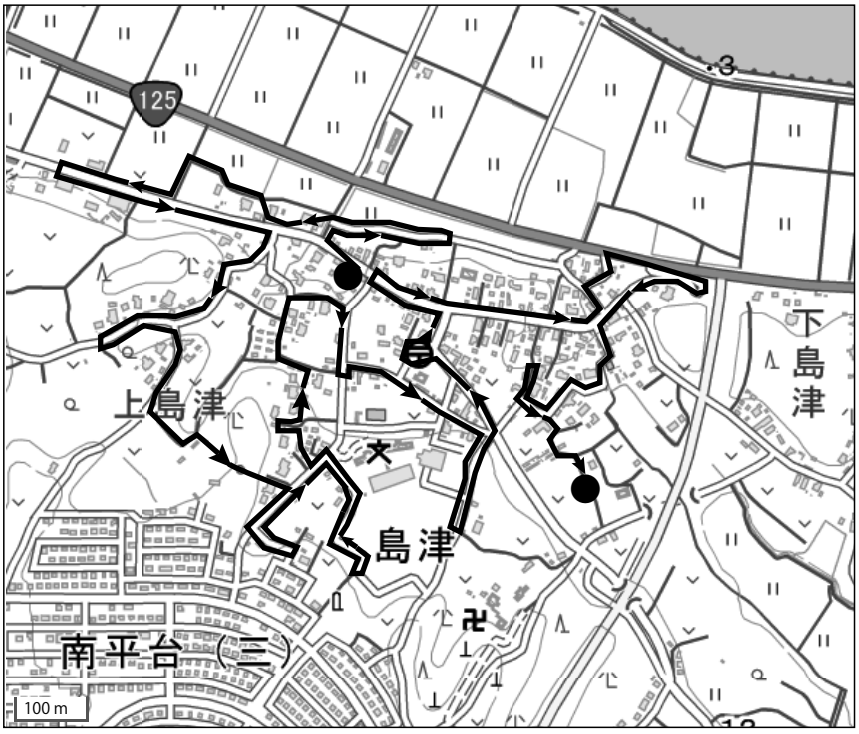
〔情報提供者〕

昭和四十九年生まれの男性
昭和四十七年生まれの男性
昭和二十三年生まれの女性

〔参考文献〕
［内山ａ］内山　純子編『阿見町史編さん史料（８）仙台藩と阿見地域―仙台藩常州領のうち信太郡十三か村―』　阿見町史編さん委員会、一九八一年
［内山ｂ］内山　純子編「阿見町」（茨城県史編さん市町村史部会編『茨城県史＝市町村編Ⅲ』茨城県、一九八一年）
「角川地名大辞典」編纂委員会・竹内理三編『角川地名大辞典８茨城県』角川書店、一九八三年



順路図（迎え盆）



順路図（送り盆）

（横田　慶一）

二四　実穀（じっこく）（阿見町）の盆綱

〔地区名〕

阿見町実穀

〔地区の概況〕

稲敷郡阿見町実穀は、阿見町の西部に位置する農業地帯で、西側は牛久市と接している。県道土浦稲敷線が東西に、また県道土浦竜ケ崎線が南北に走っており、地区内で交差している。また南西部を乙戸川が南流している。

実穀は、江戸時代には実穀村と称したが、明治二十二年（一八八九）には朝日村の大字に、そして昭和三十年（一九五五）には阿見町の大字となった。

現在の戸数は一六九戸だが、昭和の頃と比べて子供の数が減少しており、明治期以来、一三七年の歴史を刻んだ阿見町立実穀小学校が、平成三十年（二〇一八）三月をもって閉校している。

地区内には、現在南北に一つずつ共同墓地がある。このうち、地区の南のはずれにある墓地の方が古く、「～門」、「～兵衛」などの屋号をもつ家の墓が多い。

一方、県道土浦稲敷線沿いにある地区北西部の墓地は、比較的新しく移り住んで来た人が営んでいるという。

〔実施主体〕

小学三～六年生、中学一～三年生）、高校一～三年生及び保護者を中心とした実行委員会

〔実施日〕

①　準備　八月十一日　午前九時から午後十二時

②　迎え　八月十三日　午後六時から午後九時半頃

③　送り　八月十五日　午後六時から午後十時頃

④　焼却　八月十八日　午前八時半から午前十時

〔綱の形状〕

ボンゾナの長さは四m程、太さは約十五～二十cmの注連縄状のもので、特に何かを模っているというわけではないが、参加者数に応じて、年によって長さと太さが変わる。

〔詳細〕

①　準備

八月十一日午前九時十五分頃から、実穀農村集落センターに関係者が集合して作業開始となる。まず、男子高校生二名が縄を倉庫の軒下の梁に括って地面に垂らす。彼らは、小学四年生から盆綱に参加しており、今でもOBとして参加している。同時にコンテナ容器に水を張り、長さ五十cm程の藁の束を解いて水に浸す。この作業は、小学三～五年生の男子三名とその母親が行った。なお、ボンゾナを編む前に藁を水に浸すのは、そうすることで、藁が解けたりばらけたりするのを防ぐためである。

次に、軒下に吊るした縄をボンゾナの芯として、男性三人が各々手に持った藁の束をねじって巻き付けていく。

写真１　ボンゾナを編む

藁束を両手で押さえながら、体ごと一回転させてねじる。さらに藁の束を追加して、芯に巻き付けていく。この作業を繰り返して、綱を長くする。平成二十八年（二〇一六）までは「シルバーさん」と呼ばれる老人会（地区に住む七十五歳以上の方）が行っていたそうであるが、かなりの重労働だったのではないだろうか。かつては、前年度の秋に手作業で稲刈りをしていたため、天日干しをした稲藁を老人会から貰っていた。しかし現在は、コンバインで稲刈りをするので藁の確保が困難なため、実行委員長が近くのホームセンターで約五千円で購入している。また前年度の藁が残っている場合は、それも使う。このほかに、委員長が竹を自宅の裏庭から調達する。

十時過ぎに目標の長さの半分程度出来上がったところで、休憩をはさむ。十一時頃作業を再開し、引き続き藁を編む作業を行う。この時、交代して入った男性は、高校生の時に阿見町に引っ越して来たので盆綱を経験したことはなかったが、先程まで作業をしていた男性に藁の巻き方を教えてもらうなど、後継者として育成されていた。

十一時二十分頃、藁綱の先端を縄で縛り、のこぎりで芯の縄を切り、藁綱を地面に置く。そして約三十cm間隔で、縄紐を用いて持ち手を作る。今回の参加者は十名。そのうち二名は先頭の紐と提灯・竹を持つので、残り八名分の間隔を均等に分けて、およその見当をつけながら持ち手を作っていく。十一時四十分頃には作業を終えて、倉庫の前にボンヅナを置き、終了となる。

写真２　ボンヅナに持ち手をつける

写真３　完成したボンヅナ

事前の準備として、ボンヅナの藁代は中学生が中心となって、例年七月二十日以降、数日かけて集金する。この年（令和元年）は、一軒あたり五百円を盆綱の運営費として寄付してもらうよう町内会の回覧板で周知し、同月二十九日から八月十三日まで子供たちが自転車で各家をめぐり、一六九戸中一〇七戸から寄付を集めた。また盆綱の参加メンバーは、実穀小学校の児童が中心で、名前は知らなくても顔は見たことがあるという程度で、盆綱で知り合うこともあるという。なお、新盆宅（当家）の子供は、盆綱に参加することが出来ない決まりになっている。

②　迎え

八月十三日の午後六時頃、関係者が集落センターに順次集合する。実行委員長らが先に集合し、保護者が持参したクーラーボックスにジュース等を冷やして、伴走車に積み込む。そして、倉庫からボンヅナを取り出す。また、実行委員長が用意した竹を二本並べて置き、盆提灯をそれぞれの先端に取り付ける。竹を適当な長さにするため下から二十cmほどノコギリで切り落とす。同時に、子供たちが持つ提灯にＬＥＤライトキャンドルをセットする。子供たちには、交通安全用の反射材がついたタスキが配られる。六時三十分頃、皆が縄を持ち、先端に提灯をつけた竹二本を中学生が持つ。この役を中学三年生が担うのは、かつて盆綱が男子中学生だけで構成されていたことに由来する。そして他の八名が、ボンヅナをゆるいＵ字型になるように隊列を組む。準備が出来ると、中学生の提灯を先頭にして出発する。この時、提灯の火はまだ点けていない。約二十分後、乙戸川に到着す

ると、高校生が橋の上からボンヅナの両端に付けられた紐を持って、ボンヅナをゆっくり下ろして水に浸す。ボンヅナが水に浸ったのを確認してから道路に引き上げて、乙戸川を出発する。この頃には午後七時近くになっており、辺りは暗くなるため、伴走車のライトで一行を照らす。

乙戸川を出てから約二十分後、一か所目の墓地に到着した。子供たちはボンヅナを地面に置いて、実行委員からジュース類を受け取り、休憩した。暫くしてボンヅナを持つ位置に戻り、その端を持つ高校生が墓地を正面にして「のーりゃんせ、のーりゃんせ、ほーとけさま、のーりゃんせ」と声をかけ、提灯に火を灯す。これにより、ボンヅナにホトケサマの霊が乗り移るという。墓を出発すると、小学生が「のったかのんねか、わっしょいこらしょい」と声をかけ、残りの子供たちがそれを繰り返しながら歩いて行く。道中も同じ掛け声を続ける。第一声は、ボンヅナの前後いずれかの端を持つ子供を先頭にして、順番に発声し、続けて他の皆が繰り返す。さらに約二十分後、二か所目の墓地に到着した。点いていた提灯の灯りを消し、ボンヅナを地面に置き、再び休憩する。暫くして最初の墓地と同様に、高校生が掛け声をかけてから、再度提灯に火を灯す。提灯の灯りは、先祖の霊を乗せている時に灯される。やがて、先程と同様に掛け声をかけて、残りの子供たちが一緒に繰り返しながら出発し、先を急いだ。午後八時頃には、一軒目の新盆宅に到着した。盆綱が来るのがわかると、新盆宅の者が庭先に出て来る。すると先程の高校生が「おーりゃんせ、おーりゃんせ、ほーとけさま、おーりゃんせ」「ほとけさま、お送りに来ました」と声をかける。すると当家のご主人が「有難うございます。」と礼を言うと、女性たちを中心に子供たちにジュースや菓子類を振る舞う。そして約十五分後に当家を出発した。約五分程歩いて二軒目の新盆宅に着くと、提灯の灯りを消す。そして再び高校生が、一軒目と同じ掛け声をかけて先祖を送り届けた。その後、庭先で当家が用意したご飯や菓子類でもてなしを受ける。

写真４　竹に付けた提灯を持つ中学生

写真５　配置につく

写真６　掛け声をかけて歩く

九時十五分頃、集落センターに到着すると、倉庫にボンヅナと道具を仕舞い解散した。なお盆綱が巡るルートは、その年の新盆宅によって変わるが、新旧のいずれの墓を先に行くかは特に決まっているわけではない。同様に新盆宅に行く順序も決まっていないが、十三日に迎えに行く時間帯が早過ぎると「来るのが早いね」と言われてしまう。先祖の霊を迎えるのは周囲が薄暗くなってからとされ、送りは先祖の霊の滞在時間が短くならないよう配慮する。提灯の灯りを頼りにしてホトケサマがついて来るからだという。

③　送り

八月十五日の午後六時頃、集落センターに集合する。子供たちは、提灯

類を倉庫から用意して、タスキをかけ、ボンヅナ、竹を持って、各自十三日と同じ場所につく。六時四十分頃、提灯に灯をつけて集落センターを出発する。約十分後に乙戸川に到着すると、ボンヅナの先端の紐を持って、橋からボンヅナを下ろしていく。ボンヅナ全体が水に浸ったら、引き上げる。例年、十五日は川は行かないが、今回は行くことにしたという。午後七時頃乙戸川を出発し、約十分後、一軒目の新盆宅に到着した。提灯の灯りを消して、先頭の中学生が「のーりゃんせ、のーりゃんせ、ほーとけさま、のーりゃんせ」と声をかけて、他の子供たちが復唱する。続けて中学生が「ホトケサマをお迎えに上がりました」と言う。実行委員長が玄関から声をかけると、当家の方が「有難うございます」と言って、十三日の迎えと同様にジュースや菓子類を配り、盆綱への御礼金を渡す。御礼金は一軒につき三千円～五千円が目安となるそうだ。

約二十分後、提灯をつけて新盆宅を出発する。再び掛け声をかけて次の家へ向かう。七時三十分過ぎに、二軒目の新盆宅に到着した。一軒目と同じように声かけをする子供たちを、当家の方が出迎えてもてなした。

写真７　乙戸川を出発する

写真８　新盆宅の接待を受ける子供たち

そこから約十五分後、一か所目の墓地に到着した。この墓地は路地が薄暗く林に囲まれており、ウシロヤマと呼ばれている。昭和四十三年生まれの男性がかつて盆綱に参加していた頃、この墓地までの道はまだ舗装されておらず、土がぬかるんで凸凹していたので、とても怖かったという。そして皆で提灯を消して、墓地の正面を向いて「おーりゃんせ、おーりゃんせ、ほーとけさま、おーりゃんせ」と声をかける。この後は、手提灯には灯りを点けないので車に回収したが、竹に吊るす提灯のみを残した。墓地の広場で暫く休憩してから墓地を出る時は、竹の提灯も灯りを点けず真っ暗にして行く。やがて、雑木林を抜けて墓地から離れたところで再度、竹の提灯に灯りをともす。九時過ぎに二か所目の墓に到着すると、提灯を消して一か所目の墓地と同様に一連の声をかける。ここで子供たちは、墓地を一周する肝試しを行い、予め隠れていた高校生がお化け役となって脅かしたので、悲鳴が響いた。約十分後、墓地を後にする際、伴走車も墓地を出るまではライトを消して暗くする。子供たちは、帰りは無言である。約五分後、集落センターに到着し、提灯やタスキを倉庫にしまう。竹は倉庫前に置き、ボンヅナは軒下に吊るして干す。これは処分する際に燃やし易くするためだという。その後、新盆宅から貰った菓子類を小袋に分けて、皆に配る。約十分後、実行委員長より翌日の予定と御礼金の配付額についての説明があった後、解散となった。

④　片付け・焼却

翌十六日は、朝九時に十三名が集落センターに集まり、実行委員長から封筒に小分けされた御礼金が一人ずつ受け取った。御礼金は同学年であっても、それまでの参加回数に応じて増額される。またボンヅナを約三十cmずつに切って、ケースに一時保管する。本来であれば、この後ボンヅナを焼却するはずであったが、強風のため十八日に延期した。

十八日は、実行委員だけが午前八時三十分までに集落センターに集合し、

十六日に切り分けたボンゾナを、車に載せて乙戸川に移動し、ボンゾナを川岸で燃やし始めた。一時間弱でボンゾナを燃やし終えると、その灰を箒と塵取りで取って、乙戸川の橋の上から川に散布した。灰をすべて川に流して終了となる。今回は延期したことにより、大人のみの参加となったが、通常は子供たちも行う。当日が雨であったり、悪天候が見込まれたりする場合は、十五日の夜のうちに「無理してでも」乙戸川の川岸で綱、提灯、竹を焼却する。これは「習わし」あるいは「弔事を残しておくのは良くない」という理由による。しかし、提灯は過去に翌年も使用した例があり、経費削減のためにこの年の提灯は保管する予定という。

写真９　ボンゾナを焼却する

〔綱の取扱い〕

移動時は、ボンゾナがU字を描くように持ち手の縄を持ち、地面に触れないようぶら下げて歩く。注意点は二つある。女性はボンゾナに触れてはならないとされていること、またU字型になっている空間には何人も立ち入ってはならないということである。前者について、現在は女子も参加しているが、本来は男子中学生だけが参加を許され、ボンゾナを編む際には女子は藁に触れてはならなかった。そして後者について、このU字型の空間にホトケサマが乗り移り、ボンゾナと共に新盆宅まで歩いて行くとされている。もし、U字型の空間に誤って入ると、上級生から厳しく注意を受ける。この年も小学生がこの領域に踏み込んだ時、高校生から注意を受ける光景があった。それほどこの空間が、特別な意味をもっていることが窺える。ただし、盆綱は本来、男子中学生だけで行っていた行事なので、先祖の霊がどこに乗っているのかを知らない人たちは意外に多いようだ。

〔各家の盆行事〕

各家では、十三日が迎え盆にあたる。この日は朝からナスやキュウリに割り箸を四本挿して、馬に見立てた作り物をつくり、下に蓮の葉を一枚敷いて仏壇前の盆棚に置く。これは先祖の霊がこれに乗って帰るためと伝えられ、近年はこの地域のスーパーでも売られている。群馬県出身の祖父をもち、親の代に実穀に来た女性は、幼少の頃、祖父がナスの馬を家の門に置いていたことを覚えていた。地域による違いと言える。なお、仏壇前の盆棚は、かつて晒を巻いて作ったが、現在は簡略化して卓袱台を用いている。この盆棚に膳を供え、仏壇に近いところに箸を置く。一九九〇年代に実穀へ嫁いで来た女性によると、炊いた白米、汁物、煮物など食卓と同じ献立を供えるので決まりはないという。ただし特徴的なのは、白玉団子を作り、三段に重ねて供えることである。団子の数は奇数が良いとされている。

また昭和三十一年生まれの男性の家では、盆棚の真下にムエンボトケのためのお膳を用意するという。供えるものは、先祖のものと同じである。親から「誰も供えてくれない、身寄りのないホトケサマ」のために用意していると聞いたそうだが、現在その他の家では聞いたことがないとのこと。古くは、他の家でもムエンボトケ用のお供えをすることがあったのであろうか。

午後六時半～七時頃、墓に先祖の霊を迎えに行く。先程の男性によると、子供の頃は「迎えは暗くなってから行く」ようにしていた。それは「提灯の灯りで霊が付いてくるから、暗くなってからしか行かない」のだという。墓で線香を上げて、先祖を迎えてから帰路は提灯を灯している。

また、牛久市出身の昭和四十三年生まれの男性は、先祖を迎える作法について、浄土宗の檀那寺の住職から、先祖の霊を背中におんぶするような仕草をしてから帰路につくということを教わり、現在も行っている。

先祖の霊を迎えた後、地区内の新盆宅に線香を上げに行く。まわる家が多い時は、午後十時過ぎまでかかることもある。親しい家に行く時は仏前に菓子折りを持参することが多い。また香典は、金銭の代わりに米を持って行く家もあった。新盆宅では、訪問者に対して金平や里芋等の煮物、天ぷら、漬け物を用意した。

十四日は、親戚や嫁いだ娘などがやって来る日である。親戚は、親世代が付き合っていた範囲までを指すことが多いようだ。仏壇には、食卓と同じ献立で膳を朝昼晩と供える。

送り盆にあたる十五日も、同様に朝昼晩とお膳を供える。出来るだけ夜遅く先祖を送るので、午後十～十一時、時には午前零時過ぎに墓へ行くこともあるという。家から提灯に火を灯して墓地に向かう。墓地に着くと「また来年な、また来いね」などと声をかけて線香を上げ、提灯の火を消して帰路につく。

〔歴史的変遷〕

実穀地区の盆綱は、昭和の頃から変化した点と、現在も継続する点がある。現在は、集落センターで綱を編んでいるが、昭和四十年代には、明神さまと呼ばれる鹿島神社の境内で綱を作っていた。またボンヅナも現在より大きく、長さは四～五m、太さも直径三十cm程あった。またボンヅナを編む準備は、現在、盆前の日曜日に行うことが多いが、昭和四十年代には、盆の迎えの十三日から遡って一週間前と決まっていた。また、盆提灯の調達方法も変化した。かつては「ちょうちん屋」と呼ばれる家があったことから、そこから購入していた。現在は、藁と合わせてホームセンターで購入して来る。竹につけた提灯は、かつては現在のものより大きく、葬儀業者から一つ六千円程度で毎年新調していた。最近は簡素化して小ぶりになり、毎年同じものを使用しているという。提灯も最近まで蝋燭を使っていたが、現在はキャンドル型ＬＥＤライトを使っている。火は危険で、すぐ消えてしまうためだという。蝋燭を用いた頃は、常に替えの蝋燭とマッチを持ち歩き、消えると都度、点火しながら歩いていて大変だったが、現在はこうした問題は解消されている。

また掛け声も、昭和五十年代までは、全ての掛け声が「のーらっしょ、のーらっしょ、ホートケサマ、のーらっしょ」であった。そのため盆綱のことを通称「ノーラッショ」と呼んでいた。現在は迎えと送り、移動中とで掛け声が異なる。

また盆綱では、新盆宅が用意した食べ物をなるべく残さず食べるのが礼儀だという。食糧が乏しい時代でも、盆綱は、子供たちがご飯を食べられる貴重な機会だったことから、きちんと食べることが礼儀であると教えられたという。

新盆宅は、多い時は四、五軒あることもあり、その年はまわり終わるまで三時間程度かかってしまう。昭和五十年代には、新盆宅だけでなく全ての家の前をまわっていたという。墓地も、現在は二か所に立ち寄るが、かつては三か所に立ち寄ったため、午後五時に出発しても大変な時間がかかっていた。ただし、一般の家では新盆宅のようにホトケサマを降ろすことはしなかった。

また、かつて男子中学生のみが盆綱に参加していた頃は、先輩から様々なことを教えられた。盆綱は、上下関係を学ぶことが出来る成長する場でもあった。

平成二十年頃から子供数の減少が顕著になり、現在は小学一年～中学三年生、高校生ＯＢ、そして育成会と呼ばれる保護者の組織と盆綱実行委員会が行うようになった。

この盆綱実行委員は、子供の数の減少に伴う諸課題を解決し、盆綱行事の継続を図るため、平成二十九年に発足した。現在のメンバーは、小学生・中学生の保護者と、発足時以来のメンバーの五名、区長一名で構成されている。小学生の保護者は、安全確保のため、夫婦のいずれかが必ず参加している。委員会は行事開催に先立ち、五月頃に二回程集まり打ち合わせを

する。また平成三十年より、集落から盆綱に助成金が出されるようになった。会を発足させた女性の意見では、「子供たちだけではもはや盆綱を継続することは難しいので、その保護者を含めた組織を確立して続けていく」ことを目指しているという。しかし現状では、次回以降の後継者が見つからず、発足時からのメンバーが例年行っている状況である。

また、盆綱や提灯の処分についても変化がみられる。かつて盆綱は乙戸川に流していたが、現在は川岸で焼却している。しかし新盆宅が少なく早くまわり終わった場合、ボンヅナがまだ乾き切っていないので、なかなか燃えない。また昔の提灯と違って、今の提灯はワイヤーが入っているため燃え残ってしまう。以前、川岸でボンヅナ等を燃やしたところ、周辺住人から苦情が出たことから、実行委員会では消防団のメンバーを加えて対策を講じた。

聞き取りによって知ることができた昭和初期の盆綱から内容は変化しており、男子中学生のみが参加していた盆綱から、子供の数の減少に伴い女子児童や親をも含めるようになった。ボンヅナや提灯の大きさなども、構成員の変化と財源の合理化のため、徐々に簡素化していることがわかった。またこれまで新盆がなかった年はなかったが、当地区では新盆宅しかまわらないので、新盆がなかった場合の方法は検討が必要である。

〔所見〕

ここでは、主に盆綱の地域的意義と、構成員の変容による今後の盆綱の継続について考察を述べる。盆綱に対する子供たちの思いはそれぞれである。例えば参加者の小学六年生と中学一年生は「面倒くさい」と言いながらも、「来年も持つかも」「歩く距離が短ければ持つ」とのことであった。また高校生の中には、新盆宅が多かったら持つという子もいた。小学四年生から連続して参加している高校二年生の男子は、「盆綱は続けてほしいと思う。今までやってきた行事だから。人がいるならやってほしい。」と話していた。

新盆宅の長女によると、毎年この時期になると盆綱の掛け声が聞こえてくるため、盆であることを実感するというが、小さい頃は兄二人と弟一人が盆綱に参加していたことが羨ましかったという。兄二人は現在海外で暮らしているが、毎年この時期になると電話口で盆綱の掛け声を聞かせてくれと頼むほど、盆綱に対して思い入れがあるようだ。盆綱が家に来たことで「これで故人が帰って来てくれたなという実感が湧いた」と涙を滲ませながら話してくれた。

また別の新盆宅の女性は「自分の家が新盆の年に、盆綱をやらなくなるのはちょっと…」と思っていたので、盆綱を続けてくれたことを「賑やかでいい。（亡くなった）おじいさんも喜んでいるはず」と喜んだ。

墓地でホトケサマを迎えてからの盆綱の巡行は、子供たちを中心とした生者と先祖の霊たちが、盆綱という行事を通して共存する一行となる。その意味で墓地に行く前のボンヅナと、ホトケサマを乗せた後のボンヅナとではその性質が異なる。ホトケサマと一体となったボンヅナが地区を練り歩くことに大きな意義がある。

しかし一方で、盆綱の継続について、現在集落の総会時に賛否が対立している。廃止派は、子供の数が減少していて存続が困難であること、そして子供たちが集落をまわる際に、交通安全の面でも危険なのではないかとし、反対に継続派は、盆綱は地域活性化、子供たちのコミュニケーションの場であると、それぞれ主張する。両者の意見は、総会では決まらず、平成三十一年二月二十三日開催の常任委員会（区内十一班のうち各班一名ずつ選出の十一名により構成される）に持ち越しとなり、そこでも判断がつかなかった。このため区全戸に対して盆綱を継続するか否かのアンケートを実施して、多数決で決めることになった。アンケート結果は、今回（令和元年）の盆綱終了後すぐに回収される予定で、その内容によって次年度以降は廃止するかもしれないという。ただ実行委員の男性の意見では、盆綱を続けたいという子供たちが一人でもいれば続けたい。また、要は実穀

地区の人たちが本当に続けたいと思うかどうかであると言う。

なお外部からの参加については、阿見町内でも盆綱を知らない人は多いという。小学生の母親は、帰省してきた姉の娘二人（高校生・大学生）も見に来たが、参加したいという思いもあったと言う。盆綱参加者が十三名と決まっていたから、という理由もあったが、盆綱は地域の子供たちの行事というような雰囲気が確立している様子であった。また盆綱を維持することの困難さの一つには、盆休みに「（盆綱があると家族で）どこにもいけない」という意見もある。しかし小学生の頃から盆綱に参加している子供たちは、毎年盆綱があることが当たり前となっている。大人と子供の間の感覚の違いが興味深い。

当地区の盆綱は、かつて男子中学生のみが参加していた頃は、上下関係を知る場でもあり、地域のコミュニティにおける重要な教育的な場でもあった。地域にとっても盆綱が重要な役割を担っていたことは、新盆宅のもてなしの熱心さからも窺い知ることができる。一方、地域全体の子供の数の減少が顕著になってきた昨今でも、女子児童の参加や親の介入を得ながらでも継続しようとする当地区の盆綱に対する強い姿勢を知ることができる。地域における盆綱の果たす役割は、これまでも、これからも継続して保持されていると言える。

〔情報提供者〕

中島　佳男さん（昭和三十一年生まれ）

〔参考文献〕

『阿見の民俗』阿見町史編さん委員会（一九八一）

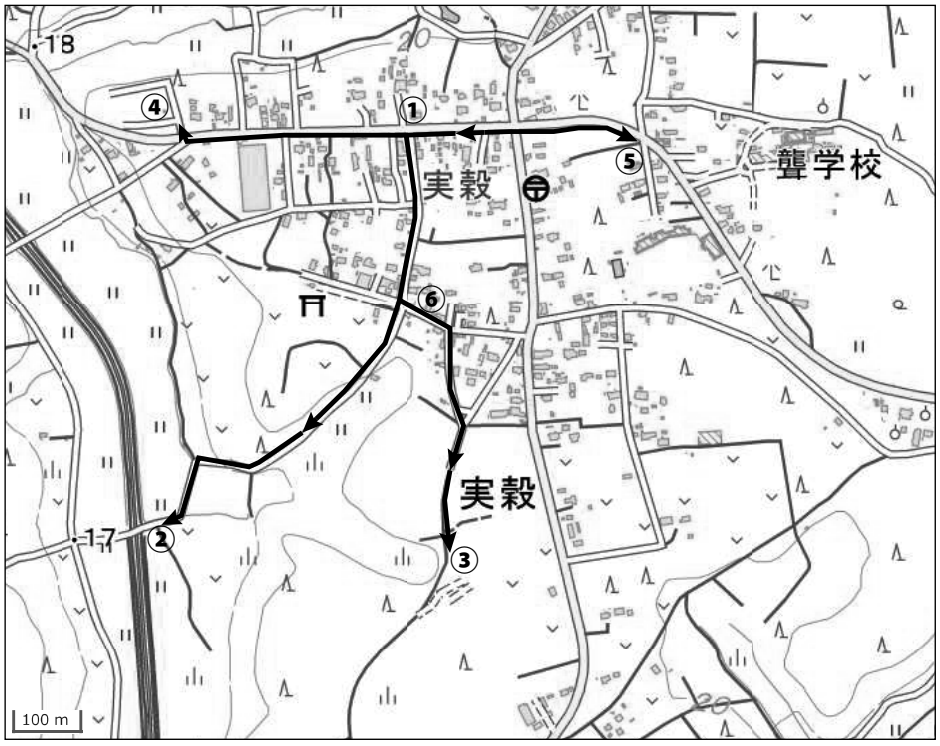
『阿見町史』阿見町史編さん委員会編（一九八三）

『角川日本地名大辞典８　茨城県』角川書店（一九八三）

田中宣一『年中行事の研究』桜楓社（一九九二）

（岡田　真帆）

〔順路図〕



※　盆綱は、新盆の家にしか行かないため、毎年順路は変わる。

① 実穀農村集落センター　② 乙戸川（ボンゾナを水に浸す地点）
③ 共同墓地（古い方）　④ 共同墓地（新しい方）
⑤ 新盆宅１　⑥ 新盆宅２

二五　大塚（筑西市）の盆綱

〔地区名〕

筑西市大塚

〔地区の概況〕

大塚は、筑西市の中央部に位置する三十六戸の地区である（令和元年現在）。平成十七年（二〇〇五）の合併以前は下館市に属しており、旧協和町・明野町との境に位置していた。農業が盛んではあるものの、専業農家は四軒程であり、兼業で行う家が多い。近年は、こだますいかの生産が多い。

地区は田畑が広がる低地部分と、神社や墓地などがある台地部分からなる。集落はその両方に形成されており、それぞれ下大塚、上大塚と呼ばれてきたが、現在は、上大塚を第一町会、下大塚を第二町会と呼ぶことも多い。

令和元年（二〇一九）の戸数は、上大塚が二十六戸、下大塚が十戸であった。

写真１　神明神社入口

集落の始まりは低地部分であったようであり、今でも低地部分には、「屋敷」という字名が残っている。しかし、次第に台地上に家々が移って上大塚集落が形成され、低地は水田として利用するようになった。やがて、上大塚の戸数が増えてきたため、分家の人々が低地に家を建て、下大塚が形成されていった。そのため、上大塚には古くからある家が多い。

集落の長は自治会長（「町内会長」と称されることもある）であり、その下に共済組合や農協関係の委員等が置かれている。役員は毎年一月三日に行う新年会で交代するが、町内会長は年度末に交代する。

集落の産土は神明神社である（**写真１**）。集落の人々は「カンドリサン」と呼ぶ。字名が「香取」であることから、「カトリ」が「カンドリ」になったのではないかと考える人もいる。神明神社では、十一月一日に「旗揚げ祭」があり、世話人が神明神社の鳥居の前に旗を建てる。

写真２　加波山講の護符「加波山本宮村内安全神璽」の文字あり

集落の人々は、いずれも旧下館市街にある尊像寺（天台宗）と藏福寺（浄土宗）のどちらかの檀家となっている。

集落では加波山講が行われており、毎年四月の第三日曜日に加波山に参拝する（**写真２**）。現在は、役員が地区を代表して神社に参拝しているが、「広報しもだて」によると、昭和五十九年（一九八四）頃までは一戸一人ずつ加波山神社をお参りする「加波山総登り」が行われていたという。加波山神社には、台風除けと豊作を祈願し、参拝していたようである〔「広報しもだて」昭和六十一年六月号、八五八頁〕。

〔実施主体〕

世話人（三名）、大塚集落の人々

上大塚は二班（各十三軒）に分かれるが、下大塚は全体で一つの班（十軒）となっており、それぞれの班から一名ずつ、計三名の世話人が出される。世話人は一年交代の輪番制であるが、その仕事は、盆綱以外にも一月二十五日に初天神と、七月二十三日に神明神社で行う祭りなどがある。準

備や片づけ、当日の段取り等多くの仕事があり、「自治会長より忙しい」と語る人もあった。

〔実施日〕

八月十三日。午後五時頃から午後七時半頃まで。雨天決行

〔綱の形状〕

長さ約十五m、太さ約十五cmである。

〔綱の取扱い〕

特に決まりは設けられていないようである。

〔詳細〕

① 準備

八月十三日に世話人三名が、稲藁の調達や、盆綱に来る子供たちに配るお菓子などを買い出しを行う。集めた稲藁は、綱を作りやすいように束ねておく（**写真3**）。束ねた稲藁は「コマルギ（小丸木）」と呼ばれている。

② ボンヅナ作り

毎年集落の各家から一人ずつボンヅナ作りに参加する。男女どちらでもよいようであるが、令和元年（二〇一九）のボンヅナ作りに集まったのは全て男性であった。特に事前の連絡は行わないが、自治会長と世話人が綱を作っていると、自然に人が集まって来るという。

まず準備として、足場を組み立てて、綱作りのための櫓を作る。「ハナミチ（花道）」と呼ばれる丁字路に、四本の丸太を組み合わせて足場を作り、その上に竿をかける（**写真4**）。丸太は、毎年ハナミチ付近の家に保管しておく。少なくとも、百年前から同じ丸太を使っているという。

綱は、稲藁と縄で作る。藁は集落で稲作を営む農家から集める。綱を作る前に藁を濡らし、湿らせておく。こうすることで、藁を強く引っ張って

写真3　コマルギの束

写真5　綱の頭を竿にかける

写真4　足場作りの様子

写真6　綱作りの様子

も滑りにくくなるためである。そして、縄の先端に綱の頭をつけて、それを先程の櫓にかけ、縄に藁を縛り付けて太い綱を作っていく（**写真５**）。綱は、「せっせと、せっせと」と声を合わせて、三人で稲藁を三つ編みに結い上げていく（**写真６**）。「せっ」で藁を隣の人に受け渡し、「せと」で綱を引き、締め上げる。藁は時計回りで回す。太い綱を手際よく作るためには、三人が声を合わせて稲藁を手渡していくことが必要である。綱を作る三人以外は、長くなった綱を後ろに引っ張る。綱の長さに決まりはなく、集めた稲藁がなくなるまで作る。また、綱には三か所の「たんこぶ」と呼ばれる結び目を作る（**写真７**）。「たんこぶ」には、厄を封じ込める意味があるという。

二時間程で綱が完成する。作り始めた頃はまだ暮れかけの空であったが、完成する頃には暗闇になっていた。完成間近の頃には多くの人が集まっていた。

③　盆綱引き

櫓を片付けた後、完成した綱を用いて二手に分かれて綱引きを行う（**写真８**）。

写真７　たんこぶ

写真８　綱引きの様子

綱の頭は南に向けることが多いという。綱引きに参加するのは、集落に住んでいる人々や、お盆を利用して帰省してきた人々で、男女の別や、年齢制限などはない。二手に分かれる際には、上・下大塚や、班などで分かれるのではなく、好きな方に入って行う。令和元年度は、四回ほど綱引きを行った。

写真９　盆綱引きを終えた綱

写真10　翌日の片づけ

④　片づけ

引き終えた綱は、一晩ハナミチに置いておく（**写真９**）。車が通ることなどを考慮し、道路の端に寄せる。

写真11　どんど焼きの様子

盆綱引きが終わると、集落の児童館に子供たちが集まり、世話人からお菓子を受け取る。子供たちが帰ると、ボンヅナ作りに参加した人たちで慰労会を行う。

翌十四日の午前中、役員はハナミチに散らばった稲藁の片付けを行う（**写真10**）。綱は神明神社の北側の広場に置いておき、翌年の一月十四日に行う、どんど焼きで焼却する（**写真11**）。

〔各家の盆行事〕

大塚地区の盆行事は、八月第一日曜日に行う墓掃除に始まる。墓掃除は集落の班ごとに分かれて行う。墓地は両墓制であり、埋め墓（**写真12**）、詣り墓（**写真13**）が道を挟んで向かい合っている。

八月十三日の午後、先祖を迎えに埋め墓へ行く。時間は決まっていないが、早く行く方がよいとされている。しかし近年は暑いため、夕方涼しくなってから迎えに行く人も多いようである。迎えに行く時には提灯を持って行く。墓地に着くと、墓地の入口で線香を焚き、石の上に手向けて来る（**写真14**）。そして、持って来た提灯の中の蝋燭に火をつけて家に持ち帰り、盆棚の蝋燭に火を移す。

十四、十五日は初盆参りに行く。

十六日の昼、埋め墓に先祖を送りに行く。送る際には提灯と墓に供える花や線香等を持って行く。埋め墓は家ごとの場所が決まっているわけではないが、花や線香を手向けたほか、サトイモの葉の上に賽の目状に切って混ぜ合せたナスとキュウリを載せて供えてくる。（**写真15**）。

〔歴史的変遷〕

大塚地区における盆綱引きは、疫病の流行を受けて始まったとされる。「広報しもだて」によると、昭和二十一年（一九四六）に一度行わなかったことがあったが、その年に赤痢がはやり、多くの方が亡くなった。それをきっかけに、その後は中断することなく盆綱引きを続けている〔「広報しもだて」昭和六十一年六月号八五八頁〕。昭和二十一年当時を知る人々によると、「特に子供が多く死んだ」という。こうした経緯により、たと

写真12　埋め墓

写真13　詣り墓

写真14　埋め墓入口に線香が手向けられる

写真15　サトイモの葉に載せて埋め墓に供えられたナスとキュウリ

え雨が降っても中止されることはない。なお、盆綱引きを行う場所はハナミチと決められている。

大塚地区の盆綱の歴史的変遷として、①稲藁の集め方、②盆綱引きの方法の二点が挙げられる。

① 稲藁の集め方

盆綱引きは、大人の男性主体で行うことに変わりはないものの、かつては、稲藁集めは小学生の男子の仕事で、一軒一軒をまわって集めていたという。そして、集めた稲藁でコマルギを作るまでを子供が担当した。コマルギ作りは先輩から後輩に受け継がれる技術であったようで、当時を知る人々はコマルギを作る際、「結び方がわりぃ（悪い）なんて怒られたよ」と厳しく受けた指導の思い出を口々に懐かしく語った（**写真16**）。しかし、次第に子供が少なくなり、男子だけでは盆綱を行えなくなったため、女子も加わるようになった。そして、平成十年頃には、縄を集めるという仕事さえも子供の手を離れてしまったという。現在、子供が関わるのは綱引きのときと、綱引き後に児童館でお菓子をもらうときだけである。

写真16　コマルギの結び目

また、昭和四十年（一九六五）頃までは稲作を行う農家が多く、藁の調達がたやすかった。そのため、現在のコマルギは直径約三cm程（片手の人差し指と親指で作る円で表現）であるが、かつてはずっと太く、直径約六cm程（両手の人差し指と親指で作る円で表現）あったという。綱の長さも五、六十mにまでなったと語る人もあった。藁が多く集まり過ぎてしまい、使いきれない年もあったようである。

② 盆綱引きの方法

現在盆綱引きは、集落内の人々が二手に分かれて綱を引き合う地区の行事となっているが、かつては他地区と対抗で行うこともあった。大塚地区の隣の深見地区とは、「集落の威信をかけて戦った」と語る人もいた。深見地区では綱を作ることはなかったようで、大塚地区が作った綱を深見地区と引き合った。その頃は、綱引きをする人だけでなく見物人も大勢来ており、とても賑やかであったと語る人が多かった。露店が二、三軒出ていたこともあったという。

「広報しもだて」には、「綱を持っていかれるというと、なんせ太い綱ですから田畑が荒らされるばかりでなく、伝染病がはやるという言い伝えがありましてね」、「だから絶対に負けるわけにはいかないんですよ。笑い話になるかもしれませんが、綱を持っていかれないようにと、大ケヤキの木に縛り付けておいて引っ張り合いした年もあるんですよ」という記述がある。かつての盆綱には、大塚集落の勝利に、集落の「豊作祈願」と「無病息災」の意味が込められていたことが窺える。しかし、現在の盆綱引きは集落内で行うため、勝敗と疫病や豊作との関わりはないようである。

〔所見〕

大塚地区の盆綱は、世話人を中心とした地区の人々のまとまりが感じられる行事であった。〔歴史的変遷〕でも述べたように、子供の参加の場が限られ、他地区との対抗という要素はなくなったため、規模をみれば縮小しているようにもみえる。

しかし、実際の盆綱引きを見学して見られた光景は、寂しい様子ではなく、綱作りに集まった人々が、笑いながら、時折試行錯誤しながら共に汗を流して綱作りを行う姿であり、綱引きに集まった人々が、大人も子供も、そして、地区に住んでいる人々だけでなく、盆休みを利用して帰省してき

た人々も含めて、一心に綱を引く姿であった。

このような様子から推察されることは、盆綱引きが地区に住む人々が団結する場となっていること、そして、地区に帰って来た人々を受け入れる場にもなっていることである。無病息災・豊作祈願といった当初の目的が薄れてはいるようにはみえるものの、人々が集まる楽しみの場として受け継がれている様子が窺える。

〔情報提供者〕

篠崎　和男さん（令和元年度大塚地区自治会長）
稲川　浩季さん・篠崎　恒夫さん・松本　裕司さん
（以上三名、令和元年度世話人）
ほか、大塚地区の皆様

〔参考資料〕

「広報しもだて」一九八六年六月号
国土地理院電子 web
（http://maps.gsi.go.jp/#16/36.287877/140.006969/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1）
（最終閲覧日：二〇二〇年四月六日）

（三津山　智香）

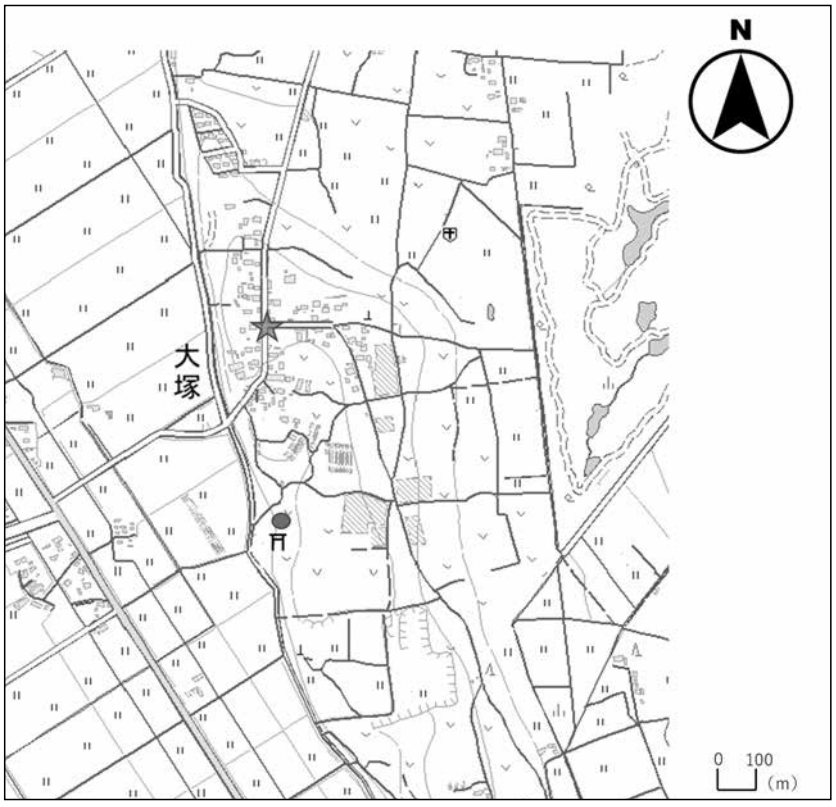


図　盆綱引きの位置
（「★」が盆綱引きを行うハナミチ、「●」がどんど焼きを行う場所）

第三章　調査報告

第二節　現況確認調査報告

二六　仁古田（笠間市）の盆綱

〔実施日〕八月十四日　午後五時から午後十一時（集落まわり）

八月十二日の午後、小学四年から中学三年までの男子が、各家から藁をもらってまわる。翌十三日の午後、公民館（宝来寺跡）に大人三人と子供たちが集まり、長さ二m、太さ二十cmのムカデ状のボンヅナを作る。ボンヅナは、綱（昔は井戸綱）を芯にして、稲藁を三束ずつ捩りながら綯い、所々に髭（約二十cm）を出す。ボンヅナは、子供の数によって長さが異なり、子供が多かった頃は、約四mあったという。また、ボンヅナの中央両脇に「トンビ」という一m五十cm程の縄を付ける。この縄を身長が高い子が持って、各家でボンヅナを揉むことになる。

十四日の夕方、子供たちがボンヅナを持って「集落まわり」を行う。目的は「鎮魂」であり、「仏の送迎」の意味はないという。身長の低い子が、ボンヅナの両端を持つ。中学生も参加しており、特に三年生はまとめ役としての役割を担っている。午後五時に公民館を出発するが、途中墓地には寄らない。竹の筒を持った子が先頭を歩き、移動中は皆で「ワッショイ、ワッショイ」を繰り返す。各家に着くと「ワッショイ、ワッショイ」と言いながら、綱を上下に揉む。竹の筒を持った子が、「おぼしめし、ちょうだい」と声をかけて、家人から「おぼしめし」を受け取る。約七十軒をまわり終えると公民館に戻る。最後にボンヅナを涸沼川に流して終了となる。

仁古田では、盆綱とは別に、十三日各家で仏さまを迎え、十六日に送っている（迎え提灯、送り提灯）。

（文化課　大塚　健司）

二七　大古山（笠間市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時から午後六時三十分（迎え）

大古山の盆綱は、江戸時代に始まったとされる。本来は各家をまわるが、令和元年は、地区内のそよ風広場で開催される夏祭りに先立って行われた。また平成二十五年以降、市販の綱を使用したが、七年ぶりに手作りの綱が復活した。

八月十三日の午後、大古山公民館で、年配の男性二名が綱の製作を指導し、小学生男女及び保護者らが約五mの綱を編み、公民館脇の薬師堂に奉納した。

午後五時に「ワッショイ、ワッショイ」と声をかけながら公民館前を出発。途中立ち寄った新盆宅で、参加者が二手に分かれて「イチ、ニ、サン」のかけ声で綱引きを行った。その目的は不明とのこと。綱がそよ風広場に到着したところで、夏祭りが開始された。綱は薬師堂に収められ、後日焼却した。

〔情報提供者〕嶋田　新さん

写真１　出発前に説明を受ける

写真２　新盆宅で綱引きを行う

（文化課　大塚　健司）

二八　佐才（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時から午後七時頃（迎え）

佐才の盆綱は、一班と二班に分かれて実施される。綱は、一班が竹に縄を巻き付けたもの、二班が稲藁で竜の形に編んだもので、いずれも子供たちの人数に合わせた一・五m程の長さである。両班とも、共同墓地を起点・終点として各家に仏さまを送り届ける。かけ声は、一班は墓地で「乗りらっしょ乗りらっしょ、ホトケさま乗りらっしょ」、各家で「ホトケさま連れてきた、ホトケさま連れてきた。降りらっしょ降りらっしょ、ホトケさま降りらっしょ」、二班は墓地で「ホートケサーマノセニキタ、ノーラッショ、ノーラッショ」、各家で「ホートケサーマノセテキタ、オーリラッショ、オリラッショ」である。

綱は、一班は製作者が持ち帰って処分し、二班は最後に焼却する。

〔情報提供者〕石井　正道さん、大塚　忠男さん、伊藤　清美さん

写真１　ボンヅナが完成（１班）

写真２　ボンヅナに仏さまを乗せて出発（２班）

（補助員　三津山　智香、藤崎　綾香）

二九　野田（隠谷東組）（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時から午後六時（迎え）

隠谷地区は、東一・二、南、豊台、池の上一・二など八班（組）に分かれるが、現在は東一・二が合同で盆綱を行っている。八月十三日朝七時より個人宅で、年配者の援助のもと大人たちが長さ二m弱、径二十cm程の竜型のボンヅナを作る。この技術をいかに伝承していくかが課題であるという。綱には、はじめにナスの角、ホオズキの目、トウモロコシの葉で作る舌を付けるが、地区内を歩く途中で、子供たちが自由に装飾する。完成すると、田村総本家（東一組）の墓までボンヅナを運ぶ。ただし、田村家の墓の多くは別の共同墓地にあるという。

午後、子供たちが田村総本家の墓に集まる。隠谷地区では、以前から中学生まで参加を認めているが、殆どは小学六年生でやめてしまうそうだ。綱を持つには、少なくとも四人が必要であるため、現在は女子や年長児も参加している。墓で仏さまを綱に乗せる時に「ノリラッショイ、ノリラッショイ、ジッチャン、バッチャン、ノリラッショイ」と言い、二～三周回る。地区をまわる際は、大人が随行する。各家の前に差しかかると「仏さまをお連れしました」という意味の声かけをする。この声を聞いて、各家が準備する。各家では、仏間にボンヅナ全体を乗せて「オリラッショイ、オリラッショイ、ジッチャン、バッチャン、オリラッショイ」と声をかける。これで仏さまを送り届けたことになるという。こうした所作を繰り返し、最後の鏑木家を終えると、その近くの林にボンヅナを投げ捨てる。

なお、南組の盆綱は、平成二十年代の中頃に中止となった。

〔情報提供者〕田村　孝広さん

（文化課　横田　博之、大塚　健司）

三〇　川戸（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時から七時、午後五時から八時（迎え）

川戸の盆綱は、二班（一・二班と三・四班）に分かれて実施される。いずれも大人たちを中心に稲藁で竜を模った約三ｍの綱を作製し、小学生の男女が綱を引く。一・二班は、墓地で「ホートケサマ、ノーラッショ」と唱えて左回りで墓地を三周して出発し、各家では「ホートケサマ、ノセテキタ」と言いながら綱の先端で家の壁を叩く。三・四班は、各家の手前で「ジッチャン、バッチャン、ノセテキタ、ホートケサーマノセテキタ」、各家では「ホートケサーマノセテキタ、オーラッショ」と唱える。両班とも、最後は綱を鎌田川の橋に括り付けて終了となる。

〔情報提供者〕内田　正次さん、川口　好広さん、斎藤　隆夫さん

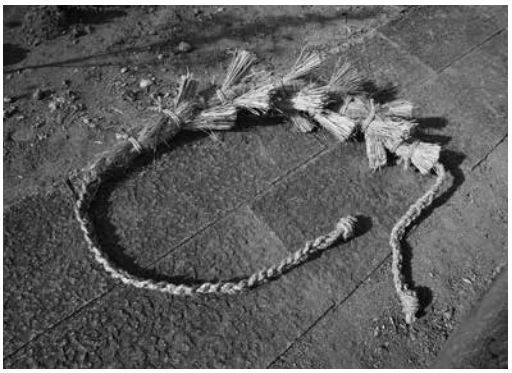


写真１　稲藁で編んだボンヅナ（1・2班）

写真２　墓地を出発（3・4班）

（補助員　北條　海織、森戸　日咲子）

三一　小塙（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時から午後六時十五分・八時（迎え）

八月十五日　午後六時から午後七時十五分・九時（送り）

小塙の盆綱は、二班（一・二班と三・四・五班）に分かれて実施されるが、八月十三日の午後、小塙球場で大人を中心に二班合同で綱を作製する。綱は約三ｍの注連縄状で、完成するとそれぞれ共同墓地に運ばれる。同日の夕方、両班とも小学生の男女が少人数ながら、「トーセンヤラ、エンヤラエン」の掛け声で班内をまわる。十三日は家の入口で「ホートケサマ、オリラッショ」と言って仏さまを降ろし、十五日は縁先で「ホートケサマ、ノーラッショ」と言って仏さまを綱に乗せる。この時綱を、縁の敷居にぶつける。

盆綱が終わると、綱はそれぞれ共同墓地に納められる。

〔情報提供者〕皆藤　幸男さん

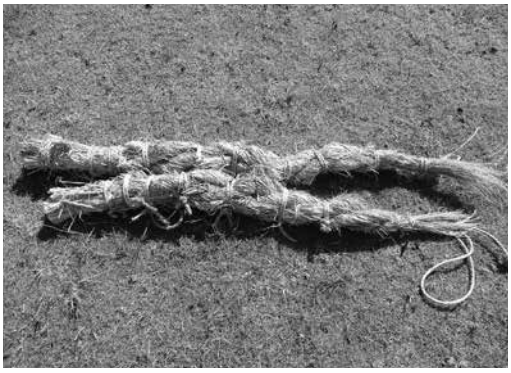


写真１　完成したボンヅナ（２本）

写真２　各家をまわる（13日、１・２班）

（文化課　大塚　健司）

三二　鮒内（いさうち）・川端（かわばた）（小美玉市川中子）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後六時から午後八時（迎え）
八月十五日　午後六時三十分から午後八時三十分時（送り）

盆前の土曜日に、大人三人が市販の縄を束ねて捩り、竜型の綱を作る。上下の顎と髭二本及び舌が付く。完成後は、保護者宅で一時保管する。八月十三日の夕方、小学生の男女が鮒内共同墓地から坂嘉美さん宅まで「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で地区内をまわり、各家では「ホートケサマ、オーラッセ」と言って仏さまを降ろす。十五日は坂さん宅より「ホートケサマ、ノーラッセ」と言って仏さまを綱に乗せて地区内をまわり、共同墓地に戻る。

盆綱が終わると、綱に火を着けて園部川に流す。

〔情報提供者〕坂　宗行さん

写真１　８月13日の迎えの様子

写真２　８月15日出発前（坂嘉美さん宅）

（文化課　大塚　健司）

三三　根玉里（ねたまり）（小美玉市下玉里）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後六時三十分から午後七時三十分（迎え）
八月十五日　午後六時から午後七時（送り）

お盆前の土・日曜日に、大人と小学生男女が協力して藁製の綱を作る。綱は竜と言われるが、目や角はない。八月十三日の夕方、玉川地区学習等供用施設を発着地とし、「ヤーサ、ボンサ、仏さま、おちらっせ」のかけ声で、各家に仏さまを送り届ける。各家では、小遣いや菓子を子供たちに渡す。お盆の間、綱を同施設の屋根裏に保管する。十五日は、「ヤーサ、ボンサ、仏さま、乗らっせ」のかけ声で、仏さまを綱に乗せる。各家をまわり終えると、綱を塚山古墳に納め、朽ちるのを待つ。なお、令和元年は、中学一年生も参加した。

〔情報提供者〕今泉　直美さん

写真１　巡行する様子

写真２　家を訪れる様子

（文化課　横田　博之）

三四　大井戸（おおいど）・共栄（きょうえい）（小美玉市下玉里）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時三十分から午後九時（迎え）
八月十五日　午後六時から午後十時（送り）

綱は、事前に指導的立場の個人が藁を用いて作製したもので、蛇型で頭部に口がつく。

参加者は年長児と小学生の男女。なお、中学生も協力するが、綱には触れない。子供たちは白装（半袖Tシャツ、半ズボン、鉢巻）で、年長児が先導役として提灯を持つ。迎え・送りとも、ロケット花火を合図に共同墓地を出発する。各家で先祖を綱から降ろす際に、綱を地面に叩きつける。綱は地区をまわる中で、壊れた方が縁起がよいとされる。送りが終わると、墓地で綱を焼却し、花火を行った後、各家でもらった小遣いや菓子を、子供たちが相談して分け合う。

〔情報提供者〕室町　恭司さん

写真１　ボンヅナを持って出発

写真２　地区内を巡行する

（文化課　横田　博之）

三五　田畑（たばた）・橋下（はしくだり）（小美玉市下玉里）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後六時から午後七時（迎え）
八月十五日　午後六時から午後七時（送り）

盆前の土・日曜日に、保護者たちが藁で蛇型のボンヅナを作る。ホオズキで目を、柿の枝で角を作るのが特徴である。八月十三日の夕方、小学生三名、中学生一名が、高内稲荷大明神付近を発着地として地区内をまわる。各家に着くと「ヤーサ、ボンサ、仏さま、降りらっせ」と声をかけながら仏さまを送り届ける。十五日は各家で「ヤーサ、ボンサ、仏さま、乗らっせ」というかけ声で、仏さまを綱に乗せる。各家からは小遣いや菓子などが渡され、終了後に子供たちが話し合って分配する。

令和三年四月の玉里地区の小・中学校統合を機に、盆綱を廃止するか、隣接の根玉里地区と併合するかは検討中である。

〔情報提供者〕
久保田　浩一さん

写真　ボンヅナを持って巡行する

（文化課　横田　博之）

三六　上馬場（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後三時から午後九時（迎え）

八月十三日の午後、鹿島神社で、大人たちが長さ三m、太さ二十cm程の注連縄状の綱を作る。昔は、長さ五m、太さ五十～六十cmあったという。午後三時に、小学生の男女が集落センターを出発して、大人（子供会会長ら）の随行のもと四十二軒をまわる。この時、新宅など仏のない家はまわらない。墓地で、「ホートケサマ、ノーラッセ」と声をかけながら三周回るが、移動中のかけ声はない。各家では、「ホートケサマ、メーリャシタ」と言って三周回り、仏さまを送り届けると、五百円から千円を受け取る。新盆の家は、やや高額を渡すという。このお金は、子供たちが平等に分ける。綱は、集落センターの脇に放置するため、しばらくすると腐食してしまう。

〔情報提供者〕川野　謙二さん　※写真提供・小美玉市

写真１　ボンヅナが完成

写真２　綱を引きずって移動する

（文化課　大塚　健司）

三七　中台（小美玉市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時三十分から午後八時（迎え）

百年以上前から続く行事。子供会が主体となるが、子供の数が減少したため、昭和四十年代に女子が加わった。現在は、中学生も参加している。

通常、八月十三日に大人二人が、中台公民館で竜を模ったボンヅナを作製する。綱の長さは、子供の減少に伴って短くなった。

夕方、墓地の前で、「仏さまのらせ」と唱えながら、時計回りに三回回って仏さまを綱に乗せる。各家に着くと、今度は反時計回りに回りながら「仏さまめらっせた」と何度も唱える。各家では子供たちに心づけを渡す。新盆の家は額が多いという。終了後、ボンヅナは墓地に置かれる。

〔情報提供者〕神山　美穂さん（子供会会長）

写真１　完成したボンヅナ

写真２　墓地の前で仏さまを乗せる

（文化課　齋藤　和浩）

三八　小堤（おづつみ）（茨城町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後十二時三十分から午後八時頃（迎え）

八月十三日の午前八時から、香取天満神社でボンヅナを作る。長さは五m程。両端約一mが頭と尾。中ほどの胴部は三m余りで径十五cm弱。竜の尖ったヒレを表現して突起状に藁を編み込み、桧の葉を挿し、持ち手の綱を六本つける。完成した綱は、共同墓地入口のお地蔵さまの周りに横にしておく。十二時三十分、中学生男子が集まり、三年生の一人が「なーんまいだんぼ」と言うと、他の子供たちが「ほとけさまきたよ」と続けて、百軒余りをまわる。各家では、迎え火を焚いて盆綱を待つ。家人からお金をもらうと、桧の葉をちぎって渡す。これで仏さまを届けたことを示す。家を出る時、子供たちは迎え火を踏んで消す。休憩の際は、綱が地面に触れないよう、膝の上に置く。終了すると、綱を鳴神神社に置いてくる。この年は、杉の大木の根元に巻くように置いた。

〔情報提供者〕林　文雄さん

写真１　声をかけながら次の家へ「なーんまいだんぼ、ほとけさま、きたよ」

写真２　家の人に桧の葉を渡す

（文化課　吉川　明宏）

三九　海老沢本郷（えびさわほんごう）（茨城町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時三十分から午後九時（迎え）

八月十三日の午後、コミュニティセンターで年配者の指導のもと、大人六人を中心に荒縄三本を撚り、さらに三束撚りをかけるように綱を編む。五十cm余のところから藁を巻き付ける。所々に藁を挿し込んで「ヒゲ」とする。形は竜と考えられる。完成後、綱を本郷十字路の角に置いて解散する。午後四時三十分に小学生男女六名が集合し、まず集落の南のはずれのお地蔵さまの前で、次に個人の墓の入口で、さらに共同墓地の前で、綱を振りながら「ホトケサマ、アガラッショ」と二～三回声を掛ける。そして集落に戻り各家を訪問する。子供たちは「ワッショイ、ワッショイ」と声を掛けながら、綱を抱えて歩く。各家では、綱を振りながら「ホトケサマ、オリラッショ」と声を三回掛けると、家人が親方（子供たちの代表者）にお金を渡す。これを五十五軒繰り返し、鳥羽田地内の最後の家に綱を預けて、処分してもらう。終了後、親方がお金を、子供たちに配分する。

〔情報提供者〕藤枝　寿勝さん

写真１　綱を撚りながら、周りに綱を巻き付けて形をつくる

写真２　「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声で各家をまわる

（文化課　吉川　明宏）

四〇　下土師宿（茨城町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時から午後七時（迎え）

八月十三日の午前八時から、保護者を中心に綱を作る。綱は、径三～四cmの青竹を軸にして、藁で包み込むように棒状に覆う。径は二十cm余りで、持ち手を六本つける。完成後、墓地入口の「お堂」の前面の縁に綱を乗せ、小学生の男女が「ぼんづなきたよ、じいちゃん、ばあちゃん、のーらっしょ」と声をかける。午後四時に墓地に集合し、三十軒程まわる。綱を持つのは子供だけで、移動中のかけ声はない。また、綱をまたいではいけないとされている。家に着くと、「ぼんづなきたよ、じいちゃん、ばあちゃん、おぢ（り）らっしょ」と声をかける。家人からお金をもらい、お礼を言って次へ向かう。まわり終えると、公民館前で終了する。昔は綱を川に流したが、現在は子供会の役員が処理している。

〔情報提供者〕中根　正美さん

写真１　「ぼんづな　きたよ、じいちゃん、ばあちゃん、おぢ（り）らっしょ」

写真２　次の家へ

（文化課　吉川　明宏）

四一　三和穴瀬（行方市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時から午後六時十五分・八時（迎え）

穴瀬の盆綱は、幼稚園の「年長さん」と小学一年生から六年生までが行う。八月十二日に各家から集落センターに藁を集め、総代・新盆の家の者・子供育成会役員の指導で綱を綯う。ボンヅナは一．五m程に綯った藁の綱をさらに束ねて綯ったもので、長さは三m程となる。頭や尻尾に特別な飾りはない。綱はご先祖の乗り物であるため、子供が跨ぐと「仏さんになるぞ」などと大人に注意された。参加する子供の数だけ、引き上げるための足が付けられている。また頭の方向が太く、尻尾の方が細い。縄がほどけないよう「芋結び」という方法で結ぶが、これは芋の苗床を作る際に用いた結び方である。

完成した綱は共同墓地へ運び、墓地中央の石組みに巻き付けておく。十三日の夕方、子供たちは白い衣服、履き物を身につけて墓地を出発する。地区をある程度まわったところで一旦ボンヅナを置いて、家に帰って夕食をとる。穴瀬では、この日餅を搗き、雑煮とあんこ餅を作るとのこと。これらも夕食の一品である。

夕食を終えて再び集まり、残りの家をまわる。

各家では、床の間などに設けられた盆棚の前の戸を開け放ち、そこに面した庭に水を撒いておく。子供たちは、庭で「ボンヅナ、ぼったらしょ、切れたら繋げ、じいさん、ばあさん乗せて来た」とかけ声を掛けながら、五～六回綱を引き上げては地面に叩きつける。終わると、菓子とお金を貰った。集落をまわり終わったボンヅナは、金上との境にある電柱に左回りに巻き付けられて遺棄される。

なお、十五日の送り盆は、盆綱は行わない。

〔情報提供者〕松信　正弘さん

（調査委員　徳丸　亞木）

四二　内宿（うちじゅく）（行方市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後一時から午後八時（迎え）

内宿は上宿と下宿からなるが、準備は八月十二日に同じ場所で行われる。綱は注連縄状で、径十五㎝。長さは人数によって異なる（上宿は子供二人で二m、下宿は子供三人で三m）。完成後は、同じ墓地に綱を置いて来る。十三日は、両地区とも小学生男女が主体となり自性寺に寄った後、各地区をまわる。墓地では「じいさん、ばあさん、乗ってくれ。孫、ひこ、やしゃごも乗ってくれ。」と唱えて木の周りを三周回る。巡行中と各家では、「じいさん、ばあさん、乗せて来た。孫、ひこ、やしゃごも乗せて来た。」と唱え、各家から千円程度を受け取る。綱は、昔は武田川に流したが、現在は年配者の家の脇で焼却している。下宿は、昭和の末期に一時中断したが、平成十五～十六年頃子供が一時増えたため再開した。上宿は中断していない。

〔情報提供者〕菅澤　薫さん（写真も提供）

写真１　子供たちが藁の仕分けをする

写真２　ボンヅナを持って巡行する

（文化課　大塚　健司）

四三　大井（おおい）（つくば市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　夕刻から夜（迎え）

大井は上組と下組とに分かれるが、それぞれで盆綱を行っている。主体は、小学校一年から六年までの男児が基本だが、平成十年頃より、女児も参加している。準備は、八月十三日の昼に、大人と子供たちが行う。ラントウ（共同墓地）の入口にあるトリオバ（十三日に個々の家がここで線香を供え、それぞれの仏さまを迎える場所）という広場で、綱を編む（現在は集落センター）。子供たちが各家から集めて来た藁で、ムカデの様に胴体から沢山の足（引き綱）を出す。胴体の長さや足の数は、子供の数で変わる。子供が二十五～六人参加した頃は、綱の長さが二間を超えることもあった。頭部は、綱を団子状に纏め、頭と顎の上下に分け、目玉を茄子で、舌を唐辛子で作った。胴体の太い綱は、右綯の綱二本と左綯の綱一本、計三本の綱を撚り合わせる。頭の太い部分から尻尾にかけて細くなるように造り、四尺位の間隔で引き縄を結ぶ。綱が完成すると、ボンヅナをラントウに運び、中央の石（無縁仏を供養する石）に巻き付けておく。夕刻、ボンヅナがラントウを出る際、時計回りに三回回る。かけ声は、ラントウで仏さまを迎える際には「仏さま迎えた」で、各家に綱を持ち込む際には「ボンヅナごーざった」と声を上げる。各家の庭に綱を運び込み、三回時計回りに回って、お捻りを貰う。子供たちの服装は、男児はランニングシャツに半ズボン、帽子の出で立ちが多かった。現在は四時頃には終わるが、以前は暗くなってから始めたので終わるのも遅かった。インキョ（屋号）宅を最後にまわって、綱をトリオバに運び、クラのオタマサンの家でお金を分配した。子供たちが少ないと、それだけ分配額も多くなるようだ。

〔情報提供者〕中島　正衛さん、小宅　貞男さん

（調査委員　徳丸　亞木）

四四　菅間（すがま）（つくば市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時から午後八時頃（迎え）

菅間では、平成二十年代半ばより女子を盆綱に参加させることで、盆綱を維持している。また、初盆の家の者が参加するということはない。

盆の二日程前から子供たちが藁を集め、大人たちが地区の集会所（かつては、道路脇の広場）で綱を綯う。綱はムカデの様な形で、頭部は太く、尻尾に向かって細くなる。頭部に引きまわすための綱を左右に二本、胴体にも細い綱が左右に二本付けられる。全体の長さや引き綱の数は、参加者の数で変わる。かつて十二名程度が参加した時は、五m程の長さだった。話者が子供の頃は、八月十二日に綱を準備した後、肝試しをして楽しんだ。

十三日の夕方、小学一年生から中学三年生の男女が、ヨコミチと呼ばれる十字路まで綱を運ぶ。ここが出発地点となる。出発すると、子供たちはまず二か所の共同墓地で「おあがんなさい（ボンヅナにお乗りなさい）」と声をかけて先祖を綱に乗せ、各家をまわる。各家では、座敷の中まで綱を差しこむことはしないが、盆棚を設ける座敷の戸が開けられているので、座敷の前の庭で綱を持って「おあがんなされ（家にお上がりなさい）」と声を掛けて、先祖を盆棚に送る。これに対して、各家では、子供たちに千円程の小遣いを渡す。

菅間は五十六戸から成るが、新しく転入して来た家などを除く約四十戸をまわる。終了後は、再びヨコミチに綱を運び、そこに朽ちるままに置いておく。

なおヨコミチは、八月十三日に家ごとに先祖を迎える場所でもあり、線香を供える台が設けられる。また、送り盆の十六日には、各家の墓にお供えをする。これは、墓まで先祖を送るためであるという。

〔情報提供者〕海老原　宏さん

（調査委員　徳丸　亞木）

四五　六斗（ろくと）（つくば市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後七時開始（迎え）

六斗は、戸数三十七戸の集落で、六斗の盆綱は、通称ではボンヅナであるが、年配者はジャーメ（大蛇の意味）と呼んでいる。五m程の長さの綱を肩に乗せて運び、仏壇に仏さまを祀る家をまわる。平成十年代に子供会の役員から女児を含めてはどうかと提案があり、それ以降女児も参加するようになった。

ジャーメ本体は藁で作るが、頭部は藁の芯に真菰（マコモ）を巻いて、ヘアピンのような形に整える。上顎と下顎を合わせた頭部は、長さ七十cm程となる。

八月になると、子供たちが東谷田川に真菰を刈りに行く。真菰は宿の家（代表となる中学三年生宅）の庭にムシロを敷いて、その上に拡げて干す。八月十三日の朝、宿の庭でボンヅナを作る。庭木に竹を渡して、そこに予め綯った三本の綱を架け、撚り合わせて太い綱とする。キンバナ（蓮の花と葉を模した盆の飾り）を新盆の家の数だけ用意し、これを綱の頭部に挿しておく。完成した綱は、集会所に運びトグロを巻かせて置いておく。

子供たちは、家に帰って入浴して身を清め、夕食をとった後に集会所に集まる。服装は自由である。綱を共同墓地まで運び、土葬の時代に棺桶を置いていた棺台の周りを反時計回りに三回回る。これで仏さまに乗ってもらい、「わっしょい」「こらしょい」の声を掛け合って各家をまわる。各家では、仏間の縁側前に綱を運び、「仏さまを送って来ました」と子供たちが挨拶をすると、迎えた大人が「御苦労様」と返事をする。新盆の家には、綱に飾ったカミハナを渡す。各家をまわり終えると集会所に戻り、十三日の行事は終わる。翌十四日の朝、綱を川に流す。

〔情報提供者〕野口　孝一さん、間中　和美さん

（調査委員　徳丸　亞木）

四六　下広岡（つくば市）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後三時から午後六時頃（迎え）

八月十三日の午前八時から、公民館に大人有志五人が集まり、竜型の綱を作る。長さは七m、太さは二十cm程で、目はナス、口は赤唐がらし、耳は樫の葉と藁で作る。完成すると共同墓地の塚に竜の頭部を乗せておく。尻尾を木に縛り付けることで、竜が逃げないようにする。

午後三時になると、小学三年から中学二年の男女六～七人がボンヅナを持って公民館を出発し、集落の約七十軒をまわる。各家では「まいこんだ、まいこんだ、ほーとけさま、まいこんだ。だんごくいてえ、もちくいてえ」を繰り返し、座敷にボンヅナを投げ入れる。これで、仏さまをお送りしたことになる。この時、尻尾を持って引っ張り戻すので、綱はある程度の長さが必要となる。

子供たちは各家でお駄賃をもらうが、新盆宅で休憩することになっており、ジュース、すいか、菓子などが振る舞われる。

すべての家をまわり終えると、花室川の下広岡橋から川に投げ落とす。かつては、橋の欄干に縛り付けたようだ。

最後に年長者が、各家からもらったお駄賃を分配して終了となる。

こうした盆綱とは別に、各家でも十三日に仏さまを迎える。翌十四日には墓に花を、十五日にはご飯を供える。下広岡では、仏さまが各家に帰っている間、亡くなって間もない人が、墓の留守番をしていると伝えられており、これらのお供えはこうした人のためのものという。十五日または十六日に仏さまを送る。

〔情報提供者〕塚本　嘉孝さん、根本　栄さん

（文化課　大塚　健司）

四七　土屋（美浦村）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午前八時三十分から午後七時（迎え）

八月六日から十二日にかけて、大人四名が農村集落センターで準備をする。綱は、長さ約五m、太さ二十cm程の注連縄状のものだが、特に何かを模っているわけではない。子供が多かった頃はもっと長かった。十三日になると、小学一年から中学三年までの男子が共同墓地を起点に、綱を持って百軒以上の家をまわる。かつては子供たちだけでまわったが、安全面を考慮して現在は大人が随行している。子供たちは、墓地で「ホートケサーマ、アガラッセ」と言って三周回り、仏さまを綱に乗せる。各家では「ホートケサーマ、オリラッセ」と言いながら庭を回る。最後の家をまわり終えると、子供たちは各家でもらったお金を分配して解散する。綱は墓地に保管するが、翌年回収して焼却する。

〔情報提供者〕栗山　公利さん

写真１　ボンヅナを持って庭を回る

写真２　令和元年度は笠を被った

（文化課　宇都木　宏一、大塚　健司）

四八　掛馬（阿見町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後四時から午後八時三十分（迎え）
八月十四日　午後四時から午後五時（村回り）
八月十五日　午後四時から午後八時三十分（送り）

盆の一週間前の土日を利用して、大人たちが掛馬新農村集落センターで、長さ三m、太さ十五cm程の注連縄状の綱を三本作る。竜型と言われるが、頭部はない。完成すると、墓の石の上に三本揃えて置く。十三日に約百軒をまわり、各家で「ヨンセノ、コラセノ、ワッショイ、ワッショイ」と声をかけるが、「ヨンセノ」の「ノ」で綱を家の縁に乗せ、「お連れしました」と言って小遣いをもらう。十四日の「村回り」は、主要な通りを歩くのみ。十五日の送りでは、各家でおんぶの所作と行い、白玉をもらう。綱はそれぞれ墓に戻し、満徳寺の住職が処理する。以前は、霞ケ浦に綱を流していたという。

〔情報提供者〕平山　敏夫さん（写真提供）、長沼　正大さん

写真１　ボンヅナを揉む

写真２　次の家に向かう

（文化課　大塚　健司）

四九　飯倉（阿見町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後六時から午後九時頃（迎え）

小学三年から中学三年の男子が参加する。八月十二日に木食上人墓所で注連縄状のボンヅナを作る。長さは六～七m。太さは十cm弱。特に竜などを模っているわけではない。翌十三日の朝六時に、子供たちが集落内の五か所の墓地をまわって、仏さまの霊を綱に乗せて、西坪墓地に置いておく。

午後六時頃、子供たちは西坪墓地から綱を持って「ワッショイ、コラショイ」と繰り返し叫びながら、各家をまわる。西坪、東坪、向坪の約五十軒から駄賃をもらうと、声を揃えて「有難うございました」と言う。

終了後、清明川に綱を流す。大人たちはサポート役に徹している。

〔情報提供者〕林　康晶さん、石引　大介さん

写真１　西坪の家をまわる

写真２　「ワッショイ、コラショイ」

（文化課　宇都木　宏一、大塚　健司）

五〇　下小池（阿見町）の盆綱

〔実施日〕八月十三日　午後五時から午後九時（迎え）

八月十二日に白髭神社脇の寺跡で大人たちが綱を作る。綱は注連縄状で長さ三m、径十cm程。模っているものはないが、ヒゲを出し、頭部の切り口に卍を墨書する。完成した綱は、共同墓地の六角形の石の上にトグロ状に置いておく。十三日の夕方、小学生の男子が綱を引き、墓地を出発して新田坪二十一軒、本田坪三十四軒をまわる。この時、綱を跨いではいけない。移動中は「ワッショイ、コラショイ」、各家では「仏さまを乗せて来ました」と言って、綱の頭部を水桶に浸す。各家でもらった駄賃（五百円。新盆宅では千円）は、中学生が管理する。最後の家をまわり終えて集落センターに戻ると、再び綱を墓地の六角形の石の上にトグロ状に置き、後日処分する。

（文化課　大塚　健司）

写真１　白髭神社

写真２　共同墓地の六角形の石（棺台）

第四章　茨城県内の盆綱実施状況

茨城県内の「盆綱」分布図（令和４年３月現在）

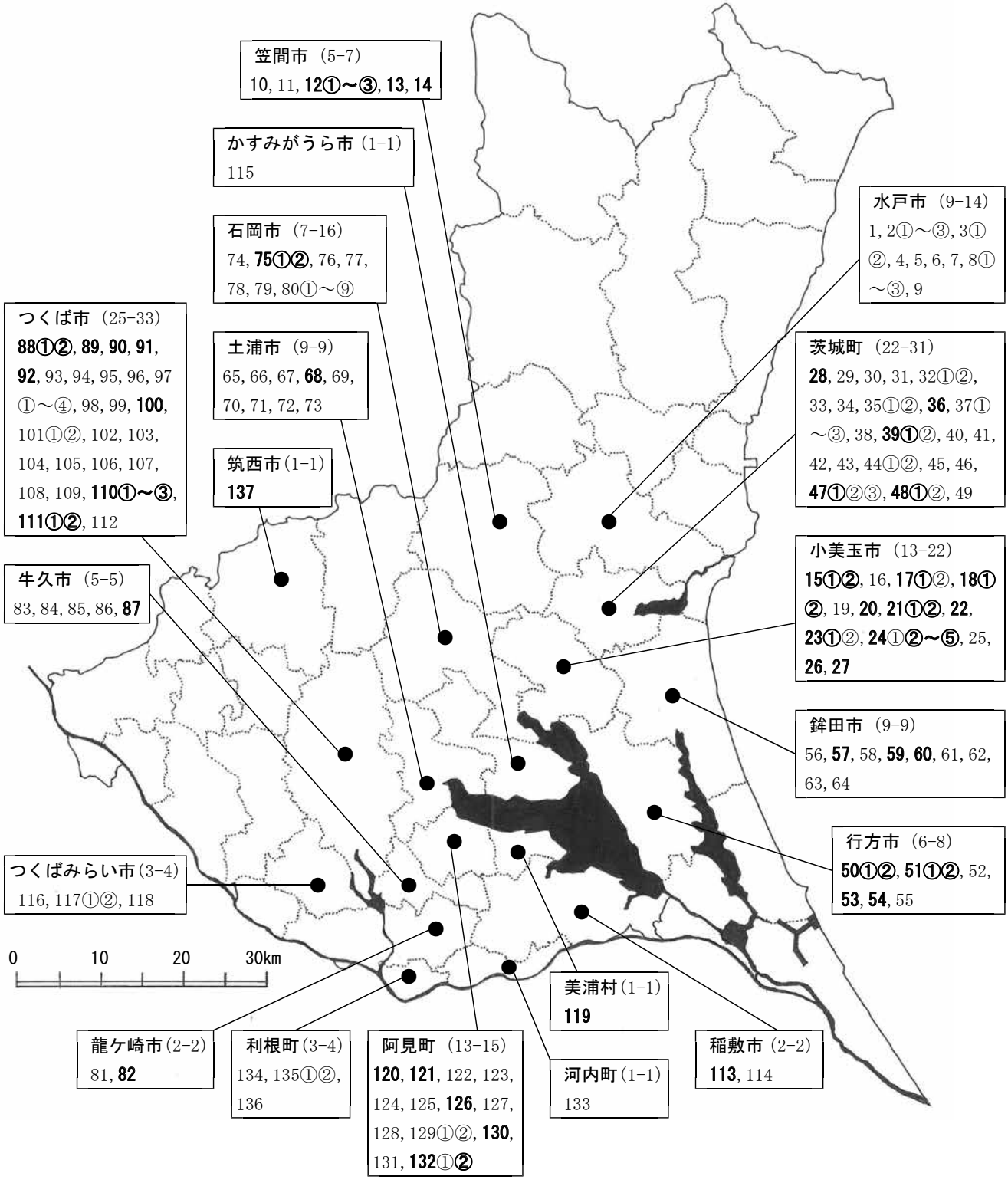
【凡例】

・この図は、令和４年３月現在、茨城県内で確認された盆綱行事の市町村ごとの分布を示したものである。

・各市町村名の右側の（　）内の数字は、当該市町村内における盆綱行事の確認数（地区数－件数）を示している。

・各市町村名の下の半角数字は、Ｐ205 ～ 225「茨城県内の盆綱実施状況一覧」のNo.に対応する。

・現在も盆綱行事が存続している地区について、**ゴシック**で示した。



（令和４年３月31日現在、137地区185件を確認。そのうち、46地区61件が存続）

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
135		利根町	①福木（宿福木）	不明	不　明	仏迎え	—
		干した真菰（マコモ）と稲藁を用いて、太く長い綱を大蛇の形に作る。子供たちが一旦これを共同墓地に持って行き、8月13日に墓地を出発して集落内をまわる。子供たちが綱を揉んで歩いて、各家に先祖の霊を迎える。これに対し、各家では子供たちに小遣いを渡して、その労に報いた。すべての家をまわると、綱を宿福木では排水路に、土手福木では利根川にそれぞれ流した。 〔参考文献〕『利根町史』第4巻（1992）					
		利根町	②福木（土手福木）	不明	不　明	仏迎え	—
		上記の①福木（宿福木）を参照					
136		利根町	羽中	ダンドビンド	平成10年代まで	仏迎え	—
		7月1日は、地獄の釜の蓋があいて、精霊たちがこの世に戻って来ると言われている。羽中では、この日から精霊迎えの行事である盆綱（ダンドビンド）の準備を始める。8月13日までに、干した真菰（マコモ）と稲藁を用いて竜を模った太く長い綱を完成させる。このボンゾナ作りは子供たちの仕事だが、大人が手伝うこともあった。13日に子供たちが綱を揉んで歩いて、新盆宅に先祖の霊を迎えるが、「ダンドビンド」の意味は不明。行事が終了すると、綱をスリバチ沼に流した。 〔参考文献〕『利根町史』第4巻（1992）					
137	182	筑西市	大塚	盆　綱	○	疫病退散	○
		毎年、世話人2人の指導のもと、8月13日の夕方、当番の大人たちが地区内の辻で綱綯いを行い、2 ～ 3時間で仕上げる。長さは、その年の参加者数によって異なる。かつては約80mの時代もあったようだが、近年は30m程である。 完成した綱は、地区を南北に貫く道路の脇に寄せておく。各家で仏さまを迎えてから、午後9時近くになって再び集合する。疫病退散の目的とする綱引きを行うためである。 綱引きは、地区の人たちが2組に分かれて、合図で「ワッショイ、ワッショイ」と綱を引く。一方が負けそうになると、見ていた人たちが加勢する。老若男女誰でも参加でき、綱に触れると病気にならず健康で過ごせるという。 終戦後、一度盆綱が中止されたが、その年に疫病が流行し死者が出たことから、その後、毎年欠かすことなく続けている。綱引きを終えた綱は、道路脇に置いて、そのまま腐らせてしまう。 〔参考文献〕『盆行事Ⅳ』（2000）、萩谷良太（2018）					

【凡例】

1　この「茨城県内の盆綱実施状況一覧」は、〔参考文献〕に示した盆綱に関する研究史及び平成27年度に実施した盆綱に関する予備調査により、各市町村から提出された調書をもとに、調査委員会の監修を受けて事務局が作成したものである。ただし、現在も存続している盆綱については、平成三十一年度から令和三年度にかけて行った現地調査の結果と必ずしも一致していない場合がある。

2　「頁」は、「第三章　調査報告　第一節　詳細調査報告」及び「第二節　現況確認調査報告」の掲載ページを示している。

3　掲載した市町村の順番は、県内の教育事務所管内の市町村順とし、地区名（大字）は郵便番号順とした。なお、小字等については順不同である。

4　「実施状況」において、「○」は令和4年3月現在、盆綱が存続していることを示す。

5　「綱引き」は、二手に分かれて綱を引き合う行為を行っている場合は「○」、行っていない場合は「—」で示した。なお、綱を引きずって巡行する「盆綱引き」と呼ばれるものについては含んでいない。

6　本文中で、盆綱行事を示す場合は「盆綱」、綱を示す場合は「ボンゾナ」と表記した。

7　〔参考文献〕については、略称で表記した。P240の「参考文献一覧」を参照されたい。

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
129		阿見町	①荒川本郷（上本郷）	盆　綱	平成16年まで	仏の送迎	—
		小学４年生から中学２年生の男子の行事。多い頃は20人程が参加したが、中止前は８人まで減っていた。実施の１週間前に地域の公会堂で綱を作成し、同所で保管した。綱は竜の形を模しており頭部に髭を持つ。長さは参加人数によって決まる。８月13日に墓地に向かい「ノーラッシャイ、ノーラッシャイ、ホートケサーマ、ノーラッシャイ」の掛け声で先祖の霊を綱に乗せた後、各家をまわり「オーラッセ、オーラッセ、ホートケサーマ、オーラッセ」の掛け声で綱から霊を降ろす。15日は逆に各家で先祖の霊を乗せて、墓地で降ろす。綱は墓地に置き、盆が明けた後、焼却された。				
		阿見町	②荒川本郷（下本郷）	盆　綱	平成25年まで	仏迎え	—
		小学３年生から６年生の男子による。多い頃は30人程が参加していたが、中止前は８人まで減り、継続が困難となった。綱は８月13日の午前９時頃から子供と保護者が作り、完成後は墓地にトグロを巻くようにして置いた。午後５時30分頃より、墓地を起点に地区の全戸に霊を送る。墓地では「仏さまノーラッシャイ」のかけ声で霊を綱に乗せ、各家では「仏さまオリラッシャイ」と言って、１周回りながら霊を降ろす。新盆宅では綱を神輿のように揉みながら回る。各家では子供たちに小遣い（500円程度、新盆宅では3,000円程度）を渡す。終了後、綱は墓地に放置され、やがて自然に朽ちた。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）				
130	174	阿見町	実穀	盆　綱	○	仏の送迎	—
		盆綱は、小学３年から中学３年の男子の行事。８月11日に長さ４ｍ、太さ20㎝の注連縄状のボンヅナを作る。13日の迎え盆では、乙戸川に綱を浸した後、共同墓地で綱に先祖の霊を乗せ、各家をまわって霊を送り届ける。墓地では、「ノーリャンセ、ノーリャンセ、ホートケサーマ、ノーリャンセ」と節をつけて先祖の霊に呼びかける。移動中は、「ノッタカ、ノンネカ、ワッショイ、コラショイ」とかけ声をかける。新盆宅では、「仏さまをお送りしました。」「オーリャンセ、オーリャンセ、ホートケサーマ、オーリャンセ」と伝える。15日の送り盆では、新盆宅で「仏さまをお迎えに上がりました」「ノーリャンセ、ノーリャンセ、ホートケサーマ、ノーリャンセ」と言う。各家は、子供たちにお駄賃やお菓子を渡す。また、墓地に着くと「オーリャンセ、オーリャンセ、ホートケサーマ、オーリャンセ」と先祖の霊に呼びかける。終了後、16日に乙戸川岸でボンヅナを焼却し、灰を川に撒く。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）				
131		阿見町	福田	盆　綱	平成28年まで	仏迎え	—
		８月13日の朝に作った藁蛇のボンヅナを墓地から担ぎ出し、各家をまわって仏さまを降ろす。この時「仏さま乗せて来たぞー」と叫び、藁蛇の頭と尾を持って庭の地面を８回叩く。このような激しい所作は、先祖の霊以外の何らかの存在を意識しているではないかとする説がある。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、遠藤賢治（2019）				
132		阿見町	①小池（上小池）	盆　綱	平成22年まで	仏迎え	—
		小学生及び中学生の男子による。多い頃は15人程が参加したが、中止前は５人くらいまで減少したため、継続が困難となった。迎え盆のみ行い、送り盆は各戸で行う。８月12日の午前10時頃から子供らが藁を集めて綱を作る。保護者は綱の作り方を教える。完成後は、墓地に真っすぐ伸ばして置く。盆綱は、午後６時30分頃から墓地を起点に始まり、地区の全戸に仏さまの霊を送る。墓地では「仏さまノーリャンセ」のかけ声で霊を綱に乗せる。道中は「ワッショイ、コラショイ」のかけ声を繰り返す。各家では「仏さまオーリャンセ」のかけ声で、霊を降ろす。各家では子供たちに小遣い（500 ～ 1000円程度、新盆宅では通常よりも多い額）を渡す。終了後、綱を乙戸川に流す。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）				
	202	阿見町	②小池（下小池）	盆　綱	○	仏迎え	—
		長さ４ ～ ５ｍ、径20㎝の蛇型のボンヅナを作り、80㎝程の引き綱を数本付ける。頭部の切り口の断面に、墨で卍を記入する。集落のはずれの墓地にトグロを巻かせて置いておき、８月13日の日没後、子供たちがボンヅナを引きずり、「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声で各家をまわる。庭中を引きまわし、水桶に綱の頭部を浸して「仏さま乗せて来ました」と言う。終了後、ボンヅナを乙戸川に流す。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
133		河内町	源清田（広田）	蛇（じゃ）もみ	昭和60年頃まで	仏迎え	—
		８月13日、夕方暗くなる頃、蛇もみが始まる。小学校低学年から中学生までの男子が参加する。薬師様（集会所）を出発すると、まず墓地の広場で「おぶされー（おんぶしろ）、抱かされー」の掛け声をくり返し、先祖を蛇（じゃ）に乗せる。そこから「わっしょい、わっしょい」の掛け声で各家に向かい、走ってまわる。各家では外から近い座敷等の戸を開けて待ち、子供たちが蛇をその座敷に投げ入れて先祖を降ろす。再び蛇を抱え次の家へ向かう。蛇作りは、地区の青年会が中心となる。真菰（マコモ）を予め刈って干したものを、13日の早朝から蛇に見たてて作る。長さは10m前後、太さは一番太い頭部付近で直径30㎝程。頭部は中学生が持ち、細い尻尾の方は低学年が持つものと、暗黙で決まっていたようだ。全戸まわり終えると、道陸神（どうろくじん）の所で蛇を大人とともに燃やし、炎の強さでその年の五穀豊穣が占われた。				
134		利根町	中谷	ダンドビンド	不　明	仏迎え	不明
		８月の盆の時期に実施していた。藁や真菰（マコモ）で大蛇を模して作られた綱を、子供たちが担いで各家をまわり、先祖を迎える。他の市町村の習俗とほぼ同一である。ただし、「ダンドビンド」という名称の由来は不明。				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
120	201	阿見町	掛馬	盆　綱	○	仏の送迎	—
		8月13日に各家をまわり、「ヨンセノ、コラセノ、ワッショイ、ワッショイ」とかけ声をかけて庭中をまわり、綱を地面に叩きつける。特に仏迎えの賞詞はない。14・15日には綱をぶら下げて歩く。終了すると路傍に綱を捨て去る。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
121	170	阿見町	島津（上島津）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		小学4年生から6年生の男女及び中・高生の有志が参加する。8月の第1日曜日に上島津農村集落センターで、長さ1.5m、太さ15cm程の注連縄状の綱を作り、長泰寺の梵鐘の下に置く。8月13日午後3時過ぎ、長泰寺から綱を持ち、かけ声を掛けながら約100軒に霊を送り届ける。移動中のかけ声は、「ヤンセー、ゴンセー」。各家に着くと、「ヤンセ、ゴンセ」と言って反時計回りに3周した後、頭上に綱を振り上げ「仏さまお連れしました」と言う。15日は、13日と逆の順に各家をまわり、各家で「仏さまお迎えに来ました」と言う。終了後、長泰寺の墓地に綱を置く。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					
122		阿見町	石川	盆　綱	平成18年まで	仏迎え	—
		小・中学生の男子による。多い頃は15人程参加したが、中止前は4人まで減ってしまい、継続が困難となった。迎え盆のみ行い、送り盆は各戸で行う。綱は8月12日または13日の午前10時頃から、子供と保護者が地区内の鹿島神社で作る。主に保護者が作るが、完成した綱を子供たちが墓地まで運び、墓石に掛けるようにして置く。盆綱は午後6時30分頃から墓地を起点に始まり、提灯持ちが先導して地区の全戸に霊を送る。道中のかけ声は「ワッショイ、ヤッショイ」で、各家では「仏さまをお連れしました」と挨拶をし、霊を降ろす。特に、新盆宅では「ワッショイ、ヤッショイ」のかけ声で綱を神輿のように揉む。新盆宅の人が綱を跨いだら何回も揉まねばならない。各家では子供たちに小遣い（500 ～ 1000円程度・新盆宅では3000円程度）を渡す。終了後、綱を坂の上の三叉路にトグロを巻くようにして置き、盆明けに鹿島神社で綱を切って燃やす。 〔参考文献〕『阿見の民俗』（1981）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
123		阿見町	塙	盆　綱	平成28年まで	仏迎え	—
		小学3年生以上及び中学生の男子による。多い頃は40人程参加したが、中止前は5人まで減ってしまい、継続が困難となった。迎え盆のみ行い、送り盆は各戸で行う。綱は8月13日の午前9時頃から、子供と保護者が地区内の六兵衛（屋号）宅に集まり、保護者のサポートのもと子供たちが作製する。中止前は老人会も協力していた。午後6時頃から墓地（東ノ崎）を起点に始まり、もう1か所の墓地（弥五郎場）でも霊を乗せる。その際「ノッタカ、ノンネカ」のかけ声で墓地内を5回以上回る。その後、提灯持ちの先導で地区の全戸に霊を送る。道中、各家の近くまで来ると「ワッショイ、コラショイ」のかけ声を繰り返す。各家では「ワーイ」のかけ声で綱を上下に振りながら霊を降ろす。各家では子供たちに小遣い（500 ～ 1000円程度、新盆宅では通常より多い額）を渡す。終了後、東ノ崎墓地の入口にトグロを巻くようにして綱を置く。綱はやがて自然に朽ちる。 〔参考文献〕『阿見の民俗』（1981）、『阿見町史』（1983）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
124		阿見町	君島	盆　綱	平成30年まで	仏迎え	—
		ボンヅナは太さ10cm、長さ5 ～ 6mの蛇型で、所々に杉の枝葉を挿す（杉の葉に殺菌力があることは古くから知られ、石岡市井関や鉾田市烟田の除疫の大人形などにも用いられた）。集落のはずれまで行って「仏さまを迎えに来たので乗って下さい」と言い、後ろを見ないようにしてボンヅナを抱えてまわる。8月13日には一般の家、14・15日には新盆宅をまわる。新盆宅では灯籠の周りを右回りで1 ～ 2回回って「仏さまを迎えて来たので降りて下さい」と言う。綱は15日の夕方、細かく裁断して三叉路に捨て去る。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
125		阿見町	大形	盆　綱	平成13年まで	仏迎え	—
		ボンヅナは口を開いた藁蛇で、杉の葉を挿すなど君島のボンヅナとよく似ている。完成後は共同墓地に置き、8月13日の夕方に持ち出して、抱えて各家をまわる。各家では「ワッショイ、ワッショイ。仏さま送りに（迎えて）来ました」という。終了するとボンヅナを焼却する。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
126	201	阿見町	飯倉	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月12日に木食上人墓所で、小学3年生から中学3年生までの男子が、長さ4m程のボンヅナを作る。13日の午後6時から、西坪墓地を起点に「仏さまのせて来た、ワッショイ、コラショイ」と叫びながら、ボンヅナを抱えて約50軒をまわる。各家では「ワッショイ、コラショイ、仏さま降りろ」と叫ぶ。終了後は、ボンヅナを墓地に納める。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
127		阿見町	若栗	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		盆綱は8月13日に行われる男子の行事で、各戸より藁1束ずつを貰い、長さ5間、直径4 ～ 5寸位の綱を作った。夕方、綱を持って共同墓地まで行き、「ノッタカ、ノンネカ」と唱えながら各戸をまわり、おひねりをもらった。 〔参考文献〕『阿見町の民俗』（1981）、『阿見町史』（1983）					
128		阿見町	岡崎	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		盆綱は8月13日に行われる男子の行事で、各戸より藁1束ずつを貰い、長さ5間、直径4 ～ 5寸位の綱を作った。夕方、綱を持って共同墓地まで行き、それから各戸をまわり、「仏さまを乗せて来た」と言い、おひねりをもらった。 〔参考文献〕『阿見町の民俗』（1981）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
113	164	稲敷市	下須田	盆　綱	○	豊作祈願	—
		盆綱は子供たちの祭りで、悪病を払い、豊作を祈願する行事である。７月下旬から20日程かけて、子供たちが荒縄50本を芯にして、長さ約８m、太さ約15cmの蛇の形に仕上げる。口を開かせ、目はナスを切ってつけた。そのボンヅナは般舟寺住職により般若心経を唱えてもらった後、琴平神社に飾られる。８月13日、綱の先頭に小学５年生が左右に分かれて並び（右側が御幣、左側が「下須田子ども中」と書かれた弓張り提灯）、綱の中ほどに６年生を配し、低学年の面倒をみる。「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声とともに産土様の周囲を７周して出発の挨拶をし、巡行の安全を祈る。次にムラはずれの水神社の周囲を７周した後、各家をまわる。玄関前で「オー、オー、今年も豊年満作だ。今年も豊年満作だ。」と、商家では「今年も商売繁昌だ。」と綱を前後に勢いよく振りながら声を張り上げる。そして心付けをもらって夜遅くまで全戸をまわり歩く。最後にボンヅナを川に流す。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）、萩谷良太（2018）					
114		稲敷市	古渡	盆　綱	昭和40年まで	仏送り	○
		８月14日の朝から、智福寺境内にてボンヅナ２本が作られる。１本は上宿（農方）のもので長さ70m、もう１本は下宿（浜方）のもので長さ40mである。芯綱に藁を巻きつけ、太い部分は直径約40cm。これに、無数の引き綱を取り付ける。この２本の綱を、尻尾の部分でしっかりと結びつけ、上宿と下宿に分かれて綱を14・15日の夜引き合う。14日は引き分けとし、15日の晩は切れるまで引く。真中から切れると紅白の幣束をつけた。上宿が勝つと豊作、下宿が勝つと大漁となるとされた。16日早朝、小野川が霞ケ浦に出る河口の橋から綱を川中へ投げこんだ。これを「仏さまを乗せて流す」といい、仏さまがこのボンヅナに乗って帰ると伝承されている。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔（1973）、人見暁郎（1986）、藤田　稔（1988）、嶋田　尚（1988）、『盆行事Ⅳ』（2000）嶋田　尚（2001）、遠藤賢治（2019）					
115		かすみがうら市	宍倉（天神）	ヤンサボンサ	平成30年頃まで	仏の送迎	—
		８月13日の迎えの日と15日の送りの日の夕方、ジャーメ（蛇目？）という蛇を模った藁綱を小学生男子６～７人が引いて各家をまわる。13日朝から不動堂の前でジャーメを作る。藁の芯に三つ編みで蛇の型にし、頭はナスで目をつけトウモロコシでヒゲをつける。先端は口をつけ、あとは尻尾状にする。蛇水龍を表すという。「ヤンサ、ボンサ」と言いながら、盆棚を設けている家を一軒一軒まわる。各家ではお金を用意する。天神60軒をまわり、午後10時頃終了する。15日は逆回りして、不動堂近くの石塔に綱を置いて終わる。子供の数の減少により、平成30年頃終了した。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					
116		つくばみらい市	伊丹	盆　綱	平成28年まで	仏迎え	—
		小学１年生から中学３年生の男子が参加する。大人の手伝いを得て、大蛇に見立てたボンヅナを作り、８月13日の午後７時からボンヅナを引いて地区をまわる。新盆宅及び手伝いをしてくれた家では、敷地内で円を描くように綱を引いてまわる。かけ声は、先頭の提灯持ちが「ワッショイ」と言うと、それ以外が「ガッショイ」と言う。地区をまわり終えるのは午後９時頃で、綱は１年間鳥居に飾り、翌年新しいボンヅナを作成する際に焼却する。地区内の子供が減り、やり手がいなくなったことから、平成28年を最後に終了した。 〔参考文献〕『伊奈のむかし』（2003）、『図説 伊奈のあゆみ』（2007）					
117		つくばみらい市	①下島（上組）	盆　綱	平成24年まで	仏迎え	○
		５歳くらいから中学３年生までの男子が参加する。７月頃、子供のいる家の中から順番で当番を決め、準備を行う。大人を中心に２週間近く毎日作業をしながら、藁縄４本を撚って、蛇型の綱を作る。子供たちは、綱を作る作業のほかに、当番の家の入口に「門」を建てる作業を行う。門は真菰（マコモ）と杉の葉で作り、様々な色の紙テープで飾る。８月13日の午後３時に組合の旦那衆が集まり、蛇の胴部分に藁を編み込むなど、最後の仕上げを行う。また、新盆宅に「高灯籠」を作る。午後７時から子供たちが、「ワッショイ、ガッショイ」とかけ声をかけながら綱を引く。各家の中には入らず、集落の端にある春日神社まで綱を引いて行き、神社の社殿の周りを３周し、その後境内でその綱を使って、大人と子供が二手に分かれて綱引きをする。仏の送迎という意味合いはないとも言われる。綱は終了後に中通川に流したが、後に大人たちが処理するようになった。男子が減少し、また部活動等の影響もあり、平成24年を最後に終了した。 〔参考文献〕『伊奈のむかし』（2003）、『図説 伊奈のあゆみ』（2007）、『茨城県の祭り・行事』（2010）、萩谷良太（2018）					
		つくばみらい市	②下島（下組）	盆　綱	平成10年代までか	仏迎え	—
		平成10年頃は、５人の男子のみで一生懸命準備していたという。 〔参考文献〕『伊奈のむかし』（2003）、『図説 伊奈のあゆみ』（2007）					
118		つくばみらい市	下平柳	盆　綱	平成10年代まで	仏迎え	—
		８月13日の夜に、大蛇に見立てた太い綱を作って、家の庭先を引いてまわった。綱には仏さまが乗って来ると考えられており、各家を仏さまにまわってもらい、ご利益がもたらされることを願った。 〔参考文献〕『伊奈のむかし』（2003）、『図説 伊奈のあゆみ』（2007）					
119	200	美浦村	土屋	盆　綱	○	仏迎え	—
		土浦藩主であった土屋氏が、明治期に移り住んでから始まったとされる。お盆の約１週間前から土屋地区農村集落センターで綱を作る。この作業には、少なくとも大人４名が必要となる。８月13日の夕方、小学１年生から中学３年生の男子が、共同墓地で「ほーとけさーま、あがらっせ」というかけ声で仏さまの御霊を綱に乗せてから地区内をまわる。以前は子供たちだけでまわっていたが、安全上の問題が出てきたため大人が同行している。各家では、「ほーとけさーま、おりらっせ」と言って、御霊を送り届ける。					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
106		つくば市	館野	盆　綱	昭和初年まで	仏迎え	—
		迎え盆の８月13日に、藁で竜の形をしたボンヅナを作った。夕方、子供たちがこれを担ぎ、「盆殿ござった」などと歌いながら各戸をまわって仏さまを降ろした。日中戦争（昭和12年）の頃からやらなくなった。 〔参考文献〕田村竹男（1979）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
107		つくば市	中内	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		昭和50年頃は、８月13日に行っていた。祖先の霊を迎えるものであった。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					
108		つくば市	稲岡	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		迎え盆の８月13日に、藁で竜の形をしたボンヅナを作る。夕方、子供たちがこれをかつぎ、「仏さまノラッセ」と言いながら、墓地を３回まわって仏さまをボンヅナに乗せた後、新盆宅だけまわる。新盆宅では「仏さまおりらっせ」と言いながら庭の中をぐるぐる回り、仏さまを降ろす。集落をまわり終えると、稲岡雷神の池にボンヅナを納める。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）、田村竹男（1979）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
109		つくば市	市之台	盆　綱	昭和40年代まで	仏迎え	—
		８月13日に実施。ボンヅナ（竜）は、祖霊のお出でになる道筋の穢れを祓うものと言われていた。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					
110	144	つくば市	①栗原（台坪）	盆　綱	○	仏迎え	—
		台坪では令和元年には小学５年から中学３年までの男女が参加した。ボンヅナは、約１週間前から準備した竹や縄、小麦藁などを用いて、大人を中心に台坪研修センターで作成する。８月13日午後４時に子供たちが同センターに集合すると、虚空堂の周りを３周回ってから、地区をまわる。提灯を持つ子が「ボンダナゴーザッタ」と言うと、全員で「ホートケサーマゴーザッタ」と言う。各家でおひねりをもらうと、「有難うございました」のかけ声とともにボンヅナを持ち上げる。午後９時45分頃全戸をまわり終えると、ボンヅナを解体してセンター裏の空き地で焼却する。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『桜村の民俗』（1985）					
	149	つくば市	②栗原（乾島）	盆　綱	○	仏迎え	—
		乾島では小学１年から中学３年の男女が参加し、高校生が手伝う。ボンヅナは父親たちが主体となって、約10日前に竹や稲藁､縄を用いて北斗寺近くの道沿いで作る。８月13日午後６時に乾島研修センターを出発して､地区をまわる。かけ声は「わっしょい、こらしょ」。各家でおひねりをもらうと、「ホートケサーマガゴーザッター」と声を３回発しながら、綱を頭上に投げ上げる。午後８時頃すべての家をまわり終えると、桜川の土手で綱を焼却する。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『桜村の民俗』（1985）					
	152	つくば市	③栗原（中坪）	盆　綱	○	仏迎え	—
		中坪では小学１年から中学３年までの男子が参加する。盆綱の１週間ほど前から中坪研修センターで、中学生を中心に竹、稲藁、縄等を用いて綱を作る。綱は跨いだり、地面に置いたりしてはならないと言われている。８月13日午後５時に子供たちが中坪研修センターを出発すると､「ワッショイ」と声をかけながら移動する。各家では､「ゴーザッタゴーザッター、ホートケサーマゴーザッター―」と３回声を発しながら綱を持ち上げる。おひねりは、新盆宅が多く出す。すべての家をまわり終えると綱を解体し、桜川の土手で焼却する。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『桜村の民俗』（1985）					
111	156	つくば市	苅間（宮本・上宿・篠／古屋敷）	盆　綱	○	仏迎え	—
		宮本・上宿・篠／古屋敷地区では、お盆の１週間前から、小学４年～中学３年の男子４ ～ ５人が集金（藁集め）し、２日前から、大人３ ～ ４人が八坂神社で綱を作り、集会所の「オゴヤ」に仕舞っておく。綱は竜を模ったもので、長さ約２ｍ､太さ15㎝（５㎝程の縄を３本撚り）。頭に盆花を挿す。この他､「ボン」（70 ～ 80㎝）を子供の人数分作っておく。８月13日､子供たちは集会所から綱を出すと､これを抱えて３か所の墓地（ラント）を経由して各家をまわり、駄賃をもらう。開始時間は概ね午後だが､親方と保護者で具体的な時間を決める。かけ声は､墓･各家ともに｢ほんづな、ござった（叩く）、ほとけさま、ござった（叩く）｣で、これを２回繰り返す。叩くとは、ボンを地面に叩きつけることを指す。約60軒をまわって集会所に戻る。綱は墓地で焼却している。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					
	160	つくば市	苅間（辻・原）	盆　綱	○	仏迎え	—
		辻・原地区では、５日前から小学３年～中学３年の男女５ ～ ６人が集金（藁集め）をし、真菰（マコモ）を干す。８月13日の朝６時から、谷田部第７分団の火の見櫓前で、年配者が長さ約３ ～ ４ｍ、太さ20 ～ 30㎝の竜を作る。耳は真菰、目はナスで作り、提灯を付ける。完成した竜は、辻・原研修センターに置いておき、午後５時から子供たちが竜を持って同センターを出発し、約５時間をかけて110 ～ 120軒をまわる。最近は、竜を台車２台に乗せて引きずっている。かけ声は、宮本･上宿･篠／古屋敷と同じで、「ポン」で地面を叩くのも同じだが、新盆宅では３回繰り返す。移動中のかけ声はない。綱は解体してごみ置き場に運ぶ。農家の大人たちが忙しいので、子供たちだけで仏さまを迎えている。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					
112		つくば市	西大橋	盆　綱	昭和40年代まで	仏迎え	—
		８月13日に竜を模ったボンヅナを作って、地区内をまわった。ボンヅナ（竜）は、祖霊のお出でになる道筋の穢れを祓うものと言われていた。 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
99		つくば市	上広岡	盆　綱	昭和55年まで	仏迎え	—
		8月13日の早朝、小学生男子が藁を集めにまわり、その藁を用いて数名の大人たちがボンヅナを製作する。ボンヅナは長さ5 ～ 7m。竜を模り頭部に角とナスで作った目玉をつける。頭部の直径は約30cm。子供たちは、共同墓地で「ノーラッセ、ノーラッセ、ホートケサマ、ノーラッセ」と唱えて出発すると、各家をまわる。庭先では「マーイコンダ、マイコンダ、ホートケサマ、マイコンダ」、玄関先では「オーラッセ、オーラッセ、ホートケサマ、オーラッセ」（神道の家では「ホトケサマ」の代わりに「神様」になる）と唱える。各家では、数百円程度（新盆宅では千円くらい）のおひねりを渡す。最後はボンヅナを花室川に流す。 〔参考文献〕『桜村の民俗』（1985）				
100	200	つくば市	下広岡	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月13日の朝8時から、大人の有志5人を中心に公民館でボンヅナを作る。ボンヅナは、長さ約7m、太さ20cm、目はナス、口は赤唐がらし、耳は樫の葉と藁で作った竜型で、尻尾は細い。綱が完成すると、隣の墓地の塚に綱の頭部を乗せて、尻尾を木に縛り付ける。竜が逃げないようにするためという。午後3時より、小学3年～中学2年の男女6 ～ 7名が綱を持って地区をまわる。交通量が多いため、大人が随行する。かけ声は、「まいこんだ、まいこんだ、ほーとけさま、まいこんだ。だんごくいてえ、もちくいてえ」で、これを繰り返す。各家では、座敷に綱を投げ入れて、尻尾を持って引っ張り戻す。こうして約70軒に仏さまを送り届け駄賃をもらうが、新盆の家では、ジュース、すいかなどが振る舞われる。午後6時頃地区をまわり終えると、最後は綱を花室川の下広岡橋から川へ投げ落とす。 〔参考文献〕『桜村の民俗』（1985）				
101		つくば市	①大角豆（上大角豆）	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		8月13日の朝、子供たちが各家から藁や縄を集め、午後2時頃から、天満宮のオコヤで大人3人が竜型のボンヅナを作り、4時頃に出来上がる。4時半頃、子供たちがオコヤに集まり、ボンヅナを担いで墓地へ行き、中央にある横田氏の墓石に乗せて帰る。6時半頃子供たちは、再びオコヤに集まり、墓地から竜を担いで天満宮に移動させ、社の庭を左に一回りしてから出発する。この時は「ワッショイ、ワッショイ」と掛け声をかけて歩くが、家の庭へ入る時に「ホトケサマ、マイリシタ」と言う。家人は仏間の縁先に出迎えるが、この時竜の口でその人の頭をかじる真似をする。この所作は、除疫的性格を示すものという。竜は庭中で激しく揉まれる。ボンヅナはすべての家をまわるが、新宅や夫婦だけの家で仏さまのない家には行かない。終了するとオコヤの近くの寺山という藪の中にボンヅナを捨てる。どの家でもおひねりをくれるので、子供たちで分けた。 〔参考文献〕藤田　稔（1973）、田村竹男（1979）、『桜村の民俗』（1985）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『民俗資料緊急調査報告書』（1968）				
		つくば市	②大角豆（下大角豆）	盆　綱	平成29年まで	仏迎え	—
		子供たち主体で、小学生全員が参加した。最初は男子だけだったが、次第に子供の数が減ってきたので、女子も加わるようになった。ボンヅナは竜を模っているが、細かい藁細工のため大人だけで作った。盆綱の目的は、仏さまを送り届けること。8月13日の午後5時頃、神社を出発し、各戸をまわって8時頃神社に戻って来る。かけ声は「ゴーザッタ　ゴーザッタ　ホトケサンゴーザッタ」。最後はボンヅナを花室川に流す。各戸における仏さまの送迎はない。平成30年、子供が少なくなり、子供会が廃止されたため、休止した。下大角豆は、学園都市建設に伴って開発された並木3・4丁目と隣接しており、移住者が多い。盆は実家に帰る人が多いことから、盆綱の復活は難しい。 〔参考文献〕藤田　稔（1973）				
102		つくば市	赤塚	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		赤塚の盆綱は、新田義貞がこの地方に来た時、子供たちに勧めたものと伝えられている。8月13日に子供たちが集めた藁を用いて、オコヤ（寮）で年配者数名がボンヅナを作る。三つ撚りにして藁じりを竜のウロコのように出し、頭にはナスの目玉をつけ、長さ10m程の綱をもじる。仏さまはこの竜の綱に乗って来ると信じられていた。夕方子供たちは、綱を担いで共同墓地へ行き、墓地内を回る。これで祖先の霊が綱にまたがるという。そして、「ボンヅナござった、仏さま舞いこんだ」と唱えながら各家をまわり、心づけをもらう。そして50数軒をまわり終えると、最後はボンヅナを明神様の鳥居に巻き付けた。 〔参考文献〕更科公護（1967）、藤田　稔（1973）、『谷田部の歴史』（1975）、田村竹男（1979）、嶋田　尚（1988）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）				
103		つくば市	梶内	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		8月13日に竜を模ったボンヅナを作って、集落内をまわった。ボンヅナ（竜）は、祖霊のお出でになる道筋の穢れを祓うものと言われていた。詳細は不明 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）				
104		つくば市	南中妻	盆　綱	昭和40年代まで	仏迎え	—
		8月13日に竜を模ったボンヅナを作って、集落内をまわった。ボンヅナ（竜）は、祖霊のお出でになる道筋の穢れを祓うものと言われていた。詳細は不明 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）				
105		つくば市	北中妻	盆　綱	昭和40年代まで	仏迎え	—
		8月13日に竜を模ったボンヅナを作って、集落内をまわった。ボンヅナ（竜）は、祖霊のお出でになる道筋の穢れを祓うものと言われていた。詳細は不明 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
92	136	つくば市	下岩崎	盆　綱	○	仏迎え	—
		平成30年は、小学３年生から中学２年生までが主体となっている。かつては男子のみの参加であったが、子供が少なくなったため、女子も参加するようになった。８月13日の午前中に、子供たちが真菰（マコモ）や藁を持ち寄って、大人の指導を受けながらボンヅナを作る。新盆宅の大人は、率先して行事に関わるものとされている。午後５時30分頃、作製場所から子供たちが綱を引いて出発するが、正式な開始は墓地がある守徳院を出発する午後６時とされており、集落の人々が集まってボンヅナを迎え、送り出す。ボンヅナが寺に入る前と出発の際には、爆竹を鳴らす。寺を出発した後、竿灯を先頭に「ワッショイ、ガッショイ」とかけ声をかけながら、集落内を約４kmにわたって綱を引いてまわる。 なお、下岩崎では各家には立ち寄らない。また綱を引きずるとすぐに傷むため、最近は綱の頭部を台車に乗せるようになった。集落をまわった後、綱を集落南の水田に運んで解散となる。後日、綱を解体して処分する。				
93		つくば市	上岩崎	盆　綱	平成５年頃まで	仏迎え	—
		藁や真菰（マコモ）で、大蛇（竜）の形の大きな綱を作る。頭部は米俵大で、全長20mとなる。これに井戸綱をつけて引きずる。８月13日に墓地を出発して、各家をまわる。盆の精霊が大蛇に乗って去来するという信仰に由来するといわれ、仏迎えと考えられる。終了後、８月15日に綱を焼却する。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、『茎崎町史』（1994）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
94		つくば市	要元猿壁	蛇かつぎ	平成26年まで	仏迎え	—
		小学３年生から中学３年生までの男子が、夏休みに地区の集会所に集まりボンヅナ（ワラ蛇）を作る。ボンヅナは、孟宗竹を芯にして、藁で覆い紙で包む。頭の部分は太く、口を開いたように切り込みを入れ、中に赤く塗った木のヘラを挿し、舌状にする。８月13日の午後、子供たちはボンヅナを担いで墓地に行き、「ホトケさんお乗んなせ」と言って先祖の霊を乗せ、「ホトケさんござった」と呼びながら各家をまわって歩く。各家では、ボンヅナに乗って来る先祖を迎え、灯りをいただき、子供たちにお礼のお金を渡す。家をまわり終わると、ボンヅナは焼却される。 〔参考文献〕藤田　稔（1973）、『大穂町史』（1989）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り･行事』（2010）、林　圭史（2014）				
95		つくば市	水堀	盆　綱	昭和40年代まで	不明	不明
		８月13日に行ったとされるが、詳細は不明 〔参考文献〕『谷田部の歴史』（1975）					
96		つくば市	玉取	盆綱引き	昭和10年代まで	仏迎え	—
		ボンヅナは、藁を芯にし、それを縄で縛り円形にしたもので、所々に持ち手となる縄をつけた。このボンヅナを「ヨンサモサ」とも言う。８月13日の晩に、子供たちがボンヅナを持って地区内を一軒ずつまわり歩いた。その際「ヨンサモンサ仏さまござった」と唱えながら、ボンヅナで地面を叩いた。子供たちは、各家で小遣いをもらった。小遣い目当てに子供たちは競って各家をまわったが、それぞれナワバリがあったという。「子供たちが来るから仏さまを迎えに行かなくても良い」と言って、迎えに行かない家もあった。盆綱引きが行われていたのは、戦前のことである。 〔参考文献〕『玉取の民俗』（1980）				
97		つくば市	①上ノ室（中坪・前坪）	盆　綱	昭和初年まで	仏迎え	—
		８月13日に子供たちが村中から藁を集め、大人が寺で竜の形をしたボンヅナを作る。頭は酒樽ほどの大きさで、角と耳は３本の縄を撚ったもの。全長は約５間。中坪と前坪のボンヅナは角があるので雄といい、西坪のボンヅナは角がないので雌といった。13日の夕方、子供たちはボンヅナを担いでラントウ（墓地）へ行き、ラントウを３回回って仏さまをボンヅナに乗せる。その後、提灯に灯をつけて、ボンヅナを担いで「ダンポウ、ダンポウ、オコヤノダンポウ、ナンマイダンポウ」と歌いながら歩いた。各家へ行く時は「マイコンダ､マイコンダ､仏さまマイコンダ」と言いながら、庭の中へ駆け込む。そして庭を３回回ってから、竜の首を座敷に放りこむ。これで仏さまがその家に降りたことになる。集落をまわり終えると､ボンヅナを寺の庭に置いて来る。後日､寺が焼却したそうだ。各家でもらったおひねりは、子供たちが分けあった。盆綱は昭和初年まで続いたが、日中戦争（昭和12年）の頃からやらなくなった。 〔参考文献〕嶋田　尚（1988）、藤田　稔（1973）、田村竹男（1979）、『桜村の民俗』（1985）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
		つくば市	②上ノ室（西坪）	盆　綱	昭和初年まで	仏迎え	—
		上記の①上ノ室（中坪・前坪）を参照					
		つくば市	③上ノ室（本郷）	盆　綱	不　明	不明	不明
		詳細は不明 〔参考文献〕田村竹男（1979）					
		つくば市	④上ノ室（舘坪）	盆　綱	不　明	不明	不明
		詳細は不明 〔参考文献〕田村竹男（1979）					
98		つくば市	倉掛	盆　綱	大正頃まで	仏迎え	—
		８月13日に竜の形をしたボンヅナを作った。これを子供たちが担いで、「やんさ、こらさ、盆どのまいこんだ、まいこんだ」と歌いながら戸別に歩いた。各家で小遣いをくれるので、子供たちは山分けした。 〔参考文献〕田村竹男（1979）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『民俗資料緊急調査報告書』（1968）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
87	124	牛久市	田宮町	田宮の蛇祭り、ジャ	○	仏迎え	—
		8月13日の午後､藁を貰い集めてボンヅナ（ジャ）を作る。頭に薪（まき）を入れ､ボッチで頭､ナスで目の形にする。夕刻、大きな子供2人が先頭に立ち、10数名の子供が墓地に行き､「ホトケさま、のーらっせ…」といって、仏さまをボンヅナに乗せ､「オンジャッタ、オンジャッタ」と言いながら各家まで運び、軒先で3回叩いて「ホトケさま渡しますよ」と言って降ろす。各家をまわり終えると、ボンヅナを墓地近くに捨てて終わる。 以前は牛久町一帯で行っていたが、明治天皇崩御の際に中止し、その後田宮だけが復活したと言い伝えられている。仏さまはボンヅナに乗って来ると言われているが、各家でも13日には釜いりしてホトケを迎える。真菰（マコモ）で棚をつくり、14日朝、野菜類を芋の葉の上に供える。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『牛久市史』民俗（2002）				
88	198	つくば市	①大井（上組）	盆　綱	○	仏迎え	—
		大井は上組と下組とに分かれるが、それぞれで盆綱を行っている。主体は、小学生の男児だが、平成10年頃より女児も参加する。8月13日の昼に、共同墓地の入口にあるトリオバという広場（13日に戸別に線香を供え、仏さまを迎える場所、現在は集落センター）で、大人と子供たちが綱を編む。子供たちが各家から集めた藁で、胴体からムカデのようにたくさんの足（引き綱）を出す。子供が25～26人参加した頃は、綱の長さが2間を超えることもあった。頭部は、綱を団子状に纏め、頭と顎の上下に分け、目玉を茄子で、舌を唐辛子で作った。頭の太い部分から尻尾にかけて細くなるように作り、4尺位の間隔で引き綱を結ぶ。完成したボンヅナを墓地に運び、中央の石（無縁仏を供養する石）に巻き付けておく。夕刻、ボンヅナが墓地を出る際、時計回りに3回回る。かけ声は、墓地では「仏さま迎えた」で、各家に着くと「ボンヅナごーざった」。各家の庭にボンヅナを運び込み、3回時計回りに回って、お捻りを貰う。現在は午後4時頃には終わるが､以前は暗くなってからまわり始めたので､終わるのも遅かった。インキョ（屋号）宅を最後に回って、綱をトリオバに運び、クラのオタマサンの家でお金を分配した。 かつては、13日から15日まで盆綱を行っていたようである。新盆宅では3回、他の家では1回まわって仏さまを降ろす。終了後は、綱を川に流したという。 〔参考文献〕『茎崎町史』（1994）、嶋田　尚（1998）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
		つくば市	②大井（下組）	盆　綱	○	仏迎え	—
		上記の①大井（上組）を参照					
89	199	つくば市	菅間	盆　綱	○	仏迎え	—
		盆の2日程前から子供たちが藁を集め、集会所（かつては、道路脇の広場）で綱を綯う。中学3年生を頭として小中学生が参加する。子供が減少したため、平成20年代後半より女子も参加している。綱の本体を作るのは大人である。綱はムカデのような形で、頭部は綱を太くし、尻尾に向かって細く作る。頭部に、引き回すための2本の綱が結びつけられ、胴体にも子供たちが曳くための細い綱が左右に結びつけられる。全体の長さや曳き綱の数は、参加者の数で変わり、12～13名が参加した頃は、長さ5m程の長さだった。8月13日の夕方、子供たちはボンヅナを、集落内の十字路（ヨコミチ）まで運ぶ。ヨコミチから2か所の共同墓地をまわり、墓地で「おあがんなさい（ボンヅナにお乗りなさい）」とかけ声を掛けてから集落の各家をまわる。各家では、盆棚を設けている座敷の縁側の戸を開け放っておき、その前の庭で「おあがんされ（家にお上がりなさい）」と声を掛けて、その家の先祖を盆棚に送る。子供たちには1000円ほどの小遣いが与えられる。各家をまわったら、再びヨコミチにボンヅナを運び、そこにそのまま朽ちるままに置いておく。 〔参考文献〕『茎崎町史』（1994）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
90	130	つくば市	小茎	ジャーメ、盆綱	○	仏迎え	—
		8月11日に子供たちが牛久沼から真菰（マコモ）を刈って来て天日に干し、13日までに竹を芯にして、長さ9mの大蛇型の太いボンヅナ（ジャーメ）を作る。その晩、子供たちがボンヅナを担ぎ､「ヨーイトマーケ、ヨーイトマーケ」と唱えながら墓地で祖先の御霊を迎え、各家をまわる。この時、綱が地面につかないように持ち上げて歩く。各家ではボンヅナが来ると「仏さまが来なすった」と言ってはじめて盆膳の箸をつける。子供たちは「仏さま送って（迎えて）来ました」と言い、綱の頭に付けた花を届ける。15日は送り盆で、新盆宅の人は提灯をつけ、仏さまを乗せたボンヅナに付き添って墓地へ送って行く。終わるとボンヅナを牛久沼に流す。現在は、15日の盆綱は行っていない。 〔参考文献〕更科公護（1967）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、『茎崎町史』（1994）、嶋田　尚（2001）				
91	199	つくば市	六斗	盆綱、ジャーメ	○	仏迎え	—
		長さ5m程のボンヅナ（ジャーメ）を肩に乗せて運び、仏さまを祀る家をまわる。平成10年代に女児も参加するようになった。ボンヅナの頭部は70㎝程の長さで、藁の芯に真菰（マコモ）を巻き、上顎と下顎をもつ。子供たちが東谷田川から刈ってきた真菰を、宿の家（代表となる中学3年生の家）で干した後、8月13日の朝、宿の庭でボンヅナを作る。庭木に竹を渡して、そこに予め綯った3本の綱を架け、撚り合わせて太い綱とする。キンバナ（蓮の花と葉を模した盆の飾り）を新盆宅の数だけ綱の頭部に挿しておく。完成した綱は、集会所に運びトグロを巻かせて置いておく。子供たちは、家に帰って入浴して身を清めた後、夕方集会所に集まる。綱を共同墓地まで運び、棺台の周りを反時計回りに3回回って仏さまを綱に乗せると、「わっしょい」「こらしょい」と声を掛けながら各家をまわる。各家では、仏間の縁側前に綱を運び、「仏さまを送って来ました」と子供たちが挨拶をする。新盆宅では、綱に飾ったカミハナを渡す。各家をまわり終えると集会所に戻り、13日の行事は終わる。翌14日の朝、綱を東谷田川に流す。				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
80		石岡市	⑦三村（坂井戸）	ジャーメ	昭和30年代まで	不明	不明
		聞き取りによると、実施していたことを知るという情報はあるが、詳細は不明。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	⑧三村（御前山）	ジャーメ	昭和30年代まで	不明	不明
		聞き取りによると、実施していたことを知るという情報はあるが、詳細は不明。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	⑨三村（新生）	ジャーメ	昭和30年代まで	仏の送迎	―
		仏さまの迎えは８月13日の午後６時頃に開始、送りは15日の同時刻頃に開始し、いずれも終了次第解散になった。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
81		龍ケ崎市	長峰町（沖坪）	盆　綱	大正頃までか	悪魔除け	―
		小学生10人くらいが盆の８月13日にボンヅナを引くので、前日の12日に各戸から藁を貰い、大人たちに教えてもらいながらボンヅナを綯ったという。長さは約10間で、頭の方を縄で２か所縛る。子供たちは「ワイワイ」言いながら太いボンヅナを引っ張ったので、人々は慌てて逃げた。仏迎えとは言えないが、悪魔払い、悪魔除けであったという。子供たちはお店の人たちから貰ったものを食べて楽しんだという。15日は夜遅く、頃合いをみてタチ（立）茶を供え、ご先祖様を送るため、カド（門）で小麦藁を燃やした（送り火）。 〔参考文献〕『龍ケ崎市史』民俗報告書Ⅱ（1986）、『龍ケ崎市史』民俗編（1993）、『龍ケ崎市祭礼報告書』（2016）					
82	118	龍ケ崎市	宮渕町（千秋）	盆　綱	○	仏迎え	―
		ボンヅナは長さ約10mで竜の形をしている。竜の頭の部分には、長さ２ｍもある藁のツノ（角）を２本、交互に組み合わせて作る。また、長さ約４ｍの松明２本を作る。８月13日の夕方、若衆たちが鹿島神社で竜の頭と口を作る。８時頃ボンヅナができ上がると、神社前から２本の松明を先頭に出発し、墓地の前で松明に火をつける。子供たちは綱を担ぎ､「わっしょい､わっしょい」と揉みながら､墓地で「さあお乗りなさい」と言って仏さまを迎え､全36戸を「仏さま送って来ました」と言ってまわる。各家では､仏さまの足もとを照らすために､手作りの四角い提灯を準備し､ローソクに火を灯す。上がり框（カマチ）には､新しい下駄を１足置き､足を洗う水と手拭を添えて､仏さまが来るのを待つ。子供たちが仏さまを送って来ると、お捻りなどで子供たちの労をねぎらう。特に新盆の家では、西瓜などでもてなし、お捻りもはずむ。全戸をまわり終えると、綱を川へ流した。 〔参考文献〕上野錦一（1963）､藤田　稔（1964）､更科公護（1967）､藤田　稔（1973）､佐藤次男（1979）､『龍ケ崎市史』民俗報告書Ⅱ（1986）､嶋田　尚（1988）､『龍ケ崎市史』民俗編（1993）､『盆行事Ⅳ』（2000）嶋田　尚（2001）､『龍ケ崎市祭礼報告書』（2016）					
83		牛久市	東猯穴町	盆綱引き	平成28年まで	仏迎え	―
		８月13日に、子供たちが各家をまわって藁を集める。藁のない家では200円を渡す。綱は、保護者や年配者が左縄で綯って竜の形に仕上げていく。長さは子供の数によって決まる。昔は男子のみで行われていたが、後に女子も参加した。夕方、子供たちが公会堂に集合し、鉢巻をしてボンヅナを持って共同墓地へ行く。墓地の松の木の周りを、ボンヅナを持って３回回った後、１から100まで数え、墓地の中央に綱を下す。そして墓石１つ１つから先祖の霊を背負う所作をしてボンヅナに乗せると､「ノーラッシェ、ノーラッシェ、仏さまノーラッシェ」を繰り返しながら、集落内を右回りに２周まわる。各家では､「オーラッシャイ、オーラッシャイ、仏さまオーラッシャイ」を唱えながら、仏さまの霊を送り届ける。皆で「仏さまをお連れしました」と言うと、家の人はお礼を言って祝儀を渡した。 〔参考文献〕「東猯穴誌」（1993）､『下根･柏田･東猯穴の民俗』（1996）､『牛久市史』民俗（2002）､『茨城県の祭り･行事』（2010）					
84		牛久市	岡見町	盆　綱	大正初年まで	仏迎え	○
		８月13日の朝、集めておいた藁で頭部、尾部、胴部を作り、組み合わせて綱を作る（長さ30m、径約10㎝）。夕方、各家をまわり仏さまを降ろす。終了後、上岡見と下岡見に分かれて、十字路で綱引きをする。負けるとケチが付くというので、大人も助太刀に加わる。結局、綱は引っ張り合いで切れるため、集会所（オヤマ）に捨てたとされる。 〔参考文献〕藤田稔（1964）､今瀬文也（1972）､藤田　稔（1973）､嶋田　尚（1988）､『盆行事Ⅳ』（2000）､嶋田　尚（2001）､『牛久市史』民俗（2002）					
85		牛久市	牛久町	盆　綱	大正初年まで	不明	○
		牛久町の上町と下町で子供たちが綱引きを行ったとされる。藁をもらい集め、頭に薪を入れ、ボッチで頭、ナスで目の形にした。 〔参考文献〕今瀬文也（1972）､『盆行事Ⅳ』（2000）､『牛久市史』民俗（2002）					
86		牛久市	新地町	盆　綱	不　明	不明	○
		詳細については不明だが、上坪と下坪の境で子供たちが綱引きを行ったと伝えられている。 〔参考文献〕『牛久市史』民俗（2002）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
78		石岡市	北根本	ジャーメ	平成24年頃まで	仏の送迎	—
		8月13日及び15日に、小学1年生から中学3年生の男子のみでジャーメ（盆綱）を行っていた。 8月1日から12日にかけて、子供たちが毎日1本ずつ縄を綯い、12日の夜は旧公民館に宿泊し、翌13日の早朝から薬師堂の境内でジャーメ作りを行った。頭部は大人たちが作った。胴体は新竹を芯にして藁を巻きつけ、藁で編んだ上顎･下顎の間に赤いボール紙で作った舌を篠で挟んで挿し込み、ナスの目と1m程の竹の角、下顎にリュウノヒゲを、また全身にはヤツデの葉を挿した。ジャーメが完成すると、旧公民館前に安置した。夕方、子供たちはジャーメを担いで、旧公民館脇の石塔場で「ヤンサ、ボンサ、ホトケサマ、ノリヤンセ」とかけ声をかけて仏さまを乗せ、薬師堂に向かった。「ヤンサ、ボンサ、ホトケサマ、ノセテキタ」とかけ声をかけながら、お堂をまわった後、各家をまわって仏さまを送り届けた。各家では、心付けを渡し、スイカやジュースなどを振舞った。集まったお金は、年長者が管理した。 15日は夕方から「ヤンサ、ボンサ、ホトケサマ、オンノレヨ」とかけ声をかけながら、各家をまわって仏さまを乗せ、石塔場で「ヤンサ、ボンサ、ホトケサマ、オリヤンセ」と仏さまを降ろして行事は終わる。翌16日、役目を終えたジャーメ本体は3つに切られ、平和橋から恋瀬川に流された。 北根本のジャーメは、平成の初頭に少子化により中断されたが、平成14年頃から女子の参加と8月13日のみ行う形で、子供会事業として復活したが、平成24年に再び少子化により中止された。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					
79		石岡市	石川（坂井戸）	ヤンサボンサ	昭和30年代まで	仏の送迎	—
		行事名を「ヤンサ、ボンサ」、蛇の本体を「ジャーメ」と呼んでいた。「ヤンサ、ボンサ」は、8月13日及び15日に小学4年生から6年生の男子のみで行われていた。ジャーメは、地区の薬師堂境内で大人によって作られた。竹を芯にして麦藁を巻きつけた胴体に真菰（マコモ）で作られた頭を合わせ、背中に杉の葉を挿したものだった。 13日の夕方、ジャーメを担いだ子供たちが「オジサン、オバサン、ノーラッセ」と呼びながら共同墓地をまわり、「ヤンサ、ボンサ」のかけ声で地区内の各家に向かった。各家で「オジサン、オバサン、オリラッセ」と呼びかけて仏さまを降ろすと、各家から心付けをもらった。このお金は、6年生の代表者が管理をした。15日の夕方、子供たちが「オジサン、オバサン、ノーラッセ」と呼びかけながら各家をまわり、「ヤンサ、ボンサ」のかけ声で墓地へ向かった。最後に墓地で「オジサン、オバサン、オリラッセ」と呼びかけ、仏さまを返して終了となった。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
80		石岡市	①三村（長見寿）	ジャーメ	昭和30年代まで	仏迎え	—
		聞き取りによると、実施していたことを知るという情報はあるが、詳細は不明。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	②三村（今泉）	ジャーメ	昭和30年代まで	不明	不明
		地区にボンヅナの頭部が残されているが、詳細は不明。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	③三村（水内）	ジャーメ	昭和36年まで	仏迎え	—
		ジャーメには、小学生から中学生まで参加し、中学生が指揮を執っていた。ジャーメに参加すると小遣いをもらえたが、これを管理する中学生が多くもらっていたようだ。中止になった背景は不明だが、当時、地元の中学校が廃校となり、城南中学校に統合されたことと関係があるのではないか。 8月13日が仏さまの迎えで、明るい時間に集まり、夜までやっていたようだ。新盆の家を優先してまわった。ただし、15日に仏さまを送ったかは不明。ジャーメの終了後、本体は焼却された。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	④三村（吹上）	ジャーメ	昭和60年代まで	仏の送迎	—
		三村のジャーメ（盆綱）は、小字単位の各集落で昭和30年代まで行われていたが、生活環境の変化とともに廃絶したといわれる。その後、昭和50年代後半、吹上集落で地元の先生を中心に、小学1年生から6年生の男女が参加する形で復活させた。事前に真菰（マコモ）を刈っておいて1週間ほど干し、それから縄を綯い、ジャーメを作る。本体には芯を入れず、細長い蛇のような形で頭部をつける。頭部は集落内で保管した（現存）。 8月13日の夕方、子供たちがジャーメを持って「ヤンセ、ボンセ、ボンボコチョウチン、アーガッタ、ホートケサマ、ノーリャンセ」と掛け声をかけて常春寺を出発し、地区内の各家へ向かう。各家では「ヤンセ、ボンセ、ボンボコチョウチン、アーガッタ、ホートケサマ、オーリャンセ」と呼びかけて仏さまを降ろし、心付けを受け取る。 15日の夕方、「ヤンセ、ボンセ、ボンボコチョウチン、サーガッタ、ホートケサマ、ノーリャンセ」とかけ声をかけながら各家をまわり、最後に常春寺で「ヤンセ、ボンセ、ボンボコチョウチン、サーガッタ、ホートケサマ、オーリャンセ」と呼びかけて、仏さまを返して終了となる。 しかし、復活したジャーメも6 ～ 7年は続いたが、少子化のため中止され、現在に至っている。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					
		石岡市	⑤三村（諸士久保）	ジャーメ	昭和30年代まで	不明	不明
		常春寺にボンヅナの頭部が2体残されているが、詳細は不明。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					
		石岡市	⑥三村（羽成子）	ジャーメ	昭和30年代後半まで	仏の送迎	—
		担い手が少なくなったことにより、昭和30年代後半に休止となった。 仏さまの迎えは8月13日の午後7時頃、羽成子地区の墓地に集合して各家をまわり、終了後解散した。送りは15日の午後7時頃開始して各家をまわり、終了後解散した。ジャーメ本体は翌日に焼却された。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）、ふるさと歴史館（2016）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
69		土浦市	粕毛	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		子供が盆綱を行った。地区を歩きながら「だんごろもち食いてえ、すいか食いてえ」とかけ声をかけた。各家では、盥に水を汲んでおき、仏さまが家に入る時、その足に水をかけてから部屋に通すしきたりだった。一方、大人たちも墓地まで仏さまを迎えに行き、暗くなった頃墓地の外で迎え火を焚き、藁を一つずつ持って「仏さま迎えに来ましたから」と言い、火を掲げて家まで導いた。 〔参考文献〕『土浦市史』民俗編（1980）					
70		土浦市	宍塚	盆　綱	昭和10年代まで	仏迎え	—
		8月13日（昔は旧暦の7月13日）に、小学生が各家から集めた藁で太い縄を綯う。ナスやキュウリで竜の顔にする。夕方子供たちが墓地から綱を担ぎ、「仏さまのらせ」「仏さまおいらせ」「スイカ食いてい、餅食いてい」などと言いながら、各家の庭先をまわり、お金や食べ物を集める。 〔参考文献〕『里山の暮らし』（1999）、『続里山の暮らし』（2005）					
71		土浦市	上高津	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		各家に着いた時のかけ声は、「ヤンヨー、ヤンヨー、銭おくんなせえ」 〔参考文献〕『土浦市史』民俗編（1980）					
72		土浦市	小松	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		各家に着いた時のかけ声は、「仏さま乗せてきた、おじさんおばさんよりうつせ」 〔参考文献〕『土浦市史』民俗編（1980）					
73		土浦市	大岩田	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		各家に着いた時のかけ声は、「仏さま乗せてきた、おじいさんおばあさんおりらっせ」 〔参考文献〕『土浦市史』民俗編（1980）					
74		石岡市	東大橋（下坪）	不　明	不　明	仏迎え	—
		盆の8月13日の夕方、子供たちが「蛇メ」を作って各家をまわり、お金や菓子をもらう。蛇には角がある。仏法に帰依した蛇が仏さまを乗せて、一歩でも早く家に到着させる意味だという。 〔参考文献〕『石岡市史』中巻Ⅱ（1983）					
75	108	石岡市	①東田中（東）	ジャーメ	○	仏迎え	—
		東田中の盆綱（ジャーメ）は、8月13日に東西の2地区に分かれて行われる。かつては小学生の男子のみの参加であったが、東地区は平成19年から、西地区は平成27年から女子も参加するようになった。 ジャーメは当日の午前8時頃から、東地区は沖中不動院の境内、西地区は共同墓地下の広場で、地区の古老や保護者によって作られる。若い杉の木を芯にして藁を荒縄で巻きつけ、背中に幣束と杉の葉をつけた胴体に、割った篠で藁を挟んで形を整えた上顎・下顎と舌にナスの目、藁で編んだ角を付けた頭部分を合わせて完成する。 午後、西地区では1時から、東地区では2時から、子供たちがジャーメを担いで「ボーンドノゴザッタ、ホートケサマノセテキタ」とかけ声をかけながら、地区内の各家をまわり、仏さまを送り届ける。各家では心付けを渡し、茶菓子などを振舞う。両地区ともに、役目を終えたジャーメを旧東田中公民館跡地に置いて、行事は終了する。 東地区の特徴として、各家でジャーメから藁を1本抜き取り、家の中に投げ入れる。また西地区では、ジャーメが出発する前に、共同墓地で後ろ手に手を組み、墓1軒ごとに仏さまを背中に背負い、ジャーメに憑依させる儀式が行われる。 〔参考文献〕石崎　良（1975）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
		石岡市	②東田中（西）	ジャーメ	○	仏迎え	—
		上記の①東田中（東）を参照					
76		石岡市	大谷津	ジャーメ	平成10年代まで	仏の送迎	—
		8月13日に共同墓地で、竹を芯にして藁を荒縄で巻きつけた胴体に、下顎に縄を付けて口が開くように工夫された頭を合わせ、幣束と目にナス、髭に杉の葉を挿したジャーメの本体が作られる。夕方、子供たちはジャーメを担いで、「ホトケサマ、ノットクレ」と呼びかけながら墓地をまわり、各家へ向かう。各家では「ホトケサマ、オリトクレ」と呼びかけ、仏さまに降りてもらう。子供たちを迎えた各家では、心付けを渡す。同行した大人たちがお金の管理を行い、子供たちに配分する。また、15日の夕方、ジャーメを担いだ子供たちが「ホトケサマ、ノットクレ」と呼びかけながら各家をまわり、最後に共同墓地で「ホトケサマ、オリトクレ」と呼びかけ、仏さまを返して行事は終了となる。 〔参考文献〕『石岡市史』中巻Ⅱ（1983）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
77		石岡市	中津川	ジャーメ	昭和50年代初頭まで	仏の送迎	—
		8月13日及び15日に小学1年生から6年生の男子が参加して行われた。集落を上と下の2つに分け、上は阿弥陀様の境内、下は香勢堂の空き地でジャーメ本体が作られ、頭の部分には俵ボッチが使われていたという。13日に「ボンドノゴーザッタ、ホトケサマ、ツレテキタ」、15日に「ボンドノゴーザッタ、ホトケサマ、オカエリダ」とかけ声をかけながら、各家をまわる。子供たちを迎えた家では、心付けを渡した。15日の夜、役目を終えたジャーメの本体は、各々作られた場所でバラされ、恋瀬川の土手で燃やされた。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
60	94	鉾田市	駒木根	盆綱引き	○	仏迎え	—
		8月13日、朝から小中学生と親たちが共同墓地に集まり、綱を作る。作り方は、2つに割った竹を並べ針金でしばり、その上に藁を乗せる。藁が抜け落ちないよう、枝のついた竹を中に入れて芯にする。昔は麦藁を使ったが、今は稲藁を用いる。午後5時頃から盆綱が始まる。昔は墓地の土を綱に少し乗せたが、今は乗せる真似だけをして、新仏を前へ乗せ、次に古い仏を乗せる。各家をまわりながら、仏さまを降ろして行く。乗せたり、降ろしたりする時、かけ声をかけることはしない。各家ではお駄賃を出すが、新盆の家ではお駄賃も多いようだ。各家をまわり終えると、綱を川のところに置く。昔は川に流したという。子供たちはお駄賃をもらった後、花火などを楽しんでから解散する。 〔参考文献〕『ほこたの歴史』(1995)、『茨城県の祭り・行事』(2010)					
61		鉾田市	安塚（上宿）	不明	明治末期まで	仏迎え	—
		ヤツデノボズナは、真菰（マコモ）や縄で作った長さ5 ～ 6mの蛇型のボンヅナを指す。年配者が集落中央の勝軍寺跡に集まり、ボンヅナを作ったという。綱は時期によって異なり、径30 ～ 45cm、長さ5.5 ～ 9m程で、蛇に似せてウロコのようにもじり、頭にはサンダワラを2枚用い、目にはナスをつけた。8月13日、子供たちが墓地で仏さまを迎えてから綱を引きずり、各家をまわって霊が来たことを叫ぶ。かけ声は「ヤツデノボズナ、キレタラハジョ、カッタラテガラ」。切れる、勝つというのは、綱の存在を暗示しており、古くは綱引きをやっていた可能性が高いとする説もある。終了すると北浦や川に流したという。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔81973）、嶋田　尚（1988）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）、遠藤賢治（2019）					
62		鉾田市	高田	盆綱引き	平成22年まで	仏迎え	—
		古くから行われていた行事で、戦後一旦廃止されたが平成の初頭に復活した。8月13日の朝、公民館で、子供たちが各家から集めた藁を用い、一掴み（径約2㎝）の束で綱を綯う。それを3本作って、また綯うとボンヅナができる。午後3時頃、子供たちが綱を共同墓地に運び、それぞれの墓の前で「やんずなの盆ずな、切れたらはじよ。仏さまのらっしょ。」と3回唱えながら綱をバタンバタンと上下にゆする。墓地から各家まで引いて行き、家の前でまた「やんずなの盆ずな切れたらはじよ。仏さまおじらっしょ。」と3回唱えて綱を3回上下にゆする。各家では子供たちにお駄賃を渡す。お駄賃は新盆の家の方が多いようだ。最後に綱を北浦沿岸の広場まで引いて行き、そこで焼却する。 〔参考文献〕『ほこたの歴史』(1995)、『茨城県の祭り・行事』(2010)					
63		鉾田市	上冨田（周防坪）	盆綱曳き	平成初頭頃まで	仏迎え	—
		旧暦の7月12日の午後、子供たちが旧家冨田氏宅に藁を持ち寄り、蛇型の太い綱を作り、これに引き縄を付けて13日の夜墓地に曳いて行く。墓地で「お仏さんを迎えに来たよ、のらっしょ、のらっしょ」と言ってから各家に曳いてまわり、「お仏さんを迎えて来たよ、おりらっしょ、おりらっしょ」と告げて歩く。各家では若干のお金をくれる。子供たちはこれを分配して菓子や花火などを買い、盆の夕べを仏さまを囲んで楽しむ。新盆の家では多くの御布施がある。綱は翌日、近くの巴川に流された。 〔参考文献〕新堀　猛（1971）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）					
64		鉾田市	巴　※現在の大字は不明	盆綱引き	明治末期まで	不明	—
		明治の末頃までは、若者や子供たちが盆綱引きをやっていたようだ。 〔参考文献〕今瀬文也（1972）、『盆行事Ⅳ』（2000）					
65		土浦市	手野町	盆　綱	不　明	仏迎え	—
		昔は、新盆の家だけでボンヅナを作ったようだ。 〔参考文献〕『土浦市史』民俗編（1980）					
66		土浦市	矢作	盆　綱	昭和10年代まで	仏迎え	—
		地元の聞き取りによると、8月13日に盆綱を実施した。墓地を出発地点とし、藁で作ったボンヅナを子供たちが持って、5班→4班→3班→1班→2班の順に歩いて新盆の家をまわった。かけ声は「ホトケサマ、ノラセ」。					
67		土浦市	飯田	盆　綱	昭和10年代まで	仏迎え	—
		地元の聞き取りによると、8月13日に迎え火を焚いて、墓地から仏さまを迎えた。ボンヅナは、藁を束にしたもので、歩きながら叩きつけた。かけ声は「ホトケサマ、ゴザッタ、スイカン（すいか）食いてえ」で、カボチャの煮しめが振る舞われた。					
68	102	土浦市	佐野子	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月13日の日中に佐野子本田の集落センター（旧満蔵寺）で、年配者らを中心にボンヅナが作られる。頭部は角や顎、舌などの形を藁で作り出し、ナスを目玉とし、長さは約10mとなる。夕方、親方と呼ばれる中学生が先頭になり、子供たちが綱をもって墓地に向かう。「のーらっせ、のーらっせ」と唱えながら墓地の中を一周し、仏さまを綱に依りつかせる。そして、墓地を出発すると佐野子新田の集落へ「ごーざった、ごーざった、仏さま、ごーざった」と唱えながら向かう。各家では、主屋の縁側で「仏さま、おりらっせ」と唱えて、綱を座敷に向けて傾ける。これで、仏さまを家に送り届けたことになる。家人は子供たちにおひねりを渡す。これを1軒ごとに繰り返して、新田から本田に移る。すべての家をまわり終えると、桜川にかかる水神橋から綱を川へ投げ入れる。子供たちは集落センターに戻り、親方がおひねりを分配して終了となる。 〔参考文献〕田村竹男（1979）、『土浦市史』民俗編（1980）、嶋田　尚（1988）、『里山の暮らし』（1999）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）、萩谷良太（2018）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
51	198	行方市	②内宿（下宿）	盆綱引き	○	仏迎え	—
		上記の①内宿（上宿）を参照 〔参考文献〕小沼忠夫（1985）					
52		行方市	行方（内宿）	盆綱引き	昭和25年頃まで	仏迎え	—
		盆綱引きは大正10年頃より始まったらしい。参加したのは小学１年から６年生まで。兄弟がいる場合は、１人だけの参加とされた。８月12日の午後、年長の保護者の指導で、子供たちが持ち寄った藁を捩って、長さ３ｍ程、子供たちが少なくなると２ｍ程の竜（大蛇）型のボンヅナを作る。完成後は、それを共同墓地の奥の方に置いて来る。翌13日の午後１時頃、子供たちは墓地までボンヅナを取りに行き、仏さまを乗せ、「やんさぼんさ、きれたらつなげ」と唱えながら、仏のある家の門口まで引いてまわる。各家から銭などをもらうが、新盆の家からはたくさんのお礼がある。終了後、それらを子供たちで分けた。ボンヅナは薬師堂近くで焼却した。 〔参考文献〕『麻生町史』民俗編（2001）					
53	76	行方市	沖洲	盆綱担ぎ	○	仏迎え	—
		８月12日に、長年、ボンヅナ製作に関わってきた方が、自宅で竹を芯にして稲藁と縄を巻き上げ、長さ２間程度の竜を作る。頭には角とひげを付ける。夕方、代表の子供とその親が沖洲共同墓地に竜を置き、先祖の霊を乗せる。翌13日午後、子供たちが「ホートゲサーマ、ノーラッショ」と唱えて墓地を出発し、集落南東部の羽生境から下町坪、中町坪、上町坪の順に各家をまわる。綱を運ぶ際は、「提灯持ち」を先頭に「髭持ち」、「尻尾持ち」などに分かれる。以前は男子のみだったが、現在は女子も参加する。各家に着くと竜の頭を盆棚のある座敷などに置き、「ホートゲサーマ、オリラッショ」と唱え先祖の霊を降ろす。座敷から出る時は、綱を尻尾から後ずさりで戻す。終了後、綱は於岐都説神社境内近くの元坊跡に置かれ、やがて朽ちてゆく。 〔参考文献〕『玉造町史』（1985）					
54	80	行方市	玉造（高須）	大蛇入れ	○	仏迎え	—
		藁を芯にして縄を隙間なく巻いたボンヅナ（大蛇）は、全長４ ～ ５m、胴回りは約１m。角は唐辛子、目はナス、顎はサンダワラ２枚、舌は厚紙で作られる。８月13日の夕刻、子供たちは、各家の墓の土を綱にこすりつけ、大蛇を墓地から担ぎ出し、「ヨイサノボンサノ、ヨイサノボンサノ」と囃しながら各家をまわる。家では「仏さまゴザラッシャッタ」と叫び、縁側に大蛇の首を乗せる。大蛇の首は仏壇の方へ向けるという。終了すると梶無川に流す。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔（1973）、堤　一郎（1977）、『玉造町史』（1985）、嶋田　尚（1988）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）					
55		行方市	手賀（舟津）	盆　綱	昭和59年頃まで	仏迎え	—
		事前に中学１年生を中心に、集めた稲藁や縄を用いて綱を作る。重くならないように胴には麦藁を入れた。８月13日に完成した綱を共同墓地まで運び、各家の墓地の砂を綱に掛け、墓地から舟津集落の各家をまわり、最後はカワ（霞ケ浦）に投げ入れた。役割は、中学１年生の親方のほか、「頭持ち」「胴持ち」「尻尾持ち」など。昭和30 ～ 40年代は「ワンサイヨ、コレ、ワンサイヨ」を唱えたが、それ以前は「ヤンサイヨ、コレ、ヤンサイヨ」と唱えていたという。順路は、南東隣の新田境から始まり、集落中心を抜け、北西部へとまわったらしい。各家では竹持ち（名称不明）が「ホドゲサマ、イラシャッタ」と地面を叩いた。家人は心付けを子供たちに渡した。昭和59年頃、地元の手賀小学校から多額の金銭の取扱いがあるのは、教育上よくないとの指摘を受け、廃止となった。 〔参考文献〕『玉造町史』（1985）					
56		鉾田市	田崎（大神）	不明	不　明	不明	不明
		鉾田市からの聞き取りによるが、詳細については不明である。					
57	84	鉾田市	冷水	盆綱引き	○	仏迎え	—
		８月13日の朝、共同墓地奥の馬頭観音前の広場で、ボンヅナを作る。芯となる縄に藁を巻いて、さらに螺旋状に縄で縛り、15m程の蛇型に作る。頭には横木を入れ、頭から４分の１程の部分を最も太くして、２ ～ ３輪のカワラナデシコの花（ボンバナ）を藁の中に捩じり込む。ここが仏さまの乗るところとされる。また綱を引く時も、この部分を地面に下ろしてはいけないという。綱の長さは子供の人数によって変わるが、引き綱が約１m間隔で付けられ、完成すると地区内で最も新しい墓の前に、トグロ状にして夕方まで置く。 夕方、迎え火が焚かれる頃、子供たちは、墓の前から「ヤッサーヤッサー、ヤッサーヤッサー、ヤッサノボンヅナエー、オジイサンモ、オバアサンモ、ミーンナノーラッショー」と歌いながら綱を引き出す。子供たちは綱を持って集落の中心部を大回りに３周、小回りに５周まわるが、各家の垣根から子供たちにしばしば水がかけられる。「ミーンナノーラッショー（みんな乗らっしょ）」と歌い、各家では「ミーンナオリラッショ（みんな下りらっしょ）」と歌って仏さまを降ろす。最後には仏迎えの役割を果たした綱を、海岸に運んで海に流す。最近は集落をまわる回数が少なくなっている。 〔参考文献〕『図でみる旭村』（1997）、『旭村の歴史』通史編（1998）、『盆行事Ⅳ』（2000）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
58		鉾田市	湯坪	不明	不　明	不明	不明
		鉾田市からの聞き取りによる。詳細については不明					
59	88	鉾田市	徳宿（徳宿新田）	盆綱引き	○	仏迎え	—
		８月13日、朝から子供たちと親たちが集まってボンヅナを作る。作り方は、竹を３ ～ ４本並べて藁を乗せ、その上にまた竹を３ ～ ４本を乗せて、縄で４箇所しばる。長さは４ ～ ６尺、幅は２ ～ ３尺程。昔は子供の数が多く、小学３年生以上の男子が参加したが、今では小学１年生以上の男女が参加している。ボンヅナも小さくなったという。午後３時頃、子供たちは共同墓地に行って、仏さまを綱に乗せてお迎えし、各家へ送っていく。子供たちは「仏さまのらっしょ。」と３回唱えながら、綱をバッタン、バッタンとゆする。各家に綱を引いて行くと、門のところで「仏さまめいりゃした。」と言いながら中に入り、庭で「仏さまおりらっしょ。」と唱える。家の人は子供たちにお礼を言って、お駄賃を渡す。お駄賃は新盆の家の方が多いようである。このお駄賃は、終了後に子供たちで分ける。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
47	197	茨城町	①下土師（下土師宿）	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月13日 に弥陀堂の前でボンヅナを作る。ボンヅナは径30 ～ 40cm、長さ５ｍ程。12cm位に束ねた藁を、大人３ ～ ４人が手伝って三本撚りにもじる。夕方子供たちがボンヅナを共同墓地まで引き出し、「ホートケサーマ乗らっしょ」と唱え、先祖の霊をボンヅナに乗せて、各家をまわる。家では門に迎え火を焚き、子供たちは庭で「ホートケサーマ来たよ、ジーサンバアサンオジラッショ」と唱えて心づけをもらう。最後は涸沼川へボンヅナを流す。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）				
		茨城町	②下土師（下土師新地）	盆　綱	昭和52年頃まで	仏迎え	—
		8月13日に明神様の境内でボンヅナを作る。盆綱行事は、上記の下土師宿とほぼ同じ。昔は、若い衆が付き添い、道先案内として松明をともしたが、後に提灯を持つようになった。 〔参考文献〕更科公護（1967）、『盆行事Ⅳ』（2000）				
		茨城町	③下土師（中塚）	盆　綱	昭和30年代まで	仏迎え	—
		8月13日に、西光寺の境内で竜の鱗のようにもじってボンヅナを作った。その日の晩、地区内をボンヅナを引きずって歩き、各家の庭に引き入れた。仏を迎える意味合いがあったという。終了後、ボンヅナを墓地に納めたり、道端等に放置したりしたらしい。 〔参考文献〕更科公護（1967）、『盆行事Ⅳ』（2000）				
48	68	茨城町	①奥谷（奥谷）	盆綱曳き	○	仏迎え	—
		8月11日から御霊神社境内の公民館で、子供たちのうちの年長者とその親たちがボンヅナを作る。材料は、藁、藁縄、井戸縄と真菰（マコモ）。長さ約10mで竜を模る。頭部には角を付けるが、この角に仏さまがつかまると伝えられている。12日の夜は、子供たちがボンヅナを見張るため、公民館に宿泊する。13日午後７時に集合し、ボンヅナに水を掛けて湿らせてから出発する。やがて墓地に着くと「仏サン、オノンナンショ、仏サン、オノンナンショ」と唱える。以前は、「仏さんの道はイド（糸）より細い」と数回唱えてから国道に引き出したらしい。新盆の仏には「○○サン、ヨクツカマリナンショ」という。奥谷では、１軒ずつ立ち寄って仏さまを降ろすことはせず、歩道に沿ってボンヅナを引きながら走り抜けるので、１時間ほどで地区をまわり終える。盆綱のかけ声が近づくと、各家では歩道に出て藁束に火をともし、迎え火を焚くが、年長の者がこれを蹴散らして勇ましく走り抜ける。この後、各家では盆棚に明かりをともして供物をする。これで仏さまが家に着いたことになる。綱はまわり終えると、涸沼川に流す。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、『茨城町史』地誌編（1993）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）、遠藤賢治（2019）				
		茨城町	②奥谷（赤坂）	盆綱曳き	平成14年頃まで	仏迎え	—
		8月13日に中学２ ～ ３年生を頭とする子供たちが、チガヤと藁を合わせながら、長さ３ｍ程の「ムカゼ編み」のボンヅナを作る。かつては６ ～ ７ｍの長さで、茅でムカデのような足をつけたこともあった。この綱に仏さまが摑まって来ると伝えられていた。暗くなると子供たちは綱を引いて墓地へ行き、小麦藁のかがり火を焚き、「お乗りなんしょう、お乗りなんしょう」と繰り返し、火が消えるまで「仏さん」と呼び、綱に乗せる。各家では、門前に小麦藁の迎え火を焚き、「仏さん」が来るのを待つ。家から出る時は「降りらっしょ、降りらっしょ」を連呼する。各家では子供たちに寸志を渡す。綱は、以前は涸沼川に流していたが、その後新溜池に流した。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、嶋田　尚（1988）、『茨城町史』地誌編（1993）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
49		茨城町	小幡	不明	明治末期頃まで	不明	○
		注連縄状にもじった綱を用いて、８月14日及び15日の晩に盆綱行事を行った。地区を巡行する際、綱は担がれたか抱えられたが、綱引きにも用いられ、終了後は墓地などに納められた。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
50	197	行方市	①三和（穴瀬）	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月12日に、各家から集めた稲藁や麦藁を利用して３ｍ程の長さの大蛇型のボンヅナを作り、共同墓地の棺台に巻き付ける。翌13日の夕刻、小学生たちが墓地からご先祖様の霊を乗せて仏さまのある各家をまわり、「ボンヅナ、ぼったらしょ、切れたら繋げ、じいさん、ばあさん乗せて来た」と唱えながら、その霊を降ろして行く。子供たちは、各戸で布施を受け取る。終了後ボンヅナは、金上との境にある電柱に左回りに巻き付けられて遺棄される。				
	72	行方市	②三和（金上）	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月10日に高貴神社で稲藁や麦藁を利用して大蛇を作り、12日に共同墓地の石組みに巻き付ける。翌13日の午後２時頃から夕刻にかけて、子供たちが墓地からご先祖様の霊を乗せて仏さまのある各家をまわり、ボンヅナを庭先に置いて「サンサのボンヅナ、切れたらつなげ、ジーサンバーサン乗せて来た」と唱える。子供たちは、各家で用意されたお菓子やお金を受け取る。集落をまわり終えると、最後は墓地に戻って、石組みに巻き付けて処分する。かつては河野勝雄さん宅の畑の溝に放置していたこともある。				
51	198	行方市	①内宿（上宿）	盆綱引き	○	仏迎え	—
		子供たちが、稲藁や麦藁等で大蛇を模って作り、綱をつけて８月13日の夕方墓に行って仏さまを迎える。「ジーサン・バーサン乗せて来た。」と唱えながら、仏さまのある各家を引きまわり、最後に綱を川に流したが、いつの間にかやらなくなってしまった。かけ声は、「ボンツナ、ボッタラ、ショキレタラツナゲ、ヂーサン乗せて来た。…」「ボンツナ、ボッタラショウ、ヂーサン、バーサン乗せて来た。…」「マゴ、ヒコ、ヤシャゴも乗せて来た。…」と連呼した時代もある。 〔参考文献〕小沼忠夫（1985）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
39	196	茨城町	①海老沢（本郷）	盆綱引き	○	仏迎え	—
		昭和40年頃、一時休止したが、その後再開して現在も存続している。８月13日の午後、大人を中心にボンヅナを編む。形は竜と考えられる。夕方、小学生の男女が、本郷十字路を起点にまず集落の南のはずれのお地蔵さまの前で、次に個人の墓の入口で、さらに共同墓地の前で、綱を振りながら「ホトケサマ、アガラッショ」と２～３回繰り返した後、各戸をまわる。子供たちは、「ワッショイ、ワッショイ」と声を掛けながら綱を抱えて歩き、各家に着くと綱を振りながら「ホトケサマ、オリラッショ」と３回繰り返す。鳥羽田地内の最後の家に綱を預けて、処分してもらう。終了後、親方が各家からもらったお金を、子供たちに配分する。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
		茨城町	②海老沢（海老沢）	不明	昭和40年代までか	仏迎え	—
		昭和40年代初頭頃は行われていた。ボンヅナは藁を被せて丸綱にしたもので、８月13日の晩にボンヅナをぶら下げて引きずって歩いた。各家に着くと、庭にボンヅナを引き入れた。仏を迎える意味があった。ボンヅナは、最後に川に流すか、道端や藪に放置することもあった。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
40		茨城町	宮ケ崎	不明	昭和40年代までか	仏迎え	—
		昭和40年代初頭頃は行われていた。ボンヅナは藁を被せて丸綱にしたもので、８月13日の晩にボンヅナを引きずって歩いた。仏を迎える意味があったようだが、各家での所作等は不明。ボンヅナの処理の方法は、焼却、墓地に納める、道端や藪に放置するなど、諸説ある。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
41		茨城町	網掛	不明	昭和40年代までか	仏迎え	—
		昭和40年代初頭頃は行われていた。ボンヅナは藁を被せて丸綱にしたもので、杉の葉を付けたとされる。８月13日の晩に、ボンヅナを引きずって歩いた。仏を迎える意味があったようだが、各家での所作等は不明。最後にボンヅナを川に流した。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
42		茨城町	神谷	盆　綱	令和元年まで	仏迎え	—
		ボンヅナは、径50㎝、長さ３ｍの大蛇型。胴体には鱗のようにスギの小枝を差し込むほか、持ち手を４か所に付ける。８月13日の夕方、墓地で３回回って「仏サン乗ラッショ　仏サン乗ラッショ」と唱え「ワッショイ　ワッショイ」のかけ声で駆け出す。各家では、前もって水を汲んで入口に置く。子供たちは、門口に焚かれた迎え火を足で蹴散らし、煙をくぐり抜けて屋敷に入る。庭では３回回って「仏サン　オジラッショ　仏サン　オジラッショ」と唱え、ボンヅナを大きく上下させる。最後はボンヅナを小川まで運んで、地面に叩きつけて解体してから、小川に流す。 〔参考文献〕更科公護（1967）、『盆行事Ⅳ』（2000）				
43		茨城町	秋葉	不明	昭和初期頃まで	不明	○
		注連縄状にもじった綱を用いて、８月14日及び15日の晩に、野曽（No.30）と同様に綱引きを行い、終了後は道端等に放置した。最後の頃は、小学校から運動会用の綱を借りて綱引きをするなど、簡略化された。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
44		茨城町	①木部（東）	不明	明治中期以前まで	不明	不明
		寺などで注連縄状にもじった綱を用いて、８月14日及び15日の晩に盆綱行事を行ったが、仏の送迎の意味合いや綱引きの実施については確認されていない。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
		茨城町	②木部（西）	不明	明治中期以前まで	不明	不明
		注連縄状にもじった綱を用いて、８月14日及び15日の晩に盆綱行事を行ったが、仏の送迎の意味合いや綱引きの実施については確認されていない。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
45		茨城町	飯沼（飯沼新田）	盆綱引き	明治中期頃まで	仏迎え	○
		ボンヅナは、三本撚りで両端が細く、中を径23㎝ほどに太くした長さ８～９ｍの注連縄状の綱。８月13日から15日にかけて、夕方綱の先を丸めてこれに小さな子供を乗せ、20人くらいで道路を引き歩いた。終了後は焼却した。 なお、大正初年に一時復活した際は、14日及び15日の晩に綱を引きまわした後、上宿と下宿に分かれて、ボンヅナの両端を持って引っぱり合った。終了後は焼却したらしい。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
46		茨城町	上飯沼・下飯沼	盆綱引き	明治末期まで	不明	○
		ボンヅナは、３束にした藁で径15～18㎝、長さ13～15ｍ程で、注連縄のようにもじる。８月13日の夜、上飯沼と下飯沼の集落内を引きまわすが、各家には寄らない。そして道路上で、ボンヅナを揉んだり、引っぱり合ったりする。仏迎えの伝承はない。最後は飯沼橋の上から涸沼川にボンヅナを流す。 〔参考文献〕更科公護（1967）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
32		茨城町	①大戸（上郷）	盆綱引き	明治末期頃まで	不明	○
		8月13日に子供と若い衆が藁を三本撚りにし、径6 ～ 7m、長さ12 ～ 15mのボンヅナを作る。13日から15日にかけて、「ワッショイ、ワッショイ」のかけ声で各家の庭まで行き、ぐるぐる駆け回る。さらに四辻などの広場で二手に分かれて綱引きをする。仏迎えの伝承はない。最後はボンヅナを打ち捨てる。 〔参考文献〕更科公護（1967）					
		茨城町	②大戸（下郷）	盆綱引き	日露戦争頃まで	不明	○
		上記の①大戸（上郷）を参照 〔参考文献〕更科公護（1967）					
33		茨城町	前田	不明	明治中期以前まで	不明	—
		ボンヅナは、径12 ～ 15cm、長さ12 ～ 13m。8月13日の晩に墓地へ仏さまを迎えに行く。14日及び15日晩にボンヅナを引き出し、提灯をともして各家の庭に引き入れ、綱の両端を持って地面を突いたり、引っぱり合ったりする。最後は綱を墓地に納める。 〔参考文献〕更科公護（1967）					
34		茨城町	谷田部	不明	明治中期以前まで	不明	不明
		8月14日及び15日に行われた。詳細については不明 〔参考文献〕更科公護（1967）					
35		茨城町	①上石崎（船渡）	盆　綱	平成26年まで	仏迎え	—
		ボンヅナは、かつては径25cm、長さ6 ～ 7mだったが、平成20年代には径12cm、長さ4m程。ボンヅナが出来上がると、昔は墓地の地蔵に巻いておいた。8月13日の晩に熊野神社から「仏さんの道は糸より細い、ワッショイ、ワッショイ、ワーゲンチョ」と言いながら、地区内を引きまわした。墓地の前では「お乗りなんしょ、おかけなんしょ」と言い、二回りして神社へ戻る。各家には寄らない。最後は、熊野神社の境内に納めた。 〔参考文献〕更科公護（1967）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
		茨城町	②上石崎（東永寺）	盆綱引き	昭和初年頃まで	仏迎え	—
		ボンヅナは、径9cmの引き綱を芯に、直径35 ～ 40cm、全長50m程。墓地の地蔵の頭に絡めておき、8月13日の夕方、40 ～ 50人の子供たちが「ヤッショイ、ヤッショイ」と引き出し、道路を引きまわす。各家には寄らないが、ボンヅナには仏さまが乗ってくると言われている。ボンヅナは16日に墓地に納めた。 〔参考文献〕更科公護（1967）					
36	196	茨城町	小堤	盆　綱	○	仏迎え	—
		ボンヅナは、昭和40年代には長さ3m、同60年代には6.6m程（昔は10mだったようだ）。8月13日の夕方、子供たちが墓地の地蔵の前にボンヅナを丸くして置き、1人ずつお辞儀をして「ナーマイダンボ、ジイノレ、バアノレ」と言ってボンヅナを抱えると、「ナーマイダンボ、ホートケサマキタヨ」と叫びながら各家をまわる。各家では、門に迎え火を焚き、縁先に仏さまが足を洗うための水を汲んでおく。この水にボンヅナの先を浸してから、縁に綱を打ち付け仏さまを座敷に上げる仕草をし、綱に付けてきた杉の小枝を1本置く。最後はボンヅナを墓地に埋める。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔（1973）、藤田　稔（1988）、嶋田　尚（1988）、『茨城町史』地誌編（1993）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
37		茨城町	①駒場（表方）	盆　綱	昭和30年頃まで	仏迎え	—
		ボンヅナは、表方・中町・後方が各々作るが、形は同じ。表方のボンヅナは、径20 ～ 30cm（中に棒を入れる）、長さは1.2 ～ 1.5m。20cm程の間隔で縄で縛る（かつては2mで、縄で49か所縛ることになっていた）。8月13日の夕方、子供たちがお地蔵さまの所へボンヅナを引いて行き、「仏さま早く乗らっしょ」と言い、新仏がある場合はその墓の土を一つまみボンヅナに乗せる。各家では迎え火を焚いて待ち、ボンヅナを庭に引き入れて「仏さま来ました」と唱える。最後はボンヅナを墓地に捨てる。 〔参考文献〕更科公護（1967）					
		茨城町	②駒場（中町）	盆　綱	昭和30年頃まで	仏迎え	—
		上記の①駒場（表方）を参照 〔参考文献〕更科公護（1967）					
		茨城町	③駒場（後方）	盆　綱	昭和30年頃まで	仏迎え	—
		上記の①駒場（表方）を参照 〔参考文献〕更科公護（1967）					
38		茨城町	南島田	盆　綱	平成24年まで	仏迎え	—
		昔のボンヅナは、藁と杉葉を持ち寄って作った径40cm、長さ10mのもの。8月13日の夕方、子供たちが「仏さま乗らっしょ」と唱えてからボンヅナを引き出し、各家をまわる。庭に入ると「ヤッショイ、ヤッショイ」と言って、ボンヅナの両端の引き綱を上下し、引っぱり合った後、「仏さま」だと言って杉葉を配る。最後にボンヅナを寛政川に流した。戦後は、径60 ～ 90cm、高さ90cmのものに杉葉をぎっしり付け、2.7mの真竹の棒を2本通して、4人で担いだ。13日の夕方、墓地へ行った後「ワッショイ、ワッショイ」と各戸をまわり、杉葉を配る。最後は、寛政川に流した。 〔参考文献〕更科公護（1967）、『茨城町史』地誌編（1993）、『盆行事Ⅳ』（2000）					

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
24	56	小美玉市	④下玉里（平山）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		ボンヅナは蛇型で頭部に角がついたもので、事前に大人が作製する。小学生と未就学児（年長児）が主体となるが、平成29年から女子も参加するようになった。８月13日の夕方、消防団機庫付近を出発。子供たちは白装束（Ｔシャツ、半ズボン、はちまき）で、小学生が綱を持ち、年長児が提灯を持って先導する。かけ声は「ホトケサマ、ゴーザッタ」。各家では庭先を回り、新盆の家では綱を座敷の縁側につけ、盆棚に向かって「ホトケサマ、ゴーザッタ」と声をかけながら綱を３回叩きつけ､仏さまを送り届ける。15日の夕方､「ホトケサマ､オモドリダ」と声をかけながら家々をまわって仏さまを乗せ、消防団機庫付近に戻る。ボンヅナは焼却した時期もあるが、現在は霞ケ浦に流している。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）､『玉里村史』後編（1975）､『玉里村民俗誌』（1998）､『玉里村の歴史』（2006）				
	194	小美玉市	⑤下玉里（田畑・橋下）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		お盆前の土・日曜日に、大人を中心に藁で蛇を模ったボンヅナを作る。目はホオズキを、角は柿の枝を用いる。８月13日の夕方、小中学生が高内稲荷大明神を発着点として、地区内をまわる。かけ声は「ヤーサ、ボンサ、仏さま、降りらっせ」。各家に仏さまを送り届けると、子供たちは小遣いや菓子をもらう。15日は同大明神を発着点として仏さまを送る。この時は「ヤーサ、ボンサ、仏さま、乗らっせ」とかけ声をかける。 〔参考文献〕藤田　稔（1988）､『玉里村の歴史』（2006）				
25		小美玉市	栗又四ケ（辻）	盆　綱	平成28年まで	仏の送迎	—
		盆が近づくと、竜形をしたボンヅナを作る。年長の小学生を中心に稲藁や縄を持ち寄り、青竹などを芯に入れて補強し、藁で頭部を太く、尾を細く作る。長さは人数に合わせて５～10ｍ程度で、縄を固く巻き上げてゆく。また、草履で舌を作り、口を開き、長く垂れるひげなども工夫した。ゆずの枝を角とし、なすやほおずきの目などを取り付けると完成である。８月13日の夕方は、各家で仏さまを待っているので、なるべく早く盆提灯に明かりを灯して出発する。子供の数の減少に伴い、中学生や女子、幼稚園生を加えた。身長の高い者を先頭にボンヅナをかつぎ、各家の門口近くで､「仏さま乗らっせー」と唱える。 〔参考文献〕『玉里村の歴史』（2006）				
26	195	小美玉市	上馬場	盆　綱	○	仏迎え	—
		ボンヅナは竜を模ったもの。長さは､綱を引く子の数によって決まる。1990年代のものは､太さ15㎝､長さ３ｍほど。頭部は左綯いで三本撚り。引き手の人数分の引き綱を付ける。綱が完成すると、子供たちが共同墓地まで引いて行き、自分の家の墓の方向に引き綱を向けておく。８月13日の夕方、子供たちが無言で墓まで行き、家の墓に向かって「仏さん、のーらっしょ」とかけ声をかけ、盆綱引きが始まる。各家の庭先で「仏さん、めーらした」のかけ声で、綱を左回りに２、３回すごい勢いで回す。その後一斉に綱を高く上げると、一気に地面に叩きつける。このように、30軒を約２時間がかりでまわる。最後にボンヅナは、鎮守社脇の「たけこま」といわれる武熊山神前寺跡に置かれる。 〔参考文献〕『美野里町史』下（1993）､『茨城県の祭り・行事』（2010）				
27	195	小美玉市	中台	盆　綱	○	仏迎え	—
		８月13 日、ボンヅナは竜を模ったものだが、長い引き綱はない。引き手は中学生までの男女。100年以上前から行われる行事で、以前は男子だけだったが、昭和40年代に女子も加わった。公民館脇の墓地で「仏さまめらっせた」と唱えながら時計回りに３回回る。地区内をまわる順、経路は毎年同じである。各家に着くと、今度は反時計回りに２～３回回りながら「仏さまめらっせた」と何度も唱える。子供たちは各家から心づけをもらうが、新盆の家は額が大きいという。終了後、ボンヅナは墓地に置かれる。 〔参考文献〕『美野里町史』下（1993）､『茨城県の祭り・行事』（2010）				
28	64	茨城町	南川又	盆綱引き	○	仏迎えか	—
		８月13日の午前中、南川又農村集落センターでボンヅナを作る。以前は、径15㎝、長さ５ｍ程だったが、1990年代から長さ３ｍ程度となり、竹を芯として荒縄を巻きつける。同日夕方、小学１年から中学２年の男子が、ボンヅナを引きずったり持ち上げたりして､「ワッショイ、ワッショイ、ワッショイ」と叫びながら、綱を地面に叩きつけて各家をまわる。終了すると、ボンヅナをセンター脇の阿弥陀堂の前に置く。仏迎えの伝承はないが、類似例から仏迎えではないかとする見解もある。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）､更科公護（1967）､今瀬文也（1972）､藤田　稔（1973）､嶋田　尚（1988）､『茨城町史』地誌編（1993）､『盆行事Ⅳ』（2000）､嶋田　尚（2001）､『茨城県の祭り・行事』（2010）				
29		茨城町	南栗崎	盆　綱	平成28年まで	仏の送迎	—
		ボンヅナは径15～18㎝。藁の端を竜のウロコのように出し、長さは5.5ｍ程。８月13日に、集落を西から東へボンヅナを引き出す。16日は送りで、東から西へ引き出すが、新盆の家には寄らない。31日の盂蘭盆でも引いて歩く。 〔参考文献〕更科公護（1967）､『茨城町史』地誌編（1993）､『茨城県の祭り・行事』（2010）				
30		茨城町	野曽	盆綱引き	明治中期以前まで	不明	○
		８月13日に子供たちが藁を集めて、鎮守様の境内で若い衆の協力を得て径15～18㎝、長さ10～13ｍのボンヅナを作る。14日及び15日の晩に、鎮守様の馬場で双方に分かれて綱引きをする。仏の送迎や年占いの意味合いはない。最後はボンヅナを鎮守様に納めて終了となる。 〔参考文献〕更科公護（1967）				
31		茨城町	越安	盆　綱	昭和20年頃まで	不明	○
		８月14日及び15日に、ボンヅナを引きずり、綱引きをする。 〔参考文献〕更科公護（1967）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
20	42	小美玉市	中延（立延）	盆　綱	○	仏迎え	—
		8月13日の午前8時頃から、立延修善院の境内で大人たちがボンヅナを作る。青竹を芯として荒縄を撚り、龍の胴体部分を肉付けして綱を仕上げる。縄の結び目は地区の戸数を表している。長さは10m前後で頭部を太くする。完成後、子供たちが綱を担いで共同墓地まで移動し、そこに安置する。午後5時すぎ、子供たちが墓地からボンヅナを担ぎ出し、各家をまわる。かけ声は世代によって異なるが、令和2年は「ワッショイ」と叫んだ。家に着くと、綱を空中に放り上げたり（「もむ」）、綱を担いだまま土足で座敷に駆け上がったりして、仏さまを送り届ける。以前は、大豆の葉で作ったムカデのような子ボンヅナを編んで、各家に置いて来たこともあったという。行事が終わると、ボンヅナは修善院の軒の下に1年間取り置かれ、翌年ボンヅナを作製した後、燃やされる。 〔参考文献〕藤田　稔（1973）、『小川町史』上巻（1982）、『ふるさとものがたり』（1984）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（1989）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
21	192	小美玉市	①小塙（1・2班）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		8月13日の午後、大人たちを中心として注連縄状のボンヅナを2本作り、これを1・2班及び3・4・5班で使用する。両班とも、完成したボンヅナを共同墓地でそれぞれ一時保管し、夕方、小中学生の男女が引き綱を持って各家をまわる。かけ声は、両班とも「トーセンヤラ、エンヤラエン」、家の入口で「ホートケサマ、オリラッショ」。 また、8月15日には各家の縁先で「ホートケサーマ、ノーラッショ」と言いながら、縁の敷居に綱をぶつける。終了後は、両班とも綱を墓地に放置する。				
	192	小美玉市	②小塙（3・4・5班）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		上記の①小塙（1・2班）を参照					
22	50	小美玉市	下馬場	盆　綱	○	仏の送迎	—
		8月13早朝、大人と小学3年から中学3年までの男女が下馬場公民館に集まって、長さ3.2m、太さ18cmのボンヅナを作る。完成後は、隣接する共同墓地の塚に、カシラを南に向けて巻き付けておく。午後4時に公民館に集合した子供たちは、墓地の塚の周りで、年長者の「シャンシャンシャン、シャシャシャンシャン」という声に続いて「乗らっせ、乗らっせ、仏さま乗らっせ」とかけ声をかけて、仏さまを綱に乗せると、綱を持って約60戸を5時間程かけてまわる。各家では、綱を前後に揺らしてリズムを取りながら、「オジラッセ、オジラッセ、仏さまオジラッセ」を2回繰り返した後、綱を座敷に投げ入れる。家人は謝金を渡すが、新盆の家では通常より多く渡すという。仏さまがいない家は、訪問するものの、綱を投げ入れることはしない。終了後は綱を墓地の塚に巻き付けておく。 15日は午後5時頃、共同墓地に集合し、13日と同じ順路で4時間かけて集落内をまわる。各家でのかけ声は、「乗らっせ、乗らっせ、仏さま乗らっせ」。最後に共同墓地では「オジラッセ、オジラッセ、仏さまオジラッセ」を繰り返し、綱を塚に巻き付けて終了となる。綱はそのまま放置され、数日後大人たちが焼却する。昔は、霞ケ浦に流したという。 〔参考文献〕『盆行事Ⅳ』（2000）				
23	193	小美玉市	①川中子（鮒内・川端）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		ボンヅナは、市販の綱を大人たちがよじって竜型に作る。上顎、下顎、髭2本と舌がある。8月13日、小学生の男女が鮒内13軒、川端21軒をまわる。鮒内共同墓地から地区東端の個人宅まで「ワッショイ、ワッショイ」「ホートケサマ、オーラッセ」と叫びながらまわり、ボンヅナは個人宅で保管する。15日は「ワッショイ、ワッショイ」「ホートケサマ、ノーラッセ」と叫び、13日とは逆回りで墓地まで行く。最後は、ボンヅナに火をつけて園部川に流す。 〔参考文献〕『玉里村の歴史』（2006）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
		小美玉市	②川中子（火の橋・城之内）	盆　綱	昭和50年代まで	仏の送迎	—
		詳細については不明 〔参考文献〕『玉里村の歴史』（2006）、『茨城県の祭り・行事』（2010）					
24		小美玉市	①下玉里（岡・帯阿井）	盆　綱	平成29年まで	仏の送迎	—
		盆が近づくと年長の小学生を中心に、稲藁や縄を持ち寄って竜形のボンヅナを作る。藁で頭部を太く、尾部にいくに従って細く作り、大体6 ～ 7m程の長さとする。頭部には角として柚子の木のとげのある枝を付け、目にはホオズキ等を入れる。8月13日の夕方、盆提灯を持って綱を担いで各家をまわるが、門口近くになると「仏さま乗らっせー」と唱え、庭先では「仏さま降りらっせー」という。仏霊を竜に乗せて迎えてくるという意味で、一同に御駄賃が与えられ、特に新盆の家では金額が多い。15日は霊を送る目的で、庭先で霊を乗せ、門口辺りで降ろす意味の言葉を唱えて再び多少のお金をもらう。このお金は年長者が一同に配分し、余った分を花火等を買う資金とする。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、『玉里村史』後編（1975）、藤田　稔（1988）、『玉里村の歴史』（2006）				
	193	小美玉市	②下玉里（根玉里）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		お盆前の土・日曜日に、大人を中心に小学生の男女が手伝って、藁で竜を模ったボンヅナを作る。ただし、目や角はない。8月13日夕方、小学生と中学1年生がボンヅナを担いで、「ヤーサ、ボンサ、ホトケサマ、オチラッセ」と声をかけながら各家をまわり、小遣いや菓子をもらう。15日に仏さまを送った後は、ボンヅナを古墳に納め、自然に朽ちるのを待つ。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、『玉里村民俗誌』（1998）、『茨城県の祭り・行事』（2010）				
	194	小美玉市	③下玉里（大井戸・共栄）	盆　綱	○	仏の送迎	—
		ボンヅナは、事前に大人が蛇を模して藁で作る。頭部や口はあるが、角はない。8月13日、子供たちは白装（Tシャツ、半ズボン、はちまき）で、小学生が綱を持ち、年長児が提灯を持って先導する。中学生（1年）は顧問的立場で同行するが、綱には触れない。各家をまわる際、綱を地面に叩きつけて先祖を綱から降ろす。綱は巡行する過程で、壊れた方が縁起が良いとされている。15日に仏さまを共同墓地に送り届けた後、綱を焼却し、子供たちは花火で遊ぶ。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、『玉里村史』後編（1975）、『玉里村民俗誌』（1998）、『玉里村の歴史』（2006）				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
13	190	笠間市	仁古田	盆　綱	○	鎮魂か	—
		８月13日、子供たちが大人３人に手伝ってもらい、ボンヅナを作る。ボンヅナは長さ約５ｍ、径30㎝。３束の藁で３本撚りとし、ヒゲを出してもじる。引き綱として両側に３ ～ ４ｍの縄をつける。翌14日、日が暮れてからボンヅナを持って「ヤッショイ、ヤッショイ」と声をかけながら各家をまわり、仏さまをおろすと、家の庭で地面を叩いたり、綱を引っぱったり（綱引き）する。最後は涸沼川に綱を流す。昭和40年代には、仏迎えの言い伝えはなかった。鎮魂か。 〔参考文献〕更科公護（1967）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）				
14	190	笠間市	大古山	盆　綱	○	仏迎え	○
		平成25年以降、市販の綱を使用していたが、令和元年に手作りの綱が復活した。子供たちが事前に集めた藁を、数日間水をかけながら干し、８月13日にこれを用いて、約５ｍのボンヅナを作る。本来、子供たちがボンヅナを持って各家をまわるが、令和元年は新盆の家に立ち寄ったのみ。そこで綱引きを行うが、目的は不明。かけ声は、歩く時は「ワッショイ、ワッショイ」、綱引き時は「１、２、３」。綱は薬師堂に奉納し、後日焼却する。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）				
15	191	小美玉市	①佐才（１班）	盆　綱	○	仏迎え	—
		ボンヅナは、竹に縄を巻きつけたもの。８月13日の夕方、小中学生の男女が共同墓地で「乗りらっしょ乗りらっしょ、ホトケサマ乗りらっしょ」と声をかけ、ボンヅナに仏さまを乗せてから各家をまわる。各家では「ホトケサマ連れてきた、ホトケサマ連れてきた。降りらっしょ降りらっしょ、ホトケサマ降りらっしょ」と言って、仏さまを降ろす。最後は共同墓地に戻る。 〔参考文献〕『盆行事Ⅳ』（2000）				
	191	小美玉市	②佐才（２班）	盆　綱	○	仏迎え	—
		ボンヅナは、稲藁を竜の形に編んだもの。８月13日の夕方、小学生の男女が共同墓地でボンヅナに仏さまを乗せて、各家で降ろす。墓地では「ホートケサーマノセテキタ、ノーラッショ、ノーラッショ」、各家では「ホートケサーマノセテキタ、オーリラッショ、オリラッショ」というかけ声をかける。最後は共同墓地に戻り、ボンヅナを焼く。 〔参考文献〕『盆行事Ⅳ』（2000）				
16		小美玉市	飯前（前原）	盆　綱	平成30年まで	仏迎え	—
		４ｍのボンヅナの両端に引き綱をつけ、８月13日に子供たちが綱を引きずりながら各家をまわり、各戸の門口で「ホトケサマ、オリラッセ」と言う。各家では門口に迎え火を焚いて仏さまを迎える。終了後、ボンヅナを墓地に納める。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、嶋田　尚（2001）				
17	191	小美玉市	①野田（隠谷東組）	盆　綱	○	仏迎え	—
		隠谷地区８組のうち、東一・二組が合同で盆綱を行っている。８月13日朝７時より、大人たちが長さ２ｍ弱、径20㎝程の龍型の綱を作る。綱には、ナスの角、ホオズキの目、トウモロコシの葉の舌を付けるが、巡行の途中で子供たちが自由に装飾する。綱が完成すると、田村総本家（東一組）の墓まで綱を運ぶ。同日の午後、子供たちが田村総本家の墓に集まる。墓で仏さまを綱に乗せる時に「ノリラッショイ、ノリラッショイ、ジッチャン、バッチャン、ノリラッショイ」と言い、２ ～ ３周回る。巡行する際、各家の前に差しかかると「仏さまをお連れしました」という意味の声かけをする。各家では、仏間に綱全体を乗せて「オリラッショイ、オリラッショイ、ジッチャン、バッチャン、オリラッショイ」と声をかける。こうした所作を繰り返し、最後の鏑木家を終えると、その近くの林に綱を投げ捨てる。				
		小美玉市	②野田（隠谷南組）	盆　綱	平成20年代中頃まで	仏迎え	—
		南組の盆綱は、平成20年代の中頃に中止となった。					
18	192	小美玉市	①川戸（１・２班）	盆　綱	○	仏迎え	—
		８月13日に真弓神社にて、子供たちが束ねた藁を大人たちが編んでボンヅナを作る。夕方、子供たちが共同墓地内を「ホーケサマ、ノーラッショ」と唱えながら、左回りで３周する。各家では「ホートケサマ、ノセテキタ」と繰り返し唱え、家の壁（玄関脇か縁側脇）をボンヅナの先端で叩く。最後は、鎌田川の橋に括り付けて終了する。				
	192	小美玉市	②川戸（３・４班）	盆　綱	○	仏迎え	—
		８月13日に大人たちが、個人宅で竜を模したボンヅナ（頭部、髭あり）を作製する。夕方、子供たちが共同墓地から綱を引き出す。各家では、盥に水を入れて用意する。最後は鎌田川の橋にボンヅナを括り付けて終了する。					
19		小美玉市	倉数（田幡）	盆　綱	昭和50年代まで	仏迎え	—
		倉数地区田幡は、昭和50年当時、約20軒で構成されていた。盆綱に参加したのは、小学３ ～ ６年生の男子のみだったが、当時15名程いた。ボンヅナは、長さ約３ｍ、直径30㎝程で、大人たちが竹の芯に藁を差し込み、頭部にナスと子供用の盆提灯を挿して、目と角とした。尻尾はないが、本体に人数分の縄を結んで持ち手とし、子供たちはボンヅナを引きずって運んだ。８月13日の午後５時頃、共同墓地の各家の塚から土を取り、ボンヅナの藁の中に入れてから墓地を出発した。墓地から最も近い家から各家をまわり、最後の家までまわり終えると、近くの梶無川にボンヅナを投げ込んだが、翌朝、大人たちがボンヅナを回収した。				

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
5		水戸市	赤尾関町	盆　綱	昭和40年代頃まで	無病息災か	—
		8月13日、春日神社で大人たちが藁を編んで綱を作る。綱は全長5ｍ以上もあり、綱の途中に持ち手となる数本の細い綱が、枝のように伸びている。農家の若者らで構成される青年団が中心となって、13･14日の晩に行事を執り行う。綱本体は青年団が持ち、前述の細い綱を子供たちが持って町内の全戸（50戸ほど）をまわる。大人と子供を合わせると、一度に20 ～ 30人ほどが綱を持つことになるが、細い綱にはほとんど重みがかからず、触っているだけの場合もある。綱を揉みながら各家をまわったともいわれる。無病息災や豊作祈願といった意味合いを込めて行う。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）				
6		水戸市	内原町	盆　綱	昭和30年頃まで	不明	不明
		青年団が中心となって実施した。8月15日に鹿島神社（龍神様）で青年団の2 ～ 3人が太い縄を作り、先に棒と綱をつけて近所を練り歩いた。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）					
7		水戸市	鯉淵町（播田実）	盆綱揉み	不　明	不明	不明
		詳細については不明 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）					
8		水戸市	①五平町（万蔵寺）	盆　綱	昭和23年頃まで	仏迎えか	○
		8月13日の夜、ムカデ型のボンヅナ頭部の引き棒を力の強い子供2人が持ち、他の子供たちは胴体に付けた引き綱を持つ。また、提灯を持つ子供4 ～ 5名が付き添う。ボンヅナは、長さ9ｍで頭部が太く尾部が細い。「ワッショイ、ワッショイ」とかけ声をかけながら、事前に寄付をくれた各家に駆け足で行き、庭を4 ～ 5周回って「ワァー」という声をあげる。8月14 ～ 16日の晩は、かけ声をかけて大道を引いて歩き、若衆が盆踊りをしている中に突入し、悪口を言い合い、若衆が尾部を、子供たちが頭部を持って綱引きをする。終了後は、墓地近くの鎮守の境内の馬捨場にボンヅナを捨てる。毎年、②の五平町（犬塚）とけんかになったという。仏さまを迎える伝承はなかったという説もある。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、更科公護（1967）、今瀬文也（1972）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）、『内原町史』民俗編（1997）、『盆行事Ⅳ』（2000）、嶋田　尚（2001）				
		水戸市	②五平町（犬塚）	不明	不　明	不明	不明
		詳細については不明。毎年、①の五平町（万蔵寺）とけんかになったという。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）					
		水戸市	③五平町（下遠田）	不明	不　明	不明	不明
		詳細については不明。平成10年頃は実施していたが、子供の数が少ないので、規模が縮小していた。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）					
9		水戸市	小林町	盆綱ひき	不　明	不明	不明
		昔、盆の3日間の最初の日、3人が輪になってボンヅナを作った。綱にする藁は、子供たちが各家からもらって来る。藁は、1束を3本に分け、左回しに捩じりながら作った。ボンヅナは直径10㎝以上の太いもので、大人に手伝ってもらうこともあった。次の日の夜、子供たちがボンヅナを引きながら各家をまわり、最後の2晩だけ各家から小遣いをもらった。集めたお金は、子供たちの親方が3分の2ぐらいもらってしまったという。ボンヅナは小川に流した。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）				
10	34	笠間市	池野辺（倉作）	倉作の盆綱	○	豊作祈願	○
		8月13日午後6時前に、住民たちが集落内の広場に藁束を1束ずつ持参し、縄作りが始まる。縄は三つ編みで、長さ10m程度、太さは20 ～ 30㎝を目安とする。約1時間で縄が完成すると、東西に分かれた親子が2 ～ 3回引き合う。勝敗をつけることはないが、引き合うことによって、9月の嵐を避け、豊作を祈願するといわれている。 〔参考文献〕『茨城県の祭り・行事』（2010）				
11		笠間市	小原（滝川）	盆　綱	終戦直前まで	仏迎え	○
		8月（盆の何日かは不明）区長の家でボンヅナを作る。大声で賞詞を唱えながら各家を持ち歩く。終わると綱引きをする。隣の集落と悪口を言い合い、喧嘩になることもあるという。最後は、ボンヅナを川に流す。 〔参考文献〕藤田　稔（1964）、藤田　稔（1973）、嶋田　尚（1988）				
12	38	笠間市	①五平（内郷）	盆　綱	○	不明	—
		3地区（内郷･西内郷･飯田）に分かれて、いずれも8月13日及び14日に実施する。内郷では、藁の確保が難しくなったことから、購入した綱を用いる。小学生の男女が、各自お手製の行燈を持って歩く。高山神社で3周左回りして出発。歩きながら「わっしょい、わっしょい…わー」というかけ声をかけるが、各家では黙々と3周左回りし、おひねりをもらう。五平公民館が終点となる。なお、かつては14日の巡行後、最後の家の庭で綱引きを行った。					
		笠間市	②五平（西内郷）	盆　綱	○	不明	—
		上記の①五平（内郷）を参照					
		笠間市	③五平（飯田）	盆　綱	○	不明	—
		上記の①五平（内郷）を参照					

茨城県内の盆綱実施状況一覧

No.	頁	市町村名	地　区　名	名　称	実施状況	目　的	綱引きの実施
1		水戸市	全隈町	盆　綱	昭和５年以前までか	不明	不明
		詳細については不明 〔参考文献〕今瀬文也（1972）、『盆行事Ⅳ』（2000）					
2		水戸市	①有賀町（中区）	盆　綱	平成27年まで	仏送りか	―
		ボンヅナは動物を模ったものではないが、先頭は太く、末尾方向が細くなる。本体の節々に、子供たちの持ち手となる細縄を付けた。実施日は８月13・14・15日の３日間。昔は、有賀神社を起点、慈眼寺を終点としたが、後に盆綱の指導者宅を集合・解散場所とした。13・14日は、区内中心部を１周するだけで各戸を訪問しないが、15日には各戸の庭先まで入って綱の上げ下げを行った。かけ声は、道中では「ワッショイ」、各戸の前では「上げろ、下げろ」。翌16日に綱を桜川に流して祖霊を送ったが、迎え盆は各戸で墓地に行くので、盆綱に祖霊を迎えるという意味はなかった。区内の子供が少なくなり、子供会が解散したため、平成27年をもって休止した。					
		水戸市	②有賀町（北区）	盆　綱	Ⅰ昭和38年頃まで Ⅱ平成元年頃から20年頃まで	厄払い	―
		Ⅰ　お盆の２～３日前、集落センターに藁を持ち寄り、大人たちが綱を編む。綱は直径10cm、全長２m50cmほど。綱本体に持ち手となる細い綱を付ける。綱を丈夫にするため、芯に自前で縒った縄を入れることもある。 お盆の夕方、集落センターに子供たちが集まり、藁綱を持って北区の全戸（26戸ほど）をまわる。綱を持てるのは、小・中学生の男子のみで、大人は随行するだけ。盆飾りのある奥座敷に仏さまが滞在していると考え、その前庭で藁綱を地面に落とすように叩きつけて音を出す。特に掛け声は決まっていない。数戸が集落から500mほど離れた場所にあるため、子供たちは綱を持って徒歩で移動する。全戸をまわり終えるまで、約１時間かかる。これを８月13・14・15日の毎日実施する。15日の巡行が終わると、藁綱を川に流す。盆綱に厄払いの意味合いがあるため、厄を洗い流すようなイメージである。各戸から金銭を貰い受け、15日に子供たちに分配する。年長の子供が頭割りで計算すると、１人10～20円程になった。昭和38年頃、地区の子供が少なくなり、実施しなくなった。 Ⅱ　平成元年頃、子供会の運営資金繰りが苦しくなった際、盆綱で寄付のような形で資金を集めてはどうかという話となり、以前参加していた小中学生の親の世代が中心となって盆綱を復活させた。この頃から、男子に限らず、女子も含めた地区内の小学生全員（子供会）が参加した。「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声にあわせて、藁綱を地面に叩きつけた。集落から離れた数戸までは、トラックに綱を載せて移動した。実施するのは13日のみ。巡行が終わると、集落センターで藁綱を燃やした。子供たちにはジュースやお菓子が振る舞われたが、集まった金銭は子供会の資金に充てられた。平成20年頃、子供会の子供が少なくなり、実施しなくなった。					
		水戸市	③有賀町（南区）	盆　綱	不　明	―	―
		平成10年頃は、子供会が中心となり、盆の14日に盆綱を実施していた。この時、各家からご祝儀があり、子供会の貴重な財源となっていた。 〔参考文献〕『内原町史』民俗編（1997）					
3		水戸市	①杉崎町（大坪）	盆　綱	昭和16年まで	不明	時々あり
		杉崎町には上町・中町・下町・大坪の字があり、このうち中町と大坪で盆綱を行っていた。以下は大坪の詳細である。旧盆の明けた頃、盆綱に参加する小学生男子が各家から前年の稲藁を持ち寄り、高学年の指導のもと子供だけで１日かけて綱を編む。綱はワニか竜の頭のような形をしており、直径20cm強、長さ10m、細縄を数か所に取り付けて把手にする。何日かは不詳だが、綱を編んだ後日、小学生男子が村の中心あたりに集まる。集合時間や場所は明確に決めていなかったが､夕方頃集合する。参加しない子供は仲間外れにされてしまう。高学年のいわゆる「ガキ大将」がリーダーとなり、広い道を通って村を１周する。各戸の敷地には入らず、ただ練り歩く。綱は持ち上げずに地面を引き摺るため、作りが緩いと途中で解けてしまうこともあった。決まったかけ声はない。集合場所と解散場所は同じである。 翌日も同じ時間に集まり、同じような行程を何周かする。２日目になると、中町か大坪か、どちらかの綱がバラバラに解けてしまう。健全な方の綱が杉崎町の代表として、隣の中原町の綱と町境で張り合う。この時、大体は言い争いのような形となるが、年によっては、相手の綱をバラバラにするために綱引きを行うこともあった。 太平洋戦争の開戦に伴い、高学年から戦時動員に駆り出され、教えてくれる人がいなくなったため途絶えた。					
		水戸市	②杉崎町（中町）	盆　綱	不　明	不明	不明
		詳細については不明。上記の①杉崎町（大坪）を参照					
4		水戸市	中原町	盆　綱	昭和33年頃まで	―	時々あり
		盆が近くなると、小学校高学年の男子が町内の農家から藁を集め、特定の個人宅（年代によって変遷あり）に大人３名が集まってその藁で綱を作る。綱作りに子供は参加しない。綱は長さ３間程で、先頭が太く、尾部が細い。把手として、先頭には竹、所々に２m程の細縄を取り付ける。飾りはなく、何らかの動物を模ったという認識はなかった。 ８月13日の夕方、小学生男子が中原不動尊に集まり、綱を引きずりながら町内をまわる。６年生を先頭に、下級生は順に後方に並ぶ。各家の庭に入って行き、「ワッショイ」のかけ声とともに綱を持ち上げて地面に叩きつける。これを「ボンヅナ揉み」と呼び、悪霊払いや五穀豊穣の意味があった。住人からはお菓子やお金をもらう。140戸程あるため、この日だけでは町内をまわり切れず、一度解散する。翌14日の夕方、同様の方法で残りの各家をまわる。まわり切ると中原不動尊に戻り、青年会が綱を燃やす。また、各家からもらったお菓子やお金を分配して解散する。					

第五章　盆綱関係資料

三村のジャーノメと木製の頭部について

石岡市三村には、ジャーノメと称される、盆綱行事にかつて使われていたとされる頭部が四体保管されている（**写真1**）。うち一体は吹上集落（ア）のもので、二体は諸士久保集落（イ）（ウ）、一体は今泉集落（エ）にて用いられていたものであり、後者三体は現在常春寺に保管されている。いずれも、木製であり上顎を含む頭部と下顎との組み合わせとなっている。以下、形状を解説する。

・木製頭部の形状

（ア）吹上集落で用いられていたとされるもので、長さ四十八cm、幅十九cm、高二十cm、重量一三四九グラムで最も大きい。全体は竜をイメージした形状で鼻孔が大きく二本の角があり、彫り込まれて丸みがある。全体はベンガラで赤色に彩色され、口の中は金色に塗られている（**写真2**）。

（イ）諸士久保集落で用いられていたとされるもので、長さ三十四cm、幅十四cm、高十六cm、重量一〇七六グラムである。これも竜をイメージした形状で棕櫚の繊維で髭や眉、角などが飾られている。ベンガラで赤色に彩色されている（**写真3**）。髭は彫刻に黒の彩色で表現される。

（ウ）同じく諸士久保集落で用いられていたとされるもので、やや小ぶりであり、長さ三十二cm、幅十五cm、高さ十五cm、重量一二八一グラムであり同じくベンガラで彩色されている。同じく竜をイメージした形状であるが、形状は（ア）、（イ）に比較して素朴であり棕櫚の繊維で髭やと眉が飾られている。鼻が前方に向けて大きくなり鼻孔が広がっている（**写真4**）。

（エ）今泉集落で用いられたとされるもので、長さ三十五cm、幅十五cm、高十四cm、重量一〇八九グラムである。二本の角を持ち黒く彩色されているが、傷の死下から赤色が見える。口の周りに白く髭が描かれ口中は銀色に彩色されている。角張っており、鼻の形状は（ウ）と類似している（**写真5**）。

いずれも記銘がないため印象にすぎないが、（ア）（イ）が今日的な竜のイメージに基づいているのに対して、（ウ）は木質の状態も古く素朴な印象を受ける。（エ）は（ウ）と類似するがより平面的な形状である。

・ジャーノメの概要

三村では、十四集落からなり、昭和三十五年頃まで各集落で盆綱を行っていた。ボンツナの形状には集落により違いもあった様で、吹上集落では三本の綱を縒って、子供が多い時期では七mから十mある一本の綱として、それに木製の頭部をつけた。他の集落ではボンゾナの芯として三mから四mの竹を用いる場合もあった。吹上集落では、六坪ほどのバンタゴヤ（共同墓地に設けられた小屋で仏像が安置されていた）の前でボンツナを造った。迎え盆である八月十三日の夕刻に共同墓地（ウエとシタの二カ所があり、古い墓地であるウエから出発する）の近くから子供たちが担いで出発し、「ボンセーヤンセ、ホトケサンノーリャンセ」のかけ声のもと墓を三周し、それから全戸を回った。ボンツナの前後には長い竹竿の先に提灯を下げたチョウチンが二名づつついた。各家では盆棚が設けられた座敷の畳の上にボンゾナの頭を乗せて「オリリャンセ」と声を掛けて先祖を降ろした。十五日の送り盆では、迎え盆で最後に訪れた家にボンゾナを運び「ホトケサンノーリャンセ」と声を掛けて共同墓地（ウエ）に運んで「オハカノーリャンセ」の言葉で先祖を送り出した。使い終わったボンゾナは、そのまま共同墓地横のダンチ（段地、未耕作の畑）に置いた。

・木製の頭部についての考察

茨城県下の盆綱行事ではボンゾナの頭部は、藁などで竜や蛇を模した形状のものが作られるか、あるいは頭部にあたるものは特には作らない例が殆どであり、三村の木製頭部は例外的な事例と言える。総説でも指摘したが、その形状は竜をイメージしたものであるが、（ウ）に見られるような大きく開いた鼻孔などの形状は三匹獅子舞であるササラの獅子頭の形状も連想させる。三村の吹上集落においてもかつて三村吹上ササラが行われており、その形状を参考にした可能性もあるかと思われる。いずれにしても、木製の頭部を用いるボンゾナの事例として貴重なものであると言える。

（徳丸　亞木）

写真２　（ア）吹上集落で用いられた頭部

写真１　４体の木製頭部

写真３　（イ）諸士久保集落で用いられた頭部

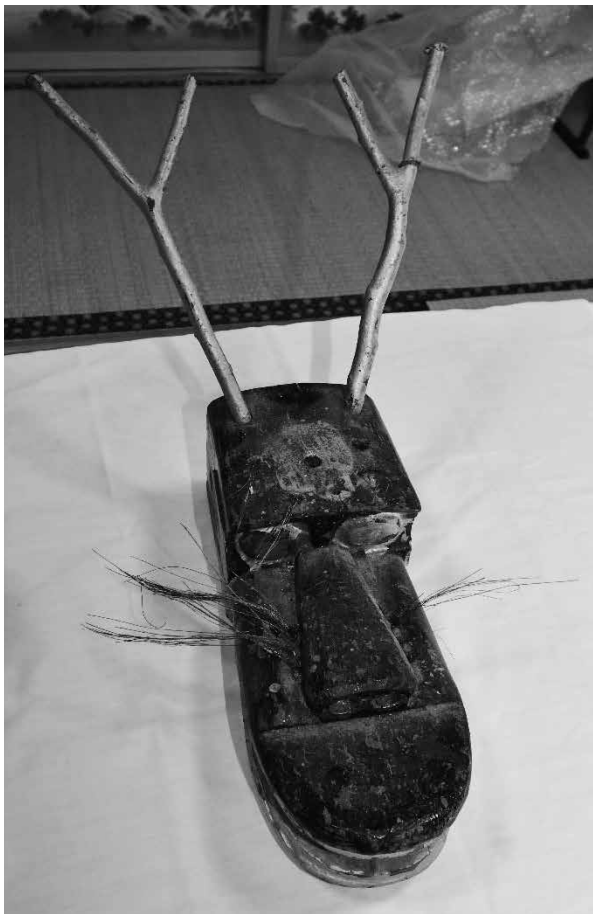


写真５　（エ）今泉集落で用いられた頭部

写真４　（ウ）諸士久保集落で用いられた頭部

実測図

図1　立延（小美玉市中延）のボンヅナ　茨城県立歴史館所蔵

詳細調査報告三、小美玉市指定無形民俗文化財として知られる立延のボンヅナである。茨城県立歴史館に昭和四十年代に収蔵された。本資料は長さ八メートルを超えるが、現在作成されているのは五メートルほどである。

ボンヅナの芯となる部分に肉付けをするようにして束ねた藁を添えながら形を整え、荒縄を二回り巻いて縛り、俵結び（男結び）できつく締めている。この荒縄本数を迎える仏さま（地区内の仏壇のある家の数）と同じ数にする点が、立延のボンヅナの最大の特徴である。結び目が仏さまの乗る場所（座席）になるともいわれる。

頭には先端を細くして注連縄状に編んだ角を二本並べて縛りつける。角は後ろへ反るようにして丸みをもたせている。目玉は本来ナスでつくるが、本資料は博物館資料として展示活用されたため、模造品をとりつけている。

立延のボンヅナは肩で担がれ持ち運ばれる。竹を芯にして、藁を直線的に束ねている形状は、子供たちが並んで肩に担ぐ際には適している。また、庭では天に向かって三回投げ上げたり、家によっては座敷の盆棚に向かって投げ入れられたりする。屈曲しやすい綱ではないため、そうした所作にも十分に適応することができる。その一方で、曲げたり折りたたんだりできないため、墓地などの狭い場所では取り回しに苦労をすることもある。

図2　平山（小美玉市下玉里）のボンヅナ　小美玉市玉里史料館所蔵

詳細調査報告五、小美玉市下玉里平山のボンヅナで「ダイジャ（大蛇）」と呼ばれる。令和二年に作られ、実際の盆綱行事に使用されたものである。本資料は七・八mを超えていて、近年にみられない長いボンヅナであった。コロナ禍での感染リスクを下げるため、子供同士の距離をとる必要が生じ、ボンヅナが長く作られたことによる。子供の数が減り短く作られる傾向にあったため、長いボンヅナは珍しく、行事終了後に玉里史料館に寄贈される運びとなった。普段であればボンヅナは霞ケ浦に流されている。

平山のボンヅナの製作方法については、詳細調査報告の中で手順を図示しておいたのであわせて参照いただきたい。特徴となるのは上あごと下あごにあたる部分で、それぞれ別に作り出し一体化させて頭部としている。頭部には藁を編んで作った角や舌がつく。目玉にナスをつけていたが、外れやすいため、近年は発泡スチロールで作りきつく縛っている。

胴部は上あごと下あごの芯となっている三組六本の縄に、藁を束ねながら重ねてひねり、一本の大きな綱に仕上げている。さらに芯となる縄を三つ編みにしていき、最後に根元を束ねた藁を折り返して尾をつくりだす。

元々は頭部と胴部を別々に作り出していたが、ボンヅナは縁側に激しく叩きつける所作により分解しやすいため、縄を芯にして一体的に作り出す工夫がなされるようになった。

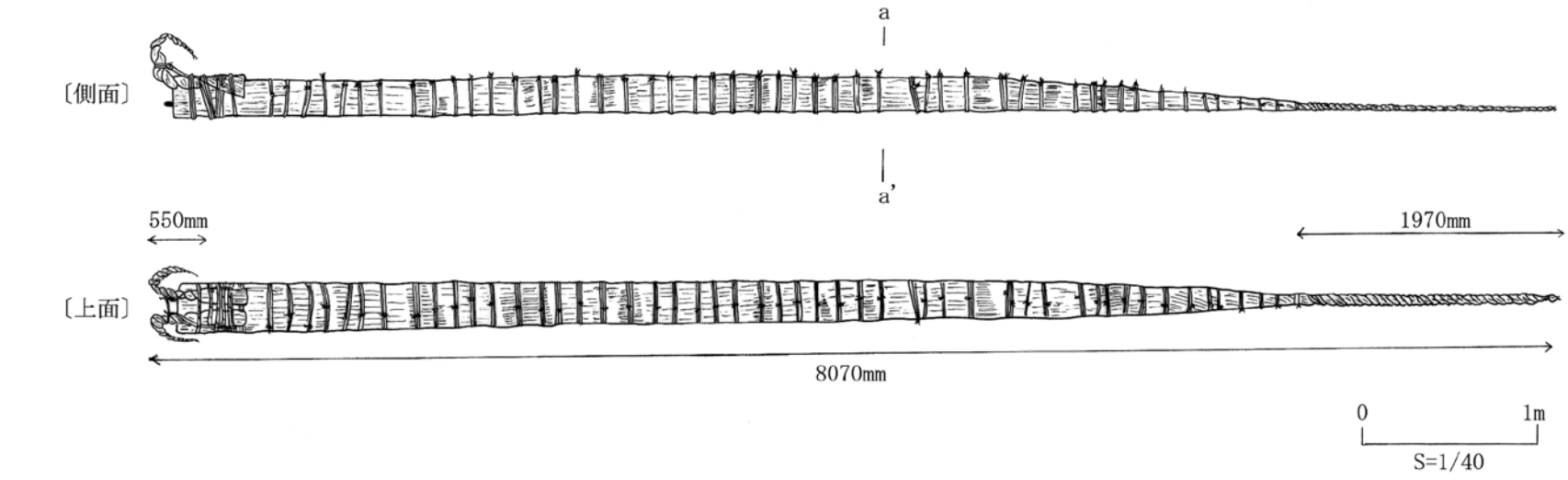
図3　佐野子（土浦市）のボンヅナ　土浦市立博物館所蔵

詳細調査報告一四、土浦市指定無形民俗文化財「佐野子の盆綱」で作られるボンヅナである。かつて中心的な作り手であった梅沢清左衛門さんが、博物館の収蔵資料とするため平成時代に製作したものである。

佐野子の盆綱の最大の特徴は表情のある顔を作り出すことである。大きな角をとりつけ、口はサンダワラを半分に折り曲げて作り出し、目玉にはナス（収蔵資料では模造品）をとりつける。舌を作り出して、口の中にはめ、龍の顔を独特かつ立体的に表現している。顔を含めた頭部と、綱の胴部とは別々につくられる。頭部側は竹を芯にしており、サンダワラや舌、角などはすべて竹に結び付けられている。顔の下部には藁を束ねておく。

先頭の子供は竹の下部をもって、龍の頭を掲げるようにして墓地を出発し、集落内を巡行していく。各家では縁側で座敷に向かって頭をもたげるようにして傾けることで、ボンヅナに乗った仏さまを降ろす所作をする。愛嬌のある龍が子供たちとともに家々を回っていく様子は、佐野子の盆綱行事のみどころである。

（作図・文　萩谷　良太）



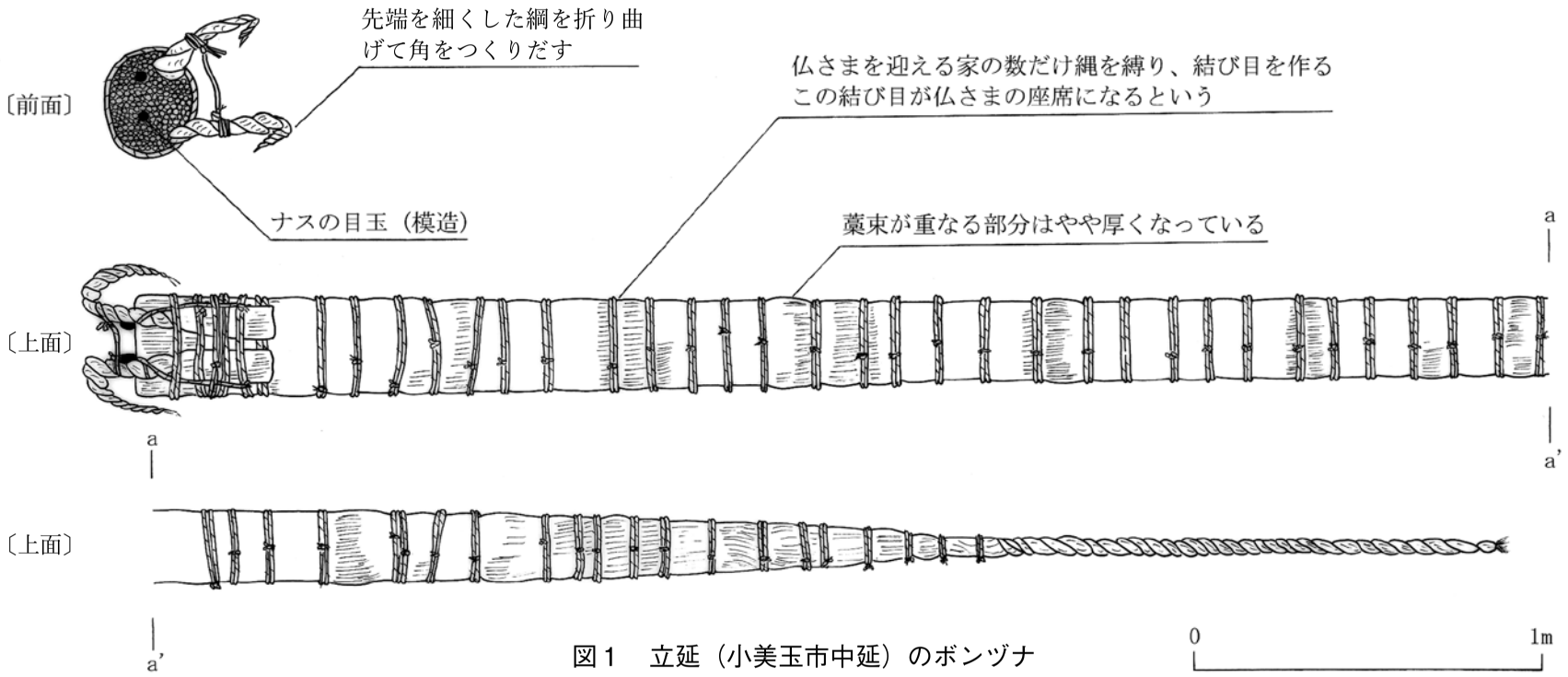


図１　立延（小美玉市中延）のボンヅナ

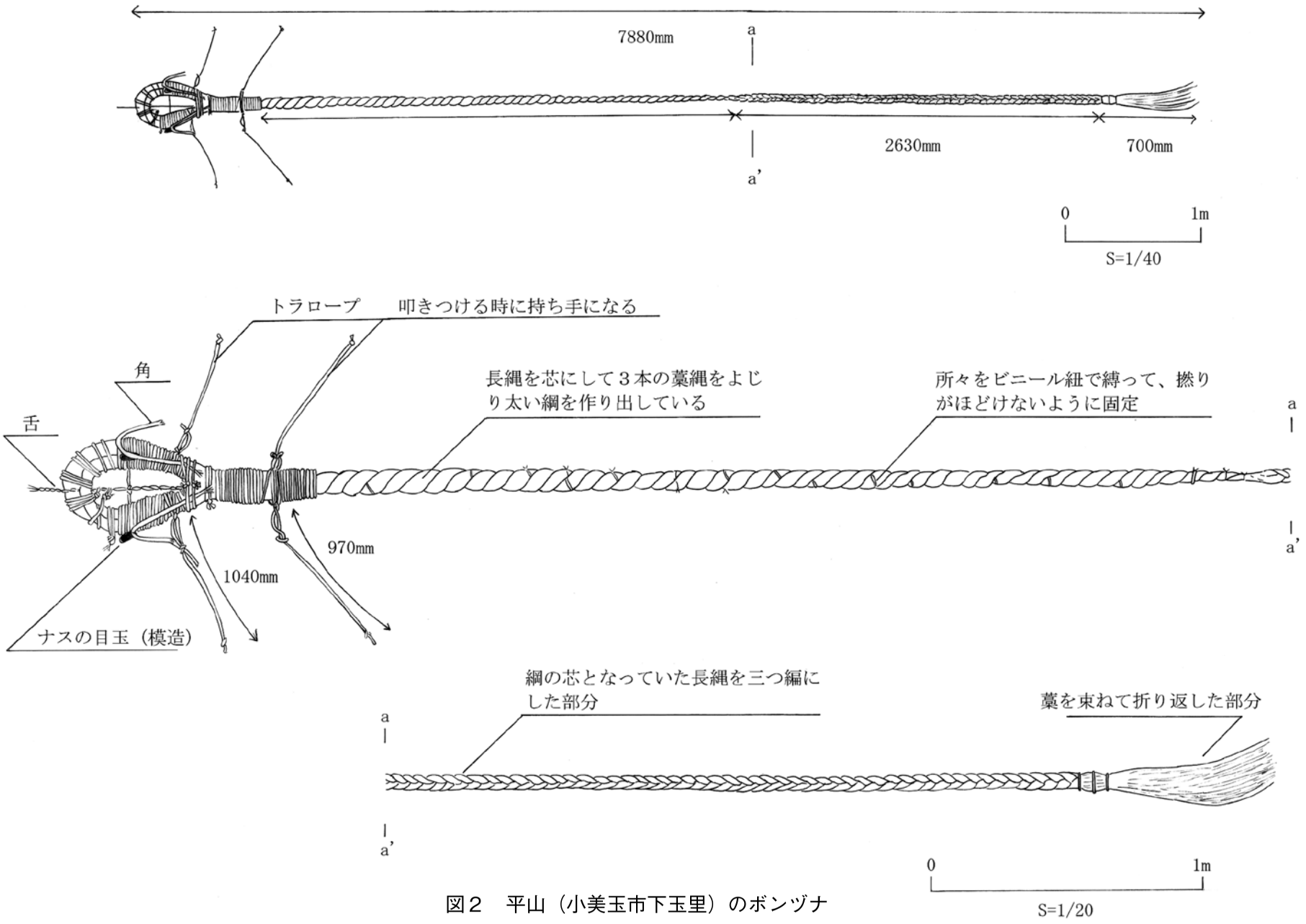


図２　平山（小美玉市下玉里）のボンヅナ

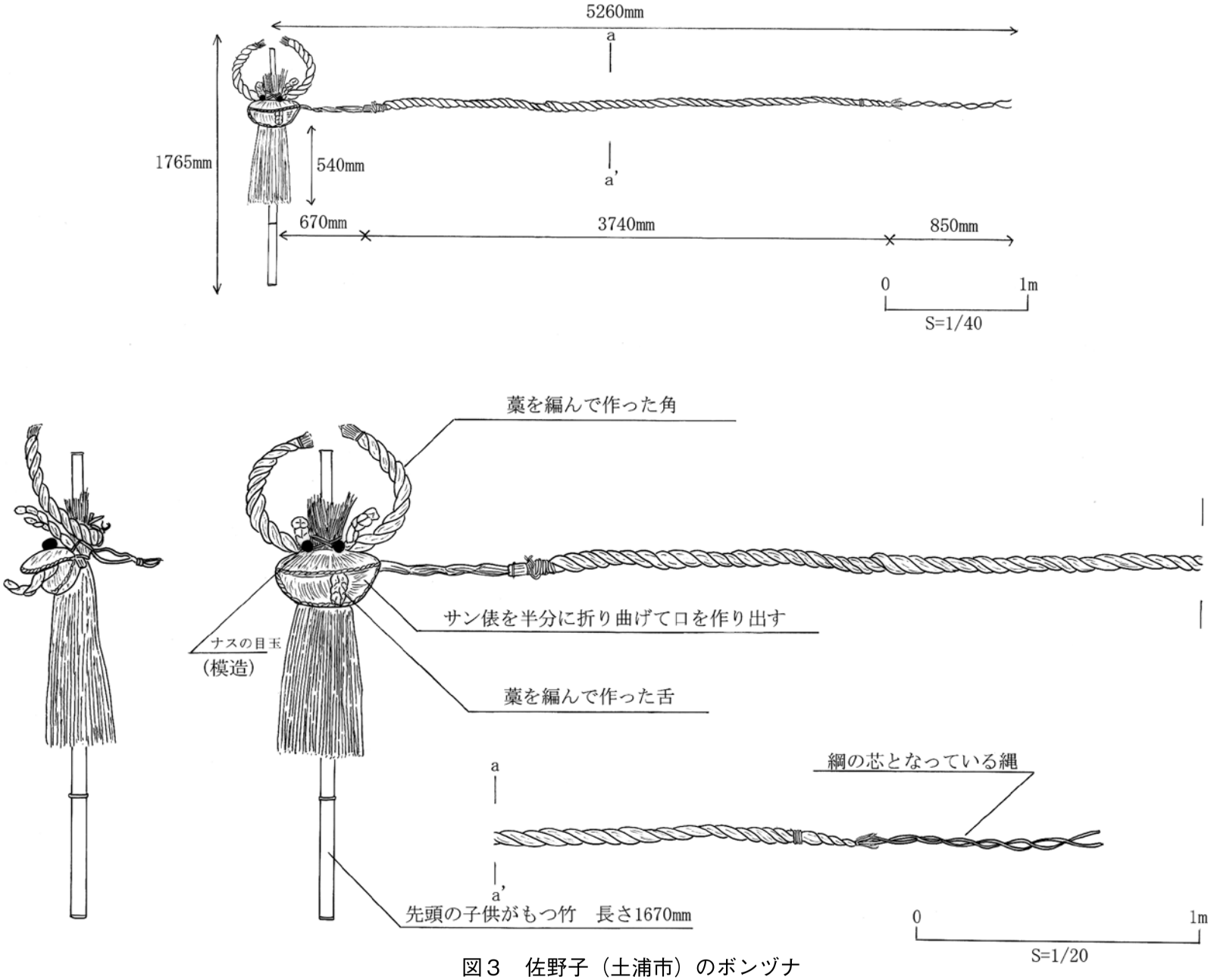


図３　佐野子（土浦市）のボンヅナ

古　写　真

3　旧小川町の盆綱（昭和40年）藤田稔氏提供
上下白色の服装でハチマキ姿。綱は太い

1　茨城町小堤の盆綱（昭和39年）藤田稔氏提供
ボンヅナを持って、民家の門を入る

4　旧小川町の盆綱（昭和40年）藤田稔氏提供
綱を墓地から担ぎ出す

2　茨城町小堤の盆綱（昭和39年）藤田稔氏提供
縁側外の洗面器に、ボンヅナの頭を入れる

7　旧小川町の盆綱（昭和40年）藤田稔氏提供
綱を担いで庭を出る

5　旧小川町の盆綱（昭和40年）藤田稔氏提供
縁側より綱が担ぎ込まれようとしている

8　茨城町か（昭和40年）藤田稔氏提供
綱を引きずって、夜道を次の家へ向かう

6　旧小川町の盆綱（昭和40年）藤田稔氏提供
綱が座敷に担ぎこまれる

12　笠間市五平（昭和63年）協力者提供
頭に手拭いを巻き、手に行燈を持っている

9　土浦市佐野子（昭和58年）大塚博氏提供
竜を模った立派なボンヅナ

13　笠間市五平（昭和63年）協力者提供
太いボンヅナを持ち、賑やかに回っている

10　土浦市佐野子（昭和58年）大塚博氏提供
子供たちは皆、頬かぶりしている

14　笠間市五平（平成 5 年）協力者提供
ボンヅナが細くなっているのであろうか

11　土浦市佐野子（昭和58年）大塚博氏提供
竜の頭を先頭に、夜道を行く

18　小美玉市小塙（平成10年）後藤静夫氏提供
ボンヅナを家の中に押し込んでいる

15　笠間市五平（平成５年）協力者提供
午後９時を回っている。もうひと頑張り

19　小美玉市小塙（平成10年）後藤静夫氏提供
ポンヅナを家の中に押し込んでいる

16　笠間市五平（平成８年）協力者提供
体ごと捻ってボンヅナをきつく綯っていく

20　小美玉市小塙（平成10年）後藤静夫氏提供
雨天でもレインコートを着て巡行する

17　小美玉市小塙（平成10年）後藤静夫氏提供
ボンヅナには持ち手が付いている

23　小美玉市上馬場（平成26年）小林稔氏提供
大人たちが協力してボンヅナを作る

21　土浦市佐野子（平成13年）大塚博氏提供
ボンヅナは昭和58年と変わらない

24　阿見町実穀（平成26年）文化庁提供
先頭は、提灯をつけた竹を持つ中学生

22　土浦市佐野子（平成13年）大塚博氏提供
頬かぶりも昭和58年と変わらない

28　牛久市東猯穴（平成26年）小林稔氏提供
東猯穴のボンヅナには人数分の持ち手が付く

25　阿見町掛馬（平成26年）文化庁提供
各家でボンヅナを高く持ち上げる

29　牛久市東猯穴（平成26年）小林稔氏提供
ボンヅナを引いて集落内をまわる

26　阿見町掛馬（平成26年）小林稔氏提供
各家でボンヅナを地面に叩きつける

30　牛久市東猯穴（平成26年）小林稔氏提供
ボンヅナを引いて、墓地の棺台の周りを回る

27　阿見町島津（平成26年）小林稔氏提供
各家でボンヅナを持って回る

参考文献一覧

【論考等】（年代順）

著者	文献名	略称
上野　錦一	「千秋の盆綱について」 『茨城の民俗』創刊号　茨城民俗学の会編（1963）	上野錦一（1963）
藤田　　稔	「茨城県の盆綱」 『茨城の民俗』第３号　茨城民俗学の会編（1964）	藤田　稔（1964）
更科　公護	「盆綱引きの意義」 『茨城県史研究』第７号　茨城県史編さん委員会編（1967）	更科公護（1967）
新堀　　猛	「鉾田地方における奇習と奇祭」『茨城の民俗』第10号―県内の奇習・奇祭特集―　茨城民俗学会編（1971）	新堀　猛（1971）
今瀬　文也	「茨城県における盆行事」 『仏教と民俗』第９号　仏教民俗学会刊（1972）	今瀬文也（1972）
藤田　　稔	『日本の民俗 8 茨城』 第一法規出版（1973）	藤田　稔（1973）
石崎　　良	「水辺の部落」「危機に瀕するボンドノ ゴオザッタ」 『茨城の民俗』第14号―水の民俗特集―　茨城民俗学会編（1975）	石崎　良（1975）
堤　　一郎	『水郷の民俗』 玉造町郷土文化研究会（1977）	堤　一郎（1977）
田村　竹男	「蛇・竜に関係した民俗行事」『茨城の民俗』第18号―蛇・竜の民俗特集―　茨城民俗学会編（1979）	田村竹男（1979）
佐藤　次男	「「角のある蛇」と「頭上の蛇」」『茨城の民俗』第18号―蛇・竜の民俗特集―　茨城民俗学会編（1979）	佐藤次男（1979）
小沼　忠夫	ふるさと文庫『北浦の昔ばなし』筑波書林（1985）	小沼忠夫（1985）
藤田　　稔	『茨城の年中行事』 茨城新聞社（1988）	藤田　稔（1988）
嶋田　　尚	「蛇型綱の習俗に就いて―茨城の盆綱のルーツに関する一考察」 『茨城の民俗』第27号　茨城民俗学会編（1988）	嶋田　尚（1988）
嶋田　　尚	「蛇型綱の習俗に就いて（２）」『茨城の民俗』第28号　茨城民俗学会編（1989）	嶋田　尚（1989）
嶋田　　尚	「蛇型綱の習俗に就いて（３）」『茨城の民俗』第29号　茨城民俗学会編（1990）	嶋田　尚（1990）
嶋田　　尚	「蛇型綱の習俗に就いて（４）」『茨城の民俗』第30号―禁忌特集― 茨城民俗学会編（1991）	嶋田　尚（1991）
嶋田　　尚	「蛇型綱の習俗に就いて（５）―盆綱のルーツを尋ねて（総集編）―」 『茨城の民俗』第40号記念　茨城民俗学会編（2001）	嶋田　尚（2001）
佐々木尊久	「地域社会と盆行事」―茨城県稲敷市下須田地区の「ボンヅナ」を事例として―フィールドワーク報告書第22集Part４『利根川下流域村落の伝統と現在―茨城県稲敷市上須田･下須田地区の調査報告―』（常磐大学人間科学部現代社会学科社会学コース）（2007）	佐々木尊久（2007）
萩谷　良太	「宍倉天神」『岩坪・田伏中台・上軽部・下軽部・宍倉西部の民俗―茨城県かすみがうら市』筑波学院大学民俗学ゼミナール（2013）	萩谷良太（2013）
林　　圭史	「要元猿壁地区蛇担ぎ・盆綱」 『つくば市の祭りと行事』―つくば市民俗文化財調査報告書― つくば市教育委員会（2014）	林　圭史（2014）
萩谷　良太	「盆綱考―民俗の地域性について―」土浦市立博物館年報30（2018）	萩谷良太（2018）
遠藤　賢治	「関東地方の盆綱について」 國學院大學伝承文化学会『伝承文化研究』16（2019）	遠藤賢治（2019）

【市町村史、報告書等】（年代順）

文　献　名	略　称
筑波研究学園都市地区『民俗資料緊急調査報告書』 茨城県教育委員会（1968）	『民俗資料緊急調査報告書』（1968）
『谷田部の歴史』「谷田部の歴史」編さん委員会編（1975）	『谷田部の歴史』（1975）
『玉里村史』後編　玉里村史編さん委員会編（1975）	『玉里村史』後編（1975）
『土浦市史』民俗編　土浦市史編さん委員会編（1980）	『土浦市史』民俗編（1980）
『筑波研究学園都市　玉取の民俗』筑波大学みんぞく研究会（1980）	『玉取の民俗』（1980）
阿見町史編さん資料７『阿見の民俗』阿見町史編さん委員会編（1981）	『阿見の民俗』（1981）
『小川町史』上巻　小川町史編さん委員会編（1982）	『小川町史』上巻（1982）
『石岡市史』中巻Ⅱ　石岡市史編さん委員会編（1983）	『石岡市史』中巻Ⅱ（1983）
『阿見町史』　阿見町史編さん委員会編（1983）	『阿見町史』（1983）
『ふるさとものがたり』　小川町教育委員会（1984）	『ふるさとものがたり』（1984）
『玉造町史』　玉造町史編さん員会編（1985）	『玉造町史』（1985）
『桜村の民俗』　桜村の民俗編集委員会編（1985）	『桜村の民俗』（1985）
『龍ケ崎市史』民俗調査報告書Ⅱ―長戸・大宮地区― 龍ケ崎市教育委員会編（1986）	『龍ケ崎市史』民俗報告書Ⅱ（1986）
人見　暁郎『桜川村史考』第６号（桜川の民俗） 桜川村史編さん委員会編（1986）	『桜川村史考』（1986）
『大穂町史』　大穂町史編纂委員会（1989）	『大穂町史』（1989）
『利根町史』第４巻　通史　民俗編 利根町教育委員会、利根町史編さん委員会編（1992）	『利根町史』第４巻（1992）
『茨城町史』地誌編　茨城町史編さん委員会（1993）	『茨城町史』地誌編（1993）
『龍ケ崎市史』民俗編　龍ケ崎市史編さん委員会編（1993）	『龍ケ崎市史』民俗編（1993）
『美野里町史』下　美野里町史編さん委員会編（1993）	『美野里町史』下（1993）
『東猯穴誌―里の風土記』　東猯穴誌刊行委員会発行（1993）	『東猯穴誌』（1993）
『茎崎町史』　茎崎町史編さん委員会編（1994）	『茎崎町史』（1994）
『図説　ほこたの歴史』　鉾田町史編さん員会編（1995）	『ほこたの歴史』（1995）
牛久市史民俗調査報告書Ⅲ『下根・柏田・東猯穴の民俗―小野川沿い集落の生活―』牛久市史編さん委員会民俗部会（1996）	『下根・柏田・東猯穴の民俗』（1996）
『内原町史』民俗編　内原町史編さん委員会編（1997）	『内原町史』民俗編（1997）
『図でみる旭村の歴史』　旭村史編さん委員会編（1997）	『図でみる旭村』（1997）
『旭村の歴史』通史編　旭村史編さん委員会編（1998）	『旭村の歴史』通史編（1998）
『玉里村民俗誌　ふるさとの民俗』 笹目　實、玉里村教育委員会、玉里村立史料館編（1998）	『玉里村民俗誌』（1998）
『聞き書き 里山の暮らし―土浦市宍塚』 ＮＰＯ法人宍塚の自然と歴史の会（1999）	『里山の暮らし』（1999）
『盆行事Ⅳ』無形の民俗文化財記録第43集 文化庁文化財保護部（2000）	『盆行事Ⅳ』（2000）
『麻生町史』民俗編　麻生町史編さん委員会編（2001）	『麻生町史』民俗編（2001）
『牛久市史』民俗　牛久市史編さん委員会編（2002）	『牛久市史』民俗（2002）

文　献　名	略　称
『伊奈のむかし―伊奈町の歴史を語る72章―』 伊奈町史編さん専門委員会（2003）	『伊奈のむかし』（2003）
『続 聞き書き 里山の暮らし―土浦市宍塚』 ＮＰＯ法人宍塚の自然と歴史の会（2005）	『続里山の暮らし』（2005）
『玉里村の歴史―豊かな霞ケ浦と大地に生きる―』 玉里村史編さん委員会編（2006）	『玉里村の歴史』（2006）
『図説　伊奈のあゆみ』―伊奈町史　通史編― 伊奈町史編纂委員会編（2007）	『伊奈のあゆみ』（2007）
『茨城県の祭り・行事―茨城県祭り・行事調査報告書』 茨城県教育委員会（2010）	『茨城県の祭り・行事』 （2010）
『つくば市の祭りと行事―つくば市民俗文化財調査報告書―』 つくば市教育委員会（2014）	『つくば市の祭りと行事』 （2014）
『龍ケ崎市伝統的祭礼調査報告書』 龍ケ崎市教育委員会、龍ケ崎市まちづくり・文化財団編（2016）	『龍ケ崎市祭礼報告書』 （2016）

【その他】

資　料　名	略　称
ふるさと歴史館【ＨＰ】第６回企画展「ジャーメ～こんな行事があったのか　石岡の盆綱行事～」　石岡市教育委員会文化振興課（2016）	『ふるさと歴史館』（2016）

「東関東の盆綱」
総合調査報告書（茨城県編）
令和五年（二〇二三）三月
発行　茨城県教育委員会
編集　茨城県教育庁総務企画部文化課
〒三一〇―八五八八
茨城県水戸市笠原町九七八番六
電話　〇二九―三〇一―五四四九
FAX　〇二九―三〇一―五四六九
印刷　佐藤印刷株式会社
〒三一〇―〇〇四三
茨城県水戸市松が丘二丁目三番二三号
電話　〇二九―二五一―一二一二
FAX　〇二九―二五一―一〇四七
© 2023